

この索引は、『静岡新報』（1892年＝明治25年創刊、1941年＝昭和16年廃刊）から富士山関係の記事タイトルを拾ったものである。カバーできた期間は、1895年＝明治28年11月28日付から1941年＝昭和16年11月30日付まで。

まとまった欠号については索引中に記してあるが、飛び飛びの欠号については連載記事の欠番についてのみ指摘しておいた。

富士山関係といっても幅が広い。

《憧れの富士に向つた、古へからの数知れぬ人を迎へて、それによつて衣食した山麓の人々が、如何に争闘し、罪悪し、盛衰の波に漂はされて来たか。これがその儘人の世の姿である。富士は——しかし富士は悠久に東海の天にかかつてゐる。》（塚本繁松「富士登山道の種々相」『山と溪谷』33号、昭和10年9月）

私が村山古道を再発見して間もなく20年、毀誉褒貶さまざまながあつたが、加齢とともに富士山曼荼羅のようなものができないかと思うようになった。

昨年、富士宮市を中心とするタウン紙『岳南朝日』索引・昭和編、同平成編を公表することができた。今年は続いて戦前の静岡県紙『静岡新報』索引の完成をみた。

さらに陋屋には『静岡民友新聞』、両紙を統合して創刊された『静岡新聞』、そして県境を越えた『山梨日日新聞』『山梨時事新聞』などのコピーがメートル単位で積んである。古本屋さんに見積もってもらふと「単なるゴミです」。単なるゴミにしないよう精進したい。

この索引の利用・引用は自由であるが、固有の著作権があることは認識しておいていただきたい。

とくに事件・事故に登場する人たちのプライバシーの保護には、節度を保つていただけるよう強くお願いしておく。

記事見出しの固有名詞の省略・送り仮名・誤字誤植のためにその記事に辿り着けないことがあるので、〔 〕内にキーワード・記事内容を記すよう努力した。

各記事見出しのあとに←印→印で注記を付したのもあるので、研究などにご活用いただければ幸いである。

▼▼は事件・事故の内容理解や前後の経緯を理解するために、本文を私的にテキスト化した記事である。しかし複雑な著作権がからむこともあるので、公開しない。

間違いや批判、あるいはこれに基づく成果物があつたばあいにはご連絡をお願いしたい。

長年にわたつてご協力をいただいた静岡県立中央図書館本館および静岡県立中央図書館歴史文化情報センターの歴代の職員の方々に謝意を表したい。

2022年8月

山樂カレッジ 島堀操八

〔静岡県立中央図書館本館蔵架の『静岡新報』プリント版冊子（以下「県立プリント」という）と静岡県立中央図書館歴史文化情報センター蔵架の『静岡新報』プリント版冊子（以下「歴史文化」という）を基にして拾った。両者の違いや問題点については、このホームページに収録してある拙稿「戦中・戦後期の『静岡新聞』夕刊発行状況について」を参照されたい。〕

富士山データベース『静岡新報』索引・明治大正昭和編

■1895年=明治28年

●歴史文化『静岡新報 VOL.1 明治28年3月・11月 明治30年2月～3月』

「◎岳麓研究所同窓会」〔上井出村・木下松蔵が明治21年ごろ発起、26年までに70数名の入所生〕（『静岡新報』1895年=明治28年11月28日付）

■1897年=明治30年

「◎金融逼迫」〔三極価格下落が原因〕〔ミツマタ〕（『静岡新報』1897年=明治30年2月4日付）

「◎自家用造酒の減額」〔駿東郡北部〕（『静岡新報』1897年=明治30年2月4日付）

「◎村境論和解せん」〔上野村精進川と柚野村上野〕（『静岡新報』1897年=明治30年2月4日付）

「◎大鹿を生捕る」〔富士郡上野村〕（『静岡新報』1897年=明治30年2月4日付）

「◎浅間社の保存金」〔浅間大社〕〔官幣大社〕（『静岡新報』1897年=明治30年2月4日付）

「◎本年度所用の軍馬」〔日清戦争で消耗〕（『静岡新報』1897年=明治30年2月21日付）

「◎御料林盗伐」〔富士郡北山村〕（『静岡新報』1897年=明治30年3月9日付）

「◎芸人田子の浦に十万坪を購ふ」〔別荘地〕（『静岡新報』1897年=明治30年3月10日付）

「◎山林に関する紛争」〔富士郡上野村下条下之坊と妙蓮寺〕（『静岡新報』1897年=明治30年3月14日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.2 [明治30年4月～11月]』

「◎鉄道協議会」〔大宮・鈴川間の富士鉄道に敷設許可〕〔富士馬車鉄道〕（『静岡新報』1897年=明治30年4月3日付） ▼▼

「◎大宮電信局の開局式」（『静岡新報』1897年=明治30年4月3日付）

「◎製紙会社員の花見」〔富士製紙〕〔浅間大社〕（『静岡新報』1897年=明治30年4月8日付）

「◎大宮浅間の桜」〔浅間大社〕（『静岡新報』1897年=明治30年4月8日付）

「◎狩宿の下馬桜」（『静岡新報』1897年=明治30年4月8日付）

「◎電気鉄道」〔御殿場・大月間電鉄布設の願い出〕（『静岡新報』1897年=明治30年4月23日付）

「◎富士山腹の死体」〔表口七合目に身元不明死者〕〔遭難〕（『静岡新報』1897年＝明治30年8月4日付）

「◎御殿場馬車鉄道」〔測量認可〕（『静岡新報』1897年＝明治30年9月16日付）

「◎富士山頂の気象」〔中央气象台〕（『静岡新報』1897年＝明治30年9月17日付）



「◎駿甲鉄道」〔身延線〕（『静岡新報』1897年＝明治30年9月22日付）

「◎実弾射撃演習」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1897年＝明治30年9月26日付）

「風損木入札払下公告 浅間神社社々務所」〔浅間大社〕〔広告〕（『静岡新報』1897年＝明治30年11月3日付、11月6日付）

「風損木（根返）公売 浅間神社氏子惣代」〔今宮浅間〕〔広告〕（『静岡新報』1897年＝明治30年11月7日付）

■1898年＝明治31年

●歴史文化『静岡新報 Vol.3〔明治31年1月～3月〕〔明治31年11月〕』

「立木売却広告 上井出村外六ヶ村組合」〔広告〕（『静岡新報』1898年＝明治31年1月5日付）

「…株主ヲ募集ス… 御殿場馬車鉄道株式会社創立事務所」〔広告〕（『静岡新報』1898年＝明治31年2月4日付）

■1899年＝明治32年

●歴史文化『静岡新報 Vol.4〔明治32年2月～8月〕』

「◎鈴川の近況」〔別荘〕〔富士ホテル〕（『静岡新報』1899年＝明治32年6月1日付）

「◎富士馬車鉄道会社」〔株主総会〕（『静岡新報』1899年＝明治32年6月11日付）

「◎富士の害虫」〔富士製紙の原料稲藁からメイガが発生〕（『静岡新報』1899年＝明治32年6月11日付）

「◎侠客治郎長の七回忌」〔清水次郎長〕〔梅陰寺〕（『静岡新報』1899年＝明治32年6月11日付）

「◎富士郡北部の水論」〔大沢崩れ〕〔上井出で堰を造ったため芝川に大量の土砂が流れ込むようになった〕（『静岡新報』1899年＝明治32年6月14日付）

「◎富士水論の和解」〔大沢崩れ〕〔上野村が謝罪し堤防を撤去〕（『静岡新報』1899年＝明治32年6月21日付）

「◎富士登岳者」〔梅村甚太郎、植物調査〕〔村山古道〕（『静岡新報』1899年＝明治32年7月26日付）

「◎富士山表口改良組合」（『静岡新報』1899年＝明治32年7月27日付） ▼▼

「◎鉄道馬車の割引」〔富士馬車鉄道〕〔富士登山者は2割引〕（『静岡新報』1899年＝明治32年7月27日付） ▼▼

「◎馬車の転覆」〔御殿場馬車鉄道〕（『静岡新報』1899年＝明治32年7月30日付）



「◎治郎長の木像」〔清水次郎長〕〔鉄舟寺〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月2日付）

「◎富士山頂の気温」〔最高気温・最低気温〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月3日付）

「◎鉄道馬車谷間に転覆す」〔御殿場馬車鉄道〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月18日付）▼▼←「◎馬車の転覆」（7月30日付）の詳報。

「◎独逸領事の富士登山」〔外国人登山〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月19日付）

「◎富士観測」〔野中至〕〔観象台建設〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月19日付）

「◎御殿場雑信」〔野中至〕〔御殿場病院〕〔御殿場場所鉄道〕〔ぼったくり物価〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月20日付）▼▼

「◎富岳の絶頂に琵琶を弾ず」〔変わり種登山〕〔筑前琵琶・橘知定〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月27日付）

「◎老婆の登山」〔高齢者登山〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月29日付）

「◎鈴川の瑣事」〔海水浴場〕〔富士ホテル〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月29日付）

「◎篠竹実を結ぶ」〔竹の花〕（『静岡新報』1899年＝明治32年8月30日付）

〔製本は通巻だが32年9月分は存在せず〕

●歴史文化『静岡新報 Vol.5〔明治32年10月～12月〕』

「◎紙業取締違反」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月6日付）

「◎富士の祈者」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月8日付）

「◎被害地往復」「◎海嘯地詳況」「◎海嘯地雑聞」「行衛不明者人名」〔田子浦村〕〔元吉原村〕（『静岡新報』1899年＝明治32年10月10日付）

「県下未曾有の海嘯に付義捐金募集の広告 静岡新報社」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月11日付）

「◎海嘯被害の視察 特派員報」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月11日付）

「◎海嘯後聞（十二日田子浦特報）」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月15日付）

「◎海嘯後聞（十三日田子浦特報）」「○田子浦海嘯負傷者の原因」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月17日付）

「◎海嘯後聞（十八日田子浦特報）」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月20日付）

「◎海嘯後聞（十八日田子浦続報）」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月21日付）

「◎海嘯後聞（廿一日田子浦特報）」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月24日付）

「◎海嘯後聞（廿一日田子浦特報）」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月25日付）

「◎海嘯余響」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月27日付）

「◎海嘯溺死者追吊大法会」（『静岡新報』1899年＝明治32年10月29日付）

「◎海嘯の統計」（『静岡新報』1899年＝明治32年11月9日付）

「◎富士郡北部校長会決議」（『静岡新報』1899年＝明治32年11月17日付）

「◎富士農学校」〔設立〕（『静岡新報』1899年＝明治32年12月3日付）

「◎奥宮改築協会」〔浅間大社〕（『静岡新報』1899年＝明治32年12月3日付）

「◎岳麓一週紀行（其一）兆木居士稿」〔駿府―御殿場―須走―山中湖―河口―御坂―石和一甲府〕（『静岡新報』1899年＝明治32年12月6日付）

「◎岳麓一週紀行（其二）兆木居士稿」〔甲府―鰍沢―岩淵―駿府〕（『静岡新報』1899年＝明治32年12月7日付）

「◎富士観象台設置の計画」〔渡辺洪基〕〔山頂観測〕（『静岡新報』1899年＝明治32年12月10日付）

「◎富士観象台の成立」（『静岡新報』1899年＝明治32年12月12日付）

「◎次郎長の肖像」〔清水次郎長〕〔宝台院〕（『静岡新報』1899年＝明治32年12月12日付）

「◎山中の賊」〔世附山〕〔籠坂峠〕（『静岡新報』1899年＝明治32年12月20日付）

■1900年＝明治33年

●歴史文化『静岡新報 Vol.6〔明治33年1月～12月〕』〔1月は揃っているが2月はなし、3月は数日分あるが4月以降まったくなく、12月が数日分のみ〕

「◎富士郡大宮町の新年」（『静岡新報』1900年＝明治33年1月9日付）

「◎富士根村同志大懇親会」〔大岩妙泉寺〕（『静岡新報』1900年＝明治33年1月10日付）

「◎大宮町婦人会」（『静岡新報』1900年＝明治33年1月10日付）

「◎不埒な修験者」（『静岡新報』1900年＝明治33年1月10日付）

「◎盗難一束」〔富士根村小泉〕（『静岡新報』1900年＝明治33年1月10日付）

■1901年＝明治34年

●歴史文化『静岡新報 Vol.7〔明治34年3月～9月〕』〔明治34年1月2月存在せず、4月は数日あるが5月はゼロ、6月数日、7月8月はかなり揃っているが9月は数日分〕

「◎富士の鹿狩り」〔上井出村麓区〕（『静岡新報』1901年＝明治34年3月10日付）

「◎大宮分署新築開署式」（『静岡新報』1901年＝明治34年3月12日付）

「◎富士郡共済組合」〔貯蓄銀行に変更〕（『静岡新報』1901年＝明治34年3月13日付）

「◎富士川船の難破（溺死三人）」〔釜口橋〕（『静岡新報』1901年＝明治34年3月16日付）▼▼→「◎釜口開鑿に付て」（3月19日付）、「◎富士川通船賦金と開鑿」（同）

に関連記事

「◎釜口開鑿に付て」（『静岡新報』1901年＝明治34年3月19日付）▲▲

「◎富士川通船賦金と開鑿」（『静岡新報』1901年＝明治34年3月19日付）▲▲

「◎町村組合会」〔富士馬車鉄道〕（『静岡新報』1901年＝明治34年3月19日付）

→一部▼▼

「◎富士の裾野の大開墾」〔駿東・富士2郡、大宮～神山1万町歩の開墾計画〕（『静岡新報』1901年＝明治34年3月24日付）

「◎外人富士登山を企つ」〔世界一周自転車旅行中のイタリア人とイギリス人〕〔外国人登山〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1901年＝明治34年3月24日付）

「◎外人登山を果す」〔英伊両外国人が御殿場口から富士登山に成功〕〔外国人登山〕〔雪

中登山] (『静岡新報』1901年=明治34年3月26日付)

「◎大石寺の出火(火傷者二名) (『静岡新報』1901年=明治34年3月26日付)

「◎ヂャンヂャン」〔富士根村大岩で火事〕(『静岡新報』1901年=明治34年3月29日付)

「◎富士奥宮改築工事」〔浅間大社〕(『静岡新報』1901年=明治34年6月27日付)

「◎富士川の開船」〔増水〕(『静岡新報』1901年=明治34年7月10日付)

「◎富士川通船停止」(『静岡新報』1901年=明治34年7月13日付)

「◎富士登山の開始期」〔夏山開山〕(『静岡新報』1901年=明治34年7月20日付)



「◎中学生の富士登山」(〔三重県第一中学〕『静岡新報』1901年=明治34年7月21日付)

「◎富士山上の踏査」〔駿甲国境と大社境内地調査〕(『静岡新報』1901年=明治34年7月24日付)

「◎富士山上の踏査」(『静岡新報』1901年=明治34年7月26日付)

「◎富士山開と改良組合」〔富士山表口改良組合〕(『静岡新報』1901年=明治34年7月26日付)

「◎小笠青年会の一大壮遊」(『静岡新報』1901年=明治34年7月30日付)

「◎健児隊」〔小笠青年会〕(『静岡新報』1901年=明治34年7月31日付)

「◎富士登山健児隊の一行」〔小笠青年会〕(『静岡新報』1901年=明治34年8月2日付)

「◎富士奥宮の上棟式」〔浅間大社〕(『静岡新報』1901年=明治34年8月4日付)

「◎小笠青年会の富士登岳隊消息(第一報)(第二報)(第三報)」(『静岡新報』1901年=明治34年8月4日付)

「◎小笠青年会富士登岳録(其一) 猶痴浪徒」(『静岡新報』1901年=明治34年8月6日付)

「◎御殿場の昨今」(『静岡新報』1901年=明治34年8月7日付) 一部▼▼

「◎小笠青年会富士登岳録(其二) 猶痴浪徒」(『静岡新報』1901年=明治34年8月8日付)

「◎小笠青年会富士登岳録(其三) 猶痴浪徒」(『静岡新報』1901年=明治34年8月9日付)

「◎小笠青年会富士登岳録(其四) 猶痴浪徒」(『静岡新報』1901年=明治34年8月10日付)

■1902年=明治35年

●歴史文化『静岡新報 Vol.8 [明治35年3月～7月]』〔製本は通巻だが34年10月～35年2月分は存在せず〕〔明治35年5月は1日分のみ、〕

「◎富士登山の栞(一)(鉄道作業局の調査)」〔△登山の時期△登山口△御殿場口△須走口△大宮口△須山口〕(『静岡新報』1902年=明治35年6月29日付)

「◎実弾射撃と富士登山者注意」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1902年=明治35年7月1日付) ▼▼

「◎富士山々開」〔七月五日なりと云ふ〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月1日付）

「◎富士登山の栞（二）」〔△吉田口△登山費用△割引乗車券△旅宿△宿泊料△結束△携帯品△植物と古蹟〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月1日付）

「◎杉谷大宮浅間社宮司」〔浅間大社〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月3日付）

「◎富士山奥院の普請」〔浅間大社〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月3日付）

「◎富士登山期に就て」（『静岡新報』1902年＝明治35年7月3日付）

「◎富士山絶頂に登る」〔大工棟梁石川栄十郎〕〔奥院〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月3日付）

「◎富士登山割引券発売駅に就ての出願」〔登山者運賃割引〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月4日付）→「◎富士登山汽車賃割引に付稟請」（7月19日付）に続報、表口登山口からの強い反発。

「◎演習用軍器運搬請負」〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月4日付）

「◎富士登山期」（『静岡新報』1902年＝明治35年7月4日付）

「◎富士登山汽車賃割引に付稟請」〔登山者運賃割引〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月19日付）▼▼→結末については「◎鉄道割引券発行の請願（却下）」〈『静岡民友新聞』明治35年7月16日付〉、さらに「◎富士郡参事会の決議」（同紙7月22日付）参照、そしてさらに改善された結果は「◎富士登山者に汽車割引」（『静岡新報』1908年＝明治41年6月21日付）にあり。

「◎富士山の実況」〔残雪〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月19日付）

「◎教諭の登山」（『静岡新報』1902年＝明治35年7月20日付）

「◎富士山麓の演習」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月20日付）

「◎富士山の近況」〔山開きは廿五六日〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月22日付）

「◎富士登山者の便益（富士表山休泊営業合資会社）」〔富士宮口砂走り〕（『静岡新報』1902年＝明治35年7月23日付）▼▼←この記事には富士表山休泊営業合資会社は《去る三十三年七月中設立》とあるが、すでに「◎富士山表口改良組合」（1899年＝明治32年7月27日付）という記事がある。

「◎大雄山登山案内（駿遠豆等よりの登山者）」（『静岡新報』1902年＝明治35年7月26日付）

「◎富士登山の記念碑」（『静岡新報』1902年＝明治35年7月26日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.9〔明治35年8月～9月〕』

「◎富士山頂の最低温」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月2日付）

「◎富士山の近況（岡田技師の談話）」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月5日付）

「◎富士山上石室の破壊（八合目の暴風）」〔野中至〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月6日付）

「◎姦夫本夫を糞攻めにす」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月17日付）

「◎富士石の博覧会出品」〔内国博覧会〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月21日付）

「◎実弾射撃演習終了」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月21日付）

「◎富士登山案内（当市附近の人々へ）」〔成田武次郎〕〔奥宮改築〕〔村山古道〕〔御殿場口砂走り〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月22日付）→詳細は「△富士登山見聞記事▽《其壱》」（8月27日付）、「《其弐》」（8月28日付）、「《其参》」（8月29日付）、「《其四》」（8月30日付）、「《其五》」（8月31日付）、「《其六》」（9月2日付）に掲載。

「◎義足隊の富士登山」〔障害者登山〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月24日付）→「◎義足者の富士登山」（8月29日付）に続報。

「△吉田の火祭を見る（旧暦七月廿一日夜執行）」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月27日付）→「△吉田の火祭を見る」（8月28日付）に続報。

「△富士登山見聞記事▽《其壱》鏡川」〔富士表山休泊営業合資会社〕〔成田武次郎〕〔富士馬車鉄道〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月27日付）▼▼

「△吉田の火祭を見る（旧暦七月廿一日夜執行）（承前）」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月28日付）

「△富士登山見聞記事▽《其弐》鏡川〔富士馬車鉄道〕」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月28日付）▼▼

「◎義足者の富士登山（首尾好く目的を達せり）」〔障害者登山〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月29日付）

「△富士登山見聞記事▽《其参》鏡川」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月29日付）▼▼

「△富士登山見聞記事▽《其四》鏡川〔村山古道〕〔強力〕」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月30日付）▼▼

「◎二十六夜（昨夜）」（『静岡新報』1902年＝明治35年8月30日付）

「△富士登山見聞記事▽《其五》鏡川」〔富士表山休泊営業合資会社〕〔強力〕〔村山古道〕〔強風帯のカラマツ〕〔旗状樹形〕（『静岡新報』1902年＝明治35年8月31日付）▼▼

「◎富士山巔朝日岳の崩壊（幸に負傷者なし）」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月2日付）

「△富士登山見聞記事▽《其六》鏡川」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月2日付）▼▼

「◎登岳雑興（一）沂風生」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月3日付）

「◎登岳雑興（二）沂風生」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月4日付）

「◎登岳雑興（三）第二の続き 沂風生」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月5日付）

「◎登岳雑興（四）沂風生」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月6日付）

「◎登岳雑興（五）沂風生（完）」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月9日付）

「◎富士川の渡船止め」〔豪雨〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月9日付）

「◎富士北麓実弾射撃」〔軍事演習〕〔北富士演習場〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月17日付）▼▼

- 「◎当聯隊の強行軍」〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月17日付）
- 「◎村井中尉招魂祭」〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月17日付）
- 「◎吉原町芸妓の評判」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月17日付）
- 「◎富士の初雪（例のなき早さ）」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月18日付）
- 「◎密猟者の取締に就て 富士北部猟友会に於て 清峯太郎」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月20日付）
- 「◎師団長の砲兵演習視察」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月20日付）
- 「◎密猟者の取締に就て（続）富士北部猟友会に於て 清峯太郎」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月21日付）
- 「◎大演習の日割と其種類」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月21日付）
- 「◎富士の大雪（三合目以上の真白）」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月21日付）
- 「◎第三十四聯隊強行軍（一）△強行軍に就ての訓示」〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月23日付）
- 「◎第三十四聯隊強行軍（二）」〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月24日付）
- 「◎強行軍従事者」〔第三十四聯隊〕〔名簿〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月26日付）
- 「◎強行軍記事 紙面の都合にて已を得ず明日の紙上に完載する事とせり」〔第三十四聯隊〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月27日付）
- 「◎第三十四聯隊強行軍（三）」〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月28日付）
- 「◎実弾射撃終了」〔軍事演習〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月28日付）
- 「◎砲兵の射撃演習」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月28日付）
- 県立プリント『静岡新報 Vol.14〔明治35年9月～10月〕』**
- 「◎富士の初雪（例のなき早さ）」〔明治17年以降各年の初雪月日一覧表〕（『静岡新報』1902年＝明治35年9月18日付）
- 「◎密猟者の取締に就て 富士北部猟友会に於て 清峯太郎」（『静岡新報』1902年＝明治35年9月18日付）
- 「◎金原翁と賀茂郡三階滝御料地植林（一）小野田五郎兵衛（寄）」〔金原明善〕（『静岡新報』1902年＝明治35年10月7日付）
- 「◎富士の裾野に於ける密猟（実見者の通信）」（『静岡新報』1902年＝明治35年10月8日付）
- 「◎金原翁と賀茂郡三階滝御料地植林（二）小野田五郎兵衛（寄）」〔金原明善〕（『静岡新報』1902年＝明治35年10月8日付）
- 「◎金原翁の林業講話」〔金原明善〕（『静岡新報』1902年＝明治35年10月8日付）
- 「◎金原翁と賀茂郡三階滝御料地植林（三）小野田五郎兵衛（寄）」〔金原明善〕（『静岡新報』1902年＝明治35年10月9日付）

「◎御殿場芸妓の出稼」（『静岡新報』1902年＝明治35年10月9日付）
「◎須走消防組の演習」（『静岡新報』1902年＝明治35年10月21日付）
「◎富士郡北部の分離事件」〔上井出村〕（『静岡新報』1902年＝明治35年10月22日付）

「◎御殿場馬車鉄道会社」（『静岡新報』1902年＝明治35年10月22日付）

●**県立プリント『静岡新報 Vol.15〔明治35年10月～12月〕』**

「◎鈴川駅陸橋の開通」（『静岡新報』1902年＝明治35年11月1日付）

「◎金原翁講話」〔金原明善〕（『静岡新報』1902年＝明治35年11月2日付）

「◎鈴川駅陸橋開通式」（『静岡新報』1902年＝明治35年11月6日付）

「◎富士山腹狩猟の記 瘦鶴猟士稿（つづく）」〔勢子辻〕（『静岡新報』1902年＝明治35年11月25日付）

「◎富士山腹狩猟の記 瘦鶴猟士稿」〔勢子辻〕（『静岡新報』1902年＝明治35年11月26日付）

「◎富士山腹狩猟の記（三）瘦鶴猟士稿」〔勢子辻〕（『静岡新報』1902年＝明治35年11月27日付）

「◎富士山腹狩猟の記（四）瘦鶴猟士稿」〔勢子辻〕（『静岡新報』1902年＝明治35年11月28日付）

「◎富士郡の疎水工事」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月2日付）

「◎巴の遠足運動会 一、出発当日のごたゝゝともゑ」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月3日付）

「◎巴の遠足運動会 二、進む汽車路の面白さともゑ」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月4日付）

「◎巴の遠足運動会 三、岩淵製糸場縦覧ともゑ」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月5日付）

「◎巴の遠足運動会 四、富士川の親不知子不知ともゑ」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月6日付）

「◎巴の遠足運動会 五、松の翠りの岩松村（吾には涙の故郷の空）」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月9日付）

「◎巴の遠足運動会 六、竜岩橋の絶景」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月10日付）

「◎富士奥の院新築費」〔浅間大社〕（『静岡新報』1902年＝明治35年12月11日付）

「◎巴の遠足運動会 八、厚原田圃の昼飯 吉原尋高両処の休憩」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月16日付）

「◎巴の遠足運動会 九、砂山の遊楽附帰り道」（『静岡新報』1902年＝明治35年12月17日付）

■**1903年＝明治36年**

●**県立プリント『静岡新報 Vol.16〔明治36年1月～3月〕』**〔4月・5月は存在しない〕

「◎成田富士根村長の徳望」〔成田武次郎の人となり〕（『静岡新報』1903年＝明治36年1月17日付）

「◎御殿場馬車の雪搔」〔籠坂峠不通〕〔御殿場馬車鉄道〕（『静岡新報』1903年＝明治36年2月11日付）

「◎富士川船夫の惨状」〔中央線の甲府まで開通〕（『静岡新報』1903年＝明治36年3月24日付）

「◎富士山巔奥宮の改築（朝野の賛成を求む）」〔浅間大社〕（『静岡新報』1903年＝明治36年3月24日付） ▼▼←〔富士山頂改築之図〕あり。

「◎富士川船夫の窮困」〔中央線の甲府まで開通〕（『静岡新報』1903年＝明治36年3月28日付）

●県立プリント『静岡新報 Vol.17〔明治36年6月～7月〕』

「◎富士郡人穴蚕況」〔養蚕〕（『静岡新報』1903年＝明治36年6月18日付）

「◎富士の笠雲につき」（『静岡新報』1903年＝明治36年6月19日付）

「◎富士登山者に注意」〔吉田口より須走口が運賃が安い〕（『静岡新報』1903年＝明治36年7月11日付）

「◎富士山開と登山者」〔7月25日山開き〕（『静岡新報』1903年＝明治36年7月22日付）

「◎御殿場馬車の割引」〔御殿場馬車鉄道〕（『静岡新報』1903年＝明治36年7月23日付）

「◎神職の登山」〔浅間大社〕（『静岡新報』1903年＝明治36年7月30日付）

●県立プリント『静岡新報 Vol.18〔明治36年8月～9月〕』

「◎富士登山案内（登りは表口に限る）」〔山開き7月30日に延期〕（『静岡新報』1903年＝明治36年8月7日付）

「◎富士山頂最低気温」〔中央气象台〕（『静岡新報』1903年＝明治36年8月8日付）

「◎警部長登山」〔愛知県警部長〕（『静岡新報』1903年＝明治36年8月9日付）

「△富士登山の記（一）杉浦学■」〔御殿場口登山道〕〔富士登山休泊営業合資会社〕（『静岡新報』1903年＝明治36年8月11日付）

「△富士登山の記（二）杉浦学■」〔岩岱虎石碑〕（『静岡新報』1903年＝明治36年8月12日付）

「△富士登山の記（三）杉浦学■」〔お鉢巡り〕〔大砂走り〕（『静岡新報』1903年＝明治36年8月14日付）

「◎八十三翁富士登山」（〔大木虎吉〕〔御殿場口登山道〕〔高齢者登山〕『静岡新報』1903年＝明治36年8月18日付）

「◎富士の登山に就て」〔馬車鉄道で客引き〕〔扶桑教天拝所〕〔穴野健丸〕（『静岡新報』1903年＝明治36年8月23日付）

「◎富士登山者数の減少」（『静岡新報』1903年＝明治36年9月2日付）

「山水篇 鷹峰 朝岡鎮太郎（一）足柄山」（『静岡新報』1903年＝明治36年9月3日付）

「△山水篇▽（二）富士山」（『静岡新報』1903年＝明治36年9月5日付）

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎（三）愛鷹山」〔牧馬〕（『静岡新報』1903年＝明治36年9月8日付）

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎（四）薩■山」（『静岡新報』1903年＝明治36年9月

13日付)

■ = 土へんに垂

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (五) 富士川」 (『静岡新報』1903年=明治36年9月20日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (六) 安倍川」 (『静岡新報』1903年=明治36年9月26日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (七) 大井川」 (『静岡新報』1903年=明治36年9月27日付)

「◎富士山麓の演習諸隊」 [東富士演習場] (『静岡新報』1903年=明治36年9月30日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (八) 天竜川」 (『静岡新報』1903年=明治36年9月30日付)

● 県立プリント『静岡新報 Vol.19 [明治36年10月~11月]』

「◎神代杉採掘者の名誉」 [柚野] [田中分助] (『静岡新報』1903年=明治36年10月8日付)

「◎中央線と鮮魚輸出」 [沼津→甲府] (『静岡新報』1903年=明治36年10月24日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (九) 柏原沼」 [浮島沼] (『静岡新報』1903年=明治36年10月17日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十) 浅畑沼」 [麻機沼] (『静岡新報』1903年=明治36年11月12日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十一) 浜名湖」 (『静岡新報』1903年=明治36年11月12日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十二) 白糸滝」 (『静岡新報』1903年=明治36年11月13日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十三) 大島瀑」 [佐野瀑園] (『静岡新報』1903年=明治36年11月13日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十五) 牛臥海水浴」 (『静岡新報』1903年=明治36年11月21日付)

「◎修験者の名を騙る」 [鈴木三蔵] (『静岡新報』1903年=明治36年11月22日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十六) 興津海水浴」 (『静岡新報』1903年=明治36年11月25日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十七) 焼津海水浴」 (『静岡新報』1903年=明治36年11月27日付)

「△山水篇▽鷹峰 朝岡鎮太郎 (十八) 江尻海水浴」 (『静岡新報』1903年=明治36年11月28日付)

[明治36年12月欠号]

■ 1904年=明治37年

● 歴史情報『静岡新報 Vol.14 [明治37年1月~2月]』

「◎富士根学校組織変更」 [高等小学校] [ふじねむら] (『静岡新報』1904年=明

治 37 年 1 月 19 日付)

「◎須走の寒気と製氷」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 1 月 23 日付)

「◎須走籠坂間の道路」 [籠坂峠改修] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 1 月 24 日付)

「◎富士郡裾野便り」 [農作物] [賭博] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 1 月 24 日付)

「◎富士の岩尾は桜木」 [人穴] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 2 月 9 日付)

「宣戦詔勅」 [日露戦争] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 2 月 11 日付附録)

「△富士根村の送別会」 [在郷軍人] [ふじもとむら] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 2 月 19 日付)

「◎北条謙徳の醜行」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 2 月 27 日付)

「◎大石寺僧侶の乱行…驚くべき彼等の裏面… (つゞく)」 [ふじもとむら] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 2 月 28 日付)

「◎大石寺僧侶の乱行…驚くべき彼等の裏面… (続)」 [藤本智教] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 2 月 29 日付)

●歴史情報『静岡新報 Vol.15 [明治 37 年 3 月、8 月、9 月、11 月、12 月]』

「◎大石寺僧侶の乱行…驚くべき彼等の裏面… (つゞく)」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 3 月 1 日付)

「◎大石寺僧侶の乱行…驚くべき彼等の裏面… (つゞく)」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 3 月 2 日付)

「◎大石寺僧侶の乱行…驚くべき彼等の裏面… (つゞく)」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 3 月 3 日付)

「◎大石寺僧侶の乱行…驚くべき彼等の裏面… (つゞく)」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 3 月 4 日付)

「◎大石寺僧侶の乱行…驚くべき彼等の裏面… (つゞく)」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 3 月 5 日付)

「◎富士山上の鶴の巢 (目出度き瑞祥)」 [ツル] (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 9 月 3 日付)

「◎富士山頂上の怪火」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 9 月 3 日付)

「◎大石寺の僧侶 藤本智教の大野心」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 9 月 4 日付)

「◎富士山麓の好獵地」 (『静岡新報』 1904 年=明治 37 年 11 月 26 日付)

■1905年=明治38年

●歴史情報『静岡新報 Vol.16 [明治 38 年 3 月、5 月]』

■1906年=明治39年

●歴史情報『静岡新報 Vol.17 [明治 39 年 3 月～5 月、11 月]』

「◎潤井川改修工事」 (『静岡新報』 1906 年=明治 39 年 3 月 4 日付)

「◎御殿場地方の降雪」 [御殿場馬車鉄道不通] (『静岡新報』 1906 年=明治 39 年 3 月 4 日付)

「◎富士郡大追弔会」〔日露戦争戦病死者〕（『静岡新報』1906年＝明治39年3月7日付）

「◎富士郡の水力電気」〔水力発電の開発競争〕（『静岡新報』1906年＝明治39年4月18日付）

「◎植林地の紛擾（大宮町と山宮区）」〔入会権と植林〕（『静岡新報』1906年＝明治39年4月25日付）

〔1906年＝明治39年5月の大宮新道開設の記事は、『静岡新報』原紙の欠落のため一本も見ることにはできない。以降に同紙掲載の記事「○富士登山案内」（1907年＝明治40年7月24日付）などはとくに断らない限り大宮新道のことである。大宮新道開設に関しては（『静岡民友新聞』には「富士山新道開鑿」（1906年＝明治39年5月15日付附録）ほか多数の記事があり、『富士登山画報』（『近事画報』93号を改題、独歩社、明治39年7月）のようなまるごと提灯雑誌もある。〕

〔明治39年12月なし〕

■1907年＝明治40年

●県立プリント『静岡新報 Vol.24〔明治40年1月～4月、7月〕』

「◎大宮町の惨状 特派記者 小杉生」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月17日付）←7月は16日付以前の原紙がないので第1報は不明。

「△大水害の原因」〔御料林乱伐〕〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月17日付）

「◎潤川水害惨状 特派記者 小杉生」〔潤井川〕〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月17日付）

「◎鉄道馬車運転開始広告」〔豪雨〕〔馬車鉄道運転再開〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月17日付）

「◎潤川水害惨状 特派記者 小杉生」〔豪雨〕〔潤井川〕〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月18日付）

「◎潤川水害公報」〔豪雨〕〔潤井川〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月18日付）

「◎富士水害への同情」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月18日付）

「◎富士洪水の善後（再び此惨害を受くべからず）」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月19日付）

「◎潤川水害後記」〔豪雨〕〔潤井川〕〔富士登山再開〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月19日付）

「◎富士郡農作被水」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月20日付）

「◎芝富の大惨事」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月20日付）

「◎富士川の渡船禁止」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月20日付）

「◎富士郡被災地同情」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月20日付）

「当地未曾有の出水 富士製刻所」〔被災見舞いへのお礼広告〕〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年7月20日付）

「水害ニ付……富士製紙株式会社」〔被災見舞いへのお礼広告〕〔豪雨〕（『静岡新報』

1907年=明治40年7月20日付)

「水害謝御見舞……吉原銀行ほか」〔被災見舞いへのお礼広告〕〔豪雨〕(『静岡新報』

1907年=明治40〔豪雨〕年7月20日付)

「◎水害地善後策」(『静岡新報』1907年=明治40年7月21日付)

「水害ニ付……富士製紙株式会社」〔被災見舞いへのお礼広告〕〔豪雨〕(『静岡新報』

1907年=明治40年7月21日付)

「◎水害罹災者へ義捐」〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月21日付)

「◎水害罹災者へ義捐」〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月21日付)

「◎行衛不明死体判明」〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月23日付)

「◎富士関係者大集会」〔富士山表口改良組合?〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月23日付) ▼▼

「◎鷹岡村に同情義金」〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月23日付)

「◎富士水害地へ義捐」〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月23日付)

「◎鉄道馬車開通広告 富士鉄道株式会社」〔富士馬車鉄道運転再開〕〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月23日付)

「◎富士郡水害田反別」〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月24日付)

「◎富士登山案内」〔大宮新道〕〔富士山表山休泊営業合資会社〕〔富士山表口大宮改良同盟旅館〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月24日付) ▼▼

「△富士山頂の光線」(『静岡新報』1907年=明治40年7月24日付「はなしのたね」)

「鉄道馬車開通広告 富士鉄道株式会社」〔富士馬車鉄道運転再開〕〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月24日付)

「◎富士山巡査派出所」(『静岡新報』1907年=明治40年7月26日付)

「富士登山と大瀑布六流れ 佐野瀑園佐野ホテル」〔特別広告〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月30日付)

「◎富士たより」〔富士登山奨励会〕〔大阪探勝わらじ会〕(『静岡新報』1907年=明治40年7月31日付)

●県立プリント『静岡新報 Vol.25〔明治40年8月～12月〕』

「◎水害地現状」〔豪雨〕〔静岡県農会の調査〕(『静岡新報』1907年=明治40年8月1日付)

「◎富士山上の気候と大宮口登山者」〔中央气象台〕〔大宮新道〕(『静岡新報』1907年=明治40年8月2日付)

「◎富士たより」〔早田理学士登山〕〔静岡県昌谷内務部長登山〕〔遭難△八合目の死体〕〔富士山頂電話開通式〕〔親子四名の登山〕〔登山と箱根巡り〕〔黄金仏の行方▼▼〕〔俳優の富士登山〕(『静岡新報』1907年=明治40年8月3日付)

「◎富士山と乗合馬車」〔荷馬車の乗合馬車への転用許可〕(『静岡新報』1907年明治40年8月6日付)

「◎富士登山歓迎会」〔静岡県昌谷内務部長〕〔大阪毎日新聞社特派員〕〔大宮新道〕(『静岡新報』1907年=明治40年8月6日付) ←一部▲▲

「◎富士水害善後策」〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年8月6日付)

「◎富士たより」〔大坂わらじ会〕〔富士馬車鉄道ストライキ〕〔悪天候で避難〕〔発病〕

〔静岡県内務部長昌谷彰下山〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月7日付）

「◎昌谷部長 富士登山談」〔豪雨災害の原因〕〔富士山設備の改良〕〔山室の改良〕〔山麓旅館の連携〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月8日付）

「◎又々潤川増水せり」〔潤井川〕〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月8日付）

「◎富士馬車鉄道開通」〔ストライキ〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月8日付）

「◎富士山絵葉書好評」（『静岡新報』1907年＝明治40年8月8日付）

「◎一昨日の大雷雨 再び富士郡の惨事！」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月9日付）

「△徒歩主義者の登山」（『静岡新報』1907年＝明治40年8月9日付）

「◎戸田帝国大学水泳場本部」（『静岡新報』1907年＝明治40年8月9日付）

「◎富士郡水害善後策」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月10日付）

「◎富士郡水害義捐金」〔豪雨〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月10日付）

「◎富士山神符売切」〔浅間大社奥宮〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月11日付）

「◎吉原署長の免職（欠勤の巡査続々出勤す）」〔パワハラ〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月17日付）

「◎行衛不明者は無事」〔遭難〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月20日付）

「◎老翁の登山（鉄製錫杖を杖つき）」〔中村太兵衛〕〔高齢者登山〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月20日付）→「◎老人登山に就て」（8月21日付）、[「◎老爺愈々登山す」（8月24日付）に続報。](#)

「◎墨国代理公使登山」〔外国人登山〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月20日付）

「◎老人登山に就て（既記せる）」〔中村太兵衛〕〔高齢者登山〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月21日付）

「◎富士郡水害原因（一）（堀田山林技師の談話）（続く）」〔豪雨〕〔沼津測候所〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月22日付）

「◎富士郡水害原因（二）（堀田山林技師の談話）」〔豪雨〕〔排水路〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月23日付）

「◎吉原と砲兵（二百人の宿泊）」〔軍事演習〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月23日付）

「◎富士案内者懇親会」〔富士山表口富士案内業者〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月23日付）

「◎富士山と浩々歌客」〔角田勤一郎〕〔富士保勝論〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月24日付）▲▲

「◎老爺愈々登山す」〔中村太兵衛〕〔高齢者登山〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月24日付）

「◎富士郡水害原因（三）（堀田山林技師の談話）」〔豪雨〕〔土石流〕〔山林乱伐〕（『静岡新報』1907年＝明治40年8月24日付）

「◎富士郡水害原因（四）堀田山林技師の談話（完）」〔豪雨〕〔水源涵養林〕〔原野開

壘) (『静岡新報』1907年=明治40年8月25日付)

「◎御殿場署長の富士山視察」(『静岡新報』1907年=明治40年8月27日付)

「◎汽車と馬車衝突」(『静岡新報』1907年=明治40年8月30日付)

「◎村八分と詫状一札」(『静岡新報』1907年=明治40年8月30日付)

「◎富士山と警察」〔巡查派出所〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月3日付)

「◎富士郡郵便局廃止」〔富士山郵便局〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月3日付)

「◎静岡聯隊 裾野演習」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月5日付)

「◎野戦砲兵演習」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月7日付)

→「◎砲兵聯隊演習」(10月2日付)に続報。

「◎富士山上 強盗の逮捕 九月六日午後東京電話」(『静岡新報』1907年=明治40年9月7日付) ▲▲

「△箱根 線 上 開通」〔御殿場線 小山-山北間〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月8日付)

「◎洪水被害統計」〔8月24日豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月8日付)

「◎静岡聯隊野営」〔千本松原〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月8日付)

「◎富士電気の工事」(『静岡新報』1907年=明治40年9月10日付) →「◎富士電気開業式」(『静岡新報』1908年=明治41年5月27日付)に続報。

「◎小山山北開通」〔御殿場線〕〔豪雨〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月10日付)

「◎富士裾野射撃」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕

●歴史文化『静岡新報 Vol.19 [明治40年8月~40年12月]』

「◎供進神社指定」(『静岡新報』1907年=明治40年9月14日付)

「◎富士郡元吉原の紛乱(一)」(『静岡新報』1907年=明治40年9月20日付)

「◎富士山の大雪」〔冠雪〕(『静岡新報』1907年=明治40年9月27日付)

「◎富士郡元吉原の紛乱(二) (つゞく)」(『静岡新報』1907年=明治40年9月29日付)

「◎砲兵聯隊演習」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1907年=明治40年10月2日付)

「◎富士郡元吉原の紛乱(三) (つゞく)」(『静岡新報』1907年=明治40年10月2日付)

「◎富士郡元吉原の紛乱(四) (つゞく)」(『静岡新報』1907年=明治40年10月3日付)

「◎郡会選挙の不正(富士郡元吉原の紛乱)」(『静岡新報』1907年=明治40年10月4日付)

「◎富士郡元吉原の紛乱(五) (つゞく)」(『静岡新報』1907年=明治40年10月6日付)

「◎佐野停車場の改築式典」〔裾野駅〕(『静岡新報』1907年=明治40年10月8日付)

【駅の開業は1889年(明治22年)で、1934年(昭和9年)まで東海道本線の一部

であった御殿場線の開通と同時に開設された、御殿場線で最も古い駅の一つである。開業当時の駅名は、地名に由来する佐野駅（さのえき）であった。1915年（大正4年）に、大阪府にある佐野駅（1948年以降は泉佐野駅）や栃木県にある佐野駅と紛らわしい、という理由で現在の裾野駅に改称した。【Wikipedia】

「◎富士郡元吉原の紛乱（六）」（『静岡新報』1907年＝明治40年10月8日付）

「◎富士郡元吉原の紛乱（六）（つづく）」（『静岡新報』1907年＝明治40年10月10日付）

「◎富士駅新築工事」（『静岡新報』1907年＝明治40年12月13日付）

■1908年＝明治41年

●歴史文化『静岡新報 Vol.20 [明治41年1月～41年4月]』 [1月完全に欠落]

「◎富士山より転け落つ 雪中無事富士登山す」〔雪中登山〕〔倉田白羊〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月8日付）

「◎箱根と牽引力」〔御殿場線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月9日付）

「◎甲府岩淵鉄道」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月9日付）

「◎富士製紙の専用軌道」〔加島停車場〕〔富士駅〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月11日付）

「◎元吉原紛擾に就て」（『静岡新報』1908年＝明治41年2月14日付）

「蚕種貯蔵 富士天然風穴株式会社」〔広告〕〔養蚕〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月16日付）

「◎大宮町通信」（『静岡新報』1908年＝明治41年2月19日付）

「◎駿甲鉄促成請願」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月25日付）

「◎大倉喜八郎氏一行」（『静岡新報』1908年＝明治41年2月25日付）

「◎大倉氏の講話」〔大倉喜八郎〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月25日付）

「◎富士材木商同業組合」（『静岡新報』1908年＝明治41年2月25日付）

「◎大倉鶴彦翁講話」〔大倉喜八郎〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月26日付）

「◎東海紙料会社」〔大倉喜八郎〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月26日付）

「◎駿甲鉄道請願書」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年2月29日付）

「◎富士を奪はれるな 四十五年の大博覧会と三保の大海水浴場」〔山梨側との開発競争〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月6日付）

「◎駿甲鉄道建議案」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月13日付）

「◎駿甲鉄道急設」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月14日付）

「◎知事の東駿視察（一）」〔李家隆介〕〔鈴木農場〕〔佐野瀑園〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月18日付）

「◎知事の東駿視察（二）」〔李家隆介〕〔須山佐野往還〕〔佐野農業学校〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月19日付）

「◎知事の東駿視察（三）」〔李家隆介〕〔佐野三島往還〕〔沼津公園〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月20日付）

「◎競馬取締嚴重」〔鈴川競馬会〕〔治安警察法〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月20日付）

「◎元吉原の紛乱」（『静岡新報』1908年＝明治41年3月21日付）→「[元吉原の平和](#)」（9月20日付）に続報。

「◎加島村の発展」〔加島駅〕〔富士駅〕〔富士製紙〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月21日付）

「◎日本の大射撃場」〔東富士演習場ほか5カ所に拡大〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月25日付）

「◎加島停車場工事」〔加島駅〕〔富士駅〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月25日付）

「◎駿甲鉄道の速成（一）（衆議院委員会に於る演説）代議士 松本薫平」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月27日付）

「◎駿甲鉄道の速成（二）（衆議院委員会に於る演説）代議士 松本薫平」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年3月28日付）

「◎駿甲鉄道速成慰労会」〔身延線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年4月15日付）

「◎富士川の船転覆 乗客十九人の内六人溺死」（『静岡新報』1908年＝明治41年4月24日付）→「[◎富士川遭難後報](#)」（同日付）に続報。

「◎砲兵聯隊より差止」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1908年＝明治41年4月24日付）

「◎富士川遭難後報」（『静岡新報』1908年＝明治41年4月24日付）

●[歴史文化『静岡新報 Vol.21 \[明治41年5月～41年7月\]](#)』

「◎愛鷹山を取巻く 農民百五六十名の一団 弁護士危く逃る」（『静岡新報』1908年＝明治41年5月1日付）

「◎仏と鬼（富士郡と伊豆）」〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月1日付）

「◎大野原砲台建設」〔東富士演習場〕〔狐塚〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月9日付）

[\[このページ掲載の鈴木辰二郎氏の近影は『静岡新報』に掲載された初めての写真である\]](#)

「◎女三人の身投げ 落花の東京を迷出でて怨は長し田子の浦」〔女3人心中〕〔自殺〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月10日付）

「◎疑問の水死婦人 田子の浦波黙して不言」〔女3人心中〕〔自殺〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月12日付）

「◎疑問は益々疑問 田子浦 水死婦人の後報」〔女3人心中〕〔自殺〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月13日付）

「◎秘密の鍵は不開 水死婦人の身元益々怪し」〔女3人心中〕〔自殺〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月14日付）

「◎水死婦人判明す 疑問の扉漸く開く」〔女3人心中〕〔自殺〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月15日付）

「◎本県と死行く人 一年幾人死すか 何の病気で多く死ぬか？」（『静岡新報』1908年＝明治41年5月16日付）

「◎水死婦人判明す 疑問の扉漸く開く」〔女3人心中〕〔自殺〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月16日付）

「◎恨は不消田子の浦 東京出発後の三女」〔女3人心中〕〔自殺〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月17日付）

「◎女子の富士登山」〔この花会〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月24日付）

「◎芝川水電の供給」〔四日市製紙〕〔水力発電〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月27日付）

「◎富士電気開業式」〔水力発電〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月27日付）
→次の2本が続報。

「◎富士電気会社」〔完成〕〔水力発電〕（『静岡新報』1908年＝明治41年5月30日付）

「◎富士電気会社」〔営業開始〕〔水力発電〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月3日付）

「◎重代の宝刀紛失 富士郡大石寺の百鬼夜行」（『静岡新報』1908年＝明治41年6月3日付）

「◎田子の浦 鳥合戦 死屍累々として横はる」〔鳥の戦争〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月4日付）

「◎大宮分署長の刷新」〔巡査合宿所〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月4日付）

「◎射撃目標砲台」〔東富士演習場〕〔狐塚〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月5日付）

「◎富士電気開業式（大宮浅間社内の不夜城）」〔水力発電〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月5日付）

「◎富士電気会社吉原支店」〔水力発電〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月7日付）

「◎砲台工事視察」〔東富士演習場〕〔狐塚〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月11日付）

「◎富士軌道株式会社創立総会」〔大宮一根原〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月11日付）

「◎大宮葉煙草品評会」〔タバコ〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月14日付）

「◎富士山電話」〔吉田口〕〔頂上電話〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月14日付）

「◎荒廃せし小夜の中山 老松怨を呑んで栄華の夢を語る」〔東海道線〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月17日付）

「◎富士裾野と煙草」〔タバコ〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月19日付）

「◎葉煙草褒賞授与式」〔秦野葉煙草収納所大宮出張所〕〔タバコ〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月19日付）

「◎富士登山者に汽車割引」（『静岡新報』1908年＝明治41年6月21日付）▲▲
←「◎富士登山汽車賃割引に付稟請」（1902年＝明治35年7月19日付）の改善内容
→「◎富士登山汽車割引」（6月25日付）に続報。

「◎富士登山新道」〔富士山南表須山口〕（『静岡新報』1908年＝明治41年6月24日付）→「◎富士登山南表須山口」（6月27日付）、「◎富士登山須山口」（7月10日付）に続報

「◎富士登山汽車割引」 (『静岡新報』1908年=明治41年6月25日付)
「◎株式会社設立登記公告 富士軌道株式会社 吉原区裁判所大宮出張所」 (『静岡新報』1908年=明治41年6月27日付)
「◎株式会社設立登記公告 富士運送株式会社 吉原区裁判所」 (『静岡新報』1908年=明治41年6月27日付)
「◎富士登山南表須山口 佐野駅より=距離最も近し」 (『静岡新報』1908年=明治41年6月27日付) ▲▲

「◎富士登山須山口」 [新橋営業事務所が視察] [富士山南表須山口] (『静岡新報』1908年=明治41年7月10日付)
「◎富士の郵便局」 [富士山郵便局・富士山北郵便局] (『静岡新報』1908年=明治41年7月12日付)
「◎佐野須山往還改修」 [富士山南表須山口] (『静岡新報』1908年=明治41年7月15日付)
「◎富士山と郵便物」 [浅間大社奥宮] (『静岡新報』1908年=明治41年7月16日付)
「◎富士登山の枝折」 (『静岡新報』1908年=明治41年7月19日付) ←この資料静岡県の「おうだんくんサーチ」で検索できず→「富士登山の葉附沼津三島遊覧案内 静岡印刷」(8月9日付) [広告]あり。

「◎駿東郡の水害」 (『静岡新報』1908年=明治41年7月19日付)
「◎潤川改修延長請願」 [潤井川] (『静岡新報』1908年=明治41年7月19日付)
「◎水害救助」 [富士郡の水害] (『静岡新報』1908年=明治41年7月19日付)
「◎大宮浅間大祭」 [浅間大社奥宮] (『静岡新報』1908年=明治41年7月21日付)
「◎須山口の初登山」 [富士山南表須山口] (『静岡新報』1908年=明治41年7月21日付)
「◎登山記念写真」 [浅間大社の許可] [須走口に写真屋] (『静岡新報』1908年=明治41年7月21日付)
「◎山開せし富士山 続々と登山者多し」 [大宮新道] [富士表山大宮口新聞記者招待登山会] (『静岡新報』1908年=明治41年7月22日付) ▲▲←富士表山大宮口新聞記者招待登山会に招待された新聞社・記者名と歓迎ぶりは「○富士登山記者招待会」(『静岡民友新聞』明治41年7月28日付)に詳しい。つづく提灯記事は『静岡新報』が「金剛杖(一)小杉菜花」(7月30日付)～「金剛杖(十)小杉菜花」(8月9日付)の10回、『静岡民友新聞』が「一万二千尺(一)蝶生」(7月30日付)～「一万二千尺(七)蝶生」(8月8日付)の7回、『東京日日新聞』は「○車窓より見し富士(富士紀行の一)」(8月1日付)～「○御来光を拝す(富士紀行の七)」(8月12日付)の7回があり、『東京朝日新聞』は吉田口からの登山記で『熱鬧な富士山(上)』(8月2日付)～『熱鬧な富士山(下)』(8月4日付)3回がある。

「◎富士の葉発行」 [大宮新道] (『静岡新報』1908年=明治41年7月22日付) ←静岡県横断検索「おうだんくんサーチ」では検索できないが、『富士文庫寄贈図書展示目録』(富士市立博物館・富士市立図書館発行、1988年)には《4808 富士の葉附

登山案内 多々良松翠 静岡市松翠堂 明治41（1908）の記載あり。

「◎富士山表口通信」〔7月20日山開き～24日の大宮の様子〕〔客の取り合い〕（『静岡新報』1908年＝明治41年7月26日付）

「◎富士頂上鳥居の献納」〔岩淵鳥居講〕〔信仰登山〕（『静岡新報』1908年＝明治41年7月29日付）

「金剛杖（一）表口大宮新道登山記 小杉菜花」〔富士表山大宮口新聞記者招待登山会の提灯記事〕（『静岡新報』1908年＝明治41年7月30日付）

「◎富士登山電車（応て事実）」（『静岡新報』1908年＝明治41年7月30日付）

「金剛杖（二）表口大宮新道登山記 小杉菜花」〔大宮新道〕〔富士表山大宮口新聞記者招待登山会の提灯記事〕 ←原紙欠落

●歴史文化『静岡新報 Vol.22〔明治41年8月～41年12月〕』〔10～12月はほとんどなし〕

「金剛杖（三）表口大宮新道登山記 小杉菜花」〔富士表山大宮口新聞記者招待登山会の提灯記事〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月1日付）

「◎加島停車場道路」〔富士駅〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月1日付）

「◎楽な富士登山法（上）病人でも無い限り誰れでも登れる」〔大宮新道〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月1日付）

「金剛杖（四）表口大宮新道登山記 小杉菜花」〔富士表山大宮口新聞記者招待登山会の提灯記事〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月2日付）

「◎楽な富士登山法（中）病人でも無い限り誰れでも登れる」〔大宮口案内（『静岡新報』1908年＝明治41年8月2日付）

「金剛杖（五）表口大宮新道登山記 小杉菜花」 ←原紙欠落

「金剛杖（六）表口大宮新道登山記 小杉菜花」〔富士表山大宮口新聞記者招待登山会の提灯記事〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月5日付）

「◎宗教法案の提出」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月5日付）

「◎大宮町近信」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月5日付）

「金剛杖（七）表口大宮新道登山記 小杉菜花」 ←原紙欠落

「金剛杖（八）表口大宮新道登山記 小杉菜花」 ←原紙欠落

「金剛杖（九）表口大宮新道登山記 小杉菜花」〔富士表山大宮口新聞記者招待登山会の提灯記事〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月8日付）

「◎箱根七湯と富士（乙女峠開鑿の急務）」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月8日付）

「金剛杖（十）表口大宮新道登山記 小杉菜花」〔富士表山大宮口新聞記者招待登山会の提灯記事〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月9日付）

「◎暴風雨と其の被害 △富士川橋は落橋せり△大宮町を通ずる横溝川は……」〔豪雨〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月9日付）

「◎神戸新聞富士登山」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月9日付）

「富士登山の葉 静岡印刷」〔広告〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月9日付）

←「◎富士登山の枝折」（明治41年7月19日付）のことか。

「◎富士製紙の改革 内部の乱脈甚だし」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月18日付）

日付)

「◎三歳の幼女富士登山」〔幼児登山〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月23日付)

「◎富士裾野演習」〔北富士演習場〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月25日付)

「◎大野原砲台竣工 明年四月より執行」〔東富士演習場〕〔狐塚〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月25日付)

「◎静岡県の公有林（本多林学博士視察談）」〔本多静六〕〔金原明善の失敗〕〔冬の寒気で杉・檜の幼樹は育たない〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月26日付）→「◎静岡県の山林業」（9月1日付）に続報。

「◎富士製紙腐敗の真相 役員相結託し賄賂公行す」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月26日付)

「◎富士製紙腐敗の真相 役員相結託し賄賂公行す」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月27日付)

「◎野砲兵の演習」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月28日付)

「◎富士製紙腐敗の真相 役員相結託し賄賂公行す」（『静岡新報』1908年＝明治41年8月28日付)

「◎秋の富士登山」〔須走口〕（『静岡新報』1908年＝明治41年8月29日付）▲▲

「◎静岡県の山林業」〔本多静六〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月1日付)

「◎富士製紙腐敗の真相 役員相結託し賄賂公行す」（『静岡新報』1908年＝明治41年9月1日付)

「◎富士頂上の閉鎖」（『静岡新報』1908年＝明治41年9月1日付）▲▲

「◎大野原目標砲台」〔東富士演習場〕〔狐塚〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月2日付)

「◎本門寺払下事件」〔西山本門寺が立木払い下げ代金を騙された〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月3日付)

「◎寒天製造工場」〔須走〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月3日付)

「◎富士山伐木と水害」〔御止山〕〔御料林〕〔富士製紙〕〔植林〕〔水害〕〔山麓開墾〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月3日付）▲▲

「◎富士山麓戦争」〔各種部隊が軍事演習〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月4日付)

「◎閉鎖せる富士山（登山者は幾人）△登山者五万人△御守札十八万枚△一日十五円の収入△開山期と鉄道庁、郵便局」〔登山者数〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月4日付)

「◎富士製紙腐敗の真相 役員相結託し賄賂公行す」（『静岡新報』1908年＝明治41年9月4日付)

「◎軍隊富士に登山す 八合目以上は登れず」〔軍事演習〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月16日付)

「◎鉄馬で大怪我」〔富士馬車鉄道〕〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月19日付)

「◎元吉原の平和」〔元吉原の紛乱終結〕（『静岡新報』1908年＝明治41年9月20

日付)

「◎野戦砲兵来着」〔東富士演習場（『静岡新報』1908年＝明治41年9月22日付）〕

「◎富士製紙の改称」〔ふじもとむら（『静岡新報』1908年＝明治41年11月27日付）〕

「◎雪中富士登山隊 小説家江見水蔭氏の発案」〔雪中登山〕（『静岡新報』1908年＝明治41年12月25日付）→「◎雪中の富士登山隊」（1909年＝明治42年1月7日付）に続報。

■1909年＝明治42年

●歴史文化『静岡新報 Vol.23〔明治42年1～8月；4月はまったくなし〕〔明治44年4～7月；6月まったくなし〕〔明治45年1月〕』

「大富士（小説）花の（ゆき）小杉菜花（終り）」（『静岡新報』1909年＝明治42年1月1日付）→小説ではあるが大宮口の二合目まで、御殿場口の風光が実写されている。

「◎雪中の富士登山 旅装勇ましく愈々出発したり△日比谷に集る△過半は中老年△一人の外国婦人△携帯品の数々△第一報△第二報△第三報」〔雪中登山〕（『静岡新報』1909年＝明治42年1月7日付）←原紙のハシラは「1月6日付第4781号2面」だが、1月6日付は第4780号であり、「1月7日付第4781号1面」の次に綴じられているので実際は1月7日付2面らしい。このあと月末まで原紙なし。

「◎白糸芝川水電」（水力発電）『静岡新報』1909年＝明治42年3月6日付)

「◎須山上村夜学会」（『静岡新報』1909年＝明治42年3月6日付)

「◎駿甲鉄道請願」〔身延線〕（『静岡新報』1909年＝明治42年3月6日付)

「◎富士山への電話設計」〔富士山電話〕（『静岡新報』1909年＝明治42年5月29日付)

「◎駿甲鉄道の実測」〔身延線〕（『静岡新報』1909年＝明治42年5月15日付)

「◎富士山と種々なる設備 軌道、ホテル、温室、賭博、雉子、番犬養成所」（『静岡新報』1909年＝明治42年6月6日付)

「◎箱根禁伐林組合」（『静岡新報』1909年＝明治42年6月5日付）▲▲

「◎富士山と種々なる設備 軌道、ホテル、温室、賭博、雉子、番犬養成所」（『静岡新報』1909年＝明治42年6月6日付）▲▲

「◎函南村の大樹林」〔箱根禁伐林組合〕（『静岡新報』1909年＝明治42年6月16日付)

「◎富士登山の準備」〔大宮の準備状況〕〔富士山表口大宮改良同盟旅館〕〔強力馬丁の悪弊〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月1日付)

「◎雨を冒し富士へ強行軍 近衛第三聯隊の快事」〔軍事演習〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月8日付)

「◎富士須走口登山」〔大米谷大住〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月8日付)

「◎富士山電話」（『静岡新報』1909年＝明治42年7月20日付)

「◎貯水池新設」〔富岡村（『静岡新報』1909年＝明治42年7月20日付）〕

「◎盲人の富士登山」〔障害者登山〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月20日付)

→「◎無事頂上に達す」（7月21日付）に続報。

「◎東久邇宮御登山」〔皇族登山〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月21日付)

「◎御料地払下」〔…富士郡十五ヶ所、駿東郡十二ヶ所…〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月21日付）

「◎無事頂上に達す 盲人隊の元気旺盛」〔障害者登山〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月21日付）

「◎富士山の山開き 荘厳なる祭典執行〔浅間大社奥宮〕」（『静岡新報』1909年＝明治42年7月21日付）▲▲

「◎富士製紙重役会」〔富士馬車鉄道？〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月22日付）

「◎富士山麓排水溝渠」〔山宮字割石から万野原新田字机島〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月22日付）

「◎富士登山と大宮口 岳麓の名勝と軌道△富士駅と鉄馬△四合目までの道路△頂上迄の電話△岳麓の名勝△砂走り新道▲▲」〔富士軌道〕〔人穴砂走り？〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月22日付）

「◎山上の芳名録」（『静岡新報』1909年＝明治42年7月22日付）→[高齢者登山番付表の嚆矢か。](#)

「◎富士登山（八月一日）発行」〔小杉菜花・河合英忠共著、記事ふうの自社広告〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月22日付）←[静岡県立図書館「おうだんくんサーチ」で検索できない。](#)

「◎大宮学校の成績」〔大宮尋常高等小学校〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月23日付）

「◎殿下頂上に立たせ給ふ 東久邇宮殿下の御英姿」〔皇族登山〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月23日付）

「◎女子の富士登山」（『静岡新報』1909年＝明治42年7月23日付）

「◎有望なる芝川水電（一）牧野四郎の談話」〔水力発電〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月24日付）

「◎大宮学校の成績（二）」〔大宮尋常高等小学校〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月24日付）

「◎有望なる芝川水電（二）牧野四郎氏談話」〔水力発電〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月25日付）

「◎富士の風穴に就いて（理学博士横山又二郎氏談）」〔駒門風穴〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月28日付）←[文章が途中で切れていて、原紙の左端が断ち落とされているらしい。](#)

「◎富士登山七千人 大宮口?御殿場へ下よ」〔御殿場駅〕〔富士駅〕〔鈴川駅〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月29日付）

「◎小学生頂上を極む 富士始つてより以来」〔大宮尋常高等小学校〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月30日付）

「◎富士山と電話」（『静岡新報』1909年＝明治42年7月30日付）

「◎富士山で行衛不明 五合目より四合目の途中」〔遭難〕（『静岡新報』1909年＝明治42年7月31日付）

「◎小学生富士登山詳報 元気旺盛疲労なし」〔大宮尋常高等小学校〕（『静岡新報』1

1909年=明治42年7月31日付)

「◎三重の団体登山」〔三重新聞社〕(『静岡新報』1909年=明治42年7月31日付)
「新報文壇『富士登山』を読む 滝閑邸」〔書評〕(『静岡新報』1909年=明治42年8月4日付)

「△富士の測候」〔中央气象台〕(『静岡新報』1909年=明治42年8月4日付)

「△最近富士山頂〔中央气象台〕」(『静岡新報』1909年=明治42年8月4日付)

「◎少女の富士登山 其他各団体登山者」(『静岡新報』1909年=明治42年8月4日付)

「菜花著 英忠画 富士登山(一部二十銭)△各書店に有り」〔広告〕〔小杉菜花〕(『静岡新報』1909年=明治42年8月4日付)

[明治42年8月5日~大正2年1月ほとんど欠号]

■1910年=明治43年 原紙なし

■1911年=明治44年 原紙なし

■1912年=明治45年=大正元年 原紙なし

■1913年=大正2年

●歴史文化『静岡新報 Vol.24 [大正2年3~4月]』〔連日そろっている〕

「◎馬車一部開通す」〔御殿場馬車鉄道〕〔積雪のため運休〕(『静岡新報』1913年=大正2年2月1日付)

「◎数百間を転げ落つ 雪中富士登山中の椿事」〔雪中登山〕〔遭難〕(『静岡新報』1913年=大正2年2月9日付)

「◎馬匹講習会」(『静岡新報』1913年=大正2年3月3日付)

「◎大室山風穴」(〔養蚕〕『静岡新報』1913年=大正2年3月3日付) ▲▲

「◎スキー滑走練習」〔オイヒレル〕〔須走口〕(『静岡新報』1913年=大正2年3月4日付)

「◎外人の雪橇登山 二人漸く絶頂に達す」〔須走口〕〔外国人登山〕〔雪中登山〕〔スキー登山〕(『静岡新報』1913年=大正2年3月19日付)

「◎停車場問題調停」〔富士身延鉄道大宮停車場〕〔身延線〕(『静岡新報』1913年=大正2年3月20日付) ▲▲

「◎村民議場を襲ふ 三百八十名大挙して」〔上井出村の秣場争論〕(『静岡新報』1913年=大正2年3月28日付) →次項続報。

「◎入会秣場傘割」〔上井出村の秣場争論〕(『静岡新報』1913年=大正2年4月1日付)

「◎富士表口道路の改修 立派なるものとなるべし」〔大宮新道〕(『静岡新報』1913年=大正2年4月6日付) ▲▲

「◎熱海線起工期」〔東海道本線〕(『静岡新報』1913年=大正2年4月10日付)

「◎独逸軍艦乗組員富士山頂を極む 七名中漸く二名のみ」〔外国人登山〕〔雪中登山〕(『静岡新報』1913年=大正2年4月16日付)

「◎神社統一法規内容」(『静岡新報』1913年=大正2年4月20日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.25 [大正2年5～6月]』 [連日そろっている]

「◎駿甲国境調査」〔駿甲国境問題〕〔富士郡上井出村地先〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月1日付）▲▲

「◎野鼠駆除成績」〔野ネズミ〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月1日付）

「◎当聯隊裾野滞留」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月10日付）

「◎老人の雪中富士登山 危険六合目より引返す」〔高齢者登山〕〔雪中登山〕〔回数登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月17日付）

「◎独人の雪中登岳 七合目迄達して逆戻り」〔外国人登山〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月22日付）

「◎浮島沼の実体（一）横山博士の調査△浮動区域△浮島沼区域△試掘区域と地質」〔横山又次郎〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月23日付）

「◎浮島沼の実体（二）横山博士の調査△腐植土△粘土△■●△砂土」〔■＝土偏にに盧、●＝土偏に母〕〔横山又次郎〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月23日付）

「◎浮島沼の実体（四）横山博士の調査△排水工事△湧水口閉鎖」〔横山又次郎〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月26日付）

「◎熱海線工事延期」〔東海道本線〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月26日付）

「◎浮島沼の実体（五）横山博士の調査△排水の結果（完）」〔横山又次郎〕（『静岡新報』1913年＝大正2年5月27日付）

「◎富士郡畜牛検査」（『静岡新報』1913年＝大正2年5月27日付）

「◎甲駿国境論争地の沿革」〔駿甲国境問題〕〔富士郡上井出村地先〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月3日付）▲▲ →この問題は「◎甲駿国境問題」（1914年＝大正3年8月30日付）、「◎駿甲国境問題」（『静岡新聞』1914年＝大正3年10月25日）へと延々続く。

◎富士山は桜が満開 七合目以上は登山危険〔残雪〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月5日付）

「◎熱海線は抛棄セズ 一時的に中止す」〔東海道本線〕〔資金欠乏〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月9日付）

「◎富士登山頗る危険 七合目以上の雪崩期」〔残雪〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月11日付）

「◎富士登山道改修」〔大宮新道〕〔姫神松〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月14日付）▲▲→《三、姫神松 大社の北約二丁登山道ノ右側ニ靈峰富士ヲ背景トシテ立テル枝振面白キ老松アリ、里人『曲り松』ト称シ、富士ノ秀麗ヲ眺ムルー勝地トナス、昭和七年十一月十四日大暴風の為メ主枝ヲ折ラレ聊カ風致ヲ損シタルモ未ダ名木タルヲ失ハズ。》（『富士山ト其附近ノ名所旧蹟』大宮町役場編・発行、1933年＝昭和8年）

「◎赤十字の新事業 富士山救護は休止」〔衛生センター〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月24日付）▲▲

「◎法学生富士登山 絶頂究めたと自称」〔残雪〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月24日付）

「◎富士の山開は十日 五日間早めて七月十日」〔御殿場口〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月26日付）▲▲

- 「◎浮島沼の整理」〔自然排水〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月27日付）
- 「◎学生の富士登山 山頂には積雪二尺余」〔残雪〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月29日付）
- 「◎停車場新道問題 大宮町民又々紛擾」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1913年＝大正2年6月29日付） ▲▲
- 歴史文化『静岡新報 Vol.26〔大正2年7～8月〕』〔連日そろっている〕
- 「◎高師生登山団」〔広島高等師範〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月1日付）
- 「◎富士山の暴風雨 三合目より引返へす」大正2年7月1日付）
- 「◎須山口山開き」（『静岡新報』1913年＝大正2年7月1日付） ▲▲
- 「◎富士登山統計」〔明治41年～大正1年、御殿場口・須走口登山者統計〕〔登山者数〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月2日付） ▲▲
- 「◎富士登山道改修」〔大宮新道の拡幅・改修〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月4日付）
- 「◎騎馬で富士登山 奇抜なる富士登山」〔外国人登山〕〔変わり種登山〕〔騎馬登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月4日付）
- 「◎悪戯から重軽傷 北山村山宮で」〔富士軌道〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月5日付）
- 「◎富士山の暴風雨 登山者は皆引返せり」（『静岡新報』1913年＝大正2年7月5日付）
- 「◎富士山中取締」〔富士山巡查派出所〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月5日付）
- 「鈴川河合橋之富士」〔仁丹本舗の広告、写真〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月5日付）
- 「◎富士風穴貯蔵高」〔養蚕〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月6日付）
- 「◎身延鉄道支線調査」〔富士身延鉄道〕〔富士大石寺鉄道〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月6日付）
- 「◎富士山電話架設」（『静岡新報』1913年＝大正2年7月6日付）
- 「◎富士登山者陸続 女も登り少年も登る△上下十七時間△婦人の登山△団体の初登山」〔開山前登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月7日付）
- 「◎芸妓の登山」（『静岡新報』1913年＝大正2年7月7日付）
- 「◎須走口の新道」〔駿河小山駅〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月8日付） ▲
- ▲→「◎小山須走間道路」（1916年＝大正5年8月16日付）、「◎小山須走登山道」（1917年＝大正6年10月1日付）に続報。
- 「◎富士山水雪少し 山頂気温四十八度」〔残雪〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月9日付）
- 「◎登山組合の大会」〔大宮町富士登山組合〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月9日付）
- 「◎熱海線促成運動 静岡神奈川両県聯合にて」〔東海道本線〕（『静岡新報』1913年＝大正2年7月10日付）
- 「◎大宮地代昂騰」〔富士身延鉄道大宮停車場〕〔身延線〕〔土地ブーム〕（『静岡新報』

1913年＝大正2年7月10日付)

「◎浮島沼実測」(『静岡新報』1913年＝大正2年7月10日付)

「◎原野化して水田△灌漑用水△山中湖△酒匂川を水源」〔小山町・北郷村の水田化〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月10日付)

「◎富士山西山口」〔西山口登山道〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月11日付)

▲▲→「◎富士上井出口」1915年＝大正4年6月11日付)の記事あり、同じものか。

「◎富士山死体後報」〔自殺〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月12日付)→「◎富士山死体判明」(7月14日付)、「◎変死者判明す」(8月17日付)に続報あり。

「◎富士煙草褒賞式」(『静岡新報』1913年＝大正2年7月13日付)

「◎宮司更迭」〔浅間大社〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月13日付)

「◎六百余名登山団」〔門司日報〕

「◎各駅共通の切符」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月13日付)

「熱海線自動車計画」〔東海道本線迂回路〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月14日付)

「◎安元宮司の罪悪 妾を蓄へ社金を私消」〔安元久雄〕〔浅間大社〕〔富士山写真撮影の許可〕〔写真屋〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月14日付)▲▲→「◎前宮司捕まる」(1914年＝大正3年3月27日)、「◎浅間神社元宮司の罪状」(5月14日付)、「◎元大宮浅間神社宮司の公判」(6月11日付)に続報

「◎富士山死体判明 辛苦活版職工となりし男」(『静岡新報』1913年＝大正2年7月14日付)

「◎富士山通信一束 本年は登山者多し」〔浅間大社山開き〕〔富士山電話〕〔富士山表山休泊営業合資会社〕〔三井藤作の騎馬登山認可〕〔三井藤次郎?〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月14日付)▲▲

「◎富士山彙報」〔浅間大社山開き〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月15日付)

「◎富士駅の中角力」〔相撲興行〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月15日付)

「◎富士山電話開通」(『静岡新報』1913年＝大正2年7月16日付)

「◎登岳聯隊の帰京 地方の人々に感謝す」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月16日付)

「◎富士山開式挙行」〔山開き〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月16日付)

「◎大石寺鉄道合併」〔富士大石寺鉄道〕〔大石寺軌道〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月17日付)

「◎八十四回登山」〔回数登山〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月17日付)

「◎須走口山開き」(『静岡新報』1913年＝大正2年7月17日付)

「◎富士山派出所」〔巡查派出所〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月17日付)

「◎大宮口だより」〔富士身延鉄道〕〔大宮停車場〕〔三井藤次郎の騎馬登山〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月18日付)▲▲

「◎気候と登山者」(『静岡新報』1913年＝大正2年7月18日付)

「◎富士山便り」〔17日の御殿場口・須走口・大宮口の登山状況〕〔表山強力組合〕〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1913年＝大正2年7月19日付)一部▲▲

「◎騎馬登山団体」〔三井藤次郎〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1913年＝大正2

年7月20日付) ▲▲

「◎富士駅の大角力」〔相撲〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月20日付)

「◎富士身延鉄道」〔富士身延鉄道が開通し、富士-大宮鉄馬廃止、鈴川-入山瀬鉄馬は従来通り〕〔身延線〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月20日付) ▲▲

「◎富士山だより」〔19日の登山状況〕〔富士郡産牛馬組合〕〔三井藤次郎が土地提供〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月21日付)

「◎百町歩の富士牧場」)〔富士郡産牛馬組合〕〔三井藤次郎が土地提供〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月22日付) ▲▲

「◎官鉄と富士鉄」〔東海道本線と富士身延鉄道の連絡輸送〕〔身延線〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月22日付)

「◎高下駄で登山す」〔変わり種登山〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月22日付)

「◎富士山だより」〔20日の登山状況〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月22日付) 「◎富士身延愈運転」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月23日付)

「◎富士身延割引」〔団体割引〕〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月24日付)

「◎東宮富士御登山 李王世子御同伴か〔昭和天皇〕〔皇族登山〕」(『静岡新報』1913年=大正2年7月24日付)

「◎富士山だより」〔22日の登山状況〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月24日付)

「富士身延鉄道開業」〔広告〕〔大宮新道〕〔身延線〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月24日付)

「◎富士山だより」〔23日の登山状況〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月25日付)

「◎競争登岳の壮観 第一着は二時間卅六分」(『静岡新報』1913年=大正2年7月26日付) →時事新報主催、のちの富士登山駅伝競走大会。

「◎砲弾にて殲さる 射撃演習中の大椿事」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月28日付)

「◎富士山だより」〔26日の登山状況〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月28日付)

「◎富士山だより」〔27日の登山状況〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月29日付)

「◎八年ぶりの奇遇 老婆と孫の富士登山」〔行方不明の富士紡女工と祖母の邂逅〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月30日付)

「◎富士山だより」〔28日の登山状況〕(『静岡新報』1913年=大正2年7月30日付)

「◎騎馬登山試乗」〔7月28日、三井藤次郎は七合目まで試乗〕(『静岡新報』1913年=大正2年8月1日付) ▲▲←ハシラの日付は7月1日付となっているが号数からすれば8月1日付。

「◎富士山で負傷」〔遭難〕(『静岡新報』1913年=大正2年8月1日付)

「◎富士山だより」〔7月29日の登山状況〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月1日付）

「◎富士山だより」〔7月31日の登山状況〕〔三井藤次郎騎馬登山隊〕〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月2日付）一部▲▲

「◎布哇中学生登山」〔外国人登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月3日付）

「◎騎馬登山頂上着 三日大宮に帰着の筈」〔三井藤次郎騎馬登山隊〕〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月3日付）▲▲

「◎富士山だより」〔1日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月3日付）

「◎富士山の奇寒」（『静岡新報』1913年＝大正2年8月3日付）

「◎騎馬登山一行無事下山 頂上に記年碑建設計画」〔三井藤次郎騎馬登山隊〕〔宝永山行場〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月5日付）▲▲

「◎富士山だより」〔3日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月5日付）

「◎熱海線の将来」〔御殿場線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月5日付）

「◎東口登山者は一万人 御殿場須走両口総数」〔登山者数〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月6日付）

「◎富士山だより」〔5日の大宮口の状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月6日付）

「◎富士山だより」〔5日の登山状況〕〔深川二十六夜講の登山〕〔信仰登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月7日付）一部▲▲

「◎婦人の登山団体」〔富士騎馬登山会〕〔三井藤次郎〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月7日付）▲▲

「◎富士登山の葉発刊」〔『富士登山の葉』静岡県駿東郡教育会編、警眼社、1913年〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月8日付）

「◎大宮市街鉄道」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月8日付）▲▲

「◎富士山で転ぶ」〔遭難〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月8日付）

「◎少年二名登山」（『静岡新報』1913年＝大正2年8月9日付）

「◎富士山だより」〔7日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月9日付）

「◎富士山だより」〔8日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月10日付）

「◎二歳で富士登山」〔幼児登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月12日付）

「◎富士山だより」〔有名人登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月12日付）

「◎名妓八千代登山 驚く程仰山な仕度」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月14日付）

「◎山上で行方不明」〔遭難〕〔吉村市太郎〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月14日付）→「◎富士山上を捜索」（8月17日付）に続報。

「◎富士山頂の変徴 一時は登降頗る危険」〔異常気象〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月14日付）

「◎富士山だより」〔12日の登山状況（『静岡新報』1913年＝大正2年8月14日付）〕

「◎富士山だより」〔13日の登山状況〕〔遭難〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月15日付）

「◎野中至氏の登山」〔気象観測〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月16日付）

「◎富士山だより」〔14日の登山状況〕〔遭難〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月16日付）

「◎変死者判明す」〔自殺〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月17日付喉部分）←

「◎富士山死体後報」（7月12日付）、「◎富士山死体判明」（7月14日付）の続報。

「◎富士山上を捜索 行方不明者捜索の為」〔吉村市太郎〕〔遭難〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月17日付）←「◎山上で行方不明」（8月14日付）が第1報

「◎富士山だより」〔16日の登山状況（『静岡新報』1913年＝大正2年8月18日付）〕

「◎富士郡砂防工事」〔山林乱伐〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月19日付）▲

▲

「◎富士山だより」〔17日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月19日付）

「◎富士郡の膏雨」〔旱魃〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月20日付）

「◎富士山だより」〔18日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月20日付）

「◎富士山だより」〔19日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月21日付）

「◎富士北部の喜雨」〔旱魃〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月21日付）

「◎白糸公園計画再燃」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月22日付）

「◎神戸芸妓の登山」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月22日付）

「◎登山者頼に減ず 三十一日に悉く閉鎖」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月22日付）

「◎須走村水力電気」〔水力発電〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月23日付）

「◎富士山だより」〔21日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月24日付）

「◎芸妓の富士登山」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月24日付）

→大阪・神戸の芸妓に刺激されて御殿場芸妓も富士登山。

「◎砲兵の時計窃取」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月24日付）

「◎富士山雪降る」（『静岡新報』1913年＝大正2年8月24日付）

「◎富士競馬場再興」〔水窪競馬場〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月24日付）

「◎富士山だより」（〔22日の登山状況〕『静岡新報』1913年＝大正2年8月24日付）

「◎野砲隊富士登山」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月26日付）

「◎富士山だより」〔24日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月26日付）

「◎明日は二十六夜」（『静岡新報』1913年＝大正2年8月26日付）▲▲

「◎富士山だより」〔24日の登山状況〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月26日付）

「◎老爺と跣足登山」〔高齢者登山〕〔変わり種登山〕〔大庭佐十郎〕〔回数登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月27日付）

「◎吉原富士間軌道」〔富士身延鉄道馬車部〕〔馬車鉄道〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月28日付）▲▲

「◎高山植物園設置」〔山出半次郎〕〔須走に高山植物園を計画〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月28日付）

「◎富士山大暴風雨」〔登山客足止め〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月29日付）

「◎甲駿国境問題」〔西部国境の恩賜林の境界調査〕〔駿甲国境問題〕（『静岡新報』1913年＝大正2年8月30日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.27〔大正2年9～11月〕』〔10月1日付～24日付欠号〕

「◎大宮水道計画」〔上水道〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月2日付）

「◎富士山の閉山式 山中石室は尚営業す」（『静岡新報』1913年＝大正2年9月2日付）

「◎富士山中で賭博」〔須走口五合五勺で強力5人〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月3日付）

「◎富士登山者総数 登山者は二万下山者は三万」〔御殿場口・須走口・須山口の登山者数〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月4日付）

「◎富士山麓の奇寒 大雨落雷数ヶ所あり」〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月7日付）

「◎富士山頂で観月 奥人登山の途に上る」〔外国人登山〕〔変わり種登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月16日付）

「◎富士山大降雪」（『静岡新報』1913年＝大正2年9月19日付）

「◎富士鹿毛献納儀」〔三井藤次郎〕〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月21日付）

「◎学生の生死不明 富士山中で遭難か」〔御殿場口、荒天を押して登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月21日付）

「◎大宮浅間と幣饌」〔浅間大社大祭〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月24日付）

「◎富士山大降雪」（『静岡新報』1913年＝大正2年9月29日付）

「◎老夫婦富士登山 八十一歳に七十七歳」〔高齢者登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年9月30日付）

「◎奥国武官の登岳 頂上は積雪五尺に達す」〔外国人登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月2日付）

「◎汽車賃半減 富士身延鉄道」〔広告〕〔浅間大社大祭〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月2日付）

「◎裾野の雉猟」（『静岡新報』1913年＝大正2年11月3日付）

「◎富士山大降雪」（『静岡新報』1913年＝大正2年11月3日付）

「◎青年と坊主悶着」〔星山大悟庵〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月3日付）

「◎馬車鉄道の脱線」〔御殿場馬車鉄道〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月5日付）

「◎大宮浅間祭典」〔浅間大社大祭〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月5日付）

「◎熱海線工事着手」〔東海道本線〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月7日付）
「◎第一師団演習」〔富士郡南部〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月16日付）
「◎富士川鉄道会社」〔四日市製紙〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月16日付）
→富士郡四日市専用軌道は岩淵一月台間に貨物専用軌道を新設し、旅客輸送も含む富士川
鉄道創立の動き。

「◎富士山頂で元旦 日本スキー隊の快挙」〔日本スキー倶楽部〕〔金井勝三郎〕〔高田
スキー隊〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1913年＝大正2年11月23日付）→本文中《本
年元旦に歩兵第五十八聯隊の日本スキー倶楽部将校は富士山巔を極めし》とあるが1月分
の原紙がそっくり欠落しているの確認できない→「◎雪橇登山隊椿事」（1914年＝大正
3年1月7日付）に続報。

〔大正2年12月は欠号〕

■ 1914年＝大正3年

●歴史文化『静岡新報 Vol.28〔大正3年1～3月〕』（大正3年1月2～6日付）、2
月は欠号]

「◎雪橇登山隊椿事 一名は即死一名は重傷」〔金井勝三郎〕〔高田スキー隊〕〔雪中登
山〕〔遭難〕（『静岡新報』1914年＝大正3年1月7日付）▲▲

「◎雪橇倶楽部支部」〔東京スキー倶楽部支部〕（『静岡新報』1914年＝大正3年1
月7日付）

「◎登山は絶対危険」〔雪中登山流行〕（『静岡新報』1914年＝大正3年1月8日付）

「◎小山廿五戸消失 白昼にも拘はらず大火なり」〔富士嵐〕（『静岡新報』1914年
＝大正3年1月8日付）

「◎富士身延鉄道促成」〔身延線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年1月11日付）→
富士－大宮間が高収益なので大宮－身延間を延長する計。

「◎富士身延土地買収」〔大宮－丸滝間の土地買収先行〕〔身延線〕（『静岡新報』19
14年＝大正3年1月15日付）

「◎富士の噴煙は虚説 多分は吹雪なるべし」〔吹っ立て〕（『静岡新報』1914年＝
大正3年1月24日付）

「◎富士火山系の大活動 海中に新島の湧出せるは其の結果」（『静岡新報』1914年
＝大正3年1月30日付）

「◎鉄道馬車の脱線」〔御殿場馬車鉄道〕（『静岡新報』1914年＝大正3年3月11
日付）

「◎熱海迂回線と沿道民」〔熱海線建設中止〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1914年
＝大正3年3月12日付）

「◎富士川定期通船」〔鯨沢－岩淵間〕（『静岡新報』1914年＝大正3年3月12日付）

「◎籠坂積雪二尺」（『静岡新報』1914年＝大正3年3月14日付）

「◎富士を飛越さん 甲府静岡までの大飛行」〔徳川大尉の大飛行〕（『静岡新報』19
14年＝大正3年3月15日付）

「◎籠坂積雪二尺」（『静岡新報』1914年＝大正3年3月14日付）

「◎鉄道馬車運転開始」〔御殿場馬車鉄道〕（『静岡新報』1914年＝大正3年3月14

日付)

「◎富士身延土地買収」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕〔大宮－羽鮒間買収すすむ〕（『静岡新報』1914年＝大正3年3月16日付）

「◎北山村の紛擾」〔北山村と山宮村の合併に起因する争い〕（『静岡新報』1914年＝大正3年3月26日付）

「◎箱根横断大飛行は近日決行さる」〔徳川大尉の大飛行〕（『静岡新報』1914年＝大正3年3月27日付）

「◎前宮司捕はる」〔浅間大社宮司・安元久雄逮捕か〕（『静岡新報』1914年＝大正3年3月27日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.29〔大正3年4～5月〕』

「◎富士絶頂で自殺との遺書を残して登山す」（『静岡新報』1914年＝大正3年4月6日付）

「◎四万円山林伐採 村民五百七十人総出にて」〔富丘村入会地に周辺住民が開墾・植林したため富丘村村民が実力行使〕（『静岡新報』1914年＝大正3年4月18日付）▲▲

「◎岳麓に殺気満つ 開墾地植林紛擾の後報」〔富丘村入会地〕（『静岡新報』1914年＝大正3年4月24日）▲▲

「◎熱海線延期か」〔熱海線工事復活〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年4月25日付）

「◎外人の富士登山」〔外国人登山〕〔オーストリア人〕（『静岡新報』1914年＝大正3年4月28日付）

「◎独逸水兵の登山」〔外国人登山〕（『静岡新報』1914年＝大正3年4月30日付）

「◎富士身延工事」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年5月2日付）

「◎富士身延払込済」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年5月4日付）

「◎浅間神社元宮司の罪状 神社のものは自分のもの」〔安元久雄〕（『静岡新報』1914年＝大正3年5月14日付）

「◎英人の富士登山 二合目以上は冬木立の儘」〔外国人登山〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1914年＝大正3年5月21日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.30〔大正3年6～7月〕』

「日蓮上人遺跡参拝（三）富永勇」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月5日付）←
6月1日付～4日付の原紙なし。

「◎熱海線復活せんか」〔東海道本線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月7日付）

「日蓮上人遺跡参拝（四）富永勇」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月7日付）

「◎熱海線復活内定」〔東海道本線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月8日付）

「日蓮上人遺跡参拝（五）富永勇」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月8日付）

「日蓮上人遺跡参拝（六）富永勇」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月9日付）

「趣味百題 富士川より仰げる初夏の富士」〔写真〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月10日付）

「日蓮上人遺跡参拝（七）富永勇」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月10日付）

「◎雪中富士登山 三合目は桜の真盛り」〔雪中登山〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月10日付）

「日蓮上人遺跡参拝（八）富永勇」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月11日付）

「◎元大宮浅間神社宮司の公判 老年に約五千円を費消す」〔安元久雄〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月11日付）

「◎魔窟の掃蕩」〔御殿場〕〔売春茶屋〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月11日付）

「◎熱海線の前途 決定は旬日の後」〔東海道本線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月12日付）

「日蓮上人遺跡参拝（九）富永勇（完）」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月12日付）

「◎元宮司の処刑」〔安元久雄〕〔懲役1年6カ月〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月14日付）

「◎富士身延成績」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月16日付）

「◎雪中富士登山 三名御殿場口より登攀〔雪中登山〕」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月16日付）

「◎老人雪中登山 三名御殿場口より登攀」〔高齢者登山〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月16日付）

「◎学者富士登山 七八月頃には北海道へ」〔アーネスト・ウィルソン〕〔植物調査〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月18日付）

「◎富山士巔降雪」（『静岡新報』1914年＝大正3年6月19日付）

「◎熱海線愈決定」〔熱海線工事復活〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月20日付）

「◎七月一日より 御殿場口の開山式」〔開山式を早める〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月23日付）▲▲〔続報のようにじっさいの開山は7月10日〕

「◎大宮口開山式 頂上の設備は十五日後」〔大宮新道例年通り〕（『静岡新報』1914年＝大正3年6月30日付）▲▲

「◎東表口開山式 御殿場にて盛大に挙行」（『静岡新報』1914年＝大正3年7月11日付）▲▲

「◎登山者の休憩所」〔富士駅前〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月12日付）

「◎御殿場町と改称」〔8月1日付で御厨町が御殿場町に改称〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月12日付）

「◎富士表口開山 石室は十四日より」（『静岡新報』1914年＝大正3年7月12日付）▲▲

「◎須走口開山式」（『静岡新報』1914年＝大正3年7月14日付）▲▲

「◎各室の準備」〔富士表山休泊合資会社〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月14日付）▲▲

「◎富士表口改善 偏に登山者の便宜を図る」〔大宮新道〕〔写真屋〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月15日付）▲▲ ←本文末尾が《富士本道大宮口にては静岡より発

行せる新聞並に静岡版ある各東京新聞記者に本年八月登山を乞ひ富士登山本道大宮口の便道たる事又た岳麓の名勝古跡の紹介を乞ふべく成田郡会議長より夫々案内状を發する筈」と結ばれており、本紙『静岡新報』にはそれと思しい提灯記事はないが、『静岡民友新聞』には「○富士登山の栞」（7月19日付）（7月20日付）および「大宮口富士登山図解」（7月21日付）が載っている。

「◎重砲兵の演習」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月17日付）

「◎十五日愈開山 各口の登山者多し」〔15日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月17日付） ←一部▲▲

「◎富士山便り」〔16日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月18日付）

「◎富士山便り」〔18日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月20日付）

「◎富士山便り」〔19日の登山状況〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月21日付）

「◎富士山で負傷 日射病に罹つた青年」〔遭難〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月22日付）

「◎富士山便り」（〔16日の登山状況〕〔浅間大社奥宮〕 ←『静岡新報』1914年＝大正3年7月22日付） 一部▲▲

「◎富士山便り」〔21日の登山状況〕〔巡查派出所〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月23日付） ←一部▲▲

「◎富士山便り」〔22日の登山状況〕〔白金水〕〔荒神岩〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月24日付） ←一部▲▲

「◎富士山便り」〔23日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月25日付）

「◎富士山便り」〔24日の登山状況〕〔富士宮口砂走り・虎走り〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月26日付） ←一部▲▲

「◎富士山便り」〔25日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月27日付）

「◎富士山便り」〔27日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月29日付）

「◎大宮水道計画」〔伝染病〕〔上水道〕（『静岡新報』1914年＝大正3年7月30日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.31 静岡新報〔大正3年8月・11月〕』、『静岡新聞〔大正3年9月29日～10月31日〕』

「○富士山便り」〔7月31日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年8月2日付）

「○富士山便り」（〔5日の登山状況〕『静岡新報』1914年＝大正3年8月7日付）

「○登山者増加」〔大宮新道の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年8月8日付）

「○富士山便り」〔8日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年8月10日付）

「○富士山便り」〔9日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年8月11日付）

「◎富士山の初霜 気温俄に変動したる為」（『静岡新報』1914年＝大正3年8月13日付）

「○富士山便り」〔11日の登山状況〕（『静岡新報』1914年＝大正3年8月13日付）

「○歐洲動乱と日本 宣言は十七日乎」〔ドイツに宣戦布告〕（『静岡新報』1914年＝

大正3年8月15日付) ←実際は8月23日。

「◎富士郡農作被害」〔豪雨〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月15日付)

「◎東海道線鮎沢川鉄橋大破壊」〔豪雨〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月15日付)

「◎困難なる徒歩連絡 老人小児婦人等は不可能」〔豪雨〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月15日付)

「◎登山者は無事 何等の異常を認めず」〔暴風雨で電話線は切断〕〔豪雨〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月16日付)

「◎富士紡大損害 其額五十万円以上に達す」〔豪雨〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月16日付)

「◎富士川交通杜絶」〔豪雨〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月16日付)

「◎富士山上を捜索 行方不明者捜索の為」〔吉村市太郎厭世自殺か〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月17日付)

「◎即死三名出す 機関車と貨車の衝突」〔豪雨〕〔復旧工事中〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月17日付)

「○富士山便り」〔15日の登山状況〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月17日付)

「◎列車接続時刻 徒歩する道程は約二里」〔豪雨〕〔復旧工事中〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月18日付)

「○富士の絶頂にもクラブ齒磨の香を留るに至れり」〔広告〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月22日付)

「◎富士閉山近し 登山者頓に減少したり」〔石室25日まで、31日頂上閉山式〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月26日付)

「○富士山便り」(〔27日の登山状況〕『静岡新報』1914年=大正3年8月29日付)

「◎甲駿国境問題」〔富士郡上井出村地先〕〔駿甲国境問題〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月30日付)

「◎列車運転休止 二十九日の大雨の為め」〔御殿場線〕〔豪雨〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月30日付)

「◎富士山便り」〔28日の登山状況〕〔各登山口の閉山〕(『静岡新報』1914年=大正3年8月30日付) ▲▲

〔大正3年9月1日~11月2日欠号〕

〔大正3年9月29日創刊号~10月31日は『静岡新聞』が綴じ込んであるが、この『静岡新聞』は戦時体制下の新聞ではなく、Wikipediaにもまったく触れられていない〕

「◎駿甲国境問題」(『静岡新聞』大正3年10月25日付)

「◎工事を中止 身延鉄道会社と大宮町」〔富士身延鉄道と大宮町の対立激化〕(『静岡新聞』大正3年10月29日付)

〔大正3年11月2日付〕から静岡新報に戻る〕

「◎富身工事差止」〔富士身延鉄道第2期線工事に対して大宮町が差し止めを命じる〕(『静岡新報』1914年=大正3年11月4日付)

「◎熱海線の工事」〔熱海線工事再開〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1914年=大正3年11月16日付)

[大正3年12月～4年2月欠号]

■ 1915年＝大正4年

● 歴史文化『静岡新報 Vol.32 [大正4年3月～4月]』

「◎大宮芝川開通」〔富士身延鉄道が延長〕〔身延線〕（『静岡新報』1915年＝大正4年3月2日付）

「◎大雪で凍死す 富士西北麓の炭焼人夫」〔山梨県古関村〕〔炭焼き〕（『静岡新報』1915年＝大正4年3月6日付）

「◎大宮町民大会」〔名誉助役新設につき町民の反対〕（『静岡新報』1915年＝大正4年3月17日付）

「◎芝川に墜落 機関車駛走して」〔富士身延鉄道事故〕〔身延線〕（『静岡新報』1915年＝大正4年3月28日付）

「△箱根の復旧」〔御殿場線山北一駿河間の復旧工事〕（『静岡新報』1915年＝大正4年4月8日付）

「◎富士身延借入」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1915年＝大正4年4月10日付）

「◎熱海線愈着手」〔東海道本線〕（『静岡新報』1915年＝大正4年4月13日付）一部▲▲

「◎大日本山林会総会 林業の振興と国家社会の発展 本県の林業 一、緒論 二、濫伐の弊 三、現在の状況△御料林野△公有林野△私有林野 四、結論 視察すべき林業△天城御料林△椎茸産地△山葵田△大幡野県林」（『静岡新報』1915年＝大正4年4月19日付）

「○大日本山林会総会 会衆千五百非常の盛況」（『静岡新報』1915年＝大正4年4月20日付）

「◎富士山の植林事業」（『静岡新報』1915年＝大正4年4月24日付）

● 歴史文化『静岡新報 Vol.33 [大正4年5月～6月]』

「◎須走浅間祭典」〔須走浅間神社〕（『静岡新報』1915年＝大正4年5月11日付）

「◎富士山の降雪 各地に雷雨降雹あり」（『静岡新報』1915年＝大正4年5月22日付）

「◎駿甲国境問題 廿一日県参来会に附議」〔県参事会〕〔行政訴訟〕（『静岡新報』1915年＝大正4年5月24日付）

「◎恐しい虫（一）富士郡の奇病」〔日本住血吸虫〕（『静岡新報』1915年＝大正4年6月2日付）

「◎恐しい虫（二）富士郡下の奇病」〔日本住血吸虫〕（『静岡新報』1915年＝大正4年6月3日付）

「◎恐しい虫（三）富士郡下の奇病」〔日本住血吸虫〕（『静岡新報』1915年＝大正4年6月4日付）

「◎斯く予防せよ 日本住血吸虫病」〔富士郡須津村・駿東郡浮島村〕（『静岡新報』1915年＝大正4年6月11日付）

「富士川急流の富士（静岡市紺屋町杉本写真館撮影）」〔写真屋〕（『静岡新報』191

5年＝大正4年6月11日付)

「◎富士上井出口 本年より新に開通」〔上井出口登山道〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月11日付) ▲▲←「◎富士山西山口」(1913年＝大正2年7月11日付) という記事あり、同じものか?

「◎列車一輛脱線」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月11日付)

「◎箱根線変更工事」〔熱海線〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月14日付)

「◎富士裾野に飛行機飛ぶ」〔所沢陸軍飛行隊〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月18日付)

「◎厄介な熱海線 兎角の風説あり」〔東海道本線〕〔土地ブーム〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月19日付)

「◎鉄道馬車転覆 負傷者数名を出す」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月19日付)

「◎裾野飛行 砲煙上を縦横快翔」〔所沢陸軍飛行隊〕〔軍事演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月21日付)

「◎富士身延第二期線工事」〔芝川－身延間〕〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月22日付)

「◎富士登山始る 京都の尼僧五合目迄」〔山室衛生〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月22日付) 一部▲▲

「◎夏の富士 物凄いほど寒い」〔野中至の談話〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月25日付)

「◎熱海線改築工程 富田建設所長談」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1915年＝大正4年6月27日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.34 静岡新報〔大正4年7月〕、静岡朝報〔大正4年8月〕』

「◎大学生登山」(『静岡新報』1915年＝大正4年7月1日付喉側)

「◎富士頂上に達す 今年は冰雪甚少し」〔大宮新道の下り山新道〕〔牡丹畑〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月1日付) ▲▲

「◎御殿場口山開 開山式は一日に挙る」(『静岡新報』1915年＝大正4年7月1日付)〔須走口は十五日〕

「◎富士山大宮口 山開きと諸準備」〔写真屋〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月1日付) 一部▲▲

「◎複線運転開始」〔御殿場線の複線運転再開〕〔豪雨〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月1日付)

「◎開山式の延期」〔御殿場口〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月2日付)

「◎岳麓の壮観 発砲中の飛行」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月3日付)

「◎馬車の転覆」〔富士身延鉄道の馬車〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月3日付)

「◎岳麓雨中の一大偉観 砲弾炸裂裡に数回の大飛行」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕(『静岡

岡新報』1915年＝大正4年7月4日付)

「◎外人の初登山 米国の新聞記者外一名」〔須走口〕〔外国人登山〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月4日付)

「◎何者の悪戯だ 鉄道線路に大石を横ふ」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月4日付)

「◎箱根越えは中止 气流甚しく悪き為めに」〔所沢陸軍飛行隊〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月5日付)

「◎健児五百の登山 静岡中学校の壮挙」〔大宮－御殿場の予定〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月5日付)

「◎開山祭の執行」〔浅間大社〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月6日付)

「◎富士火山系活動開始 我国の火山は目下一般に活動せり」〔北ア焼岳噴火〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月8日付)

「◎下駄穿で登山 二学生絶頂に達す」〔変わり種登山〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月9日付)

「◎浅間御田植祭」〔浅間大社〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月10日付)

「◎海兵富士登山 二十一、二日の両日に」(『静岡新報』1915年＝大正4年7月10日付)

「◎登山期愈迫る 富士山開山祭執行」〔大宮新道〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月12日付)

「◎跣足先達来る 十一日又々登山す」〔大心教会・大庭佐十郎〕〔変わり種登山〕〔回数登山〕〔信仰登山〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月12日付)

「◎女中等の登山」〔大宮町旅館組合〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月13日付)

「◎駿甲国境調査」〔西部国境の恩賜林の境界調査〕〔駿甲国境問題〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月15日付)

「◎富士身延割引」〔富士身延鉄道〕〔登山割引〕〔身延線〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月15日付)

「◎富士山豪雨」(『静岡新報』1915年＝大正4年7月16日付)

「◎大宮口設備完成」〔大宮新道〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月18日付)

「◎富士山頂で剃刀自殺」(『静岡新報』1915年＝大正4年7月19日付)

「◎富士電話不通」〔落雷〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月19日付)

「◎富士登山列車割引 二割引で期間は七日間」〔国鉄〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月19日付)

「◎青年の露營登山」(『静岡新報』1915年＝大正4年7月20日付)

「◎度々変る山上の天気」(『静岡新報』1915年＝大正4年7月20日付)

「◎静中登山決定 健児四百五十名の踴躍」〔静岡中学校〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月20日付)

「◎十里木往還起工」〔国道469号?〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月21日付)

「◎駿甲国境繫争 県参事会裁定内容」〔行政訴訟〕〔駿甲国境問題〕(『静岡新報』1915年＝大正4年7月21日付)

- 「◎近衛聯隊到着」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1915年＝大正4年7月21日付）
- 「◎東海道線短縮 九月一日より実行」〔御殿場線〕（『静岡新報』1915年＝大正4年7月22日付）
- 「◎富士山通信」〔20日の登山状況（『静岡新報』1915年＝大正4年7月22日付）〕
- 「◎富士山の天候」〔25日の登山状況〕（『静岡新報』1915年＝大正4年7月27日付）
- 〔一九一五年＝大正4年8月については翌日付夕刊の『静岡朝報』（編集兼発行人・古杉彦太郎、印刷人・寺田仙吉、発行所・静岡市七間町二丁目 静岡朝報社）が収録されている。『静岡朝報』についてはネット検索しても引っ掛からない〕
- 「◎一日の富士山 午前晴天午後は強風」〔大宮口の状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月3日付）（2日夕刊）
- 「◎老若の登山 少しも疲労せぬと」〔高齢者登山〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月3日付）（2日夕刊）
- 「◎富士山で病死」〔須走口六合目で写真屋営業中に腹膜炎で死亡〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月3日付）（2日夕刊）
- 「◎一日の富士山 頂上暴風雨となる」〔御殿場口の状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月4日付）（8月3日夕刊）
- 「◎白糸滝納涼会」〔白糸の滝〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月4日付）（8月3日夕刊）
- 「◎二日の富士山 終日頂上は暴風」〔大宮口・御殿場口の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月5日付）（8月4日夕刊）
- 「◎四日の富士山 天候時々変化する」〔大宮口・御殿場口の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月6日付）（8月5日夕刊）
- 「△富士山の暴風」〔電話不通〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月7日付）（8月6日夕刊）
- 「◎六日の富士山 暴風雨と濃霧にて」〔須走口・御殿場口・大宮口の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月8日付）（8月7日夕刊）
- 「◎八日の富士山 登山者頗る多し」〔大宮口・御殿場の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月10日付）（8月9日夕刊）
- 「◎九日の富士山 十日は強風雨なり」〔大宮口・御殿場口の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月11日付）（8月10日夕刊）
- 「◎十一日の富士山 十日は強風雨なり」〔御殿場口・須走口の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月12日付）（8月11日夕刊）
- 「◎十一日の富士山 正午より全山快晴」〔御殿場口・須走口の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月13日付）（8月12日夕刊）
- 「◎十二日の富士山 御殿場口盛ん也」〔大宮口・御殿場口の登山状況〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月14日付）（8月13日夕刊）
- 「○老僧の富士登山」〔高齢者登山〕（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月14日付）（8月13日夕刊）
- 「◎十三日の富士山 登山者も尠なし」（『静岡朝報』1915年＝大正4年8月15日付）

(8月14日夕刊)

「◎十五日の富士山 頂上晴天麓は曇雨」〔大宮口・須走口・御殿場口の登山状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月17日付)(8月16日夕刊)

「◎十七日の富士山 天候定かならず」〔須走口の登山状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月19日付)(8月18日夕刊)

「◎十九日の富士山 登山者漸く減ず」〔須走口・御殿場口・大宮口の登山状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月21日付)(8月20日夕刊)

「◎二十日の富士山 終日晴天なりき」〔御殿場口・大宮口の登山状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月22日付)(8月21日夕刊)

「◎廿二日の富士山 全山概ね雨天なり」〔須走吉・御殿場口の登山状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月24日付)(8月23日夕刊)

「◎廿三日の富士山 気温平均、全山曇雨」〔須走口・御殿場口・大宮口の登山状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月25日付)(8月24日夕刊)

「◎廿四日の富士山 登山者漸次減少す」〔須走口・御殿場口・大宮口の登山状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月26日付)(8月25日夕刊)

「◎廿五日の富士山 天候陰悪の一日中」(『静岡朝報』1915年=大正4年8月27日付)(8月26日夕刊)

「◎暴風の富士山 二十六日の正午より」〔須走口の状況〕(『静岡朝報』1915年=大正4年8月28日付)(8月27日夕刊)

[1915年=大正4年8月末をもって『静岡朝報』は消える]

●歴史文化『静岡新報 Vol.35 [大正4年9月~12月]』

「◎富士山で遭難 少年負傷して倒る」(『静岡新報』1915年=大正4年9月6日付)

「◎駿甲国境問題」〔韮山・江川文書を調査〕(『静岡新報』1915年=大正4年9月4日付)

「◎熱海線地質調査 鈴木理学博士出張」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔鈴木敏〕(『静岡新報』1915年=大正4年9月14日付)

「◎国境事件弁論」〔駿甲国境問題〕(『静岡新報』1915年=大正4年9月21日付)

「◎ス博士来 東海道膝栗毛の」〔スताल博士〕(『静岡新報』1915年=大正4年11月14日付)

「◎雪中登山 ク博士無事下山す」〔ニューヨーク・クック〕〔外国人登山〕(『静岡新報』1915年=大正4年11月26日付)

「◎富士軌道値上」(『静岡新報』1915年=大正4年12月7日付)

[大正4年12月24~5年1月31日欠号]

■1916年=大正5年

●歴史文化『静岡新報 Vol.36 [大正5年2月~3月]』

「◎裾野改称祝賀会」〔御殿場線〕〔佐野駅から裾野駅へ改称〕(『静岡新報』1916年=大正5年2月1日付)

「◎東海道線短縮=三十余哩 時間も四十分 然し完成は十年後」〔丹南トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1916年=大正5年2月4日付)

「◎馬力休業解決」〔鈴川駅馬力業者〕（『静岡新報』1916年＝大正5年2月4日付）

「◎身延鉄道心中 女は即死し男は軽傷」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年2月10日付）

「△熱海線方針決定」〔東海道本線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年2月22日付）

「◎熱海線は七年で竣工 新線は一時間半短縮する」〔東海道本線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年2月24日付）

「◎途中下車制度改正 五月十五日より実施」〔国鉄運賃〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月2日付） ▲▲

「◎駿甲国境問題」〔25日弁論終了、4月7日証拠調べ〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月2日付）

「◎富士身延鉄道 延長工事着手」〔芝川－身延間〕〔身延線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月2日付）

「◎本県産馬状況（一）△検査成績△飼養管理状況△産馬の変遷」（『静岡新報』1916年＝大正5年3月4日付）

「◎村役場へ押寄す 北山山宮両区の軋轢」〔北山村と山宮村の合併に起因する争い〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月5日付）

「◎本県産馬状況（二）△体型と嗜好△舎飼の弊△種牡馬の欠乏△本県産馬の将来」（『静岡新報』1916年＝大正5年3月5日付）

「◎芝川往還組合会」（『静岡新報』1916年＝大正5年3月6日付）

「◎熱海隧道確定 広軌改善の計画」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月7日付）

「◎大宮町地主会」〔地価200円以上を納税する者168人〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月13日付）

「◎富士軌道解散」（『静岡新報』1916年＝大正5年3月14日付）

「◎熱海線と三島」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔三島火力発電所〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月15日付）

「◎水久保鈴川競馬」〔水久保競馬〕（『静岡新報』1916年＝大正5年3月19日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.37〔大正5年4月～5月〕』

「◎富士山上で宙返り 四月四日から三日間＝日本訪問の記念に」〔飛行家スミスの来日〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月1日付）

「◎徴兵検査と住血吸虫 其害毒激烈＝直接療法なし」〔富士川沿岸と浮島沼付近〕〔日本住血吸虫〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月6日付）

「◎国境問題弁論延期」〔駿甲国境問題〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月8日付）

「◎富士不就学童」（『静岡新報』1916年＝大正5年4月8日付）

「◎各地の競馬会」〔鈴川競馬倶楽部〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月8日付）

「◎富士入会地問題」〔印野村、東富士演習場内の入会権〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月10日付）

「◎鈴川競馬会」〔第1日の状況〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月11日付）

「◎鈴川の競馬」〔2日目の状況〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月12日付）

「◎知事国境視察」〔駿甲国境問題とは無関係〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月13日付）

「◎富士身延工事」〔富士身延鉄道第2期線〕〔身延線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月15日付）

「◎遺骸は富士へ 天刑病の恩人」〔ジョゼフ・ベルトラム僧正〕〔神山復生病院〕〔ハンセン病〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月16日付）

「◎国境弁論延期」〔駿甲国境問題〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月19日付）

「◎富士山大降雪 東駿地方の奇寒」（『静岡新報』1916年＝大正5年4月19日付）

「◎本門宗諸改革」〔北山本門寺〕（『静岡新報』1916年＝大正5年4月20日付）

「◎村長乱打事件 加害者悉く拘引」〔富士郡富丘村・石川宇太郎村長〕（『静岡新報』1916年＝大正5年5月1日付）

「◎駿豆神職大会」（『静岡新報』1916年＝大正5年5月2日付）

「◎十六年間盗伐」〔御料林〕〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1916年＝大正5年5月5日付） ▲▲

「◎富士郡の損害 本所銀行破綻に対して」〔富士郡下の被害がもっとも大きい〕（『静岡新報』1916年＝大正5年5月6日付）

「◎富士郡の不良茶」〔粉末混入〕（『静岡新報』1916年＝大正5年5月17日付）

「◎郡役所に押寄す 須山村村民の陳情」〔須山村村長による村政紊乱〕（『静岡新報』大正5年5月17日付）

「◎富士山に降雪 岳麓各地の奇寒」（『静岡新報』1916年＝大正5年5月24日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.38 [大正5年6月～7月]』

「◎浮島排水工事 知事土木課長等東北視察」〔日本住血吸虫〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月8日付）

「◎浮島沼排水設計工事 △浮島沼の底面△設計の概要」（『静岡新報』1916年＝大正5年6月11日付）

「◎熱海線の着手」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月13日付）

「◎富士山これ日本人の理想△東京帝大に於けるタゴール翁の講演」（『静岡新報』1916年＝大正5年6月13日付）

「◎心配は無用也 大なる地震は断じてない」〔世附山の鳴動〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月13日付）

「◎富士の大探検＝裾野巡りの徳川頼倫侯の主宰－静岡で大講演会」〔霊峰〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月22日付）

「◎国境弁論続行」〔駿甲国境問題〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月23日付）

「◎急行列車停車」〔御殿場駅〕〔富士駅〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月24日付） ▲▲

「登山季来 富岳は待てり 男女学生登山」〔学生富士登山の隆盛〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月25日付）

「◎御殿場口開山 七月一日執行の予定」〔須走口開山〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月25日付） ▲▲

- 「◎ス島爆発に就て 富士帯火山脈は鎮静」〔スミス島噴火〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月26日付）
- 「◎浮島沼着工難 或は不可能なるべし」（『静岡新報』1916年＝大正5年6月28日付）
- 「◎自動車で富士へ 米人ボール氏の企て」〔自動車登山〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月28日付）
- 「◎国境訴訟有利」〔駿甲国境問題〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月29日付）
- 「◎大宮口開山」（『静岡新報』1916年＝大正5年6月30日付）▲▲
- 「◎遊覧客の為め 割引乗車券を発売す」〔東海道線〕〔身延線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年6月30日付）→部▲▲
- 「◎御殿場口開山」〔従来の弊風を一掃云々〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月2日付）▲▲
- 「◎富士登山打合」〔大宮口の業者会合〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月5日付）▲▲
- 「◎須走登山道路」〔騎馬登山〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月7日付）〔須走口登山道県費で改修〕▲▲→本文中《落成式を行ひ翌十六日は来賓一同騎馬登山を行ふ計画》とあるように須走口によるマスコミ各社の招待登山が行われる。その提灯記事は『静岡新報』では「須走口（一）」は7月19日付が欠号で見られないが、以下この索引に「須走口（二）」（7月20日付）～「須走口（六）」（7月24日付）を収録。その他『静岡民友新聞』が「騎馬登山（一）芙蓉生」（7月20日付）～「騎馬登山（三）芙蓉生」（7月22日付）の3回、『東京日日新聞』が「○馬に乗つて富士登山（上）（中）（下）」（7月19日・20日・22日付）、『東京朝日新聞』に「◇富士騎馬登山試乗記◇一」（7月20日付）～「◇富士騎馬登山試乗記◇七」（7月26日）の連載提灯記事がある。
- 「◎登山者続々」（『静岡新報』1916年＝大正5年7月8日付）▲▲
- 「◎愛媛師範登山」〔愛媛師範学校〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月9日付）
- 「◎徳川大尉登山」（『静岡新報』1916年＝大正5年7月10日付）
- 「◎浅間御田植祭」〔浅間大社〕〔お田植祭〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月10日付）
- 「◎海兵富士登山 二十一、二日の両日に」（『静岡新報』1916年＝大正5年7月10日付）
- 「◎大宮駅工事竣工」〔富士身延鉄道大宮駅増築工事〕〔身延線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月13日付）
- 「◎富士山表口道路改修」〔大宮新道〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月13日付）▲▲
- 「◎修養団登岳」〔蓮沼門三修養団〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月13日付）
- 「◎登山熱の旺盛 至極結好の事なり」〔学生の集団登山が流行〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月13日付）
- 「◎富士山派出所」〔巡查派出所と警察電話〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月14日付）▲▲

「◎師団長登山」〔第一師団長仙波中将〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月15日付）

「◎熱海線予備工事」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大場軽便鉄道〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月16日付）

「◎富士登山の注意」〔登山物価〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月16日付）一部▲▲

「◎富士山の通信」〔15日の登山状況〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月17日付）

「須走口（二）△須走泊り 黒田茜城」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月20日付）←《駅前馬車会社で東京からの同業者を待ち受けて一行凡て十七名（東京十四名、大阪一名、名古屋一名、静岡一名）》と招待新聞記者団の規模が分る。

「◎百回目の登山 富士山の跣足先達」〔大庭佐十郎〕〔回数登山〕〔変わり種登山〕〔信仰登山〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月20日付）

「須走口（三）△須走泊り△巨人の膝下を 黒田茜城」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月21日付）

「◎江尻登山団員募集」（『静岡新報』1916年＝大正5年7月21日付）

「◎富士身延二期線」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月21日付）

「須走口（四）△六根清浄 黒田茜城」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月22日付）

「◎富士山で発狂 夜半小川中に潜む」（『静岡新報』1916年＝大正5年7月22日付）

「□富士山便り□」〔20日の登山状況〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月22日付）

「須走口（五）△お鉢廻り 黒田茜城」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月23日付）

「◎登山兵帰艦」〔清水港寄港の第三駆逐艦隊海軍兵〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月23日付）→この時のコースタイム詳細は「◎一着は八時間」（7月24日付）にあり。

「須走口（六）△砂走りを 黒田茜城（完）」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月24日付）

「△富士山の降雪」〔「昨日の英文欄」〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月24日付）

「◎一着は八時間 海兵の大宮口登山」〔第三駆逐艦隊海軍兵のコースタイム〕〔夜間登山〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月24日付）

「◎富士山便り」〔23日の登山状況〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月24日付）

「◎富士山便り」〔24日の登山状況〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月26日付）

「◎浮島沼排水準備」〔宮城県品井沼・福島県八沢浦へ視察〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月28日付）

「◎慈善団体へ乗車券」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1916年＝大正5年7月28日付）

日付)

「◎天幕講習準備」〔白糸の滝〕〔修養団青年天幕講習会〕(『静岡新報』1916年=大正5年7月29日付) → 「◎天幕講習講師往来」(8月6日)、「◎天幕講習状況」(8月9日付)に続報。

「◎国境実査」〔駿甲国境問題〕(『静岡新報』1916年=大正5年7月29日付)

「◎富士の大暴れ 食物遂に欠乏す」〔山室足止め〕(『静岡新報』1916年=大正5年7月30日付) → 「◎登山者漸無事」(8月1日付)に続報。

「◎静商生下山」〔静岡商業学校〕(『静岡新報』1916年=大正5年7月30日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.39〔大正5年8月~12月〕』〔大正5年10~11月欠号〕

「◎登山者漸無事 百余名=急いで下山す」(『静岡新報』1916年=大正5年8月1日付)

「◎富士山便り」〔7月31日の登山状況〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月2日付)

「◎駿甲国境状況」(『静岡新報』1916年=大正5年8月4日付)

「◎桂川水電反対」〔富士五湖〕〔水力発電〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月4日付)

「◎富士湖両調査」〔桂川水電〕〔富士五湖〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月5日付)

「◎静中生登山」〔静岡中学〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月5日付)

「◎富士放牧有望」〔富士郡上井出村・御大典記念富士郡畜産組合附属放牧場〕〔朝霧高原〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月6日付) → 「◎富士放牧場開始」(1917年=大正6年5月15日付)に続報。

「◎天幕講習講師往来」〔白糸の滝〕〔修養団青年天幕講習会〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月6日付)

「◎御殿場口寂寥 実弾射撃演習=登山口遮断」〔東富士演習場〕〔登山道通行禁止〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月6日付) ▲▲

「◎富士山上より」〔東京クラブ歯磨本店富士登山隊〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月6日付)

「◎雑沓する停車場 登山客=海水浴客」〔静岡駅〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月7日付)

「◎国境踏査状況」〔駿甲国境問題〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月9日付)

「◎天幕講習状況 模擬自治体の組織」〔白糸の滝〕〔修養団青年天幕講習会〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月9日付)

「◎富士山便り」〔8日の登山状況〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月10日付)

「◎富士山便り」〔9日の登山状況〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月11日付)

「◎富士山便り」〔10日の登山状況〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月12日付)

「◎富士川下廻遊団」〔富士川下り廻遊団〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月12日付)

「◎富士山便り」〔11日の登山状況〕(『静岡新報』1916年=大正5年8月13日付)

「◎熱海附帯工事」〔熱海線〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大場軽便鉄道〕(『静岡

岡新報』1916年＝大正5年8月14日付)
「◎桂川電気に反対 富士郡民の奮起」〔富士五湖〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月14日付)
「◎落合氏未だ本県に入らず」〔落合道徳〕〔遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月14日付)
「◎富士山便り」〔12日の登山状況〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月14日付)
「◎百七回の登山 跣足先達＝登山者頗る多し」〔大心教・大庭佐十郎〕〔回数登山〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月15日付)
「◎小山須走間道路」(『静岡新報』1916年＝大正5年8月16日付) ▲▲←「須走の新道」(1913年＝大正2年7月8日付)の続報。
「◎不二公園払下」〔北山〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月16日付)
「◎八歳で頂上まで」〔幼児登山〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月16日付)
「◎落合氏は依然不明 本県へ入込んだか＝消息なし」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月16日付)
「◎尚ほ不明 落合海軍属は」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月17日付)
「◎岳南水源保護」〔岳南水源保護期成同盟〕〔富士五湖〕〔桂川水電〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月18日付)
「◎富士山便り」〔16日の登山状況〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月18日付)
「◎富士身延割引」〔富士身延鉄道〕〔富士軌道〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月19日付)
「◎森林中で餓死か 落合属尚不明」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月19日付)
「◎十歳単身登山 絶頂を究めて下山す」〔幼児登山〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月19日付)
「◎癒大捜索 落合属依然不明」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月20日付)
「◎富士水源運動」〔桂川水電〕〔富士五湖〕〔岳南水源保護期成同盟〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月21日付)
「◎富士山便り」〔19日の登山状況〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月21日付)
「◎水源問題鑑定」〔富士五湖〕〔桂川電気〕〔岳南水源保護期成同盟〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月22日付)
「◎落合属の大捜索開始 赤石山の突破」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月22日付)
「◎富士山便り」〔20日の登山状況〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月22日付)
「◎富士軌道好成绩」(『静岡新報』1916年＝大正5年8月23日付)
「◎大学生重傷か 実弾が破裂して」〔東富士演習場〕〔下山中着弾地に入る〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月23日付)
「◎捜索隊の出発 何れも元気旺盛◇荷車へ満載◇セル服を着◇隊形を素す◇落合属行方◇背囊を背負◇赤石の支脈」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』19

16年＝大正5年8月23日付)

「◎富士山便り」〔22日の登山状況〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月23日付)

「◎搜索隊漸進す 田代で二隊に別る」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月24日付)

「◎富士水源問題 郡民の蹶起△踏査視察団△水源涸渴影響△今後の運動方法△県当局談」〔桂川電気〕〔富士五湖〕〔岳南水源保護期成同盟〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月25日付)

「◎搜索隊進まず 霧深く前進困難」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月26日付)

「□登山者の準備 農商務省山林局編纂」〔冊子出版〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月26日付)

「◎富士山便り」〔26日の登山状況〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月28日付)

「◎富士山便り」〔27日の登山状況〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月29日付)

「◎搜索隊の大困難 愈本舞台に入る」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月30日付)

「◎富士砂防工事計画」〔富士大河原〕〔大沢崩れ〕〔富士郡の手に負えないので国庫補助を請願〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月31日付) ▲▲

「◎登山隊消息」〔高山植物採取の農会技手一行〕〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月31日付)

「◎富士電話撤廃」〔富士山内電話〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月31日付)

「◎富士水源問題 委員の活動△各省を訪問△四日に評議会」〔桂川電気〕〔富士五湖〕〔岳南水源保護期成同盟〕(『静岡新報』1916年＝大正5年8月31日付)

「◎御殿場馬車好況」〔御殿場馬車鉄道〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月2日付)

「◎富士電化拡張」(『静岡新報』1916年＝大正5年9月2日付)

「◎搜索は無効 落合属未発見」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月2日付)

「◎富士水源問題 委員の活動」〔桂川電気〕〔富士五湖〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月2日付)

「◎落合海軍属の搜索談 結局失敗に終る」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月3日付)

「◎望み尽きたる落合属 本県に入りたる形跡はなし」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月4日付)

「白雲を踏破し富士山頂に肺病の奇薬を探す」〔安原尚親の売薬広告〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月4日付)

「◎知事の富士水源行」〔桂川電気〕〔富士五湖〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月5日付)

「◎誰の遺品か」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕(『静岡新報』1916年＝大正5年9月5日付)

「△落合属は未だ無事 中るも八卦中らぬも八卦」〔南アルプス〕〔落合道徳海軍属遭難〕

(『静岡新報』1916年=大正5年9月5日付)
「◎熱海線軽鉄進捗」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大場軽便鉄道〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月7日付)
「◎水源地視察」〔桂川電気〕〔富士五湖〕〔岳南水源保護期成同盟〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月7日付)
「◎富士根村の融和」〔成田武次郎〕〔ふじもとむら〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月8日付) ▲▲
「◎泉村問題真相 気の毒なる低級民」〔駿東郡泉村村有財産問題〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月9日付)
「◎富士の閉山祭」(〔7日に浅間大社で〕『静岡新報』1916年=大正5年9月9日付)
「◎今夏期の富士は大当り 貧乏籤は=御殿場口なりし〔須走口騎馬登山〕〔富士身延鉄道〕」(『静岡新報』1916年=大正5年9月10日付) ▲▲
「◎富士水源地再視察」〔桂川電気〕〔富士五湖〕〔岳南水源保護期成同盟〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月13日付)
「◎富士水電内野発電所」(『静岡新報』1916年=大正5年9月16日付)
「◎大場耕地整理変更」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔大場軽便鉄道〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月16日付)
「◎富士山麓濫伐 より大なる水源枯渇問題」〔富士山南西麓の乱伐〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月16日付) ▲▲
「◎保安林盗伐」〔元吉原・砂山の保安林盗伐横行〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月17日付)
「岳南水源保護同盟会に告ぐ 岳南隠士(寄)」〔桂川水電〕〔富士五湖〕〔岳南水源保護期成同盟〕〔行政訴訟を提起〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月25日付)
「◎水源保護其後」〔桂川水電〕〔富士五湖〕(『静岡新報』1916年=大正5年9月29日付)
「◎富士身延工事進捗」〔富士身延鉄道第二期線工事〕〔身延線〕(『静岡新報』1916年=大正5年11月3日付)
「◎須走の大降雪 山梨県へ交通途絶」〔明神街道〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月5日付)
「◎今様浦島物語 三十余年目で帰郷した」〔富士郡大宮町阿幸地・渡辺広吉〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月8日付)
「◎富士軌道延長」〔富士水電内野発電所工事〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月13日付)
「◎駿富鉄道内容」〔志下-沼津-片浜-浮島-吉原-富士をつなぐ計画〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月15日付)
「◎肺病全治の声明 富士の霊山と医神甲斐の徳本 人助けの薬が一眼十八文〔安原尚親の売薬広告〕」(『静岡新報』1916年=大正5年12月16日付)
「◎富士山大降雪 八合以上は一丈余」(『静岡新報』1916年=大正5年12月17日付)
「◎熱海線一部変更」〔東海道本線〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月19日付)

日付)

「◎一月元旦を期して雪中登山 湯船青年会員の壮挙」〔須走口〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月22日付)

「◎富士水源問題 衆議院に質問書」〔桂川水電〕〔富士五湖〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月29日付)

「◎富士身延総会」)〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1916年=大正5年12月29日付)

■ 1917年=大正6年

●歴史文化『静岡新報 Vol.40〔大正6年1月～7月〕』〔大正6年1月ほとんど欠号〕〔大正6年3～4月欠号〕

「◎民友新聞革命」〔静岡民友新聞が政党色から脱却〕(『静岡新報』1917年=大正6年2月8日付)

「□富士の麓は桜満開 頗る美観を極む」〔須走付近〕(『静岡新報』1917年=大正6年5月2日付)

「◎富士山大降雪 小山町地方は豪雨出水」(『静岡新報』1917年=大正6年5月8日付)

「◎富士放牧場開始」〔富士郡上井出村根原、牛馬の預託〕(『静岡新報』1917年=大正6年5月15日付) ←「◎富士放牧有望」(1916年=大正5年8月6日付)の続報。

「◎本県側が有利らしい 山梨県との国境問題踏査終る◇一行百二三十名◇炭焼小屋に泊り◇本県側も引揚て◇御料局の技師に」〔駿甲国境問題〕(『静岡新報』1917年=大正6年5月20日付)

「◎富士身延成績 近く身延まで開通」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1917年=大正6年5月28日付)

「◇富士裾野の壮観◇」〔写真〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1917年=大正6年5月30日付)

「◎気球一斉射撃の壮観 ◇富士裾野の聯合演習開始 注目すべき最新戦術研究」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1917年=大正6年5月30日付)

「◇射撃爆破すべき気球の飛揚◇」(〔写真〕〔東富士演習場〕『静岡新報』1917年=大正6年5月31日付)

「◎第二日目の気球観測射撃演習 強風にて午前中々止」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1917年=大正6年5月31日付)

「◎富士山の八合目以上◇静岡の有 大宮浅間神社より山梨県へ駐在所救護所の撤廃を申込む」〔駿甲国境問題〕〔山頂問題〕〔浅間大社〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月1日付) ▲▲→本文中に《山梨県某新聞紙の伝ふる処に依れば》とあるように、『山梨日日新聞』には「富士山の奪合ひ」(6月30日付)、「富士北口八合目は甲州領地也」(7月1日付)、「山頂奪合の其後」(7月24日)の記事がある。

「◎鈴木旅団長が右足挫折 富士裾野演習地で」〔日射病と仮病〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月1日付)

「◎女生富士登山 女子師範の七十名が」〔静岡女子師範〕(『静岡新報』1917年=

大正6年7月3日付)

「◎須走口開山式」〔騎馬登山〕〔招待登山〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月4日付) ▲▲

「◎富士積雪深し 七月一日の登山者実話」〔残雪〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月7日付)

「◎富士開山祭」〔大宮新道〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月7日付) ▲▲

「◎師範生登山」〔御殿場口〕〔姫路師範〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月10日付)

「◎大宮口の電話」(『静岡新報』1917年=大正6年7月10日付)

「◎富士郡側有利 水源問題訴訟」〔桂川水電〕〔富士五湖〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月11日付)

「◎富士山巔の発動機試験◇場所は金明水の附近なるべきか 築山工兵中尉検分の為め登攀す」(『静岡新報』1917年=大正6年7月12日付) →「◎頂上石室開く」(7月12日付)、「◎世界で最初の試験」(7月18日付)、「◎富士山巔の大爆音」(7月21日付)、「◎富士山巔発動機試験結果」(7月23日付)に続報

「◎頂上石室開くー発動機試験も近く執行」(『静岡新報』1917年=大正6年7月12日付)〔須走口〕 ▲▲

「◎富士騎馬登山 来十六日須走口より」〔須走口下山道改修〕〔須走口招待登山〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月13日付) ▲▲←前出「◎須走口開山式」(7月4日付)に《十六日前年の如く東京静岡、名古屋、大阪、仙台、福岡各新聞記者を招待し騎馬登山を試みる由》、この日の記事にも《東西各地新聞記者三十余名を招待して翌十六日再び騎馬登山会を催す由》とある。その提灯記事として、『静岡新報』は「富士へ(一)」(7月19日付)～「富士へ(五)」(7月23日付)の5回、『静岡民友新聞』は「富士山を騎馬で登山」(7月19日付)～「富士山を騎馬で登山(5)」(7月23日付)の5回があり、『東京朝日新聞』は「○富士の騎馬登山(上)(中)(下)」(7月20日～22日付)の3回連載がある。

「◎近衛兵の登山 合計二千名即日下山」〔12日須走口から600人、13日御殿場口から1200人〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月14日付)

「◎女学生登山」〔御茶水女子高等師範(『静岡新報』1917年=大正6年7月15日付)〕

「◎富士大宮口便◇準備万端整頓したり」〔浅間大社〕〔開山祭〕〔馬丁組合〕〔強力組合〕〔電話〕〔巡查派出所〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月16日付) ▲▲

「◎馬車転覆負傷 富士登山客二名の災難」〔御殿場口登山馬車〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月17日付)

「◎世界で最初の試験◇富士山巔に於ける発動機の試験 横田工学博士が須走口から登山する」〔横田成年〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月18日付)

「◎師範男女登山 女子は十八日男子は廿日」〔静岡女子師範〕〔静岡師範〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月18日付)

「◎秣場料金値上 関係町村長の嘆願」〔御料林入会地〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月19日付)

「◎富士へ(一) 瀧閑村」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕(『静岡新報』1917年=

大正6年7月19日付)

「◎富士山便り」〔17日の登山状況〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月19日付)

「◎富士へ(二)瀧閑村」(7月20日付原紙欠号)

「◎富士へ(三)瀧閑村」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月21日付)

「◎富士山巔の大爆音◇十九日発動機試験開始 研究委員の一行皆山頂に集まる」(『静岡新報』1917年=大正6年7月21日付)

「◎九合目で倒れる 空腹と山酔ひを感じて」〔遭難〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月21日付)

「◎女子師範登山 一同元気頗る良し」〔静岡女子師範〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月21日付)

「◎富士へ(四)瀧閑村」〔須走口招待登山〕〔提灯記事〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月22日付)

「◎富士へ(五)瀧閑村(了)」〔砂走口登山〕〔提灯記事〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月23日付)

「◎富士山巔発動機試験結果 約七割減—横田博士談」(『静岡新報』1917年=大正6年7月23日付)

「◎富士徒歩競争 静岡師範二着を占む」〔時事新報〕〔のちの富士登山駅伝競走大会〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月23日付)

「◎静岡生登山」〔静岡商業学校〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月24日付)

「◎富士澱粉設置反対」〔富士郡富丘村淀師〕〔排水汚染〕〔公害〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月25日付)

「◎水雷艇員登山 六十名宛二回大宮口より」〔清水港に入港〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月25日付)

「◎農林生の登山」〔駿東農林学校〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月25日付)

「◎富士山の降雪 九合目以上は真白」(『静岡新報』1917年=大正6年7月27日付)

「□富士山頂で謡曲 猛者達廿三名の登山」〔変わり種登山〕(『静岡新報』1917年=大正6年7月30日付)

〔大正6年8～9月欠号〕

●歴史文化『静岡新報 Vol.41〔大正6年10月～12月〕』

「◎小山須走登山道」〔御殿場馬車鉄道廃止〕〔小山須走道路〕〔駿河小山駅〕(『静岡新報』1917年=大正6年10月1日付) ▲▲←「◎須走口の新道」(1913年=大正2年7月8日付) 「◎小山須走間道路」(1916年=大正5年8月16日付) に関連記事。

「▽富士山の初雪 八合目以上は真白」(『静岡新報』1917年=大正6年10月12日付)

「◎宝永山の崩潰 富士山の南西面」(『静岡新報』1917年=大正6年10月13日付)

▲▲

「◎富士山の崩壊個所は 剣ヶ峰の南から宝永山の左方へ 堀田本県山林技師の調査談」(『静岡新報』1917年=大正6年10月16日付) ▲▲

「◎富士山さしたる崩壊無し 多少風害あり=吉川技手談」〔宝永山〕(『静岡新報』1

1917年=大正6年10月17日付) ▲▲

「◎競馬は興国の要道也 畜産組合の競馬会を視よ」〔軍馬〕(『静岡新報』1917年=

大正6年11月4日付)

「◎富士裾野壯観 野砲兵十七聯隊演習」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1917年=大正6年11月11日付)

「◎熱海線工事着手 来春早々東西より」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1917年=大正6年12月1日付)

「□富士郡の不景気 頗る暮し難い大宮町」(『静岡新報』1917年=大正6年12月3日付)

「▽石標百二十基 通行者の便を図る」)〔仁藤春吉〕(『静岡新報』1917年=大正6年12月3日付)→『仁藤春耕道しるべ』(奈木盛雄監、荻野武彦著、吉永郷土研究会発行、2007年)参照。

「◎富士山大降雪 須走口太郎坊積雪四尺」(『静岡新報』1917年=大正6年12月5日付)

■1918年=大正7年

〔大正7年1月欠号〕

●歴史文化『静岡新報 VOL.42 大正7年2月～9月』

「△富士郡の軌道◇合計約三十八哩」(『静岡新報』1918年=大正7年2月1日付) ▲▲

「◎種牡馬検査△富士郡大宮町」〔軍馬〕(『静岡新報』1918年=大正7年2月6日付)

「◎静岡県神職会」(『静岡新報』1918年=大正7年2月7日付)

「◎汽車転覆の大椿事原因は従業員の軽忽と仮睡」〔東海道線鈴川駅西で脱線〕(『静岡新報』1918年=大正7年2月8日付)

「◎水量調査問題▽富士水電と富士郡町村」〔水利権〕〔水力発電〕(『静岡新報』1918年=大正7年2月8日付)

「◎本県神職会 第二日」(『静岡新報』1918年=大正7年2月9日付)

「◎未曾有の降雪 三国峠は六尺余」(『静岡新報』1918年=大正7年2月9日付)

「◎富士水電の電力調査▽需用者の憤激」〔電力不足〕(『静岡新報』1918年=大正7年2月10日付)

「◎富士水電対庵原郡及沼津町 庵原郡は交渉不調沼津は解決」〔電力不足〕(『静岡新報』1918年=大正7年2月13日付)

「◎富士山巔に卅四日▽これ神の声神の業なりと説く▽物の本にあるやうな神秘的な話」〔原照原〕〔雪中登山〕〔信仰登山〕(『静岡新報』1918年=大正7年2月14日付) ▲▲
この記事中にある《既記》見つからず、欠号している1月か。→『山梨日日新聞』大正7年1月10日付～2月1日付に詳報な経過あり。

「◎ゴルフ御遊 東宮殿下鈴川行啓」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1918年=大正7年2月16日付) →現存する鈴川の石碑「皇太子殿下御散策之蹟」に記述あり。

「◎毘沙門臨時列車」 (『静岡新報』 1918年=大正7年2月16日付)

「◎ゴルフ御遊戯 東宮殿下鈴川行啓」 [昭和天皇] (『静岡新報』 1918年=大正7年2月18日付)

「◎昨日が御最初のゴルフの御遊戯◇東宮殿下には御堪能」 [昭和天皇] (『静岡新報』 1918年=大正7年2月18日付)

「◎砂利取紛擾で危く血雨騒動 富士水電対狩宿区」 [発電所建設] (『静岡新報』 1918年=大正7年2月18日付)

「◎東宮御愛馬に召され今週から遠乗りの御稽古◇ゴルフの御遊戯で御壮健」 [昭和天皇] (『静岡新報』 1918年=大正7年2月19日付)

「◎熱海線収用」 [東海道本線] (『静岡新報』 1918年=大正7年2月23日付)

「◎富士山頂を越えて◇解剖された独逸の怪砲」 [ドイツ軍の長距離砲] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月3日付)

「◎駿甲国境問題」 (『静岡新報』 1918年=大正7年6月4日付)

「◎天災の齎した幸福 須津村の宮入員全滅▽昨年海嘯で海水侵入の為▽武藤愛知博士の実地調査談」 [浮島沼] [日本住血吸虫] [風土病] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月10日付)

「◎前面に一大火山岩◇熱海線隧道西口奥=工事為に頓挫せんか」 [丹那トンネル] [東海道本線] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月14日付)

「◎富士登山大走=二外人三合目迄」 [雪中登山] [外国人登山] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月14日付)

「◎岳南健児の健脚は◇由来十五師団内に鳴つたもの◇二日間連続露営の強行軍敢行」 [東富士演習場] [軍事演習] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月15日付)

「◎八合目迄登山=富士六合以上は大降雪」 [雪中登山] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月15日付)

「◎聯隊裾野行」 [東富士演習場] [軍事演習] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月16日付)

「◎相手は富士身延 栄村より訴えられたり」 [県道が富士身延線工事で通行不能に] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月17日付) → 「◎富士身延工事中止の命令」 (6月26日付) に続報。

「◎研究される富士桜 種類は豆桜と峰桜と御山桜」 [フジザクラ] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月18日付)

「◎御殿場口山開=須走へは自動車で」 [御殿場馬車鉄道廃止] [登山バス] [須走口] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月19日付) ▲▲

「◎女師富士登山」 [静岡女子師範] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月21日付)

「◎登山海水と列車」 [登山臨時列車] [御殿場線] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月21日付)

「◎裾野の偉観 重砲兵と航空隊聯合の演習举行」 [東富士演習場] [軍事演習] (『静岡新報』 1918年=大正7年6月21日付) → 「◎飛行機射撃演習は中止」 (6月27日付)、 「◎富士裾野の重砲演習」 (6月30日付) に続報

「◎学生富士登山 昨夜中に帰着の筈」 [御殿場口] (『静岡新報』 1918年=大正7

年6月21日付)

「口上井出村と外米＝五車四百袋を購入す」(『静岡新報』1918年＝大正7年6月21日付)

「◎富士山の電話 全部架空線となる」〔被覆線は雷に弱い〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月22日付)

「◎女師登山 ◇津市女師を嚮導◇大宮口から須走へ」〔静岡女子師範〕〔津市女子師範〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月24日付)

「◎登山用自動車」〔御殿場口登山バス〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月24日付) ▲▲

「◎浮島沼排水計画」〔池田龍太郎〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月25日付)

「◎富士身延工事中止の命令＝山梨県栄村の工事を」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月26日付)

「◎飛行機射撃演習は中止▽富士裾野に於る」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月27日付)

「◎大宮口開山期 登山道路も改修す」〔大宮旅館組合〕〔電話〕〔大宮新道〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月29日付)

「◎富士裾野の重砲演習 モ式七号飛翔し砲烟天地を罩む」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月30日付)

「◎富士の気候遅れ登山困難 電話工事も未著 山上は積雪深し」〔開山遅れ〕〔残雪〕(『静岡新報』1918年＝大正7年6月30日付)

〔大正7年7～8月欠号〕

「◎先月限りで富士閉山 登山者八万人」〔登山者数〕(『静岡新報』1918年＝大正7年9月2日付) ▲▲

「◎富士山麓開拓」〔富士山西南麓〕〔富士拓殖工業〕(『静岡新報』1918年＝大正7年9月3日付) ▲▲

「◎富士頂上既に結氷 金明水銀明水の秘密 四合目で気温三十度」〔電話架線取り外し工事〕〔金明水銀明水の水枯れ〕(『静岡新報』1918年＝大正7年9月9日付)

「◎当聯隊裾野行」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1918年＝大正7年9月11日付)

「◎苦悶中の二百余名 腐敗せる茹?を食して 上井出地方の大混雑」〔シラス中毒〕(『静岡新報』1918年＝大正7年9月18日付)

「◎富士山初雪 六合は八寸余積む」(『静岡新報』1918年＝大正7年9月24日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.43 大正7年10月～12月』

「◎十五師団演習 静岡聯隊の行動」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月5日付)

「◎富士競馬大会」〔富士郡牛馬畜産組合〕〔大宮競馬会?〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月11日付)

「◎田子浦村の小作不穩 小作割引の悶着」〔田子浦村小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月12日付)

「◎富士の鶉捕り 裾野を繞て四十五軒 一日平均十羽を捕獲」〔狩猟〕(『静岡新報』

1918年＝大正7年10月13日付)

「◎大宮の競馬会」〔大宮競馬会〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月14日付)

「◎農民大挙殺到して大地主を襲撃し 風水害の為割引を求む 地主側は頑として承諾せず 遂に兇暴を逞ふす」〔田子浦村小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月15日付)

「◎地主襲撃の原因 双方の意志疎隔に因る 近因は地主坪刈の放棄」〔田子浦村小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月16日付)

「◎最終富士競馬」〔大宮競馬会〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月17日付)

「◎田子浦村小作人の暴動 首謀者検挙頗る峻厳 被検挙者は既に三十五名 尚続々検挙されつゝあり」〔田子浦村小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月19日付)

「◎小作騒擾無事解決す 送局されたる被告卅五名 村民代表者の嘆願書提出」〔田子浦村小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月20日付)

「◎吉原警察の拷問事件 事実あるらしい 怪しからぬ事だ」〔田子浦村小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月25日付)

「◎富士郡北部も小作料割引きを地主に迫らんとす」〔富士郡北部〕〔小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月26日付)

「◎豊橋歩兵第六十聯隊第八中隊の百余名が釣橋切断して富士川に墜落す」〔釜口橋切断事故〕〔釜ヶ淵〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月29日付) →「[釜ヶ淵の釣橋折損し](#)」(1939年＝昭和14年2月18日)に類似事故。

「◎多数の兵士の重量に堪へず橋は真二つに切断」〔釜口橋切断事故〕〔釜ヶ淵〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月30日付)

「△富士山大降雪 裾野一帯大降霜」(『静岡新報』1918年＝大正7年10月30日付)

「◎小作の割引 坪刈の結果で協議中」〔富士郡北部〕〔小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年10月31日付)

「◎五名引上ぐ 松野在郷軍人尽力」〔釜口橋切断事故〕〔釜ヶ淵〕(『静岡新報』1918年＝大正7年11月2日付) ←ハシラは10月2日だが号数からすれば11月2日付。

「◎富士郡の小作人暴動は地主の誠意を疑ふた結果 坪刈り当時の示威的群衆が地主を恐怖せしめた」〔田子浦村小作争議〕(『静岡新報』1918年＝大正7年11月13日付)

「◎元旦に登山 小山町湯船青年会で」〔雪中登山〕(『静岡新報』1918年＝大正7年11月27日付) ▲▲

「◎富士自動車」〔大宮新道路線バス〕(『静岡新報』1918年＝大正7年12月4日付) ▲▲→「◎富士自動車」(1919年＝大正8年2月26日付)に関連記事。

「◎白皚々たる富士山＝昨朝富丘より観たる」〔写真〕(『静岡新報』1918年＝大正7年12月13日付)

「◎富士駿東郡各地大雪▽寒威頗る激し」(『静岡新報』1918年＝大正7年12月13日付)

「▽大宮芸妓会社 四十名の顔を揃える」(『静岡新報』1918年＝大正7年12月13日付)

「◎富士川遭難兵追悼法会 十四日挙る」〔釜口橋切断事故〕〔釜ヶ淵〕(『静岡新報』1918年＝大正7年12月16日付)

「◎浅間社危険 附属建物より出火」〔浅間大社〕（『静岡新報』1918年＝大正7年12月17日付）

「◎検事被告に同情 小作人对地主の立場を論じ 重刑は求めずと喝破す」〔田子浦村小作争議〕（『静岡新報』1918年＝大正7年12月25日付）→「今日の判決や如何に」（12月27日付）、「◎本年最終の判決」（12月28日付）に続報。

「◎東駿の大雪 駿河御殿場積雪五寸」（『静岡新報』1918年＝大正7年12月25日付）

「◎今日の判決や如何に 検事の同情を惹いた被告人 彼等は全く悔悟せり」〔田子浦村小作争議〕（『静岡新報』1918年＝大正7年12月27日付）

「◎本年最終の判決 当地方裁判所に於ける 暴動小作人其他に対し」〔田子浦村小作争議〕（『静岡新報』1918年＝大正7年12月28日付）

■ 1919年＝大正8年

● 歴史文化『静岡新報 VOL.44 大正8年1月～3月』（1月4～6日付）欠]

「◎当聯隊雪中登山◇今年の雪中に決行の議あり◇西伯利亚出征兵の成績に鑑て」〔軍事演習〕（『静岡新報』1919年＝大正8年1月11日付）

「◎飽まで頂上を極めんと▽雪中富士登山」〔青木藤吉〕〔小泉知海〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年1月16日付）▲▲→小泉知海は「◎風雪を冒して五合目まで」（1月21日付）、「◎富士初登山」（1920年＝大正9年1月5日付）に再登場。

「◎風雪を冒して五合目まで▽富士登山せる一行」〔小泉知海〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年1月21日付）▲▲

「◎六合目に達す＝先達の雪中富士登山」〔角一講・村石伊之助〕〔雪中登山〕〔信仰登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年1月25日付）▲▲→村石伊之助は「◎富士山で荒行」（1920年＝大正9年1月16日付）に再登場。

「▽鈴川駅の騒動 俊寛大に駅長を罵る」〔根方軌道〕（『静岡新報』1919年＝大正8年1月27日付）

「○富士郡各地 雇人大拵底 農家では皆大閉口」〔旧暦正月〕（『静岡新報』1919年＝大正8年1月27日付）

「▽富士山の雪崩 例年より二十日早し」（『静岡新報』1919年＝大正8年2月25日付）

「○富士自動車 大宮加島間定期」〔路線バス〕（『静岡新報』1919年＝大正8年2月26日付）▲▲

「○雪積る尺余 寒気俄に襲来す」〔太郎坊〕（『静岡新報』1919年＝大正8年3月18日付）〔須走〕

「○富士郡製茶粉抜問題再燃 組合決議と営業者の反対」（『静岡新報』1919年＝大正8年3月24日付）

「○保健調査の結果如何 富士郡大淵村」（『静岡新報』1919年＝大正8年3月30日付）

「□米三十俵鯛十捆 大宮丸二運送店誑さる」〔ふじねむら〕（『静岡新報』1919年＝大正8年3月30日付）

「○富士の競馬会」〔鈴川競馬〕（『静岡新報』1919年＝大正8年3月30日付）▲▲

●歴史文化『静岡新報 VOL.45 大正8年4月～5月』

「◎時ならぬ寒気に岳麓は積雪五寸余に達す」（『静岡新報』1919年＝大正8年4月1日付）

「◎富士自働車」〔富士自動車〕〔路線バス〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月1日付）▲▲

「□富士桜綻初む 籠坂峠附近の美観」〔フジザクラ〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月10日付）

「◎大宮疑獄の真相 関係者は郡下著名の人 内容は左のみ大ならず」〔小口の詐欺事件〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月11日付）

「◎鈴川競馬初日」（『静岡新報』1919年＝大正8年4月13日付）

「◎裾野駅発展祝賀」〔御殿場線〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月14日付）

「◎鈴川の競馬◇二日目も亦盛況」（『静岡新報』1919年＝大正8年4月14日付）

「◎伊奈氏霊祭＝二百余年前の偉人」〔宝永噴火〕〔伊奈半左衛門〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月15日付）▲▲ ←記事に出てくる《駿府…軍用米》のエピソードは、この霊祭のときに定着したものでしょうか。小山町文化財保護審議会委員長・樽林一美氏は次のように報告している。すなわち《須走村の伊奈神社創建は、復興資金を砂降り直後に支給してくれた伊奈忠順への純粋な報恩、慰霊の気持であったが、古久保村や阿多野新田での伊奈神社創建運動は、現在の為政者に対する批判や反発から始まった。しかし、大正時代になり、吉久保渡辺保三郎の孫渡辺丹治は、「伊奈半左衛門仁徳略記」を著し、時の言論界の権威徳富蘇峰の協力を得て吉久保水神社境内に「伊奈半左衛門忠順頌徳之碑」を建立した。碑文の原案は丹治の「仁徳畧記」であり、撰は蘇峰による。文中に「忠順之為功大矣、而会坐私開府庫賑恤窮氓、遂免其役」の文字が刻された。丹治と蘇峰は著作と建碑により、忠順のより英雄的な行為として、「駿府米蔵開扉説話」を作り上げた。》（樽林一美『須走地区を歩く須走講座』、2019年11月9日）

「◎大宮町の発展」〔土地ブーム〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月16日付）

「◎鈴川海岸賑ふ」〔地引き網〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月19日付）

「◎日本一の大隧道 熱海線中の難工事 地質は堅牢なる安山岩」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1919年＝大正8年4月22日付）

「◎富士郡教育植林」（『静岡新報』1919年＝大正8年4月28日付）

「◎獐猛なる山窩の群 常に戸切強盗などを働く 此の機に於て剿滅すべし」（『静岡新報』1919年＝大正8年4月29日付）

「◎富士浅間の大祭 四日より三日間」〔浅間大社〕（『静岡朝報』大正8年5月3日付夕刊）

「◎牧野博士一行 雪中の登山 高山植物研究の為」〔牧野富太郎〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年5月8日付）

「◎裾野共有地整理」〔印野村入会地〕（『静岡新報』1919年＝大正8年5月9日付）

「◎実弾射撃で恰も実戦 岳麓の総監」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1919年＝大正8年5月12日付）

「◎東表口改善 御殿場口の宿弊打破」〔山室サービス〕（『静岡新報』1919年＝大

正8年5月12日付) ▲▲ ←《宿弊打破》の具体的内容は不明。

「◎残忍なる山窩の本性 惨劇 当時を想起せしむ松本巡查を斬りし三兇賊共予審終結」
(『静岡新報』1919年=大正8年5月13日付)

「◎御殿場須走両口開山は六月十五日頃 暖気の早い為電話架設準備中」(『静岡新報』
1919年=大正8年5月14日付) ←マイクロフィルムでも読めない

「◎富士大降雪 裾野の木立迄真白」(『静岡新報』1919年=大正8年5月17日付)

「◎自作農が増加す 田は減少して畑は増加した 減少は工場軌道等が出来た為」(『静岡新報』1919年=大正8年5月17日付)

「◎鈴川大宮自動車」〔路線バス〕(『静岡新報』1919年=大正8年5月19日付)

「◎富士身延と身延山との争 乗車賃補給に付て」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1919年=大正8年5月19日付) ▲▲

「◎大宮口の協議」〔登山物価〕〔山室サービス〕(『静岡新報』1919年=大正8年5月22日付) ▲▲

「◎本門寺再建」〔北山本門寺〕(『静岡新報』1919年=大正8年5月25日付)

「◎富士登山開山期 御殿場口は七月一日よりか」〔開山日〕(『静岡朝報』大正8年5月28日付夕刊) ▲▲

〔大正8年6月全欠〕

●歴史文化『静岡新報 VOL.46 大正8年7月～8月』

「◎御殿場開山▽一日に浅間神社にて」(『静岡新報』1919年=大正8年7月2日付) ▲▲

「◎開山第一日の富士登山者▽雪深く寒気激し」〔御殿場口〕〔残雪〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月4日付) ▲▲

「◎富士鉱業会社 鉱区は静岡山梨両県」〔金鉱山〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月5日付)

「◎甲駿の新金鉱(富士鉱業株式会社)」〔金鉱山〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月6日付)

「◎甲駿の新金鉱(富士鉱業株式会社)」〔金鉱山〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月7日付)

「◎富士諸川減水 水源諸湖調査」〔富士五湖〕〔水源〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月7日付)

「◎須走開山式=来る十日に挙行」〔騎馬登山〕〔須走口砂走り〕〔登山物価〕〔山室サービス〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月7日付) ▲▲

「◎甲駿の新金鉱(富士鉱業株式会社)」〔金鉱山〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月8日付)

「◎富士山電話 完成は二十二日頃か」(『静岡新報』1919年=大正8年7月8日付)

「◎浅間御田植祭」〔浅間大社〕〔お田植祭〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月8日付) ▲▲

「◎富士鉱業盛況 株式締切は十二日」〔金鉱山〕(『静岡新報』1919年=大正8年7月10日付)

「◎富士登山者 開山早々の十一日」〔11日の登山状況〕(『静岡新報』1919年=大

正8年7月13日付)

「◎帝大生の登山」〔東北大学〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月13日付）

「◎富士山開山▽浅間神社奥宮の開山祭」〔浅間大社〕〔大宮口〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月13日付）▲▲

「◎須走口開山▽浅間登山は廃止す」（『静岡新報』1919年＝大正8年7月13日付）▲▲

「◎須走口開山＝十五日開山式執行」（『静岡新報』1919年＝大正8年7月16日付）▲▲

「◎女師生登山 三重高女生も同伴して」〔静岡女子師範〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月17日付）

「◎鈴川競馬初日」（『静岡新報』1919年＝大正8年7月18日付）

「◎登山者増加▽各口とも賑ふ」〔16日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月19日付）

「◎鈴川競馬二日」（『静岡新報』1919年＝大正8年7月19日付）

「◎富士の繁昌▽客は日一日と殖える」〔18日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月20日付）

「◎鈴川競馬最終」（『静岡新報』1919年＝大正8年7月20日付）

「◎富士登山者行衛不明 当日代暴風雨 登山熱は旺盛」〔遭難〕〔宮崎善太郎〕〔18日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月22日付）

「▽下駄で富士登山 学生三人が」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月23日付）

「◎富士繁昌す▽日々登山者増加」〔22日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月24日付）

「◎不明者は無事」〔遭難〕〔宮崎善太郎〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月24日付）▲▲

「▽一本歯の足駄 富士登山を為す」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月24日付）

「◎富士山通信」（『静岡新報』1919年＝大正8年7月25日付）〔23日の登山状況〕

「◎六時間弱で富士登降 全く水を飲ず」（『静岡新報』1919年＝大正8年7月26日付）〔変わり種登山〕

「◎富士山通信」〔24日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月26日付）

「◎登山者多し 殊に団体が増えた」〔25日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月27日付）

「◎登山者増加▽廿七日の富士山」〔27日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年7月29日付）

「◎富士登山のお札博士と早大マラソン」〔スター博士〕〔早大競走部〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月1日付）

「◎富士山も大雨」〔7月31日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月1日付）

「◎富士山は暴風降雪 激寒で大雷鳴」（『静岡新報』1919年＝大正8年8月2日付）

「◎富士山で不明＝沼津商業の一年生」〔遭難〕〔植松幸治〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月2日付）▲▲ →「◎学生の行方判明せず」（8月5日付）に続報。

「◎不明者帰京す」〔遭難〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月2日付）▲▲

「◎登山者尠なし＝富士山暴風雨の爲め」〔7月31日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月2日付）

「◎熱海線路に土砂崩壊 軽鉄も運転中止」〔丹那トンネル〕〔小田原熱海軽便鉄道〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月3日付）

「◎富士は風雨▽登山者は相応あり」〔2日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月4日付）

「◎熱海隧道進捗」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月5日付）

「◎学生の行方判明せず 目下搜索中」〔遭難〕〔植松幸治〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月5日付）▲▲

「◎富士山頂より」〔提灯記事〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月5日付）▲▲

「◎熔岩中に空洞▽三島重砲兵旅団敷地」〔三島風穴〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月6日付）

「◎四日の富士▽午後は一大暴風雨」（『静岡新報』1919年＝大正8年8月6日付）〔4日の登山状況〕

「◎富士は濃霧▽登山者却々多し」〔5日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月7日付）

「◎続々登山す▽富士は全山快晴」〔7日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月9日付）

「◎富士山通信」〔9日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月11日付）

「◎富士根の火事」〔ふじもと〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月11日付）

「◎十日の富士山」〔10日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月12日付）

「◎富士の寒気▽秋の色は漸く濃し」〔13日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月14日付）

「◎静岡聯隊の富士登山 来月中旬頃決行？」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月18日付）→「◎当聯隊富士登」（8月20日）、「◎休暇に登山」（9月13日付）に続報。

「◎富士の降雪 御殿場の閉山式」（『静岡新報』1919年＝大正8年8月18日付）→一部▲▲

「◎富士降雨濃霧」〔17日の登山状況〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月19日付）

「◎当聯隊富士登山 九月六日一斉に御殿場口より」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月20日付）

「◎富士山頂で死体を発見 山に迷ひし結果か」〔遭難〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月21日付）

「◎富士鉱業前途 工学士 太田辛一」〔金鉱山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月26日付）

「◎富士身延残工事」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1919年＝大正8年8月29日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.47 大正8年9月～10月』

「◎富士閉山式 御殿場須走両口にて」（『静岡新報』1919年＝大正8年9月2日付）

▲▲

「◎休暇に登山 静岡聯隊が演習中」（『静岡新報』1919年＝大正8年9月13日付）
〔東富士演習場〕〔軍事演習〕

「◎登山者四名不明 一名は死体になりて横はる 他の三名も同じ運命か」〔遭難〕〔旧須山口四合目〕（『静岡新報』1919年＝大正8年9月13日付）▲▲

「◎富士既に降雪 岳麓地方寒気強し」（『静岡新報』1919年＝大正8年9月15日付）

「◎富士登山大競争 御殿場から六時間で上下して正午帰著」〔早大競走部〕〔登山マラソン〕〔変わり種登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年9月24日付）▲▲ → 「◎早稲田生五人富士登山」（9月28日付）は続報か。

「◎芝川駅以北不通＝線路破壊の爲め」〔富士身延鉄道〕〔豪雨〕（『静岡新報』1919年＝大正8年9月24日付）

「◎早稲田生五人富士登山▽八合以上は積雪」〔早大競走部〕〔登山マラソン〕〔変わり種登山〕（『静岡新報』1919年＝大正8年9月28日付）

「▽富士山大降雪 須走口太郎坊迄真白」（『静岡新報』1919年＝大正8年10月2日付）

「◎鉄道熱海線促成 一ヶ年繰上方針」〔東海道本線〕（『静岡新報』1919年＝大正8年10月6日付）

「◎富士林業成立」〔上井出〕（『静岡新報』1919年＝大正8年10月6日付）

「◎鈴川競馬初日」（『静岡新報』1919年＝大正8年10月7日付）

「△東駿既に結霜 富士山又々降雪」（『静岡新報』1919年＝大正8年10月10日付）

「◎鈴川の競馬会」（『静岡新報』1919年＝大正8年10月10日付）

「◎競馬で犯罪」〔鈴川競馬〕（『静岡新報』1919年＝大正8年10月14日付）

「◎鈴川競馬二日」（『静岡新報』1919年＝大正8年10月14日付）

「◎鈴川競馬最終」（『静岡新報』1919年＝大正8年10月16日付）

「◎大宮銀行盛況」（『静岡新報』1919年＝大正8年10月19日付）

「◎大宮銀行優勢」〔増資〕（『静岡新報』1919年＝大正8年10月29日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.48 大正8年11月～12月』

「◎大宮浅間秋祭」〔浅間大社〕（『静岡新報』1919年＝大正8年11月5日付）

「◎雪橇復活 富士山麓籠坂峠にて」〔外国人スキー〕〔籠坂峠スキー場〕（『静岡新報』1919年＝大正8年11月23日付）

「◎大淵の保健 調査を執行する」〔栄養衛生〕（『静岡新報』1919年＝大正8年11月28日付）

「◎雪中富士裾野廻り 静岡聯隊の一個大隊が耐寒演習に一月に決行」〔軍事演習〕（『静岡新報』1919年＝大正8年12月4日付）

「◎根方軌道増資」〔沼津・静岡浦まで延長〕（『静岡新報』1919年＝大正8年12月

16日付) ▲▲

「◎天幕張りの大山窩団 熱海附近山林に」 (『静岡新報』1919年=大正8年12月

19日付) ▲▲

「◎二ツ山競馬会」〔大淵村高尾山例祭〕 (『静岡新報』1919年=大正8年12月19日付)

「◎富士登山土産 木製品を奨めん計画」 (『静岡新報』1919年=大正8年12月23日付) ▲▲

「◎大宮町市場 近く其設置を見ん」〔公設市場〕 (『静岡新報』1919年=大正8年12月24日付)

「◎根方軌道と貨物」〔引き込み線〕 (『静岡新報』1919年=大正8年12月26日付)

▲▲

■1920年=大正9年

●歴史文化『静岡新報 VOL.49 大正9年1月～2月』

「◎大宮町の元旦▽小学校で年賀交換」 (『静岡新報』1920年=大正9年1月1日付)

「◎富士初登山▽軍歌を奏しつゝ」〔須走〕〔雪中登山〕〔小泉知海〕 (『静岡新報』1920年=大正9年1月5日付) ▲▲

「◎身延線二等廃止」〔富士身延鉄道〕〔二等を廃止し三等だけに〕 (『静岡新報』1920年=大正9年1月7日付)

「◎根方軌道増資」〔岳南電車〕〔沼津まで延長のため増資〕 (『静岡新報』1920年=大正9年1月7日付)

「◎富士山麓開拓」〔本栖湖疎水〕 (『静岡新報』1920年=大正9年1月12日付) →

「岳麓の難路に」 (1927年=昭和2年12月14日付夕刊) を参照。

「◎大宮病院設立」〔株式会社として準備〕 (『静岡新報』1920年=大正9年1月12日付)

「◎富士山で荒行=六合は積雪丈余」〔須走〕〔雪中登山〕〔村石伊之助〕〔信仰登山〕 (『静岡新報』1920年=大正9年1月16日付) ▲▲

「◎大宮町大火=目抜の場所が丸焼 全焼百廿六戸二百余棟 原因は電力過度の使用」 (『静岡新報』1920年=大正9年1月25日付)

「◎大宮町大火の損害五十万円に達せん 炊出し見舞い人にて大混雑 河原保安課長も同地に急行す」 (『静岡新報』1920年=大正9年1月26日付)

「◎大火の悲喜劇 口頭弁論中に自家焼失」〔大宮町大火〕〔火災保険〕 (『静岡新報』1920年=大正9年1月26日付)

「◎富士郡道十三線 廿七日郡会に諮問」 (『静岡新報』1920年=大正9年1月27日付)

「◎県道全部認定 諮問線は勿論、県会希望の廿路線も」 (『静岡新報』1920年=大正9年1月30日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.50 大正9年3月～5月』

「◎地主と小作=紛擾拡大せん形勢」〔大宮町野中〕〔小作争議〕 (『静岡新報』1920年=大正9年3月1日付) ▲▲

「◎大宮町の復旧＝各町共新築盛ん也」〔大宮町大火〕（『静岡新報』1920年＝大正9年3月1日付）

「◎大宮電灯値上 電柱税の祟り」（『静岡新報』1920年＝大正9年3月7日付）

「◎大宮と市制」〔大宮町大火〕（『静岡新報』1920年＝大正9年3月8日付）

「◎大淵村信用組合」（『静岡新報』1920年＝大正9年3月8日付）▲▲

「◎大宮の活動館」〔映画館〕（『静岡新報』1920年＝大正9年3月9日付）

「◎鈴川競馬大会」（『静岡新報』1920年＝大正9年3月12日付）▲▲

「▽大宮浅間の桜◇ボツ々開き始む」〔浅間大社〕（『静岡新報』1920年＝大正9年3月23日付）

「◎大宮局の大乱脈…為替抜取電報遅延の事実▽勤務中交換手は遊びに出る」〔逓信局〕（『静岡新報』1920年＝大正9年3月26日付）

「◎衛生思想なき大宮学校職員＝呆れ果てた人々」〔大宮町小学校〕（『静岡新報』1920年＝大正9年3月26日付）

「駅夫募集 富士身延鉄道株式会社」〔広告〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月1日付）

「◎郡道認定 一日認可（二）△富士郡」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月2日付）

「△富士各地花信◇浅間神社の桜開く」（〔浅間大社〕〔駒止の桜〕『静岡新報』1920年＝大正9年4月6日付）▲▲

「◎鈴川競馬開催」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月9日付）

「◎岩石が崩壊し熱海線の不通▽宮殿下は自動車で」〔小田原熱海軽便鉄道〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月10日付）

「◎大宮に活動館」〔映画館〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月10日付）

「◎分校の紛擾▽増築費負担問題から」〔北山小学校山宮分校〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月11日付）▲▲

「◎鈴川の競馬△第一日の競技は」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月12日付）

「◎大宮駅歩廊で＝雀を射たる乱暴技手」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月13日付）

「◎大宮口砂走＝千二百円で改修」〔大宮町青年団〕〔鈴木重作〕〔富士宮口砂走り〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月13日付）▲▲

「◎鈴川競馬二日」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月13日付）

「◎鈴川競馬最終」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月14日付）

「◎相州大山大祭」〔数千本の桜の大樹〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月16日付）

「▽桜が散つて降雪◇太郎坊附近は五尺」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月17日付）

「◎大宮競馬二日付）」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月18日付）

「◎大宮に又活動」〔映画館〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月18日付）

「◎大宮競馬最終」（『静岡新報』1920年＝大正9年4月19日付）

「◎富士製紙慰安」〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月19日付）

「◎大社の警備隊」〔浅間大社〕〔大宮町青年団〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月26日付）

「◎山林大賭博▽新庁舎の初公判」〔大淵～高岡の山林で賭博、吉原区裁判所〕（『静岡新報』1920年＝大正9年4月26日付）

「身延山迄鉄道全通（五月十八日）」〔富士身延鉄道の広告〕〔身延線〕（『静岡新報』1920年＝大正9年5月21日付）

「◎白糸滝の藤花」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1920年＝大正9年5月27日付）

「◎大宮不景気▽繭も茶も安い為」（『静岡新報』1920年＝大正9年5月29日付）

「身延山迄鉄道全通 五月十八日より」〔富士身延鉄道の広告〕（『静岡新報』1920年＝大正9年5月30日付）

〔大正9年6月～10年1月欠号〕

■ 1921年＝大正10年

● 歴史文化『静岡新報 VOL.51 大正10年2月～4月』

「◎毘沙門天祭典」（『静岡新報』1921年＝大正10年2月7日付）

「神職にも被選挙権を与えよと云ふ建議可決▽本県神職会総会大いに力む」（『静岡新報』1921年＝大正10年2月9日付）

「精進湖を中心にして富士裾野を大公園▽約一千町歩の佳絶を選択…内務省にて既に調査す」〔国立公園〕（『静岡新報』1921年＝大正10年2月20日付）

「富岳を中心の国立公園設置の請願」〔静岡県山林会〕（『静岡新報』1921年＝大正10年2月25日付）

「埼玉山口山形の諸県と共に寄生虫の多い本県◇遠慮なく農民の生血を吸つて居る 講習会を開いて撲滅を期す」〔風土病〕（『静岡新報』1921年＝大正10年3月9日付）

「富士身延運賃引下の誓願」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年3月10日付）

「富士浅間の本殿改築 工費十三万円」〔浅間大社〕（『静岡新報』1921年＝大正10年3月14日付）

「富士大降雪 太郎坊は四尺余」（『静岡新報』1921年＝大正10年3月28日付）

「熱海隧道崩潰大惨事 岩石に敷かれし惨屍体発掘 十九名の生死は未だ判明するに至らず 坑内よりは助けての悲鳴漏れつゝあり」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月3日付）→前田恭助著『丹那隧道現場日誌 前田日誌1～20』（大正10年1月1日～昭和6年12月31日）が熱海市立図書館で閲覧可能である。

「富士浅間の桜 ◇五六日頃より咲く」〔浅間大社〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月3日付）

「幽に聞えた悲鳴も今は聞えず絶望か▽必死の努力も其効無く全部窒息惨死の運命か」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月5日付）

「◎大宮競馬初日」〔万野原〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月5日付）一部▲

▲

「生存の見込ある十九名中に遭難の経験者あり▽屍体は其の儘掘鑿を急ぐ」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月6日付）

「○大宮競馬二日」（『静岡新報』1921年＝大正10年4月6日付）

「貫通は今朝以後か◇工夫に対する奨励金集る＝遭難者の運命は如何に」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月7日付）

「生か死か今一步で判明の機は近付く＝掘鑿口の一部は間も無く終点▽坑内の温度は八十度内外か▽予定の如く進捗せぬは遺憾」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月8日付）

「◎大宮競馬最終」（『静岡新報』1921年＝大正10年4月8日付）

「噫遂に絶望？＝貫通の見込み立たず▽予定は終に裏切られたり▽今後尚ほ五日を要せんか」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月9日付）

「救はれたり十七の生霊＝八日夜半に至り漸く貫通す」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月10日付）

「斯くして十七名は救助せられたり 猶惨死せる十四名の屍体は鋭意発掘中なるも作業困難」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月11日付）

「真勇を発揮した飯田技手と門屋小頭＝十七名の生命を救ひ得た」〔丹那トンネル事故〕

〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月12日付）

「∴各地の桜咲く◇何れも花見客で賑ふ」〔浅間大社〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月12日付）

「坑内深く進入検査中の富田所長等の窒息＝酸素吸入で漸く蘇生せしめた 其後屍体一個を発見せるのみ」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月12日付）

「◎富士石室崩壊」〔須走口六合目〕〔雪崩〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月13日付） ▲▲

「屍体九個発見さる◇残りの七個は未だ発見されず…寄附金は続々として集る」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月16日付）

「◎鈴川の競馬会」（『静岡新報』1921年＝大正10年4月8日付） ▲▲

「◎田子浦の賑ひ」〔地引き綱〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月20日付）

「夕刊を発行して 大改良大改善 本誌六頁となる」〔夕刊発行〕〔社告〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月25日付）←これまで4面建ての朝刊であったが、4月25日付は1面下半分、2面は下2段、3～6面が「祝発展」の協賛広告となって全8面。

「本日より愈夕刊発行＝宣伝隊全市を練る」〔夕刊発行〕〔社告〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月26日付）

【1921年＝大正10年4月26日付から『静岡新報』は夕刊発行、ただし原紙は、27日発行＝28日夕刊以降しか残っていない】

「鈴川競馬大会」（『静岡新報』1921年＝大正10年4月27日付）

「大宮政友勝利」〔政友会〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月29日付）

「森林政策と地方財源」〔御林御説〕〔官有林〕〔森林原野下戻法〕〔森林法〕〔宮古■代議士〕（『静岡新報』1921年＝大正10年4月29日付） ▲▲ ←茨城県出身の宮古啓三郎代議士かどうか？

●歴史文化『静岡新報 VOL.52 大正10年5月～6月』

「社告 紙面拡張六頁（内二頁は夕刊）と相成候に付五月一日より左の通り定価改正仕候一、一ヶ月（金六十五銭ノ処）改メ定価七拾銭 但夕刊別配達の方は配達料一ヶ月金十銭可申受候 尚夕刊は日曜日、大祭日は休刊す 五月一日 静岡新報社」〔夕刊発行〕〔新聞値上げ〕〔社告〕（『静岡新報』1921年＝大正10年5月2日付）

「○浅間流鏑馬祭」〔浅間大社〕（『静岡新報』1921年＝大正10年5月3日付）

「鈴川競馬最終▽十一競馬に珍事出来」（『静岡新報』1921年＝大正10年5月3日付）

「富士山は大雪崩 登山は頗る危険」〔雪中登山〕〔行政執行法〕（『静岡新報』1921年＝大正10年5月6日付）

「日蓮を種に山師跋扈 これも其の一例」（『静岡新報』1921年＝大正10年5月12日付）

「十死体を発見して残りは六名となる」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年5月12日付）

「外人の富士山講演 お札博士のスタール氏富士山と富士講に就いて」（『静岡新報』1921年＝大正10年5月16日付）

「男女二個の屍体発掘＝未発見は四個」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年5月16日付）

「十四人目の屍体発見＝残るは二名のみ」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年5月20日付）

「熱海全町死活問題 間歇泉噴出減少《一》鈴木旅館の私慾の為に高貴の御料にも事欠くに至る」〔大湯間歇泉〕（『静岡新報』1921年＝大正10年5月25日付夕刊）

「国立公園実施計画▽富士山麓も有力の候補地」（『静岡新報』1921年＝大正10年5月25日付夕刊）

「□富士亦降雪」（『静岡新報』1921年＝大正10年6月3日付）

「御殿場開山式＝来七月一日に挙行」〔登山物価引き下げ〕（『静岡新報』1921年＝大正10年6月3日付）▲▲

「富士 登山期は来れり＝須走御殿場共七月十五日開山 電話架設は目下準備中」〔登山物価引き下げ〕（『静岡新報』1921年＝大正10年6月8日付）▲▲

「林宮司を排斥」〔浅間大社〕〔林治一〕（『静岡新報』1921年＝大正10年6月11日付）

「将来を嘱目さるゝ富士山麓一帯の産馬 歴史上名誉ある産馬地の復活」〔大宮種付場〕〔浦川種付場〕〔加納嘉四郎〕（『静岡新報』1921年＝大正10年6月15日付）▲▲

「熱海線遭難者弔魂祭執行日＝来る廿六日と決定す」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年6月18日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.53 大正10年7月～9月』

「□富士山と琵琶湖」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月2日付）

「御殿場開山式＝一日午後執行す」〔登山バス〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月2日付）▲▲

「須走口開山期▽来る十日執行すると」〔騎馬登山〕〔登山物価〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月3日付）▲▲

「大宮の開山式＝御田植祭と共に執行」〔浅間大社〕〔お田植祭〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月7日付）▲▲

「少年団の登山▽五百名を選抜して」〔静岡市少年団〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月7日付）

「駿東高女登山 須走口より御殿場口へ」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月7日付）

「富士大宮に設備改善▽客引を全廃せよ」〔大宮口〕〔トイレ〕〔客引き〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月11日付）▲▲

「富士身延電化 準備増資決行」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月12日付）

「□富士風烈し◇女子の登山は危険」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月14日付）

「登山案内配布」〔大宮口〕〔登山者数〕〔名古屋鉄道局〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月14日付）▲▲

「登山者増加す＝大宮口の団体登山者」〔登山バス〕〔富士自動車〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月17日付）一部▲▲

「御殿場と須走▽県の警戒頗る嚴重」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月17日付）

「富士山通信 全山快晴なり 頂上三十八度」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月18日付）

「下山の途発狂して行方不明となる」〔御殿場口〕〔滝ヶ原〕〔遭難〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月19日付）

「十七日の富士 宿泊者は三百九十名」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月19日付）

「御殿場口登山」〔明治神宮御造営奉仕団〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月19日付）

「駿東高女登山 本科実科で三十名」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月19日付夕刊）

「少年団五十名＝十八日富士登山」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月20日付）〔静岡市少年団〕

「富士山は晴天 十八日の御殿場と須走」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月20日付）

「師範生の登山」〔御殿場口〕〔大宮口〕〔静岡師範学校〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月21日付）

「山中不便無し」〔大宮口休泊組合〕〔切符制度〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月21日付）▲▲

「登山者増加す 大宮口のみ振はず」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月21日付）

「▽富士山表大宮口三合五勺の夕雲」〔写真〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月22日付）

「富士益々賑ふ▽大宮口相変わらず振はず」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月22日付）

「富士に憧れ御殿場泊り 露国教員観光団一行廿六名 途中迄でも登つて見たいと」〔東

支鉄道沿道露国教員観光団〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月23日付）

「▽富士山表大宮口二合五勺の馬返し」〔写真〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月22日付）

「日に増す登山者 全山晴れて風も無し」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月23日付）

「富士山頂大宣伝を行ふ三島警察隊が」〔夜間登山〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月25日付）

「富士登山日報」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月25日付）

「高空心理 富士山上で実験」〔田中寛一〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月28日付）

「「▽沼津河口より望みたる富士」〔写真〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月29日付）

「富士降雹 天候激変せり」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月29日付）

「白隠禅師の科学上の功績を研究」（『静岡新報』1921年＝大正10年7月29日付）

「在郷軍人登山」〔小笠郡池新田在郷軍人〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月29日付）

「登山隊出発す」〔静岡市少年団〕（『静岡新報』1921年＝大正10年7月29日付）

「富士山巔と御殿場間を十時間で往復突破したる健脚児…」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1921年＝大正10年8月2日付）

「登山者激減大宮口▽旅館の不親切」〔大宮口不振〕（『静岡新報』1921年＝大正10年8月2日付）▲▲

「富士登山者激減す 昨年に比して殆ど半数内外 原因は不景気と天候不順の為」（『静岡新報』1921年＝大正10年8月3日付）一部▲▲

「富士山上快晴＝御殿場口より団体登山」（『静岡新報』1921年＝大正10年8月3日付）

「富士軌道延長 倍額増資決定す」〔本栖湖の材木搬出〕〔吉田精進湖間軽便鉄道〕（『静岡新報』1921年＝大正10年8月4日付）

「五時間半にて▽富士山を上下す」〔変わり種登山〕〔西本勉〕（『静岡新報』1921年＝大正10年8月5日付）

「富士山頂大降雹 三日雷電激し」（『静岡新報』1921年＝大正10年8月5日付）

「富士山大宮口」（『静岡新報』1921年＝大正10年8月6日付）

「留学生の奇禍▽富士で石に傷けられ」〔遭難〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1921年＝大正10年8月8日付）

「富士登山日報」（『静岡新報』1921年＝大正10年8月9日付）

「国立公園候補地として箱根富士裾野有望 日本アルプスは要素が不備で日光中禅寺湖一帯も候補地」（『静岡新報』1921年＝大正10年8月12日付）

「◇富士山須走口より往復四時間十分の記録を作る明大生西本勉君」〔写真〕〔変わり種登山〕（『静岡新報』1921年＝大正10年8月12日付）

「二千町歩収穫皆無 愛鷹山麓の野鼠益々猖獗 開墾組合幹部非難熾烈」〔野ねずみ〕（『静岡

岡新報』1921年＝大正10年8月16日付)

「◇三保の灯台より望みたる富士」〔写真〕(『静岡新報』1921年＝大正10年8月17日付)

「◇三保羽衣橋の富士風光」〔写真〕(『静岡新報』1921年＝大正10年8月18日付)

「◇三保の松原と富士の遠望」〔写真〕(『静岡新報』1921年＝大正10年8月21日付)

「外人登山旅館 須走口に建設計画」〔外国人登山〕〔大米谷旅館〕〔米山安治〕(『静岡新報』1921年＝大正10年8月21日付)

「富士軌道椿事 馬狂奔して車体顛覆」(『静岡新報』1921年＝大正10年8月26日付)

「県下の名勝を米国の活動写真に」〔映画〕(『静岡新報』1921年＝大正10年8月28日付)

「◇三保の貝島より望みたる富士」〔写真〕(『静岡新報』1921年＝大正10年8月31日付)

「試験は断行決行ん 熱海間歇泉湧出の中断」〔大湯間歇泉〕(『静岡新報』1921年＝大正10年8月31日付)

「富士は快晴 七十老人の大气焰」〔高齢者登山〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月2日付)

「富士山閉山式▽去る三十一日執行」〔大宮口不振〕〔登山者数〕〔奥宮〕〔電話〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月2日付) ▲▲

「熱海間歇泉問題は癒々紛糾 一日町民大会」〔大湯間歇泉〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月3日付)

「富士山麓と身延」〔イギリス皇太子〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月11日付)

「R型気球高く飛翔 富士裾野の攻防演習開始」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月11日付)

「山宮入会地 紛擾拡大＝組合組織調印中」(『静岡新報』1921年＝大正10年9月21日付) ▲▲

「天母山落成式」〔松尾喜代蔵〕〔天母山法華道場〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月22日付) ▲▲ →その後の発展については「天母山法華道場 燈明を継承し、81年の歳月」(『岳南朝日』1988年＝昭和63年11月19日付) 参照。

「◇伊豆長岡大黒堂の松より富士を望む」〔写真〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月22日付)

「愛鷹山麓野鼠駆除 チブス菌で充分」〔野ねずみ〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月25日付)

「秋晴の富士 千本浜より見たる」〔写真〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月26日付)

「富士渡船停止＝富士身延線漸く開通」〔富士身延鉄道〕〔豪雨〕(『静岡新報』1921年＝大正10年9月28日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.54 大正10年10月～12月』

「熱海線工事 死傷数名 大石が落下し」〔長坂トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1921年＝大正10年10月10日付）

「大湯は遂に復活せり 鈴木湯閉塞…其の結果で＝原因は矢張…鈴木の新井」〔大湯間歇泉〕（『静岡新報』1921年＝大正10年10月11日付）

「□三尺余降雪◇富士山六合目迄」（『静岡新報』1921年＝大正10年10月11日付）

「富士二合には青鹿が十数頭 大和猟友会の初猟」〔狩猟〕（『静岡新報』1921年＝大正10年10月15日付）

「◇小山町より見たる雪の富士」〔写真〕（『静岡新報』1921年＝大正10年10月23日付）

「望月町長の専恣から大宮青年団分裂 望月団長遂に辞職す」〔大宮町青年団〕（『静岡新報』1921年＝大正10年10月29日付）

「神田川原に陣取て＝立宿組といはほ組の青年▽祭の山車の紛紜から篝を焚て」〔浅間大社〕（『静岡新報』1921年＝大正10年10月29日付）

「鈴川競馬初日」（『静岡新報』1921年＝大正10年10月29日付）

「特種大演習と警戒＝明十三日より開始せらるゝ…観覧者其他の注意すべき条々」〔昭和天皇〕〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔地下水〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月12日付）

「霜白き裾野原頭 思ひやらるゝ特種演習の壯観 於御殿場 大森特派員」〔昭和天皇〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月14日付）

「東宮殿下 裾野御着」〔軍事演習〕〔昭和天皇〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月14日付）

「特種演習 十四日は御殿場を中心に騎兵団の大接戦 於御殿場 大森特派員」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月14日付）

「特種演習 今晩夢を破つて一大決戦行はれ 午前八時半頃には終了 於御殿場 大森特派員」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月15日付）

「東西両軍の飛機活躍▽西軍飛行機は敵情偵察▽東軍のは報告筒を投下」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月15日付）

「▽東宮御野立所＝演景の小丘がそれ」〔軍事演習〕〔昭和天皇〕〔東富士演習場〕〔写真〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月15日付）

「東宮後謙徳の程」〔軍事演習〕〔昭和天皇〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月15日付）

「◇裾野演習地所観」〔軍事演習〕〔写真〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月15日付）

「特種演習 裾野の朝靄を破つて両軍の一大決戦(特種演習終了)十五日御殿場に於て 大森特派員」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕〔昭和天皇〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月16日付）

「□須走の初雪 廿二日二寸余を積む」（『静岡新報』1921年＝大正10年11月25日付）

「特別大演習実写 静岡帝国館」〔映画〕〔広告〕（『静岡新報』1921年＝大正10年11月25日付）

「富士の周囲を自動車で周遊することが出来たなら外人漫遊客は満足するだらう」〔国立公園〕〔富士山一周〕（『静岡新報』1921年＝大正10年12月4日付夕刊）

「英皇儲殿下の御観光中 富士五湖と天龍下りは御希望で既に殆どご決定 お召列車は三十六万円」〔イギリス皇太子〕（『静岡新報』1921年＝大正10年12月19日付）

「争闘将に開かれんとす＝用水事件にて両区民の軋轢…互ひに数十名づつ繰出し来つて」〔大宮町・野中黒田用水〕〔水争い〕（『静岡新報』1921年＝大正10年12月28日付）

■ 1922年＝大正11年

● 歴史文化『静岡新報 VOL.55 大正11年1月～2月』

「熱海線は遅くも十四年に必ず開通 十三年に熱海迄完成する 鈴木横山博士調査発表▽太田建築課長は快く語る 鈴木博士百度以下なり」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月3日付）

「宝永山運動会」〔雪中登山〕〔御殿場口〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月8日付） ▲▲

「摂政宮殿下御遠乗 十四日龍華寺へ御騎乗▽十一日も御馬にて佐野瀑園へ」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月12日付）

「積雪を蹴て重砲兵演習」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月12日付）

「裾野に雪橇場◇スキー倶楽部と協力し」〔須走スキー場〕〔米山安治〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月19日付）

「近年希有の大降雪＝根方軌道は一時運転を中止し▽白皚々として頗る美観」（『静岡新報』1922年＝大正11年1月20日付）

「丹那隧道視察」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月20日付）

「雪中富士登山◇八名が御殿場口より」〔牛田清彦〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月21日付）

「僧侶参政運動 中央と連携して」〔中央仏教联合会〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月22日付）

「大宮の大賭博 大網でバサリと」（『静岡新報』1922年＝大正11年1月25日付夕刊）

「富士大雪で登山不能▽漸く七合目迄」〔雪中登山〕〔東京元講〕〔丸不二講〕〔信仰登山〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月27日付）

「雪中御岳登山」〔御岳講〕〔信仰登山〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月29日付夕刊）

「貴族院議員廿九名丹那隧道を視察す 雨合羽にカンテラを携へて 崩落当時の惨状を偲ばせる」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年1月31日付夕刊）

「駿東郡泉・小泉両村合併して裾野町なる町政をを布かんと両村有力者の協議」（『静岡新報』1922年＝大正11年2月5日付）

「紛糾を重ね居れる大宮町長問題 市街地と村部の競争」（『静岡新報』1922年＝大

正 11 年 2 月 7 日付)

「岳麓野鼠駆除効果甚大 近く第二回を施行」〔野ねずみ〕(『静岡新報』1922年＝大正11年2月11日付)

「実現の暁には第一に富士山を国立公園 編入請願を議会で採択▽施設に就て潮衛生局長語る」(『静岡新報』1922年＝大正11年2月20日付)

「十二時間断食して富士の山巔を極めたる英国の飛行士官 落下傘の世界的名手オ中尉と命知らずの剛胆飛行家ク中尉」〔外国人登山〕〔雪中登山〕(『静岡新報』1922年＝大正11年2月21日付)

「◇雪の富士 沼津千本■より望む」〔写真〕(『静岡新報』1922年＝大正11年2月28日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.56 大正11年3月～4月』

「快晴の富士を御覧▽鈴川で展望車に出でさせられ＝皇后陛下御微笑遊ばさる」〔貞明皇后〕(『静岡新報』1922年＝大正11年3月10日付)

「頗る危険なる富士山の雪崩＝御殿場署の取締」〔雪中登山〕(『静岡新報』1922年＝大正11年3月14日付)

「富士山は国立公園として申分無し」(『静岡新報』1922年＝大正11年4月6日付)

「精進湖々畔の準備 英国皇太子殿下を迎へ奉る 山梨県当局が必死となりて」〔精進ホテル〕〔イギリス皇太子〕(『静岡新報』1922年＝大正11年4月7日付)

「富士大降雪 須走口は一丈余」(『静岡新報』1922年＝大正11年4月16日付)

「鈴川競馬二日」(『静岡新報』1922年＝大正11年4月17日付)

「鈴川競馬最終」(『静岡新報』1922年＝大正11年4月19日付)

「英皇儲へ献上の富士と天竜の＝美しき写真帖昨出来せり◇来る二十五日道岡知事より献上◇沿道各地の注意と警戒発せられる」〔イギリス皇太子〕(『静岡新報』1922年＝大正11年4月20日付)

「熱海温泉復旧▽異変は漏出せる為」〔大湯間歇泉〕(『静岡新報』1922年＝大正11年4月20日付)

「籠坂県道改修＝二十二日全部改修」〔イギリス皇太子〕(『静岡新報』1922年＝大正11年4月21日付夕刊)

「模範的公園を富士山麓に 老万五千人慰安の為め 実現後は県下唯一のもの」〔富士紡〕〔小山町〕(『静岡新報』1922年＝大正11年4月25日付)

「熱海隧道工事約一万尺▽双方より進行」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1922年＝大正11年4月26日付)

「富士を眺めて割腹自殺＝常に高利貸を罵倒する変り者▽原因には曖昧な点があると」〔大宮町〕(『静岡新報』1922年＝大正11年4月30日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 VOL.57 大正11年5月～6月』

「国立公園の有望地－富士箱根五湖阿寒湖等▽候補地は目下全国で九ヶ所」(『静岡新報』1922年＝大正11年5月1日付)

「□富士山降雪△岳麓各地冷氣」(『静岡新報』1922年＝大正11年5月2日付夕刊)

「熱海線と沼津駅 完成すれば愈々重要さを加へる」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1922年＝大正11年5月4日付)

「馬一頭焼死す 富士根村の火事」〔ふじもとむら〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月15日付）

「摂政宮殿下が御憧憬の富士裾野を御巡遊＝北海道行啓前…六月上旬を期して▽御殿場駅から自動車を召され同夜は精進ホテルに御仮泊か」〔イギリス皇太子〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月24日付）

「桂月老の富士登山＝山開き前の気分に接する為」〔大町桂月〕〔大町芳文〕〔小笠原松次郎〕〔須走口〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月25日付）

「雪中富士登山＝須走口より山頂へ」〔原虎之助〕〔横浜植物会〕〔米山館〕〔竹内鳳次郎〕〔岡田弥之助〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月25日付）

「宿引全廃問題で大宮宿屋内証▽まだ宿泊料も協定せぬ」〔客引き〕〔大宮口休泊組合〕〔大宮旅館組合〕〔大宮分署〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月25日付）▲▲
→「大宮口の客引き」（1924年＝大正13年7月24日付）に続報。

「六万円で水道敷設＝富士郡鷹岡村の大奮発▽同村には昔から井戸が無い」〔上水道〕〔ふじねむら〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月26日付）

「□御殿場開山◇来る七月一日を以て」〔開山式〕〔御殿場口〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月26日付）▲▲

「桂月老は五合目に 野はつゞし空は八千八声哉 鶯の鳴く声さへも聞えた」〔大町桂月〕〔須走口〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月27日付）

「大宮口も十日＝開山祭を行ふに決す」〔浅間大社〕〔大宮自治青年団〕〔登山案内所〕〔開山日統一〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月28日付）▲▲←記事中にある大宮自治青年団が特設した登山案内所については「大宮旅館組合が青年団を迫害した」（7月3日付）参照。

「▽富士桜と鶯＝須走口や太郎坊附近では」〔フジザクラ〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月31日付）

「富士芝を窃取▽裾野演習地帯から」〔芝生盗掘〕（『静岡新報』1922年＝大正11年5月31日付）

「近づいた登山期◇警察電話は三線に増加」（『静岡新報』1922年＝大正11年5月31日付）

「富士を中心にして五つの景勝を選ぶ▽桂月氏大宮町に入る」〔大町桂月〕〔富士五湖〕（『静岡新報』1922年＝大正11年6月1日付）

「摂政宮五湖廻りを遊ばさる 新緑滴る富士の山麓を 籠坂峠から山梨県へと」〔イギリス皇太子〕（『静岡新報』1922年＝大正11年6月4日付）

「富士時の宣伝 吉原署と大宮署で」〔時の記念日〕（『静岡新報』1922年＝大正11年6月4日付）

「熱海隧道内に悪瓦斯…第八工区泉越隧道西口坑内」〔熱海線〕〔泉越トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年6月15日付夕刊）

「実際 米国各地の高山に登った人 富士登山に成功 大町氏の登山証は見当らず」〔久保田春芳〕〔大町桂月〕〔雪中登山〕〔前島熊太郎〕〔坪池駒吉〕（『静岡新報』1922年＝大正11年6月15日付）▲▲

「富士道路修復 雪崩で崩壊した為」〔御殿場口八合目〕（『静岡新報』1922年＝大

正 11 年 6 月 17 日付)

「富士の開山を一斉に＝大宮は五日繰上げ七月十日…警察電話の架設に着手す」〔開山日統一〕(『静岡新報』1922年＝大正11年6月19日付) ▲▲

「富士紛擾の成行き 学校設立延期か」〔富士中学〕(『静岡新報』1922年＝大正11年6月20日付)

「浮島沼 田植改善 直播種法試験」(『静岡新報』1922年＝大正11年6月20日付)

「客引全廃提議◇御殿場口改善計画」〔客引き〕(『静岡新報』1922年＝大正11年6月20日付) ▲▲

「□四名登山す」(『静岡新報』1922年＝大正11年6月23日付) 〔日帰り登山〕

「□老人連登山◇廿七日須走口から」〔高齢者登山〕〔雪中登山〕(『静岡新報』1922年＝大正11年6月28日付)

「熱海西口湧水に苦む＝二十六名で一日に一尺▽土砂が何時崩壊するか判らぬ」〔丹那トンネル難工事〕〔大出水〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1922年＝大正11年6月30日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 VOL.58 大正11年7月～8月』

「学生富士登山△三名強力も雇はずに」〔大宮口〕(『静岡新報』1922年＝大正11年7月3日付)

「大宮旅館組合が青年団を迫害した」〔大宮自治青年団〕(『静岡新報』1922年＝大正11年7月3日付) ▲▲←「大宮口も十日＝開山祭を行ふに決す」(5月28日付)、「富士登山 各石室で電灯」(7月4日付) 参照。

「今秋行ふ裾野の演習は新戦法の実験研究 当局の期待頗る多大也」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1922年＝大正11年7月4日付夕刊)

「沼中壮挙＝今夏先人未踏の山岳突破を挙る」〔沼津中学山岳部〕〔青木ヶ原樹海〕(『静岡新報』1922年＝大正11年7月4日付夕刊)

「富士登山 各石室で電灯＝電話も公開一通話十銭 便所も曳き出式にして清潔に」〔石油ランプ廃止〕〔表口山中休泊所組合〕〔富士山郵便局〕〔大宮自治青年団〕〔大悟庵岳松寺〕〔河瀬太嶽〕〔自由宿泊所〕(『静岡新報』1922年＝大正11年7月4日付) ▲▲

「□枯死する松並木 あたら名物惜しいもの」(『静岡新報』1922年＝大正11年7月4日付)

「富士調査▽内務省で着手▽国立公園準備」(『静岡新報』1922年＝大正11年7月5日付夕刊)

「富士山の電話＝五日より架設に着手」(『静岡新報』1922年＝大正11年7月7日付)

「富士登山の大競争＝十五日御殿場にて発会式を挙げ二十二日本式の競走を挙る」〔御殿場口〕〔登山マラソン〕〔東京学生マラソン聯盟〕(『静岡新報』1922年＝大正11年7月8日付夕刊) ▲▲ →「富士上下の大競争」(7月15日付夕刊)、「□一時五十分◇金栗氏のレコード」(7月17日付)、「富士登山マラソン＝二十二日太郎坊より出発」(7月22日付) に続報。

「富士の電話は十七日に竣成 吉田口には桜満開」〔変わり種登山〕(『静岡新報』1922年＝大正11年7月8日付) 一部▲▲

「富士登山をしたが安否不明 帝大生八名」〔東京大学〕〔京都大学〕〔遭難〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月11日付夕刊）→「安否不明の大学生下山す」（7月13日付夕刊）に続報。

「砲兵射撃学校 演習終了式举行」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月12日付）

「女師水泳登山」〔静岡女子師範〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月12日付）

「登山者増加す＝旅館と宿泊所の競争」〔大宮口〕〔河瀬太嶽〕〔大悟庵岳松寺〕〔自由宿泊所〕〔富士発勝会〕〔大宮旅館組合〕〔客引き〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月12日付）▲▲

「安否不明の大学生下山す▽風雨強く頗る冒険」〔東京大学〕〔京都大学〕〔遭難〕〔電話〕〔富士山郵便局〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月13日付夕刊）一部▲▲

「江の浦へ第二艇隊 乗員富士登山」〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月13日付）

「富士賛十絶 高山恵忍」（『静岡新報』1922年＝大正11年7月14日付）

「富士上下の大競争＝明十五日より練習に看手しいよゝゝ二十二日に決行す」〔御殿場口〕〔登山マラソン〕〔東京学生マラソン聯盟〕〔金栗四三〕〔コースタイム〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月15日付夕刊）

「旅行会員登山」〔早稲田大学旅行会〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月15日付）

「師範生の登山」〔神奈川県師範学校〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月16日付）

「□一時五十分◇太郎坊より頂上迄◇金栗氏のレコード」〔御殿場口〕〔登山マラソン〕〔金栗四三〕〔コースタイム〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月17日付）

「富士山 電話開通▽十六日から」〔富士山郵便局〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月18日付夕刊）

「夏休の静中生▽海に山に英気を練る」〔静岡中学校〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月18日付）

「富士は豪雨と雷鳴＝電話は遂に不通となり…山頂の様相不明なりしが…今朝漸く開通」（『静岡新報』1922年＝大正11年7月19日付夕刊）

「富士循環鉄道 促進運動開始」〔富士山麓循環鉄道〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月19日付）

「万年雪でスケート＝富士登山者連日増加す▽十七日には約千名の登山者」（『静岡新報』1922年＝大正11年7月19日付）

「旅行会の一行」〔早稲田大学旅行会〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月19日付）

「沼津高女登山＝二十三名大宮口より」〔沼津高等女学校〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月20日付夕刊）

「熱海隧道西口視察 監察官と所長等が」〔熱海線〕〔丹那トンネル難工事〕〔大出水〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年7月21日付）

「隻脚で登山す▽十九日の富士山静穏」〔信仰登山〕〔障害者登山〕〔天善教〕〔田中忠

吉) (『静岡新報』1922年=大正11年7月21日付)

「七月廿三日廿四日廿五日の三日間 富士山頂に於けるクラブ齒磨デー開催 三日間に御登山の方先着五千名までに合計数百個の記念品贈呈」〔広告〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月21日付)、23日付)

「富士登山マラソン=二十二日太郎坊より出発▽選手は十二名連日猛烈な練習」(『静岡新報』1922年=大正11年7月22日付)

「下山途中負傷=木の枝に頭を打ち付けて」〔下山後交通事故〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月24日付)

「富士往復の登山競走=栗本氏が第一着」〔御殿場口〕〔金栗四三〕〔登山マラソン〕〔コースタイル〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月24日付)

「農学生の登山」〔中泉農学校〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月24日付)

「□富士山通信=大宮口は登山者尠し」(『静岡新報』1922年=大正11年7月24日付)

「登山者は見合せよ▽現に登山中の者は早く下山 天候は刻々に悪くなつて来る」〔台風〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月25日付夕刊)

「岳麓探勝の清浦議長=小橋前次官一行」〔清浦奎吾〕〔小橋一太〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月25日付夕刊) →「[白糸滝の清浦氏一行](#)」(7月26日付)にこのときの写真あり。

「女子職業生徒五合目で発病 須走にまだ着せぬ」〔芙蓉閣〕〔遭難〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月25日付) ▲▲

「頂上で大福引=富士登山者五千」〔クラブ齒磨〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月26日付夕刊)

「大山の山開き」(『静岡新報』1922年=大正11年7月26日付夕刊) ▲▲

「御殿場駅混雑」〔登山バス〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月26日付夕刊)

▲▲

「白糸滝の清浦氏一行」〔写真〕〔白糸の滝〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月26日付)

「富士山に女子登山多し▽六十余の老婆二人」〔クラブ齒磨〕〔高齢者登山〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月27日付)

「富士山頂より」東京クラブ富士登山隊」(『静岡新報』1922年=大正11年7月27日付)

「二十七日は富士山寒し」(『静岡新報』1922年=大正11年7月29日付)

「冒険大遠泳の計画▽戸田沼津間往復六十哩▽当日直に富士に登山す」大正11年7月30日 〔変わり種登山〕

「富士山賽銭◇小額紙幣で十数貫」〔浅間大社奥宮〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月30日付)

「下山道第一 御殿場口今昔▽鉄道敷設から神調」〔供野佐吉〕〔勝又宗八〕〔佐藤与平治〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1922年=大正11年7月30日付) ▲▲

(『静岡新報』1922年=大正11年7月30日付)

「富士山の大賑▽休日で静穏だつた為」(『静岡新報』1922年=大正11年8月1日付)

夕刊) ←原紙中央部折れ曲がり、全文は読めない。

「富士山結霜す」(『静岡新報』1922年=大正11年8月2日付夕刊)

「富士裾野 国立公園候補地として踏査」(『静岡新報』1922年=大正11年8月2日付)

「富士裾野一帯が国立公園に適當=福島学士国府氏等が調査…最初の視察」〔福島嘉一郎〕〔国府犀東〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月2日付)

「富士絶頂で三七日の苦行▽旭を二つ出して見せると」〔田島停一〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月3日付夕刊) →「断食行者降参」(8月6日付夕刊)に続報。

「大宮駅前に地図入りの指導板」〔日本度量衡協会〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月4日付)

「登山者皆凍ゆ◇二日富士山激寒」(『静岡新報』1922年=大正11年8月4日付)

「四合以上富士暴風▽各室共満員」(『静岡新報』1922年=大正11年8月5日付)

「断食行者降参=命辛々下山す」〔田島停一〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月6日付夕刊)

「国立公園の候補申請 十四地方から」(『静岡新報』1922年=大正11年8月6日付)

「富士山は三十年来の晴▽六日登山者三千余」(『静岡新報』1922年=大正11年8月8日付夕刊)

「富士山で重傷▽岩石が落下し来り」〔御殿場口〕〔遭難〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月8日付)

「七歳少年が三回目の登山▽七日の富士山静穏」〔大坪尚文〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月9日付夕刊)

「伊豆を国立公園に=加入方申請書を提出す▽七日に田方郡下各町村長より」(『静岡新報』1922年=大正11年8月9日付夕刊)

「大宮紳士賭博=発覚し大宮署活動中」(『静岡新報』1922年=大正11年8月9日付)

「登山者減少す=富士登山末期に入り」(『静岡新報』1922年=大正11年8月10日付夕刊)

「富士山雲深し▽気温降下薄氷を見る」(『静岡新報』1922年=大正11年8月10日付)

「富士道路を喰ふ男=大宮署で捜索中」〔大宮口登山道〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月11日付夕刊) ▲▲

「熱海線隧道工事進捗=泉杵越越等掘鑿」〔泉越トンネル〕〔杵越トンネル〕〔伊豆山トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月11日付夕刊)

「富士山は寂寥◇巻石氏頂上の写生中」〔神楽巻石〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月12日付)

「富士頂上のマラソン=珍無類の競走」〔お鉢回り〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月14日付)

「国立公園地の調査 田村林学博士の一行=九日朝より 山梨の方が風光に富んで居る」〔ふじねむら〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月14日付)

「富士循環鉄道 近く委員上京 再び請願」〔富士山麓循環鉄道〕(『静岡新報』1922年=大正11年8月14日付)

2年＝大正11年8月17日付夕刊)

「此秋から大宮浅間＝本殿修理に着手」〔浅間大社〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月17日付夕刊)

「□富士と東京＝伝書鳩を飛ばせると」〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月18日付)

「御殿場口閑散◇登山者日に減少す」（『静岡新報』1922年＝大正11年8月18日付)

「六根清浄 花王石鹸」〔広告〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月18日付)

「六六老人登山◇他の登山者は殆ど皆無」〔高齢者登山〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月19日付夕刊)

「□京子の局下山＝十八日無事御殿場に」〔西京子〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月20日付)

「富士山の頂上へ無線電信機を装置◇所沢八日市間の連絡飛行◇此装置は今回最初の試み」〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月22日付)

「富士紅葉紹介」〔清重太郎〕〔秋山登山〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月22日付)

「富士山日報＝二十日」〔近衛歩兵〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月22日付)

「大岩石落下し八合目の石室▽屋根に大穴を穿つ」〔大宮口〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月23日付)

「富士山既に秋＝登山者は百名内外」（『静岡新報』1922年＝大正11年8月24日付)

「富士山頂の大暴れ＝拳大の岩石飛来して危険…避難者は余り多数ならず」〔台風〕〔電話不通〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月25日付夕刊)

「隧道三個崩壊す…富士身延の芝川十島間で 身延大野間の吊橋を流出」〔富士身延鉄道〕〔豪雨〕〔身延線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年8月27日付夕刊)

〔大正11年9月分欠落〕

●歴史文化『静岡新報 VOL.59 大正11年10月』

「吉原町民フン張ったり 如何にかして町政を挽回せんと」（『静岡新報』1922年＝大正11年10月1日付夕刊)

「富士山麓一大捜査▽得物更に無し＝引続き捜査中」〔大宮署〕〔賭博〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月1日付夕刊) →「岳麓を賭場とした千名近い博徒」（10月6日付) に続報。

「細雨煙る裾野を川口湖御安着 摂政宮殿下御機嫌麗しく 籠坂峠で雲の富士御賞覧」〔昭和天皇〕〔河口湖〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月4日付夕刊)

「砲六十門で総攻撃 五日演習終了」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月4日付夕刊)

「五湖御巡遊の皇太子殿下 秋の湖畔を御嘆賞」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月4日付)

「坑夫惨死◇土砂崩潰し◇逃遅れた為」〔伊豆山トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月4日付) 〔熱海線〕

「裾野に風穴を御探検遊ばされ 愈々御満足の態」〔昭和天皇〕〔富士風穴〕〔養蚕〕〔八達館〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月5日付)

「裾野演習幹部四日決定」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月5日付）

「□富士山降雪◇九合以上は真白」（『静岡新報』1922年＝大正11年10月6日）

「摂政宮御駐泊に付検病調査」〔昭和天皇〕〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月6日付）

「岳麓を賭場とした千名近い博徒＝最初はかく迄大仕掛とは知らず…今日までの逮捕百五十名 宛然たる公許大賭場」〔賭博〕〔大宮署〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月6日付）

「道岡知事岳麓踏査 富士山公園の道路視察の為」〔国立公園〕〔大宮口登山道〕〔道岡秀彦〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月7日付夕刊）▲▲

「道岡知事等 富士西麓踏査を終つて帰庁す」〔国立公園〕〔大宮口登山道〕〔道岡秀彦〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月8日付夕刊）▲▲

「裾野大演習と取締＝虎疫流行の際とて県官は特に繁忙を極めて居る それに要する費用三万円」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月11日付夕刊）

「裾野で飛行機墜落 プロペラと車輪大破す▽任務を終へて着陸の際」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月13日付夕刊）

「東宮殿下 御見学御予定 十五六日両日 陣地攻防演習の」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月14日付夕刊）

「攻撃開始の日 東宮御観戦 秋光霊峰に映じ御英姿を迎ふ」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月16日付）

「守備益々堅く攻略愈々峻烈 空中地上地下今や乱戦格闘」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月16日付）

「□岳麓結霜す◇富士山森林帯迄降雪」（『静岡新報』1922年＝大正11年10月17日付）

「朝靄を破つて壮烈な払暁戦 富士裾野の攻防演習終了」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月19日付夕刊）

「□五合迄降雪◇富士山十七日白し」（『静岡新報』1922年＝大正11年10月20日付）

「富士山大降雪＝八合目は四尺余り」〔熱海線〕〔泉越トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月21日付）

「坑内に瓦斯発生し五名は絶命し七名は人事不省となる 隧道崩落以来の惨事」〔熱海線〕〔泉越トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月24日付夕刊）→「坑内の毒瓦斯と其の原因判明」（10月25日付夕刊）、「泉越隧道工夫 十数名同盟罷業」（10月31日付）に続報。

「坑内の毒瓦斯と其の原因判明＝爆薬が箱内で自然爆焼…其泡煙が毒瓦斯となつて発散した為」〔熱海線〕〔泉越トンネル事故〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月25日付夕刊）

「裾野行 一 滝閑村」〔大宮新道〕〔北山本門寺〕〔人穴〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月29日付）▲▲

「丹那山鉄道工事 漸次進捗す」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1922年＝大正11年10月29日付）

2年＝大正11年10月30日付)

「裾野行 二 滝閑村」〔猪之頭〕〔麓〕〔根原〕(『静岡新報』1922年＝大正11年10月31日付) ▲▲

「泉越隧道工夫 十数名同盟罷業 死者の手当に冷淡だと憤慨して待遇改善を迫る」〔熱海線〕〔泉越トンネル事故〕〔東海道本線〕(『静岡朝報』大正11年10月31日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.60 大正11年11月～12月』

「裾野行 三 滝閑村」(根原) (本栖湖) (『静岡新報』1922年＝大正11年11月2日付) ▲▲

「裾野行 四 滝閑村」〔精進ホテル〕〔星野芳春〕〔青柳善■〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1922年＝大正11年11月3日付) ▲▲

「富士山麓猟況◇鳥類の繁殖頗る良好」(『静岡新報』1922年＝大正11年11月4日付)

「猟区＝岳麓一帯は国立禁猟区▽鯨ヶ池は禁猟地＝専有から村内の共有へ」(『静岡新報』1922年＝大正11年11月4日付) 一部▲▲

「裾野行 五 滝閑村」←原紙なし。

「裾野行 六 滝閑村」〔笈ヶ峠〕〔青木ヶ原〕〔富士軌道〕〔御料林〕〔駿甲国境問題〕〔国立公園〕〔富士山麓循環鉄道〕〔植林〕(『静岡新報』1922年＝大正11年11月7日付) ▲▲

「富士山麓振興会 富士郡下のお歴々が公園、鉄道促進の為」〔国立公園〕〔富士山麓環状鉄道〕(『静岡新報』1922年＝大正11年11月19日付) ▲▲

「鈴川大競馬会◇第二日目の優勝馬」(『静岡新報』1922年＝大正11年11月20日付)

「木炭売払入札 ……富士身延鉄道株式会社富士営業所」〔広告〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月2日付)

「熱海選丹那山東口の坑内にて爆薬爆発◇一名は惨死し二名重傷…数分間早く爆発した為」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月4日付)

「富士裾野が舞台 猛烈に発展の冬期の運動界◇二荒伯が御用命を承はつて瑞西製御乗用スキー七台 紳士学生共に意気込む」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月7日付)

「熱海線開通式 二十二日挙行」〔東海道本線〕〔小田原一真鶴間〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月16日付)

「御料スキー場たらん 滝ヶ原から六郎塚へ掛け富士の裾野賑はん」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月17日付)

「岩松から城砦発見＝富士山は日本史の第一歩▽土器石器を並べて吉田氏語る」〔吉田文俊〕〔アイヌ〕〔滝戸丘陵〕〔岩本山〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月19日付)

「籠坂峠をスキー場にしよう」と計画中」〔米山安治〕〔籠坂峠スキー場〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月21日付)

「初めて富士山へ登った外人は英国領事 六十三年前の万延元年に」〔オールコック〕〔ふじねむら〕(『静岡新報』1922年＝大正11年12月2日付夕刊)

■ 1923年＝大正12年

●歴史文化『静岡新報 VOL.61 大正12年1月～2月』〔大正12年1月のマイクロフィルムはかなりぼやぼやで、本文を読みとることができないところが多い〕

「須津村附近に国造の古墳を発見 柴田黒板博士の踏査▽近く■あるべし」（『静岡新報』1923年＝大正12年1月7日付夕刊）←〔マイクロフィルムぼやで本文読めず〕

「力行会員の富士登山 十二日■予定 何等消息なし」（『静岡新報』1923年＝大正12年1月12日付）←〔マイクロフィルムぼやで本文読めず〕

「大宮積雪三寸」（『静岡新報』1923年＝大正12年1月12日付）←〔マイクロフィルムぼやで本文読めず〕

「大宮浅間本殿改築」（『静岡新報』1923年＝大正12年1月18日付夕刊）←〔マイクロフィルムぼやで本文読めず〕

「富士山麓積雪◇身延線辛ふじて運転」〔根方軌道〕〔富士軌道〕〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1923年＝大正12年1月27日付）

「潤川より見たる富士」〔写真〕（『静岡新報』1923年＝大正12年1月30日付）

「零下十度余の富士裾野で五日から耐寒演習」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1923年＝大正12年2月4日付夕刊）

「沼湖河川枯渇し 水利争議勃発せる 富士山麓一帯は安政時代大地震当時と同一状態」〔水争い〕〔富士水電〕（『静岡新報』1923年＝大正12年2月13日付）

「富士山公園建議案上程 昨日の衆議院本会議」〔国立公園〕（『静岡新報』1923年＝大正12年2月23日付）

「大宮町の水利問題 尚紛擾を続けん」〔野中黒田用水〕（『静岡新報』1923年＝大正12年2月26日付）

「摂政宮昨日鈴川ゴルフ場へ」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年2月27日付）

「問題の水利争議 大宮署長の調停で解決」〔大宮町〕〔野中黒田用水〕（『静岡新報』1923年＝大正12年2月27日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.62 大正12年3月～4月』

「小学校新築問題から大宮に疑獄起らん 四日町民大会を開き数項の事案を決議す」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕（『静岡新報』1923年＝大正12年3月6日付）

「競馬法上程 其他大馬力で日程三十余件 衆議院本会議」（『静岡新報』1923年＝大正12年3月6日付）

「国立公園としての富士は風光と資格とで優等 其の選定が成つて俄に議会へ提出＝設備が整へば日本が世界第一＝第一候補地は七箇所」（『静岡新報』1923年＝大正12年3月6日付）

「外国の国立公園を調査研究した本田博士語る」〔本多精六〕（『静岡新報』1923年＝大正12年3月6日付）

「岳南競馬大会 第一日の優勝馬匹」〔長泉村岳南競馬場〕（『静岡新報』1923年＝大正12年3月6日付）

「濃厚となつた大宮疑獄事 六日郡長自ら出張調査」〔貴船小学校〕（『静岡新報』19

23年＝大正12年3月8日付)

「潤川 用水を禁止す 七日県令公布」〔潤井川〕〔腸チフス蔓延〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月9日付夕刊)

「盗伐山林の実地踏査 貴船学校問題は那边迄進展する」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕〔富士根村村山〕〔ふじねむら〕

「富士山公園 建議案可決」〔国立公園〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月10日付夕刊)

「紛糾裡の貴船校問題の真相(一) 永き積弊を剔抉すべく革新の烽火は挙げらる 暗影漲る大宮町政」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月11日付)

「紛糾裡の貴船校問題の真相(二) 永き積弊を剔抉すべく革新の烽火は挙げらる 暗影漲る大宮町政」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月12日付)

「紛糾裡の貴船校問題の真相(三) 永き積弊を剔抉すべく革新の烽火は挙げらる 暗影漲る大宮町政」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月13日付)

「国立公園は先づ富士山と日光を第一期の計画に」(『静岡新報』1923年＝大正12年3月13日付)

「大疑獄? 大宮に暗雲爨く 急転直下して」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月16日付)

「九里の難航路を約三時間 富士川逆流を福永飛行艇が」〔釜ヶ淵〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月16日付)

「他人の土地が何日の間にか大宮町有財産 其の間の経緯が頗るあいまいだ町当局に明答あらば敢えて聞かん」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月17日付)

「富士山麓に■る魔の手の一斉検挙 地方青年は勿論軍隊に及ぼさば由々しき恨事であるから此の際徹底的に駆逐する方針」〔御殿場口〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月21日付夕刊)

「予審が終結した鈴川駅の殺人事件」(『静岡新報』1923年＝大正12年3月29日付夕刊)

「全国大学生と陸軍 聯合の大演習 六月富士の裾野で決行 米国では盛んに実行中 石光師団長統裁判」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月30日付)

「愈々問題拡大せる貴船事件を中心に検事局活動を開始して町議五名を召喚取調ぶ」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕(『静岡新報』1923年＝大正12年3月30日付)

「大宮の橋本旅館へ賊 合計千円を窃取 遂に非常線突破」(『静岡新報』1923年＝大正12年4月2日付)

「大宮競馬大会」(『静岡新報』1923年＝大正12年4月3日付)

「大宮競馬会に紛擾が起つて」〔八百長疑惑〕(『静岡新報』1923年＝大正12年4月5日付)

「町民大会開催 大宮町政刷新会で」〔大宮疑獄〕〔貴船小学校〕（『静岡新報』1923年＝大正12年4月8日付）

「鈴川大競馬会 多数駿馬の出場ある筈」（『静岡新報』1923年＝大正12年4月8日付）

「須走に富士裾野公園 設置認可を申請」（『静岡新報』1923年＝大正12年4月9日付）〔王子ヶ池〕〔国立公園〕

「富士の裾野で初試験を行ふ無発動機飛行機 一時間に二十哩を上昇気流で安全に飛ぶ伊藤式グライダー 設計した矢野氏語る」（『静岡新報』1923年＝大正12年4月12日付夕刊）

「富士五湖調査 近藤博士が」（『静岡新報』1923年＝大正12年4月12日付）〔近藤仙太郎〕〔芦ノ湖水電〕

「大山祭と桜花」〔乗合馬車〕〔バス〕（『静岡新報』1923年＝大正12年4月13日付）

「鈴川大競馬会 東西より出場馬匹多し」（『静岡新報』1923年＝大正12年4月13日付）

「天子ヶ岳山麓に村有杉林 殖林中で年収廿年後は廿万円 使途は考究中」〔白糸村〕〔植林〕（『静岡新報』1923年＝大正12年4月15日付）

「登山客の争奪 起らんとする形勢あり」〔富士根村〕〔村山古道〕〔ふじねそん〕（『静岡新報』1923年＝大正12年4月29日付）▲▲

「富士山麓共有地 管理を区分し林野開発に決定 町村財政も大助かり」〔印野村〕〔入会地〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1923年＝大正12年4月30日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.63 大正12年5月～6月』

「裾野公園開園 四日盛大に挙行した」〔大蛇ヶ池〕〔富士裾野公園〕（『静岡新報』1923年＝大正12年5月6日付）

「大宮方面の登山準備 本年は山麓探勝者が激増の見込」〔大宮口〕〔国立公園〕〔富士五湖〕（『静岡新報』1923年＝大正12年5月19日付）▲▲

「白糸滝の藤 滝壺へはボートの計画」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1923年＝大正12年5月19日付）

「取調の進行で森林賭博の端緒を得よう」〔村山浅間神社〕〔ふじねむら〕（『静岡新報』1923年＝大正12年6月6日付）

「富士宝永山に大崩れが出来て登山が危険な為め近く県から技手を出張させる 此頃に届いた情報」〔御殿場口〕（『静岡新報』1923年＝大正12年6月17日付）

「大宮分署員は不眠不休の活動 十四日夜半博徒十一名逮捕 変装巡查二名重軽傷を負ふ之に端緒を得た結果」〔賭博〕〔富丘村〕（『静岡新報』1923年＝大正12年6月17日付夕刊）

「東宮殿下が富士御登山 来月下旬御決行」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年6月17日付）

「無発動機飛行機 富士の裾野で大蔵飛行士が飛翔する日本では最初の試み」〔グライダー〕（『静岡新報』1923年＝大正12年6月19日付）

「東宮富士御登山は疑問 何分危険が伴ふから」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年

＝大正 12 年 6 月 20 日付)

「摂政宮殿下富士御登山の壮挙 万一ご確定となれば大宮表口よりと熱望」〔昭和天皇〕
〔大宮新道〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 22 日付夕刊)

「富士郡地方河川増水 田子消の波浪丈余」〔田子の浦〕〔高浪?〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 24 日付)

「摂政宮殿下の御登山は大宮口と御確定遊ばされるよう 熱望切りなる地方民代表者は各方面に陳情」〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 26 日付)

「各方面で準備中の富士登山期迫る 表口大宮の各施設を改善 従来の悪弊を一掃すべく一ヶ月遅れた初登山」〔大宮新道〕〔大宮自治青年団〕〔客引き〕〔馬丁〕〔強力〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 27 日付夕刊) ▲▲

「東宮御登山須走口から 七月十五日から八月五日迄の間」〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 27 日付)

「増水で遭難した富士川の椿事 巨岩に衝突船体破壊し廿四名濁流に押流さる 不明の三氏は屍体となつて漂着す」 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 27 日付)

「富士桜満開 須走口三合目の森林帯」〔フジザクラ〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 27 日付)

「地元の栄枯に係はる一と御殿場口地元民の熱誠」〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 28 日付)

「田子浦の禁猟区へは鶴が飛んで来た 鳥類を愛護せよと懸命になつた保安課の係り」〔ツル〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 28 日付)

「摂政宮殿下の御登山は御中止 七月五日東京御発 各所御所へ避暑の御旅行 御居間の御手入で九月頃還啓」〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 30 日付)

「摂政殿下富士御登山愈よご決行 七月二十日前後を期し葉山御用邸御滞在中に」〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 30 日付)

「殿下御登山に関し知事上京 宮内省の方針聴取」〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 6 月 30 日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.64 大正 12 年 7 月 1 日～8 月 15 日』

「少年団登山 摂政宮御警衛の為」〔静岡市少年団〕〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 7 月 1 日付夕刊)

「富士開山祭と田植祭を執行 七日大宮浅間社で」〔浅間大社〕〔お田植祭〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 7 月 1 日付夕刊)

「須走御殿場の両登山口修繕 十五日から電話開通」〔昭和天皇〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 7 月 1 日付)

「大自然を味ふべき夏の登山を推賞す 登山に就ての注意の数々(上) 榎有恒氏談」 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 7 月 3 日付夕刊)

「山岳跋涉と其の精神と注意すべき事ども」 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 7 月 3 日付夕刊)

「高潔 抜群 花王石鹼」〔富士山カットの広告〕 (『静岡新報』 1923 年＝大正 12 年 7 月 3 日付夕刊)

「頼朝が奥州産馬を年々に愛鷹山へ放牧した関係で 駿逸の駿東郡産馬 生存者森藤七郎

翁語る」〔愛鷹牧〕〔植松家〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月4日付）▲▲

「大宮登山電話 十一日から一般に通話」〔大宮新道〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月4日付）

「摂政宮殿下富士御登山は未定 御決行あるも御微行で 御日程などは公表せぬ」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月5日付夕刊）

「殿下御登山と奉送迎準備 富士八合眼以上は大宮の地積の為」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月5日付夕刊）

「大宮表口を中心に富士国立公園 遊覧設備着々進捗 避暑地と温泉と春は桜 秋は紅葉の遊園地とを近く実現せん」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月5日付夕刊）

「大自然を味ふべき夏の登山を推奨す 登山に就ての注意の数々（下）楨有恒氏談」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月5日付夕刊）

「御殿場口の開山式」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月6日付）

「三島聯隊の難路行軍 二方面に分ちて」〔籠坂峠〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月6日付）

「大宮口の初登山者 未だ各方面には雪が積んで居る」〔深沢弥作〕〔積雪〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月7日付夕刊）

「大宮紛乱逆転す 門齋氏のダゝ」〔大宮町〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月7日付）

「大宮口の新登山道 欠巢畑から二合目迄の間に迂回はするが道はよい 電話も復旧した」〔大宮新道迂回路〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月7日付）▲▲

「摂政殿下 御登山を控へ 須走口の葛藤」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月9日付）

「水泳と登山 静岡師範学校生徒 袖師と富士へ」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月10日付）

「登山の準備は各方面共整ふ 愈よ十一日開業」〔富士山表大宮口〕〔悪王子神社〕〔登山馬馬体検査〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月10日付）

「摂政宮御登山は二十五六日頃 県と地方民は夫々奉迎準備中」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月11日付夕刊）

「摂政宮殿下御登山御日取り来る二十一日と御決定」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月12日付夕刊）

「宗教法案成行 楽観を許さず」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月12日付）

「御登山道下検分 土木課長等が」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月12日付）

「富士循環鉄道促進協議会」〔富士山麓循環鉄道〕〔志村源太郎〕〔根津嘉一郎〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月12日付）

「大宮青年団員盛んに活動す 登山者に便宜を与へんと」〔大宮自治青年団〕〔大宮町青年団〕〔富士登山者案内所〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月12日付）▲▲

「須走口初登山 積雪尺余 十数年来未曾有事」〔角田鶴松〕〔一ノ瀬久吉〕〔新井武〕〔残雪〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月12日付）

「濃霧と強風中 静師登山 奥宮の開山祭 電話も開通す」〔郵便局〕〔静岡師範〕（『静岡

岡新報』1923年＝大正12年7月13日付夕刊)

「富士裾野に棲息の鳥類 本年は蕃殖が頗る良い 長谷川技手が調査した結果」(『静岡新報』1923年＝大正12年7月13日付夕刊)

「御登山と御道筋検分 御警衛費二万円は県参事会へ提案」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月13日付)

「御登山を奉迎する須走口の各種設備着々竣成 西園寺式部官一行 本日早朝から愈よ下検分を 高山植物の御説明」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月13日付)

「相当身分らしき富士山上の変死体 金剛杖を枕に登山の旅装で 開山前に単身登つたらし」〔遭難〕〔雪中登山〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月14日付夕刊) → 「黒い木乃伊の様な山上の凍死体は」(7月15日付夕刊)、「富士山の屍体」(7月17日付)、「凍死屍体」(7月18日付)、「富士山の死体」(7月19日付)に続報。

「十二日の富士登山者 本県への報告」(『静岡新報』1923年＝大正12年7月14日付夕刊)

「殿下御登山は二十七日と御決定 御差支の場合は三十日」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月14日付)

「御登山道検分を終へて県官一行帰庁」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月15日付夕刊)

「黒い木乃伊の様な山上の凍死体東京芝白銀三光町の者か」〔遭難〕〔雪中登山〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月15日付夕刊)

「十三日の富士登山 式部官一行下検分〔昭和天皇〕」(『静岡新報』1923年＝大正12年7月15日付夕刊)

「殿下御登山は来廿六、七、八日の内 天候不良ならば八月に御変更」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月15日付)

「気温は三十度 十三日正午富士山頂」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月15日付)

「葦中 山岳踏破 五湖巡りもする」〔葦山中学校山岳部〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月15日付)

「浮島沼の汎濫は等閑に附す能はざる事にて村民の死活問題 五十余町歩の稲株は腐敗放任せば収穫皆無」〔神谷川の土砂〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月15日付)

「山岳旅行 高等学校旅行部 其他運動計画」〔静岡高等学校〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月17日付夕刊)

「富士山中で重傷を負ふ 石に躓つて」〔遭難〕〔須走口〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月17日付夕刊)

「十五日の富士登山 女が多くなつた」〔女性登山〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月17日付夕刊)

「富士山の屍体 役場が引取らぬので」〔遭難〕〔雪中登山〕〔山田清次郎〕(『静岡新報』1923年＝大正12年7月17日付)

「十五日の富士 山上正午の気温卅五度」(『静岡新報』1923年＝大正12年7月17

日付)

「大宮町は山上で殿下奉迎設備 従来の経緯は此際打破す」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月18日付夕刊)

「蛇の予知 的中する洪水」(『静岡新報』1923年=大正12年7月18日付) ▲▲

「凍死屍体 十六日引降した身許漸く判明」〔遭難〕〔雪中登山〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月18日付) ▲▲

「チト妙な事だが其御祈祷で天候が恢復すれば頗る結構」〔日乞い〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月18日付) ▲▲ ←本文中に天子ヶ岳の《インラクツ、ジ》=ヨウラクツツジが出てくるが、実際に生えているのはサラサドウダンの古木。ここに出てくる風習は『伝説富士物語』(小長谷宗芳著・発行、昭和27年)にも詳しく載っていて《瓔珞躑躅》と記載されている。往時は両者の分類上の区別はなかったのかもしれない。

「十六日の富士登山 頂上は未だ寒い」(『静岡新報』1923年=大正12年7月18日付)

「殿下御登山は廿八日ご決行 御下山は御殿場口 藤田署長検分登山 殊の外お鉢廻りに御趣味を」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月19日付夕刊)

「機械薬品を携へ富士山頂で山岳病実験をする済生会病院 耳鼻咽喉科の深浦医師」〔高山病〕〔深浦文夫〕〔中央气象台〕〔築地宣雄〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月19日付夕刊) →「富士山上で行つた山岳病実験の成功」(7月25日付)、「山酔実験」(7月27日付)、「山岳病の本態」(8月8日付)に続報。

「早稲田学生軍事教育 富士裾野で暑休に」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月19日付夕刊)

「富士山の死体 引取に来た実母の話」〔遭難〕〔雪中登山〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月19日付)

「富士日報 十七日=風雨の為め少数」(『静岡新報』1923年=大正12年7月19日付)

「大宮町の御登山歓迎 昨日委員会を開き 大体方針決定」(『静岡新報』1923年=大正12年7月20日付夕刊)

「富士御登山後 摂政宮殿下奈那須野へ行啓 松方公農場御成中 乃木神社其他へも」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月20日付夕刊)

「四十日間も降り続いた梅雨が愈よ明けた」〔梅雨明け〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月20日付夕刊)

「富士日報 十八日=晴 頂上気温三十三度」(『静岡新報』1923年=大正12年7月20日付) ▲▲

「量は少くとも使命は山より重く用途は海より広い 味の素」〔広告〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月20日付)

「摂政宮殿下富士御登山は 十三年前学習院御在学当時の御企であつたが御中止となり今夏御決行」〔昭和天皇〕〔須走口〕〔大米谷〕〔皇族登山〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月21日付夕刊) ▲▲→東久邇宮の富士登山については明治42年7月21、23日付)に記事あり。

「百五十名揃の乗馬 予想される壮観 摂政御登山の順序は左の如く略々決定す」〔昭和

天皇〕〔騎馬登山〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月21日付夕刊）▲▲

「富士日報 十九日＝頂上は濃霧」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月21日付夕刊）一部▲▲

「沼津高女登山 団員十七名出発」〔須走口〕〔米山旅館〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月21日付）

「二三日経てば土用らしい暑さがやつて来る」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月22日付夕刊）

「富士日報 廿日＝晴と濃霧 御登山の準備」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月22日付夕刊）

「摂政殿下御登山に関し高橋氏来県す 御警衛事務打合の為」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月22日付）

「天候快復暑気加はり江尻と袖師の海水浴場は陸も海も人で埋る」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月22日付）

「七月廿二日廿三日廿四日 富士山頂クラブ齒磨デー」〔広告〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月22日付）

「須走口に於ける摂政殿下奉迎門（将に竣工せんとする）」〔昭和天皇〕〔写真〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月23日付）

「行方不明を伝えられた三学生頂上を極め二十一日何れも無事帰宅した 大宮警察分署の大捜索」〔遭難〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月23日付）▲▲

「殿下御登山の歓迎準備成る 当日山上で拝観の光栄に浴せんとするもの非常に多く現在の登山者は例年より激減す」〔昭和天皇〕〔奥宮〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月24日付夕刊）一部▲▲

「殿下御登山の御日取御確定 二十六日葉山御発 廿七日早朝御登攀 廿八日逗子着 御用邸還啓」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月24日付）

「クラブ齒磨富士登山招待会」〔広告〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月24日付）

「殿下の御馬術は非常に御巧妙 御八歳の折既に御熟練 今回の御登山懸念ないと主馬寮の川村調馬師は語る」〔昭和天皇〕〔騎馬登山〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月25日付夕刊）▲▲

「山上から軍用鳩を放つて御通信を 係大尉けふ登山」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月25日付夕刊）

「全郡を挙げて殿下を奉迎す 赤誠罩むる富士郡民各種団体代表者登山 藤田大宮署長お鉢廻先駆」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月25日付夕刊）

「富士御登山と本県護衛掛官警官三百四十余名は廿四日先発した」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月25日付夕刊）

「富士山上で行った山岳病実験の成功 従来気圧の関係と言はれたが生理学的に耳との関係も深い 実際の第一歩に入った」〔高山病〕〔深浦文夫〕〔中央气象台〕〔築地宣雄〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月25日付夕刊）

「摂政殿下富士御登山中の御休憩所＝写真下より須走口一合目、同三合目、同六合目、同九合目の久須志神社」〔昭和天皇〕〔写真〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月

25 日付)

「殿下御登山の準備に郡長登山」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月

25 日付)

「摂政宮殿下の御召馬」〔写真〕〔昭和天皇〕〔勝又右京〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月26日付夕刊) ▲▲

「富士日報 廿四日ー頂上は濃霧」(『静岡新報』1923年=大正12年7月26日付夕刊)

「ス博士登山 三回目の富士登山へ」〔スタール博士〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月26日付)

「此暑さは極めて順調の天候で殿下の御下山迄は純粋な夏の調子だ」(『静岡新報』1923年=大正12年7月26日付)

「宮内省から殿下御登山の先発隊頂上到着 久須師神社で諸般の打合せ 富士は頗る静穩」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付夕刊)

「御登山を待奉る風雨の跡も認めぬ快晴の富士 奉迎の準備悉く整ふ 数度の光栄に民衆の感激 廿六日 松井生」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付夕刊)

「富士五湖の大減水 神奈川山梨両県で調査 近藤博士等現場へ急行 地殻の収縮か」(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付夕刊)

「美しい女馬士 行啓前の富士山」〔登山馬〕〔昭和天皇〕〔須走口〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付夕刊) ▲▲

「愈々御登山遊ばさるゝ摂政殿下御着」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付)

「摂政殿下と富士に全景」〔昭和天皇〕〔写真〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付)

「山酔実験 自分から酔って研究下山した」〔高山病〕〔深浦文雄〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付)

「廿六日午後四時間で拝観登山者の数は千五百名 大宮口だけで」(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付)

「富士山天候観測 けふも快晴 沼津測候所発表」(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付)

「富士山便り 大宮口廿五日」(『静岡新報』1923年=大正12年7月27日付)

「御壮図を祝し奉りて協議に入り休憩 団長会議」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月28日付夕刊)

「摂政殿下に扈従せる富士登山隊(三合目と四合目間)」〔写真〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月28日付夕刊)

「玉穂村中畑なる瑞雲楼の御一夜 テニスの猛練習を遊ばされ御入浴後は種々の御物語り鹿の剥製に御感慨」(『静岡新報』1923年=大正12年7月28日付夕刊)〔昭和天皇〕

「殿下は御軽装にて登山の途に就かせらる 壯観無比の登山隊 山上の天気は頗る静穩殿下日和とも申す可か」〔騎馬登山〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年7月28日付夕刊) ▲▲

「頗る御元気 珍田東宮職語る」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月28日付夕刊）

「八合目より御徒歩にて無事頂上御着 劔ヶ峰方面を御撮影 六合目にては伝書鳩を放たる 頂上にて松井特派員」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月28日付夕刊）▲▲

「山上の天候 廿六日午後八時二十分（富士山頂中央気象台国分技師発）」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月28日付夕刊）

「御殿場より樺山伯別邸に向はせらるゝ摂政殿下」〔昭和天皇〕〔写真〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月28日付）

「摂政殿下御恙なく富岳を御踏破 伝書鳩にて両陛下の御機嫌奉伺 驚く許りの御健脚にて下山の途に就かせらる」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月28日付）▲▲

「大宮町有志三百奉迎 御会釈を給はる」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月28日付）

「◇富士山 小笠心経者」〔自動車登山〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月29日付夕刊）

「富士御登攀の摂政殿下（五合目にて拝写）」お口を取れるは名馬の主勝又右京氏」〔写真〕〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月29日付夕刊）

「富岳の御踏破に些かの御疲労なく還啓遊ばさる 山荘も一夜は種々の御物語 扈從者殿下の御健脚に驚く 葉山御用邸へ 御殿場にて松井生」〔昭和天皇〕〔雪崩〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月29日付夕刊）一部▲▲

「御機嫌麗はしく 御発車」（『静岡新報』1923年＝大正12年7月29日付夕刊）

「◇富士山 小笠心経者」〔人工施設に苦言〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月29日付「噴火口」）

「青年団会議を開いて殿下に賀表を奉呈 道岡聯合会長の名を以て お喜ばされたと拝承」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月29日付）

「富士で発狂 行方不明となり 恩不知■ある」〔遭難〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月29日付）▲▲

「摂政宮殿下御殿場御仮泊の日 社会主義者が入込む 知事警察官の狼狽」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月30日付）

「五湖めぐりから帰つて――静岡高女 入江教諭語る」〔富士五湖〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月30日付）

「静岡少年団富士登山 三十日帰岡の予定」〔須走口〕（『静岡新報』1923年＝大正12年7月30日付）

「摂政殿下の跡を慕ひ三十日の富士は開山以来の登山者」〔昭和天皇〕〔登山状況〕〔御殿場口〕〔須走口〕（『静岡新報』1923年＝大正12年8月1日付夕刊）

「芝中学校生 富士山の頂上で行方不明」〔遭難〕（『静岡新報』1923年＝大正12年8月1日付夕刊）▲▲

「御健脚を偲び奉りて（上）霊峰富士の御踏破に成功あらせられた摂政宮殿下 本県に対して多謝するとの御ことば 湖舟生」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1923年＝大正12

年8月1日付)

「登山の帰途に 興津で溺死した愛知の男」(『静岡新報』1923年=大正12年8月1日付)

「御健脚を偲び奉りて(中) 霊峰富士の御踏破に成功あらせられた摂政宮殿下 本県に対して多謝するとの御言葉 湖舟生」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月2日付)

「撮影中女優墜落重傷 富士山で一昨日」〔酒井よね子〕〔映画撮影〕〔遭難〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月2日付) ▲▲

「◇富士の頂上に於ける摂政殿下の御英姿(先登より二番目)」〔写真〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月3日付)

「御健脚を偲び奉りて(下) 霊峰富士の御踏破に成功あらせられた摂政宮殿下 本県に対して多謝するとの御言葉 湖舟生」〔昭和天皇〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月3日付)

「富士日報 一日一晴れ」(『静岡新報』1923年=大正12年8月3日付)

「滝ヶ原野営会 参加する小笠聯合青年」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月3日付)

「殿下よりの御下賜金 図書館の基本金に」〔昭和天皇〕〔大宮町〕〔浅間大社〕〔富士宮市立図書館〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月4日付)

「富士山で頓死 心臓麻痺を起し」〔遭難〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月4日付)

「御殿場在には諸名士が避暑 最近川上代表も」〔川上俊彦〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月4日付)

「富士山中の物価余り高くは無い 投書が頻繁に舞込むので当局で取調べた結果」(『静岡新報』1923年=大正12年8月4日付) ▲▲

「剛健登山団員 百五十余名八日出発」〔変わり種登山〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月4日付)

「登山者に変装し横暴自動車膺懲 不正商人をも同時に取締つて 従来の弊風を打破する方針」〔登山バス〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月5日付) ▲▲

「邦彦王 富士御登山 七日須走口から」〔皇族登山〕〔須走口〕〔山内営業組合〕〔高相亦吉〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月6日付)

「川上さんが子供に誘はれ富士登山と奮発 日露交渉のケリが漸くついたので 宮川通訳もお供と決る」〔川上俊彦〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月6日付)

「銀行員が富士で消える 二十九日以来消息なし」〔山崎藤重〕〔遭難〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月6日付)

「山岳病の本態 富士の頂上で研究 明にされたのは至極結構 済生病院深浦学士の手で近く学会に発表」〔高山病〕〔深浦文雄〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月8日付)

「富士日報 無風快晴 登山者激減す」(『静岡新報』1923年=大正12年8月9日付)

「邦久王殿下富士御登山 九日須走口から 無事に御下山」〔皇族登山〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月10日付)

「富士日報 二合目は驟雨 頂上気温四十六度」(『静岡新報』1923年=大正12年8月10日付)

「熱海線泉越 難工事進捗 明年六月迄には竣工する予定」〔泉越トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月15日付夕刊)

「富士登山するお札博士」〔スタール博士〕〔須走口〕〔偕楽園〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月15日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.65 大正12年8月16日～9月30日』

「飛行の実用化 山岳横断飛行の壮挙」〔日本飛行学校〕〔空中富士登山〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月16日付)

「秩父宮殿下 夜富士御登山 頗る御元気に御鉢廻りから剣ヶ峰御踏破」〔皇族登山〕〔東富士演習場〕〔夜間登山〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月21日付夕刊)

「軍事研究団射撃演習 九月一日から富士裾野で」〔早稲田大学軍事研究団〕〔軍事演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1923年=大正12年8月29日付)

「激震の被害惨憺たり 日本中部を襲ふた未曾有の地震は東京横浜其他を遂に破壊し全滅し去つた」〔関東大震災〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付)

「小山惨害詳報 紡績工場一より四迄倒壊 男女工五千余逃げ惑ひ 一千余名遂に惨死す」〔関東大震災〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付) ▲▲

「惨憺たる御殿場 附近村落も亦被害甚大」〔関東大震災〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付) ▲▲

「熱海伊東消息不明 被害激甚の様相あるも」〔関東大震災〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付)

「貨車隧道で立往生 乗務員の生死は詳はらず」〔関東大震災〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付) →関東大震災による御殿場線の被害状況については、藤井良晃著「山北・鉄道盛衰史」(『足柄の文化』第11号、1976年11月、山北町地方史研究会)などを参照。

「箱根は山海嘯で大家屋倒壊全滅せり」〔関東大震災〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付)

「御殿場駅倒壊」〔関東大震災〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付)

「小山町全滅」〔関東大震災〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月3日付)

「全滅した箱根 戸塚町も過半数焼失し富士屋外二三軒はは無事 小田原で女工三百余名即死」〔関東大震災〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月4日付)

「国府津沼津間を突破してきた線路工夫が途中の惨害を物語る」〔関東大震災〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月4日付) ▲▲

←関東大震災による山北駅付近の被害と復旧状況については「大震災の被害」(『足柄乃文化』第11号、1976年11月、山北町地方史研究会所収)などに詳しい。

「箱根隧道現場 線路橋脚等原形なし(大森特派員)」〔関東大震災〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月4日付)

「単線ながら鉄道 御殿場まで開通 駿河小山間は案外早からう」〔関東大震災〕〔御殿場線〕(『静岡新報』1923年=大正12年9月5日付夕刊)

「列車海中に墜落死者不明」〔関東大震災〕〔東海道線〕〔根府川駅〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月6日付夕刊）←この事故については「根府川の惨害」（『西さがみ地震』播磨晃一編、西さがみ庶民史録の会発行、1995年所収）に詳しい。

「富士郡下各地」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月6日付夕刊）
▲▲

「伊豆東海岸の惨害 特に甚大な伊東町 戦慄すべき幾多の事実が展開される」〔関東大震災〕〔海嘯〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月6日付）

「休止状態であつた三原山の神火 濛々として天に押し大島の存在説は確か 惨たる伊東町」〔関東大震災〕〔海嘯〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月6日付）

「県道漸く開通 御殿場小山間」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月7日付夕刊）

「六日朝刊発売禁止」〔関東大震災〕〔社告〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月7日付夕刊） ▲▲

「震源地は大島と熱海の間で東京より九里の地点」（『静岡新報』1923年＝大正12年9月7日付）

「一丈余高くなつた伊豆熱海町の初島 倒潰家屋三十四、死者一」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月8日付夕刊）

「御殿場駅前に救護所設置」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月8日付夕刊）

「富士の五合目で大地震に遭ふ 幾百噸の岩石が手鞠の如く 石室は第一震で脆くも崩潰大爆発と思つた」〔関東大震災〕〔御殿場口〕〔アレクサンダー〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月10日付附録） ▲▲

「東海道線中の難工事 駿河と山北間 三輪所長自ら指揮し 結局爆発工事か」〔御殿場線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月13日付）

「震源地は依然相模灘 大嶋と初嶋との中間 熱海の東方七里半で 相模灘も最深の位置」（『静岡新報』1923年＝大正12年9月13日付）

「小川理学博士踏査の結果 初島の隆起は事実 今回の地震が造山性である確かな証左 元禄の地震と同一性に属す」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月16日付）

「富士山は到る所 山崩れがして容姿が變つた 全山石室何れも全滅」〔関東大震災〕〔浅間大社〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月16日付） ▲▲

「静岡運事の発表した現在鉄道不通区間 崩れた隧道附近はけふ午後復旧の見込」〔関東大震災〕〔御殿場線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月16日付） →一部 ▲▲

「富士山で地震に遭遇した米国婦人連の話」〔関東大震災〕〔アレクサンダー〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月17日付） ▲▲

「神奈川県当局は曰く 横浜は三尺低下」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月19日付）

「活動した義勇警察隊 熱海と伊豆山警護の為に 久保田氏同地の惨状を語る」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月19日付） ▲▲

「上り下りの多くの旅人で旧東海道大賑ひ 避難者は何れも震火災より箱根越しの苦を語

る」〔関東大震災〕〔旧東海道〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月19日付）

「一般旅客を乗せて 芝浦清水間連絡 関釜連絡船を廻航させて 廿一日から開始」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月20日付夕刊）

「富士山頂成就ヶ岳には噴穴を生ず」〔関東大震災〕〔噴火〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月20日付夕刊） ▲▲

「東京沼津間約十時間 明日から開通の東海道線」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月21日付夕刊）

「御殿場小山と惨害のあとを 災後既に二旬を経ても当時の惨状はそのまま 御殿場にて 一松井生」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月21日付）

「見込なしと伝えられた熱海線は案外早く 全線開通の見込み」〔関東大震災〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月21日付）

「盛んに水蒸気を噴出して居る成就ヶ岳」〔関東大震災〕〔噴火〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月21日付） ▲▲

「地盤大変動図 大地震で隆起した所と陥没した所」〔地図〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月21日付）

「全滅に近き北郷村の復旧は到底覚束なし 沼津聯合軍人分界活動」〔関東大震災〕〔北郷村〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月21日付）

「熱海線開通は一年後か」〔関東大震災〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月23日付）

「富士在郷兵 震災地へ向ふ」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月23日付）〔関東大震災〕

「昨年より早き富士初雪」（『静岡新報』1923年＝大正12年9月27日付夕刊）

「被害最も甚だしき熱海線の工事 完成は更に三四年遅れて大正二十二三頃ならん」〔関東大震災〕〔東海道線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年9月30日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.66 [大正12年10月1日～11月15日]』

「御殿場駅に溢れて夜寒に泣く避難民 青年団が奔走して町家を開放席料一人十銭」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月2日付夕刊）

「五日迄には馬入川西岸まで単線運転が出来る 御殿場以東四往復が五往復に 馬入川も廿一日には開通」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月2日付夕刊）

「大宮町政の敵 望月前町長其他の背任罪 検事の取調べは著々進行 彼等の傍若無人」（『静岡新報』1923年＝大正12年10月2日付夕刊）

「大宮町政の敵 望月前町長其他の背任罪 検事の取調べは着々進行 彼等の傍若無人」（『静岡新報』1923年＝大正12年10月3日付夕刊）

「駿東郡の平和な村へ野猪の大群来襲す 震災で箱根山を追はれ続々とやって来る 一村を挙げて大巻狩」〔イノシシ〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月3日付夕刊）

「大宮町政の敵 望月前町長其他の背任罪 検事の取調べは着々進行 彼等の傍若無人」（『静岡新報』1923年＝大正12年10月4日付夕刊）

「谷峨山北間が開通し馬入川西岸まで単線運転 馬入仮橋に全力を集中」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月4日付夕刊）

「四日真夜中の強震で箱根トンネル又崩潰 単線開通は十日に予定変更 馬入の仮橋は見

込み立たず」〔御殿場線〕〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月5日付夕刊）

「今度の震源地は相模洋方面か 県下には殆んど被害なし 時計の振子が止まった位」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月5日付夕刊）

「神戸の鈴木商店が出資して富士山を中心に一大遊園地を現出す可く山麓の各村が合同計画す」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月5日付夕刊）

「夜半零時五十七分 激震来襲す 去月二十六日のと同程度で 震動の範囲は相当に広い」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月5日付夕刊）

「今度の震源地は 相模洋方面か 県下には殆んど被害なし 時計の振子が止まった位」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月5日付夕刊）

「物凄く箱根の連山が唸り出すと共に 強烈な震動が御殿場小山方面に 電灯は消へて暗黒界」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月5日付夕刊）

「世界の誤伝を解くために 震害後最初の登山 体育協会の富士山踏査」〔富士山爆発〕〔富士山崩壊〕〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月6日付）▲▲

「大宮町 町民大会 八日役場裏で」〔大宮町政の敵〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月7日付）

「山北谷峨間 十日開通と同時に十列車を 運転時間大改正」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月8日付）

「山梨県の地蜂が逃げたり富士五湖の減水は大地震の前兆」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月10日付）

「大宮町民大会開催 一部横暴町会議員糾弾 左の申合せを決議した」〔大宮町政の敵〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月13日付）

「八ヶ岳山中の大亀裂 京都帝大本間学士来県 十九日より調査に着手 爆発の虞れあり」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月20日付）

「東京へ行くには 現在の汽車より 船の方が得策」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月20日付）

「単に地スベリのみでなく富士火山脈の活動 ジャーサー地震学博踏査の結果 富士附近に完全な観測所が急務」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月21日付夕刊）

「お膝元では問題にせぬが 米国の学術雑誌に載つた大森博士予言 不幸に的中した関東」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月21日付夕刊）

「山北東京間が開通 二十日に試運転を行ひ 二十一日から単線運転 不通の個所は谷峨山北間」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月21日付夕刊）

「熱海線復旧は案外早からう」〔東海道本線〕〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月23日付）

「崩壊や亀裂を生じても壮年期を過ぎた富士山が噴火する事は先づないと今村地震学博士語る」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月24日付夕刊）

「山北東京間愈開通 東京静岡間に要した十時間七時間に短縮」〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年10月26日付）

「東海道本線とする熱海線の工事は断固中止せぬ 単に温泉客の便宜などを図る目的でな

いと当局談」（『静岡新報』1923年＝大正12年11月5日付）

「震後一段重要を加へた富士甲府鉄速成 関係大臣へ建議」〔身延線〕〔関東大震災〕（『静岡新報』1923年＝大正12年11月10日付）

「熱海線一部抛棄 線路を更に変更」〔東海道本線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年11月10日付）

「熱海線の一部 十五日から運転 当分早川駅まで」〔東海道本線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年11月13日付）

「岳麓の野鼠 一斉駆除」〔野ネズミ〕（『静岡新報』1923年＝大正12年11月13日付）

「甲府富士鉄速成建議書」〔身延線〕（『静岡新報』1923年＝大正12年11月14日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.67〔大正12年11月17日～12月30日〕』

「岳麓結氷す」（『静岡新報』1923年＝大正12年11月17日付夕刊）

「浮島沼の干拓 調査の結果有望」（『静岡新報』1923年＝大正12年11月28日付夕刊）

「白糸の紅葉」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1923年＝大正12年12月9日付）

「鈴川競馬大会 八日から開始」（『静岡新報』1923年＝大正12年12月9日付）

「小山青年雪中登山 元旦の壮挙」（『静岡新報』1923年＝大正12年12月14日付夕刊） ▲▲

「白糸の名滝 放流口が崩壊し原形を失す 原因は大震の亀裂」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1923年＝大正12年12月20日付夕刊）

「浅間に在はす此花咲耶姫 今年の御縁持ちが三十組」（『静岡新報』1923年＝大正12年12月20日付「斯くて歳は逝く（六）」）

「崩れ落ちた白糸の女滝 滝壺が埋まつた 丘が出来た」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1923年＝大正12年12月22日付夕刊）

「白糸の女滝は崩壊前日閉水 依然死濁つゞく」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1923年＝大正12年12月23日付夕刊）

「大宮町役場内に盗難被害被々 廿日には賞品を盗まる」（『静岡新報』1923年＝大正12年12月23日付夕刊）

■1924年＝大正13年

●歴史文化『静岡新報 Vol.68〔大正13年1月1日～2月15日〕』

「寒中登山 六合目以上は登れず」〔神道修成派木花講〕〔村石伊之助〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月10日付夕刊）

「富士の登山道 地震で潰滅」〔関東大震災〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月13日付） ▲▲

「難工事を続く丹那山隧道 一日八尺位の工程」〔熱海線〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月15日付）

「富士根で水道を 衛生施設の」〔ふじねむら〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月15日付）

「西相模を中心に今暁又復大震」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1924年＝大正13

年1月16日付夕刊)

「鉄道の被害甚大 転覆脱線と隧道の崩壊 上下線共不通」〔関東大震災余震〕〔御殿場線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月16日付夕刊）

「崩壊した白糸滝 関係村で近く復旧工事」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月18日付夕刊）

「地震でアハて 女工卅名火傷 十五日朝絹糸紡で」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月18日付夕刊）

「震災地を探ね松田から伊勢原へ 魔の丹沢山は斧鉞の入らぬ深山 松田にて 松井生」〔関東大震災余震〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月18日付）

「美事な観音像を百五十反の大布へ 西崖画伯が苦心の染筆」〔大村西崖〕〔富士川町新豊院〕（『静岡新報』1924年＝大正13年1月22日付）

「岩石を破砕する潜水夫を使用 白糸滝の復旧工事 六月までには完成」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月5日付夕刊）→「崩落した白糸滝」（7月23日付）
に続報。

「富士山の歌（一）若山牧水」（『静岡新報』1924年＝大正13年2月7日付夕刊）

「丹那山土砂崩壊 坑夫十六名生理め 昨朝大竹工事場の椿事 坑内には水が溜まり 生命既に覚束なし」〔大出水〕〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月11日付）

「遅くとも十五日朝迄には遭難箇所にとゞく 湧水から来た一種の山津波か 星野技師語る 泥の上に板を並べて坑内に入る 恐ろしい勢ひで濁水の噴出」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月13日付夕刊）

「学者を無視した結果が今回の大惨事を生む 丹那山トンネル第二回崩落に就き 横山博士語る」〔横山又次郎〕〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月13日付）

「思ひ掛けぬ地質変化を発見 丹那隧道には鉄道省も思案投げ首」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月14日付）

「三尺程に接近したが 集塊岩に出会して貫通いよゝゝ困難 今の坑道は駄目だから迂回せよ」と鹿島組の意見」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月15日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.69〔大正13年2月16日～3月31日〕』

「救助口切開の見込立つ」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月16日付）

「大竹にて特派員 松井生 左導坑も水がいつぱい 掘り下げだけにも まだ四日位」（『静岡新報』1924年＝大正13年2月16日付）

「潤川 が悪い 富士郡下のチブス 蔓延原因不明」〔潤井川〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月16日付）

「半にも達しない丹那の隧道 一難去つて又一難 完成は何時？」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月18日付）

「救助の遅延に憤慨する家族 屍体収容は月末か 両技師の現場調査」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月18日付）

「困難を想はせる丹那の盆地 その下は石か水か 熱海と大竹の中央」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月19日付）



「丹那隧道変更の議が鉄道省内にも起る 丹那盆地は最悪な地層 脇水、林岡博士意見一致」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕〔大出水〕〔脇水鉄五郎〕〔平林武〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月21日付夕刊）

「富士山の歌（二）若山牧水」←原紙なし

「富士山の歌（三）若山牧水」（『静岡新報』1924年＝大正13年2月21日付夕刊）

「問題の丹那盆地 再び地層の試験 隧道位置変更の前提か 丹那小学前から開始」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月23日付夕刊）

「現在の方針では隧道は駄目 救助作業も不成功 老練な工夫の述懐」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月24日付）

「三回目の救助抗けふ貫通？ 当局は屍体搬出の準備 遭難者へ同情集る」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月26日付）

「富士山の歌（四）若山牧水」（『静岡新報』1924年＝大正13年2月27日付夕刊）

「丹那隧道の犠牲者 十六名悉く溺死 今暁六時全部搬出さる」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年2月28日付夕刊）

「富士山麓疎水計画 開墾地中心に期成同盟会」〔本栖湖疎水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年3月1日付）

「新道坑を開鑿工事を進捗 坑夫側は避難坑の進鑿を主張」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年3月2日付夕刊）

「来る四日 遭難者葬儀を執行 鉄相も参列」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年3月2日付夕刊）

「富士五湖を『天然保有』の仮指定」（『静岡新報』1924年＝大正13年3月7日付夕刊）

「丹那盆地地質調べ始まる 愈々二十三日から」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年3月12日付）

「丹那の西口は水抜隧道を掘つて安全を期す」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年3月27日付夕刊）

「小山地方は積雪三寸 三国峠は八寸」（『静岡新報』1924年＝大正13年3月29日付）

「鈴川競馬場 一週一哩に拡張」（『静岡新報』1924年＝大正13年3月29日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.70〔大正13年4月1日～5月15日〕』

「大宮町の目抜き道路を交通シヤ断の珍事件 私有地なりとて木ガキを作り 町会議員とニラみ合ひ」（『駿河新聞』1924年＝大正13年4月2日付夕刊）

「川瀬に巢喰ふ山窩の群 箱根を脱れ世間を余所に原始的生活 附近の青年に想はれる一団の花形はお花ちゃん」（『静岡新報』1924年＝大正13年4月8日付夕刊）

「何の前兆ぞ!!! 六所浅間社の湧水減じ鏡ヶ池の水面涸濁」（『静岡新報』1924年＝大正13年4月8日付夕刊）

「大宮の不良団追ひ払はる」（『静岡新報』1924年＝大正13年4月8日付夕刊）

「大宮競馬大会」（『静岡新報』1924年＝大正13年4月8日付夕刊）

「駿東競馬大会」（『静岡新報』1924年＝大正13年4月8日付夕刊）

「六合目附近大降雪 岳麓の酷寒」（『静岡新報』1924年＝大正13年4月19日付夕刊）

「鈴鹿の競馬 第一日の勝馬」（『静岡新報』1924年＝大正13年4月19日付夕刊）

「開業 精進ホテル」〔広告〕（『静岡新報』1924年＝大正13年4月29日付）

「丹那盆地は地質頗る軟弱 避難抗は既に四十二米突 新らたに地質試験」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年5月3日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.71 [大正13年5月16日～6月30日]』

「富士山を死場所に家出」〔自殺〕（『静岡新報』1924年＝大正13年5月16日付）

「登山期近づく 今年が多からうと 各登山口は準備に掛る」〔関東大震災〕〔大宮新道〕〔自動車登山〕（『静岡新報』1924年＝大正13年5月21日付）▲▲

「天子ヶ岳の怪僧 美少年少女を伴つて托鉢 宛ら『山の男』の生活」〔豊口茂治〕（『静岡新報』1924年＝大正13年5月22日付夕刊）→「国難来るーと怪僧の宣伝で」（8月29日付夕刊）、「怪僧豊口日眼」（1927年＝昭和2年8月29日付夕刊）などに続報。

「五合目以上白皚々 富士山麓気温低し」（『静岡新報』1924年＝大正13年5月22日付夕刊）

「投宿中盗まる 大宮町梅月で」（『静岡新報』1924年＝大正13年5月25日付）

「富士山に貯水池 登山者の為に」〔ケーブルカー〕〔吉田口〕（『静岡新報』1924年＝大正13年5月26日付）▲▲

「富士の御山開き 御殿場須走は例年通り 今年に残雪が多い」（『静岡新報』1924年＝大正13年5月29日付夕刊）

「富士根の旧登山道 完成近づく」〔富士根登山道〕〔村山古道〕〔ふじねむら〕（『静岡新報』1924年＝大正13年5月29日付夕刊）▲▲

「列車時刻震災前に復旧 来る七月一日から」〔御殿場線〕〔関東大震災〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月3日付）

「丹那隧道は中途から単線二本に変更 前途の難工事を慮り 盆地の地質試験は四ヶ月を要す」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月5日付）

「箱根の線路に近く改修工事 出水時に備へる為」〔御殿場線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月5日付）

「五名共謀して山林を盗伐す 大宮分署に検挙さる」（『静岡新報』1924年＝大正13年6月6日付夕刊）

「大宮口登山道視察」〔大宮新道〕〔自動車登山〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月7日付夕刊）▲▲

「湯河原熱海間は十一月頃開通か」〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月11日付夕刊）

「岳麓の理想郷 信玄十三代の後裔が地主さんで 廿六戸で百七名の人口」〔上井出村麓

区]」（『静岡新報』1924年＝大正13年6月11日付夕刊）▲▲→参考までに、『杉田竹川本家史誌』（深沢彪編、竹川俊次発行、1988年）に富士宮市杉田の竹川本家の略史が載っており、『富士市史資料目録 第6輯』（富士市史編纂委員会編・富士市発行、1995年）にも「竹川家文書」が収められている。

「富士北部 闘鶏賭博 続々検挙」（『静岡新報』1924年＝大正13年6月13日付）

「秩父宮富士へ 九月中頃御登山」〔皇族登山〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月18日付夕刊）

「大宮町に盗難頻々 犯人依然不明」（『静岡新報』1924年＝大正13年6月19日付）

「丹那隧道 工事進む 地質も良好」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月20日付夕刊）

「登山者の為に 吉田大宮口が電話の連絡を計る」（『静岡新報』1924年＝大正13年6月22日付）▲▲

「大宮町の不良団 女工部屋を襲つて暴行」（『静岡新報』1924年＝大正13年6月26日付夕刊）

「三青年が九合目まで登山 昨日大宮から」（『静岡新報』1924年＝大正13年6月27日付夕刊）

「頂上の新石室 来月初旬新築」〔昭和天皇〕（『静岡新報』1924年＝大正13年6月28日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.72〔大正13年7月1日～8月15日〕』

「富士身延 全線電化 官営線も電化言明」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月1日付）

「岳麓鉄道近く発起人会」〔電車馬鉄会社〕〔富士山麓循環鉄道〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月1日付）▲▲

「山開きを待つ富士の各登り口 準備既に大体成る」〔関東大震災〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月2日付夕刊）

「須走口登山者廿五名 御殿場口は破壊」〔関東大震災〕〔残雪〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月3日付）▲▲

「大宮口の登山電話 十五日に開通」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月5日付夕刊）

「大宮小作争議 今猶解決せず」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月5日付夕刊）

「胸突八町の険は五六尺の積雪 十日の開山頃にはまだ登山困難か」〔残雪〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月8日付夕刊）

「富士山頂郵便局 十五日から開始」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月8日付夕刊）

「三島高女登山」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月8日付夕刊）

「浜松高工生徒富士登山に出発」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月8日付夕刊）

「活気を呈した大宮口登山道路は十三日頃全通」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月11日付夕刊）

「静岡まで剛健旅行 神奈川小学生」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月12日付夕刊）

「写真は十一日富士山頂の浅間大社奥宮で開山祭を執行するため十日登山した大宮町官幣大社浅間神社の神官一行の登山姿」〔写真〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月12日付）

「岳陽少年団夏期の旅行それぞれ決定」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月12日付）

「登山営業者に大宮署で注意」〔富士泥棒〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月12日付）▲▲←短い本文で《注意》の内容は不明。

「静岡聯隊富士登山 御殿場口から」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月12日付）〔関東大震災〕

「此夏は山へ 富士身延鉄道」〔広告〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月12日付）

「富士登山始まる－大宮口にて」〔写真〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月13日付夕刊）

「富士山頂雪深く 剣ヶ峰附近は一丈余 六十年来初めての大結氷」〔残雪〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月13日付夕刊）

「開山した大宮口 第一日登山者四十名」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月13日付夕刊）

「静師生富士登山 昨日大宮から」〔静岡師範学校〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月13日付夕刊）

「登山案内の乗馬検査施行」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月13日付夕刊）▲▲

「登山用の酸素囊 販売許可願ひ」〔高山病〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月13日付）

「大杉と大榎で知られた村山神社 近く県社に昇格される」〔村山浅間神社〕〔天然記念物〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月14日付「郷土の誇り」）▲▲→本文中に出てくるこの大杉の幹周りはメートル法に換算すると939cm、樹高42・7mであり、現存する大杉の幹周り1011cm、樹高42・4mにはほぼ匹敵するが、掲載写真では大日堂のすぐ後ろにあるように見えるこの大榎は残っていない。現存するアカガシのもっとも大きいものは、幹周り297cm、283cm、269cmであり、ここに出てくる幹周り804cm、樹高22mは桁違いに大きい（『村山浅間神社調査報告書』富士宮市教育委員会編・発行、平成17年）参照。

「雪が深く内輪のお鉢廻り不能」〔残雪〕〔お鉢めぐり〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月15日付夕刊）

「大暴風雨富士山を襲ふ 八合目以上は登山不能」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月16日付夕刊）

「昨日の富士 登山者五十名」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月16日付夕刊）

「熱海真鶴間がきのふから復旧 但し徒歩旅行に限り」〔熱海線〕〔関東大震災〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月17日付夕刊）

「掛川高女生 二百余で富士登山」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月18日付）

「御殿場口は天候恢復す」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月18日付）

「昨日の富士 まだ天候不順」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月19日付夕刊)
「大自然が恋しいー裏富士の麓三つ峠の印象 大原外光」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月19日付夕刊)
「空転を防ぐ為に連結車を制限 箱根を越える貨車は六十五輛以内に」〔御殿場線〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月19日付夕刊)
「蒲原の汚水問題は結局有耶無耶か 会社に専用水路設置の意志絶対になし」〔東洋製紙〕
〔公害〕〔工場排水〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月19日付) →「[蒲原の汚水問題](#)」 (11月5日付) に続報。
「登山者に撮影を強要する不良写真師を 規則を設けて取締る」〔写真屋〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月19日付) ▲▲
「写真説明 (上) 剣ヶ峰 (下) コノシロ池」〔写真〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月20日付夕刊)
「いよゝゝ調査着手 富士登山ケーブル」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月20日付夕刊) ▲▲→「[富士山ケーブルカー 設計を変へて](#)」 (8月10日付)、「[許されさうもない富士登山鉄道](#)」 (1925年=大正14年3月5日付)、「[登山鉄道計画内容](#)」 (4月15日付) に続報。
「富士山頂で音楽演奏会」〔変わり種登山〕〔東京音楽時報発行所〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月21日付) →「[富士山日報](#)」 (7月25日付夕刊) に続報。
「西園寺公御殿場へ」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月21日付)
「崩落した白糸滝 復旧工事に近く着工」〔白糸の滝〕〔関東大震災〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月23日付夕刊)
「富士山日報」〔月見の宴〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月23日付夕刊)
「浜松高女登山 昨朝出発す」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月23日付) →「[富士山暴風雨](#)」 「[富士山日報](#)」 (7月26日付夕刊) に続報。
「富士山日報」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月24日付夕刊)
「大宮口の客引き 今年だけは今年だけはと又今年も横暴闊歩」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月24日付) ▲▲
「八合目で苦悶 俄かの腹痛で」〔遭難〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月25日付夕刊)
「富士山日報」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月25日付夕刊)
「富士山暴風雨 危地を逃れた浜松高女生四十名」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月26日付夕刊)
「富士山日報」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月26日付夕刊)
「西遠高女登山 昨日朝出発す」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月26日付)
「丹那隧道 学者の意見で工事を決める」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月27日付)
「警戒を要する珍しい変化だ 本栖湖の減水につき气象台の藤原博士談」 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月28日付)
「丹那山坑内で工夫三名重傷 トロッコが脱線して」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』 1924年=大正13年7月28日付)

「丹那の盆地は断層と判る 更に八月一日から大々的に掘り進む」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月28日付）

「高潔 最上の品質 花王石鹼」〔広告〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月28日付）

「富士山日報」（『静岡新報』1924年＝大正13年7月29日付夕刊）

「荒廢に任せた浅間社の本元 玉穂で譲受けの交渉 病み田は近く発掘」〔玉穂浅間神社〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月29日付） ▲▲

「小笠青年 裾野々営 八月九日から」〔小笠郡聯合青年団〕〔軍事講習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月30日付夕刊）

「富士山日報」〔山頂に魚屋〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月30日付夕刊）

「滝ヶ原附近の水枯れで演習も遂に不能 三島聯隊耐熱演習を中止して引上ぐ 我国空前の出来事」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1924年＝大正13年7月30日付）

「周南講社員が御嶽へ登山」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月1日付夕刊）

「富士山日報」〔山頂の水不足〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月1日付夕刊）

「富士山日報」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月3日付）

「富士山日報」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月4日付）

「一寸治りさうもない芦の湖の水争ひ 今日までの歴史は本県に有利 伝説めいた深良用水」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月6日付夕刊）

「富士山日報」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月6日付夕刊）

「頂上の一部が崩壊したばかりで被害はない（富士の震害調査）」〔関東大震災〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月7日付夕刊）

「富士山日報」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月7日付夕刊）

「警察部長富士へ登山」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月8日付）

「番頭さんが兵隊ごっこ けふから裾野で」〔軍事講習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月8日付）

「岳南文化史観（一）一服清涼剤 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月6日付夕刊）

「岳南文化史観（二）駿遠参と駿遠豆 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月7日付夕刊）

「岳南文化史観（三）大井川を境ひして 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月8日付夕刊）

「岳南文化史観（四）富士はアイヌ語 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月9日付夕刊）

「工費八十万円で架設した富士川鉄橋 いよゝゝ十七日盛大な開橋式 卅六文の渡船時代から鉄橋へ」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月9日付）

「一日五分減る芦の湖の水 最深百四十一尺で使用水の方が多い」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月9日付）

「岳南文化史観（五）日本国民性と富士山 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月10日付夕刊）

「富士山日報」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月10日付夕刊）

「富士山ケーブルカー 設計を変へて改めて許可を申請」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月10日付）▲▲

「丹頂の鶴 十数羽宛 浜名湖岸へ 何かの吉兆」〔ツル〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月10日付）

「岳南文化史観（六）好古と考古 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月12日付夕刊）

「農霧で岳麓地方 歩行も困難」〔御殿場線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月12日付夕刊）

「富士山日報」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月12日付夕刊）

「愛鷹山に落ちてみた五百町歩の深林 十三町歩余は昼尚暗き大森林 沼津税務署で拾ひ出し国有に 不思議なやうな実話」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月12日付）

「曾我部氏追悼富士登山 岳麓に記念碑建設」〔曾我部■〕〔スタール博士〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月12日付）

「岳南文化史観（七）東京 後藤肅堂」←大正13年8月13日付夕刊原紙なし。

「岳南文化史観（八）考古学とは何ぞ 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月14日付夕刊）

「大宮浅間社へ 御下賜 金五百円を改築費へ」〔浅間大社〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月14日付夕刊）

「富士便り」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月14日付夕刊）

「岳南文化史観（九）先史時代と原史時代 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月15日付夕刊）

「御殿場口の登山者は 他の四分一 従業者奮起す」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月15日付夕刊）▲▲

「富士登山者 日を逐ふて減少」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月15日付）

「丹那隧道で工夫惨死す 作業中岩石が崩れて」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月15日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.73 [大正13年8月16日～9月30日]』

「岳南文化史観（十）縄文土器と弥生式 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月16日付夕刊）

「富士頂上 初結氷 例年より早い」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月16日付夕刊）

「岳南文化史観（十一）県下一巡に就いて 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月17日付夕刊）

「幼年学校生徒 富士へ登山」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月17日付夕刊）

「雨を降らして一と 到る処に雨乞 打続く晴天に魚も居ない 海の人にも此憂い」〔早魃〕〔沼津魚河岸〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月17日付夕刊）

「登山百五十名 昨日の富士山」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月17日付夕刊）

「富士川も大減水 旱天が続けば航行不能」〔早魃〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月17日付夕刊）

「岳南文化史観（十二）原日本人と天孫民族 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月19日付夕刊）

「（上富士川開橋式）」〔写真〕〔富士川鉄橋〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月19日付）

「枯れゆく稲を眺め専念に雨乞ひ 迷信と笑ふは 余りにも気の毒である」〔早魃〕〔富士郡〕〔庵原郡〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月19日付）

「岳南文化史観（十三）石器時代の宝庫 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月20日付夕刊）

「秋晴の富士へ 外人連が登山」〔外国人登山〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月19日付）

「登山者百名 十八日の富士山」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月20日付夕刊）

「岳南文化史観（十四）石器時代の宝庫 東京 後藤肅堂」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月21日付夕刊）

「登山指導標が爆発し通行人が気絶す 何者かが爆弾を仕込んだ形跡 犯人は数日中に検挙」〔大宮口〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月21日付夕刊）

「富士頂上は殆んど毎朝結氷」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月21日付夕刊）

「徹底的悪疫予防に 大宮で 水道計画」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月26日付）

「富士御料林問題陳情」〔御料林払い下げ〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月26日付）▲▲→「郡長の調停で」（9月17日付夕刊）、「富士山御料林問題解決す」（10月12日付夕刊）に続報。

「復興貯蓄債権売出」〔広告〕〔関東大震災〕〔中央に静岡側から見た富士山カット〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月28日付）

「国難来る一と 怪僧の宣伝で 麓の人々が戦へ上る」〔天子ヶ岳〕〔豊口茂治〕（『静岡新報』1924年＝大正13年8月29日付夕刊）

「閉山期迫る 登山者は絶無」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月29日付夕刊）

「爆薬を盗まる大宮分署大活動 犯人未だ縛に就かず」（『静岡新報』1924年＝大正13年8月29日付夕刊）

「大宮町が独力で 細菌検査所を建築 毎年のチブス流行に」（『静岡新報』1924年＝大正13年9月3日付夕刊）

「富士の閉山 凡てが去年の約半分」（『静岡新報』1924年＝大正13年9月3日付夕刊）

「駆除はやはり十二月に一富士の野鼠」〔野ねずみ〕（『静岡新報』1924年＝大正13年9月3日付）

「富士山二合目に林間講堂 目下県で設計中」（『静岡新報』1924年＝大正13年9月7日付）→「富士山麓二合目に林間大講堂建設」（1925年＝大正14年5月7日付夕刊）に続報。

「大宮口閉山式 七日浅間神社で」（『静岡新報』1924年＝大正13年9月9日付）

「真鶴湯河原間 来月から開通す 白糸川だけは徒歩連絡」〔関東大震災〕〔熱海線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年9月11日付）

「女学生が捕獲したアサギマダラ きわめて珍奇な蝶の類」〔浜名郡篠原村〕（『静岡新報』1924年＝大正13年9月12日付夕刊）

「郡長の調停で 御料林払下げ紛議の妥協成る」〔御料林払い下げ〕（『静岡新報』1924年＝大正13年9月17日付夕刊）

「目鼻の付て来た大宮水道計画」（『静岡新報』1924年＝大正13年9月19日付夕刊）

「問題再び停頓 富士御料林払下」〔御料林払い下げ〕（『静岡新報』1924年＝大正13年9月19日付夕刊）

「丹那隧道東口の椿事 ダイナマイト爆発して坑夫二名死傷」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年9月23日付）

「天然記念物 駒門の風穴 寒暑を知らぬ仙境 一見の価値あらん」（『静岡新報』1924年＝大正13年9月29日付「郷土のほこり＝読者投稿」）

「救護すべき細民を差押へ 其金まで横領した大宮町吏の暴虐も曝露」（『静岡新報』1924年＝大正13年10月9日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.74〔大正13年10月1日～11月15日〕』

「六合目まで積雪九寸 富士の初雪」（『静岡新報』1924年＝大正13年10月1日付）

「富士山麓には鳥獣の繁殖が多い 密猟は嚴重に取締る」（『静岡新報』1924年＝大正13年10月3日付夕刊）

「二度目の降雪で積雪四尺余」〔太郎坊〕（『静岡新報』1924年＝大正13年10月10日付）

「問題の丹那隧道残り三分の一強 十七年一杯かゝるまい 掘鑿大に進み燭光見ゆ」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年10月11日付夕刊）

「丹那トンネル 現業員家族慰安会」〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年10月11日付）

「富士山御料林問題解決す 昨夜大宮小学校で手打」〔御料林払い下げ〕（『静岡新報』1924年＝大正13年10月12日付夕刊）▲▲

「富士の競馬 第一日の勝馬」〔富士郡畜産組合〕（『静岡新報』1924年＝大正13年10月19日付）

「丹那隧道 半分掘れて 神代杉が発見された」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年10月20日付）

「東漸寺住職夫妻 何者かに惨殺さる 頭部を二つに割られ全身数十ヶ所に物凄い重軽傷 今晩大宮町の惨劇」〔東漸寺殺人事件〕（『静岡新報』1924年＝大正13年10月28日付夕刊）

「目星が着いたか大宮分署の緊張 襦袢に血の着いた被疑者を引致し来る」〔東漸寺殺人事件〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月2日付夕刊）

「江間村の強盗 罪状自白、昨日送局 大宮のは別人か」〔東漸寺殺人事件〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月2日付夕刊）

「大宮浅間例祭 三、四、五の三日間」（『静岡新報』1924年＝大正13年11月2日付夕刊）

「大石寺焼く」（『静岡新報』1924年＝大正13年11月2日付夕刊）

「六日早暁から戦端を開始 岳麓一帯に漲る戦雲」〔軍事演習〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月5日付）

「蒲原の汚水問題 大石部長等の調停で 近く円満解決の模様」〔東洋製紙〕〔公害〕〔工場排水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月5日付）

「丹那の隧道から廿万年前の化石 滝地山の地底で発掘さる 大出水の前兆ぢやないかと坑夫連びくゝ」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月7日付夕刊）

「愛鷹山麓に開かれる戦端 参加部隊全部揃ふ 明朝を皮切りに四日間」〔軍事演習〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月7日付夕刊）

「話好きの酒好き 長火鉢の前で見た治郎長親分」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月7日付夕刊）

「怪しくなつた被疑者の証拠 着衣の血は馬の血？」〔東漸寺殺人事件〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月7日付夕刊）

「本職も乗り込んで竹細工をフィルムに 十四日から印野村で大掛りに撮影する 世に出る印野須山」〔山村の副業〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月13日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.75〔大正13年11月16日～12月30日〕』

「岳麓地方結氷す 昨朝五分位に」（『静岡新報』1924年＝大正13年11月16日付）

「裾野で撮影中の映画劇『山村の巻』ドン底の人々を救ひ出さう 農商務省の副業奨励」〔山村の副業〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月18日付）

「水の湧出で丹那隧道悩む 愈々丹那盆地へ近づく」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月19日付）

「充足夫妻を殺した真犯人は 矢張り塩川常作か 再び嚴重な取調べ」〔東漸寺殺人事件〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月20日付）→「[住職夫妻殺し犯人予審免訴となる](#)」（1925年＝大正14年9月6日付夕刊）に続報。

「隧道の奥に河の跡か 木や砂利が出る 心配ないと掘り続く」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月20日付）

「電気機関車に触 坑夫四名惨死一名危篤 今朝丹那隧道西口で」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月22日付夕刊）

「断層の為に熱海口工事中止 弘田技師地質調査中」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月23日付夕刊）

「惨鼻を極めた樁事の現場 四坑夫は轢殺された 原因は転轍の誤過り」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月23日付夕刊）

「日布師 昨日入山 晋山式を挙行」〔身延山久遠寺〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月23日付夕刊）

「怪僧は帝都へ 若僧は天城へ 天子ヶ岳の創案に師を待つ若い女性」〔豊口茂治〕（『静岡新報』1924年＝大正13年11月30日付）

「鶉が少なくて狩猟家悄気る 雉や鳴は多いが 今年先づ不猟!!」（『静岡新報』1924年＝大正13年11月30日付）

「鈴川競馬 二十日から」〔畜産組合聯合〕（『静岡新報』1924年＝大正13年12月14日付）

「断層の為め熱海工事中止 広田技師地質調査中」(『静岡新報』1924年=大正13年11月23日付夕刊)

「鈴川競馬 二十日から」(『静岡新報』1924年=大正13年12月14日付)

「鈴川競馬会 第一日の成績」(『静岡新報』1924年=大正13年12月23日付) 「鈴川競馬会 二日目の勝馬」(『静岡新報』1924年=大正13年12月24日付)

「柚野村の小作争議 癒々持久戦に入る 小作地一反歩につき一円づゝの 運動資金を醸出し」(『静岡新報』1924年=大正13年12月25日付)

■ 1925年=大正14年

● 歴史文化『静岡新報 Vol.76 [大正14年1月1日～2月15日]』

「二日須走口から雪中の富士登山 三日夕刻無事下山」(『静岡新報』1925年=大正14年1月5日付)

「天覽を賜はる楊原神社の例祭 十六七日両日執行」〔沼津市下香貫〕(『静岡新報』1925年=大正14年1月16日付)

「雪解けが早い富士の山頂」(『静岡新報』1925年=大正14年1月16日付)

「全郡に及ぼんとする富士の小作争議 柚野村では小作地値上げ 四ヶ所の争議地を横山小作官が視察」(『静岡新報』1925年=大正14年1月27日付)

「岳麓も大湧水 発電にも支障」(『静岡新報』1925年=大正14年1月27日付)

「三島に始まる猛烈な興業戦 熱海線全通を控へて発展目覚し」〔東海道本線〕(『静岡新報』1925年=大正14年1月28日付)

「毘沙門祭典 臨時列車」〔鈴川駅〕(『静岡新報』1925年=大正14年1月29日付)

「鈴川海岸の岩窟で三十余名の大乱闘 貸せ、貸さぬのいざこざから山窩二派に別れて」(『静岡新報』1925年=大正14年2月4日付夕刊)

「六月の命日までに次郎長の銅像を 長屋や幼稚園などゝ併せて清水港に建てる」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1925年=大正14年2月6日付夕刊)

「政府の見込む国立公園候補地 富士一帯外三ヶ所」(『静岡新報』1925年=大正14年2月11日付夕刊)

「富士山麓に二千町歩の開墾 目下水源地交渉中」〔朝霧高原〕(『静岡新報』1925年=大正14年2月11日付) ▲▲

「富士の巻狩 三月下旬猟友会」〔浮島沼〕(『静岡新報』1925年=大正14年2月13日付夕刊)

● 歴史文化『静岡新報 Vol.77 [大正14年2月16日～3月31日]』

「須走口の巻狩り」〔小富士周辺〕(『静岡新報』1925年=大正14年2月16日付)

「開業近き熱海駅」〔写真〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1925年=大正14年2月17日付)

「金を貸せろーと宮司へ脅迫状 大宮署で犯人捜査」〔浅間大社〕(『静岡新報』1925年=大正14年2月17日付夕刊) →「連続的に脅迫状」(2月24日付夕刊)、「大宮登記所員が」(2月27日付夕刊)に続報。

「富士郡下の小作争議悉く永久減を要求 富丘村はけふ委員会」大正14年2月19日付夕刊)

「永久減の要求通り小作側の大勝利 十八日の調停委員会で 富士の争議解決」 (『静岡新報』 1925年=大正14年2月20日付)

「富士山麓積雪五寸 黄灰を含んで」 [黄砂] (『静岡新報』 1925年=大正14年2月22日付)

「熱海線の開通は 来月廿五日」 [東海道本線] (『静岡新報』 1925年=大正14年2月23日付)

「連続的に脅迫状 或ひは悪戯か」 (『静岡新報』 1925年=大正14年2月24日付夕刊)

「御殿場地方大降雪 籠坂は二尺余」 (『静岡新報』 1925年=大正14年2月24日付夕刊)

「大宮登記所員が 宮司へ物凄い脅迫状 筆跡から遂に発覚し けさ出勤の途中検挙さる」 (『静岡新報』 1925年=大正14年2月27日付夕刊)

「登山事務所長に永井氏当選 御殿場口大改造」 (『静岡新報』 1925年=大正14年2月28日付夕刊)

「村山浅間社が県社に昇格 三日に盛大な報告祭 四日には宝物を供覧」 (『静岡新報』 1925年=大正14年3月1日付) ▲▲→これに関連する記事は『静岡民友新聞』には見つからなかった。

「昇格した村山浅間社」 [写真] (『静岡新報』 1925年=大正14年3月1日付)

[ここに掲載されたものとはほぼ同じアングルの写真が「28 浅間神社と大日堂を区切った柵」 (『村山浅間神社調査報告書』富士宮市教育委員会編・発行、平成17年 口絵) にある。後者のオリジナルは浅間大社所蔵の乾板写真であり、おそらく1923年=大正12年の撮影である(「昔日のふじのみや〈5〉『ガラス乾板写真』が語る街の姿 写真・富士山本宮浅間大社所蔵」 (『岳南朝日』2016年=平成28年2月6日付) 参照)。両者を同じ大きさに拡大して重ねてみると、柵の位置・神社の屋根の流れ・百日紅の枝の位置などが同じようだが、拝殿の大棟が明らかに違う。この2年間に、改造されたものであろう]

「討議十時間 三派修正通り 普選案衆議院通過」 [普通選挙法] (『静岡新報』 1925年=大正14年3月4日付夕刊)

「許されさうもない富士登山鉄道 霊山を俗化させるに忍びぬとの意見が有力で」 (『静岡新報』 1925年=大正14年3月5日付) ▲▲

「鳥の王様……松永安衛さん」 [写真] (『静岡新報』 1925年=大正14年3月7日付)

「鳥類愛護思想普及の目的で 松永氏が展覧会開催 けふから加島校で」 [松永安衛] (『静岡新報』 1925年=大正14年3月7日付)

「◇…竣工した大宮浅間神社」 [浅間大社] [写真] (『静岡新報』 1925年=大正14年3月8日付)

「工事完成した大宮浅間社 四月四日から盛大に遷宮祭執行」 [浅間大社] (『静岡新報』 1925年=大正14年3月8日付)

「消防隊が玉石運搬 牛車七十台で」 [浅間大社] (『静岡新報』 1925年=大正14年3月8日付)

「圧倒的多数で 治安法通過 委員長報告通り 衆議院本会議」 [治安維持法] (『静岡

新報』1925年＝大正14年3月9日付)

「水源涸渇して山葵二反余枯死 地質検査が原因だと丹那区民大いに騒ぐ」〔熱海線〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔丹那盆地渇水〕(『静岡新報』1925年＝大正14年3月13日付) →「滝沢の渇水は隧道工事の影響」(4月10日付)に続報。

「東洋一の大鳥居 大宮浅間社へ加島村で奉納」(『静岡新報』1925年＝大正14年3月13日付夕刊)

「烈風で雪が解ける」(『静岡新報』1925年＝大正14年3月20日付夕刊)

「富士競馬会」〔富士郡畜産組合〕〔大宮万野競馬場〕(『静岡新報』1925年＝大正14年3月20日付夕刊)

「湯ヶ原熱海間 開通大祝賀けふ熱海駅に於て 久邇大将宮も台臨」〔熱海線〕〔東海道本線〕〔湯河原〕(『静岡新報』1925年＝大正14年3月25日付)

「土砂の崩壊で列車運転不能 昨朝富士身延線で」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1925年＝大正14年3月25日付)

「大宮浅間社遷宮祭 宝物拝観は四月二日」〔浅間大社〕(『静岡新報』1925年＝大正14年3月29日付)

「富士山に大降雪 稀らしい寒気」(『静岡新報』1925年＝大正14年3月31日付夕刊)

「大宮浅間遷宮祭 準備殆んど整ふ 宮地土屋両博士来宮」〔浅間大社〕(『静岡新報』1925年＝大正14年3月31日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.78 [大正14年4月1日～5月15日]』

「愈けふから八日間に亘つて大宮浅間三百年目の正遷宮祭り」〔浅間大社〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月1日付)

「御殿場地方 積雪二寸 稀有の寒さ」(『静岡新報』1925年＝大正14年4月7日付夕刊)

「遷御修祓式(六日大宮浅間で)」〔写真〕〔浅間大社〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月8日付夕刊)

「大宮浅間神社 遷宮の御儀終る 大宮地方空前の人出」〔浅間大社〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月8日付夕刊)

「区民二百余名郡衙に殺到 学校移転に反対して 富岡村紛め返へる」(『静岡新報』1925年＝大正14年4月8日付夕刊) →「富岡の学校紛擾」(5月17日付夕刊)に続報。

「駿東競馬大会 八日より三日間」〔富士郡畜産組合〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月8日付夕刊)

「滝沢の渇水は隧道工事の影響 当局に救済迫る」〔丹那トンネル〕〔丹那盆地渇水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月10日付)

「丹那工事と廃田問題 応急策決定」〔丹那トンネル〕〔丹那盆地渇水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月15日付) ▲▲

「登山鉄道計画内容」〔八合目岩室紛争〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月15日付) ▲▲

「清水の誇り次郎長の銅像 愈十月頃迄には実現」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1925年＝大正14年4月17日付)

「丹那隧道内で土砂崩壊し 坑夫四名下敷となり 何れも瀕死の重傷」〔丹那トンネル〕〔事故〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月1日付夕刊）
「浮島沼干拓にまた新設計」（『静岡新報』1925年＝大正14年5月6日付）
「命を的に働く三百の坑夫 滝なす湧水の中に 丹那隧道西口見聞記」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月8日付夕刊）

「丹那隧道東口 坑内俄に泥の海 一秒百十八石の湧水」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月12日付夕刊） ←記事タイトルには「東口」とあるが「西口」が正しい。

「多年手古摺った浮島沼干拓 一挙両得の計画案で政府直営実施？」（『静岡新報』1925年＝大正14年5月13日付夕刊）

「六百余坪の土砂流出 奥の方には空洞 十日間位は手のつけられない丹那トンネル西口」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月13日付夕刊）

「坑内は物凄い湧水 排水路を設けて全坑夫は排水を急ぐ 作業開始期日は今の処未定」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月14日付夕刊）

「隧道に併行して大排水坑を掘る 丹那西口工事益々困難 先づ一年位遅れるだらうーと 間戸野親分は語る」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月15日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.79 [大正14年5月16日～6月30日]』

「富岡の学校紛擾 近く解決せん」（『静岡新報』1925年＝大正14年5月17日付夕刊）

「後藤子あす岳麓入り 岳麓予定線視察か」〔富士山麓循環鉄道〕〔後藤新平〕〔堀内良平〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月17日付夕刊）

「一秒間の湧水量が十六石三斗二升 手の付けられぬ丹那隧道 技師連も手を拱く」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月17日付夕刊）

「岩石の破片で土工重傷を負ふ 丹那隧道排水工事中」〔事故〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月20日付夕刊）

「富士山麓に毛色の変った村 安直に避暑が出来るとしているゝな顔ぶれで」〔富士山麓文化村〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月21日付）

「中央線と東海道との近道 富士川飛航艇」〔広告〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月21日付）

「復旧した白糸の滝 藤が咲誇り得も云へぬ美観」〔関東大震災〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月24日付夕刊） ▲▲

「富士山に大降雪 養蚕家は恟々」（『静岡新報』1925年＝大正14年5月24日付夕刊）

「白糸村の水争ひ 富士水電と原半野両区と」〔水力発電〕〔水争い〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月24日付） →「富士水電对白糸村」（5月27日付夕刊）、「片付

き相もない白糸の水喧嘩」（5月3日付）、「二日間に亘る現場検証と関係者の取り調べ」（6月2日付）に続報。

「自動連結器に依る機関車の牽引力試験 廿五日から三日間 沼津山北間で」〔御殿場線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月24日付）

「富士初登山 吹雪の中を七合目迄 加島郵便局員二名」（『静岡新報』1925年＝大正14年5月25日付）

「富士山麓二合目に林間大講堂建設 御料林三千坪を無料で貸与さる 二ケ年継続事業で」〔林間講堂〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月27日付夕刊）▲▲

「富士水電対白糸村 水利あらそひ 村民の死活に関するト昨日郡長に事情開陳」〔白糸水電〕〔水争い〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月27日付夕刊）

「富士山営業者が営業区域争ひ」（『静岡新報』1925年＝大正14年5月31日付夕刊）▲▲

「片付き相もない白糸の水喧嘩 ふるからのいざこざで 検事一行現場視察」〔白糸村〕〔白糸水電〕〔水争い〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月3日付）

「小山青年に感謝状」〔御殿場線〕〔人命救助〕（『静岡新報』1925年＝大正14年5月3日付）

「富士の裾野に新しい託児所 東京市内三百名の病弱児を 八月に転地させて」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月1日付）

「交通従業者に謙譲の美德 岳麓地方を視察した山梨県議が心から激賞」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月2日付）

「二日間に亘る現場検証と関係者の取り調べ 水利争議益々紛糾」〔白糸村〕〔白糸水電〕〔水争い〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月2日付）

「土砂の搬出や排水工事で年内に工事着手困難 湧水続く丹那隧道」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月3日付夕刊）

「乗り気になつて来た浮島沼干拓 両郡関係町村長 六日再び会合する」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月5日付夕刊）

「小山から須走へ 自動車を運転」〔須走口登山バス〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月6日付夕刊）▲▲

「丹那隧道東口に金鉱脈を発見す 巾一尺位の砂金の層」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月6日付）

「浮島沼干拓 実地調査進む けふから導水路視察」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月12日付夕刊）

「次郎長の法会は来月に延期」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月14日付）

「水泳練習と登山旅行」〔静岡商業学校〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月17日付）

「馬の流行性感冒 岳麓地方に蔓延 使役馬五十頭に全部感染して神縄砂防工事中止」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月19日付夕刊）

「植付け不能の水田約百町歩 十日も続けば大ごと」〔富士郡北部〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月19日付夕刊）

「鈴川競馬大会 卅日から三日間」〔畜産組合聯合会〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月20日付）

「静高夏季旅行 十班に別つて登山」〔静岡高等学校〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月21日付夕刊）

「大宮口の物価決定 昨年と大差なし」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月24日付夕刊）▲▲

「機関車の故障で身延線立往生 汽車通学生全部遅刻」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月24日付夕刊）

「雪が多くて開山遅る 御殿場五日 須走は七日」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月25日付）

「鈴川競馬会 卅日から三日間」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月26日付）

「太郎坊附近は花盛り 六合目以上に残雪多し」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月27日付夕刊）

「神ながらの道 けふ県正庁で伝達式」〔貞明皇后〕〔浅間大社〕（『静岡新報』1925年＝大正14年6月27日付）

「山登りの注意 過ちのないやうに 県から各学校へ」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月28日付）

「新しく出来た恰好の登山具 寝具やサスペンダー其他登山に必要な品」（『静岡新報』1925年＝大正14年6月29日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.80 [大正14年7月1日～8月15日]』

「富士の頂上は雪で覆はる 阿部技手一行の初登山 開山式は五日挙行」（『静岡新報』1925年＝大正14年7月2日付夕刊）

「須走口開山式 一日浅間社で挙行」〔須走浅間神社〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月3日付）

「鈴川競馬会 二日目の勝馬」（『静岡新報』1925年＝大正14年7月4日付夕刊）

「伯山を招き治郎長追善 興行を開演」〔神田伯山〕〔清水次郎長銅像〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月4日付）

「気球隊も加はり富士の裾野で実弾射撃 横須賀重砲兵学校」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月5日付夕刊）

「富士の裾野を乗馬で繞る 学生乗馬協会員の一週間に亘る大壮挙」〔関東学生乗馬協会〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月5日付）→「百騎轡を並べて富士山麓を一周」（7月12日付夕刊）、「岳麓一週乗馬隊を迎へる」（7月17日付夕刊）、「婦人も加はつた富士一週騎乗団」（8月4日付夕刊）、「騎馬に鞭つて富士を一週」（8月7日付夕刊）に続報

「御料地の芝を盗んで阪神地方へ搬出 永の悪習が暴露して富岡村民検事局へ召喚さる」〔芝生盗掘〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月7日付夕刊）

「御殿場口開山式五日挙行す 余興で却々の賑ひ」（『静岡新報』1925年＝大正14年7月7日付夕刊）

「大宮口開山式 七日浅間社で」〔浅間大社〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月8日付）

「車と名づくもの廿六万五千余台 減つたのは馬車許り」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月8日付)

「山の姿に憧れて一杖を曳く人々の群 一日以来既に六百余名の登山者 流石に賑ふ…『山は富士』」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月10日付)

「次郎長親分の卅三回忌法要 けふ不二見梅陰寺で 東西の名士多数参列」 [清水次郎長] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月10日付)

「黄金の雨に歓び満つ農家 一斉に植付け開始 愁眉を開いた駿東地方」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月11日付)

「登山案内者に資格試験 合格者は僅かに五割一大宮口の新しい試み」 [強力] [ガイド資格] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月11日付夕刊) ▲▲

「定期自動車改正時間割」 [路線バス] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月11日付夕刊)

「準備整つた大宮口 お守札も廿万枚謹製」 [浅間大社] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月11日付)

「百騎轡を並べて富士山麓を一周 六日間の予定で婦人も交つて 来月三日三島出発」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月12日付夕刊)

「登山者の為 専用車運転 富士身延線で」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月12日付夕刊)

「登山者を当込んで暴利を貪る朦朧自動車屋 今年は嚴重に取締る」 [富士泥棒] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月12日付) ▲▲

「氷雪に閉された富士の頂上 金明水附近積雪四尺」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月14日付夕刊)

「神宮山頂へ向ふ」 [写真] [浅間大社神宮] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月14日付夕刊)

「御料林払下げは…水源地涵養の為 払下げ面積三千五百町歩 本月中には正式通知? 転売は許さぬらしい」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月14日付)

「富士山上寒気強く 八合目以上は曇」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月14日付)

「初島祭りと初木神社」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月14日付「山と温泉」)

「富士山頂にも泥棒が出没 頂上ホテルの雨戸を破り貯蔵品全部を窃取」 [小屋荒らし] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月15日付夕刊)

「登山道路 遂に行悩み 寄附が纏らず」 [大宮新道] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月16日付) ▲▲

「祝開山 富士山御殿場口 御殿場商夕組合」 [広告] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月16日付)

「十四日の富士山 登山者は百五十名位」 (『静岡新報』 1925年=大正14年7月16日付)

「山登り今が絶好! 中央气象台 藤原博士談」 [藤原咲平] (『静岡新報』 1925年=大正14年7月17日付夕刊)

「浜松高工生山岳旅行 富士山から日本アルプスへ」 [浜松高等工業] (『静岡新報』 1

1925年＝大正14年7月17日付夕刊)

「岳麓一週の乗馬隊を迎へる 三島乗馬倶楽部の準備 八月三日壮途に就く」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月17日付夕刊)

「須走口登山道 淋びれる 交通不便と地勢の関係」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月17日付夕刊)

「登山者三百名 十五日の富士山」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月17日付夕刊)

「乗馬倶楽部員 夏期猛練習」〔三島乗馬倶楽部〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月17日付)

「三若宮殿下御登山 十九日富士へ」〔皇族登山〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月18日付) → 「三殿下御元気で富士山頂に御着」(7月21日付)に続報。

「登山日和で富士賑ふ 十七日には千五百余名」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月19日付夕刊)

「富士登山列車衝突 重軽傷者数名」(富士電気軌道)(『静岡新報』1925年＝大正14年7月20日付)

「三殿下御元気で富士山頂に御着 御殿場口から御下山」〔皇族登山〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月21日付)

「富士川から沼津迄 東海道線北側の広告物取払ひ…本年末までに」〔鉄道沿線広告〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月22日付夕刊) ▲▲

「富士山便り 廿日の登山者二千名」〔皇族登山〕〔大宮新道登山バス〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月22日付夕刊)

「富士山便り 登山者激増す」〔大宮新道登山バス〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月23日付夕刊)

「石室に閉込められた千余名の登山者 全山の糧食は今日で絶ゆ 夕方まで続けば救援隊派遣 富士山の大暴風雨」〔遭難〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月24日付夕刊)

「富士山便り 此処も湧水に悩む」〔コノシロ池〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月24日付夕刊)

「霊山富士案内 精華の象徴」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月24日付)〔広告記事〕

「暑中御伺 大宮旅館組合 富士ホテル偕楽園 大宮富士山休迫所組合」〔合同広告〕(『静岡新報』1925年＝大正14年7月24日付)

「富士山平穏 遭難者全部無事 今朝来登山者相続く」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月25日付夕刊)

「富士山便り 暴風で登山者なし」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月25日付夕刊)

「富士山頂で声援歌を吹奏す 海軍々楽隊の一行が」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月26日付夕刊)

「山中湖畔で少年団員が幕営 一日から十日まで」(『静岡新報』1925年＝大正14年7月26日付夕刊)

「胸突八丁で往倒れ 疲労と寒気の為」〔遭難〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月26日付夕刊）

「浜松高女生昨日無事帰校」（『静岡新報』1925年＝大正14年7月26日付）

「風雨やんで富士全山賑ふ」（『静岡新報』1925年＝大正14年7月26日付）

「廿三日登山したまゝ 中学生消息絶ゆ 帰省途中の順天堂中学五年生 け搜索方を願出づ」〔遭難〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月28日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年7月28日付夕刊）

「少年団の富士登山 けふ須走口から」〔静岡少年団〕（『静岡新報』1925年＝大正14年7月29日付）

「富士山便り 午前中二千名登山」（『静岡新報』1925年＝大正14年7月30日付夕刊）

「富士山便り 夜山が殖えた」〔夜行登山〕（『静岡新報』1925年＝大正14年8月1日付夕刊）

「神谷鈴川間 定期自動車運転」〔路線バス〕（『静岡新報』1925年＝大正14年8月2日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月2日付夕刊）

「土用と言ふに富士山頂は大雪 剣ヶ峰付近は白皚々」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月3日付）

「補充兵二百余名 裾野で露営演習 愈けふから六日間」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1925年＝大正14年8月3日付）

「婦人も加はった富士一週騎乗団 今朝七時三島町を出発して愈々壮途に着く」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月4日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月4日付夕刊）

「八十町歩の水稲 枯死に瀕す 水不足で悩む東駿地方 地主も小作に同情」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月5日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月5日付夕刊）

「騎馬に鞭つて富士を一週 壮挙を終つた乗馬隊 けふ三島町に帰還」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月7日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月7日付夕刊）

「丹那の隧道に化学的工事 トンネル会議の結果 流石の仙石鉄相もあせつて」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年8月7日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月8日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月9日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月11日付夕刊）

「愈丹那隧道に新工事を施す 岩を造つて堀る方法」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年8月12日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月12日付夕刊）

「東駿旱魃地 免税運動」（『静岡新報』1925年＝大正14年8月12日付）

「丹那掘鑿は順調 十八年には全通する」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海

道本線] (『静岡新報』1925年=大正14年8月12日付)

「上井出地内へ飛行場新設 帝国義勇飛行隊から土地借入れの交渉」(『静岡新報』1925年=大正14年8月12日付) ▲▲

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月13日付夕刊)

「普選に備へて…神道教師大会」〔宗教者の被選挙権〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月13日付)

「富士山林間大講堂 いよいよ具体化し関係官現場に急行 工費十四万円で十六年度に完成」〔林間講堂〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月14日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月14日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月15日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.81〔大正14年8月16日～9月30日〕』

●県立プリント『静岡新報 大正14年8月』

「馬を連ねて現状を視察 林間講堂計画進む 予定より少額で出来るらしい」(『静岡新報』1925年=大正14年8月16日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月16日付夕刊)

「昨夜来の豪雨で 土砂線路を埋め 松田山北間列車普通 急援工夫の作業で午前九時開通」〔御殿場線〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月16日付夕刊)

「富士大暴れ 石室避難者約三千名」〔豪雨〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月18日付夕刊)

「土砂の崩壊で身延線不通 本日中に復旧見込み」〔富士身延鉄道〕〔豪雨〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月18日付夕刊)

「富士川増水 大宮町沼久保浸水」〔豪雨〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月18日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月18日付夕刊)

「御殿場地方所々に大穴 各地豪雨被害続報」(『静岡新報』1925年=大正14年8月18日付)

「石室も揺らぐ物凄い暴れ 負傷者もある見込み 十七日の富士山中」〔豪雨〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月19日付夕刊)

「富士林間講堂位置決定 払下げだけでは用材不足」(『静岡新報』1925年=大正14年8月20日付)

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月20日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月21日付夕刊)

「寺院境内地還附の要求 全国僧侶が決起」〔宗教法〕〔僧侶参政権〕(『静岡新報』1925年=大正14年8月22日付夕刊) ▲▲

「富士山は既に秋」(『静岡新報』1925年=大正14年8月22日付)

「益々有望な浮島沼埋立 来月中旬から調査継続」(『静岡新報』1925年=大正14年8月23日付夕刊)

「県下御料林 正式払下げ通牒来る あす県参議会へ付議」(『静岡新報』1925年=大正14年8月27日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1925年=大正14年8月27日付夕刊)

「御料林払下げ 代金の捻出と模範林造成方法 けふ県参議会へ附議」 (『静岡新報』 1925年=大正14年8月28日付夕刊)

「開墾地は十年計画で…県の年収百万円に上らん」〔御料林〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年8月28日付)

「鈴川競馬会 九月十一日から三日間」 (『静岡新報』 1925年=大正14年8月29日付)

● 県立プリント『静岡新報 大正14年9月』

「富士山麓印野村に熔岩隧道を発見 世界に誇る縄状熔岩 天然記念物として指定を申請」〔印野の熔岩隧道〕〔印野御胎内飛び地〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月3日付夕刊)

「十二年振りで浅間社の祭典 十四日から三日間 準備に多忙な沼津」〔沼津浅間神社〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月4日付夕刊)

「富士の神秘境に健気な活躍をする 白糸青年団と其事業(一)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月5日付夕刊「青年欄」)

「鍋鶴の一隊が富士川尻に飛んで来た」〔ツル〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月5日付)

「住職夫妻殺し犯人 予審免訴となる 今五日証拠不十分で 大宮の強盗殺人迷宮に入る」〔東漸寺殺人事件〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月6日付夕刊)

「風趣には富むが天産物には恵まれぬ 白糸青年団と其事業(二)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月6日付夕刊「青年欄」)

「〔山梨県の〕岳麓開発〔静岡〕県は異議なし 近く山梨へ回答」〔富士山麓循環鉄道〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月6日付)

「青年も処女会も立派な山持ち 白糸青年団と其事業(三)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月7日付夕刊「青年欄」)

「遺憾な点は補習授業と娯楽 白糸青年団と其事業(三)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月8日付夕刊「青年欄」)

「御殿場口閉山式 六日浅間社で」〔御殿場浅間神社〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月9日付夕刊)

「十年来継続の寒中朝起会 白糸青年団と其事業(四)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月11日付夕刊「青年欄」)

「夜な々お化けが 次郎長の女房三代目お蝶の屋敷に」〔清水次郎長〕 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月11日付)

「実際に即した経営 統計や衛生施設 白糸青年団と其事業(五)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月12日付夕刊「青年欄」)

「処女会と提携して風紀改善に努む 白糸青年団と其事業(六)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月13日付夕刊「青年欄」)

「幹部自慢の自治研究会 白糸青年団と其事業(七)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月14日付夕刊)

「農村青年の指導上注文したい事柄 白糸青年団と其事業(八)」 (『静岡新報』 1925年=大正14年9月15日付夕刊)

「鈴川競馬会 最終日の勝馬」(『静岡新報』1925年=大正14年9月16日付夕刊)

「部課長の更迭で富士山講堂行悩む 設計は出来たが…予算は要求しない」〔林間講堂〕

(『静岡新報』1925年=大正14年9月22日付夕刊) ▲▲

「須走山中に白骨屍体」〔自殺殺人?〕(『静岡新報』1925年=大正14年9月30日付夕刊)

「子伴れの野猪十数頭 岳麓に出没」〔イノシシ〕〔柚野〕(『静岡新報』1925年=大正14年9月30日付)

「浜工四五年生が富士裾野で教練 三島聯隊の援助を受けて 中等学校最初の試み」〔東富士演習場〕〔軍事教練〕(『静岡新報』1925年=大正14年9月30日付)

●県立プリント『静岡新報 大正14年10月』

「一日から売始めた富士駅の弁当 旅客を本意に調理」(『静岡新報』1925年=大正14年10月3日付夕刊)

「基教女子青年会が 富士の裾野で全国的総会 来十六日から四日間」〔キリスト女子青年会〕(『静岡新報』1925年=大正14年10月4日付)

「夥しい野兎が岳麓一帯に棲息 狩猟家偵察に努む」〔野ウサギ〕(『静岡新報』1925年=大正14年10月9日付夕刊)

「富士山頂白 今秋の初雪皚々」(『静岡新報』1925年=大正14年10月10日付夕刊)

「丹那の工事を一年延ばす 仙石さんも困り果て」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1925年=大正14年10月15日付夕刊)

「裾野を縦走し伝説の愛鷹へ ハイキング倶楽部員が夜を冒して大壮挙」(『静岡新報』1925年=大正14年10月16日付)

「浮島沼干拓 実測を継続」(『静岡新報』1925年=大正14年10月23日付夕刊)

「富士山を背景に発つ美しい茶摘人形 二万円を投じて万国博へ緑茶出品」(『静岡新報』1925年=大正14年10月23日付)

●県立プリント『静岡新報 大正14年11月』

「村長さんは一半年期持廻り 村会は炉端で開く 富士山麓の理想郷」〔山梨県富士河口湖町大嵐〕(『静岡新報』1925年=大正14年11月6日付)

「浮島村の埋立調査完了 実現の可否は設計後決定」(『静岡新報』1925年=大正14年11月21日付夕刊)

「策士の謀計で大石寺管長 辞職を声明 檀徒憤激して全国へ飛檄 留任運動を開始す」〔土屋日桂〕〔大石寺住職問題〕(『静岡新報』1925年=大正14年11月26日付)

「辞職強要に憤慨し 檀家代表上京す 大石寺住職問題紛糾」(『静岡新報』1925年=大正14年11月28日付)

●県立プリント『静岡新報 大正14年12月』

「身延鉄道 中学裏停留所 新設」〔国久駅?〕(『静岡新報』1925年=大正14年12月1日付夕刊)

「日桂師の辞職を文部省で調査 上京檀家代表帰る」〔大石寺住職問題〕(『静岡新報』1925年=大正14年12月2日付夕刊)

「大石寺住職は堀慈琳師に決定す 辞意を翻へし就任を快諾」〔大石寺住職問題〕(『静岡新報』1925年=大正14年12月5日付)

「新旧管長の事務引継不能 檀徒に立会を拒まれ 大石寺問題益々紛糾」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月10日付）

「掘り進んだ丹那盆地の真下 厄介な温泉余土現はる」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月17日付夕刊）

「県公認の地方競馬に当局の眼が光る 三島の競馬に農林省係官臨場 今後は厳重に取締る」（『静岡新報』1925年＝大正14年12月18日付夕刊）

「射幸心を唆る 如何はしい競馬 取締りを為すやう地方長官に警告」〔地方競馬〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月18日付夕刊）

「地方の競馬は 騎手を墮落さす 帝国競馬協会談」〔地方競馬〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月18日付夕刊）

「富士山中に凍死体 大宮署から検視に出張」〔大宮口五合目〕〔遭難〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月18日付）▲▲

「凍死者は登山者か 検視には雪解後に出発」〔遭難〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月19日夕刊）▲▲

「御料林焼失 損害二千五百円」〔大淵村〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月19日付夕刊）

「甲府丸滝線は打切り 十六年度から拾ひ上げられるか 大井浦川線熱海下田線 改訂される鉄道計画」（『静岡新報』1925年＝大正14年12月24日付）

「富士山雪深く石室悉く埋まる 検視官登山出来ず」〔遭難〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月25日付夕刊）▲▲

「甲府丸滝鉄道は＝富士身延鉄道会社の手で＝認可は既に確実」〔身延線〕（『静岡新報』1925年＝大正14年12月27日付夕刊）

●県立プリント『静岡新報 大正15年1月』

「大宮浅間神社境内の数百本の桜樹 枯死に瀕す 浅田技師調査に出張」〔浅間大社〕（『静岡新報』1926年＝大正15年1月7日付）

「小作料二割五分の永久減を要求す 上野村の小作人二百五十余名」（『静岡新報』1926年＝大正15年1月9日付夕刊）

「陸軍用地の芝を盗んで売る 首謀者一名検挙さる 犯人は多数の見込み」〔芝生盗掘〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1926年＝大正15年1月9日付夕刊）

「桜樹の枯死は白蟻の発生か 白蟻なれば社殿も危険 浅田技師十日同地へ」〔浅間大社〕（『静岡新報』1926年＝大正15年1月9日付）

「富士の小作者が農民組合組織 あす上野村で発会式」（『静岡新報』1926年＝大正15年1月14日付夕刊）

「大石寺の紛争 東京に移つて拡大 近く檀徒大会開催」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年1月16日付夕刊）

「桜樹の枯死は老齢と皮焼け 枝垂桜に被害が多い」（『静岡新報』1926年＝大正15年1月16日付）

「須走にスキー場新設 籠坂峠附近へ」〔籠坂峠スキー場〕（『静岡新報』1926年＝大正15年1月16日付）▲▲

「檀徒大会を開き 土屋日桂師の擁護を決議 十六日東京市にて」〔大石寺〕（『静岡新報』1926年＝大正15年1月16日付）

報』1926年＝大正15年1月20日付)

「女優の写真を持った富士山の凍死者 十八日漸く屍体を収容 卅歳位の労働者風」(遭難) (『静岡新報』1926年＝大正15年1月20日付)

「地元では檀家大会 近く大石寺に」〔大石寺住職問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年1月23日付夕刊)

「丹那隧道西口 排水工事順調 三月初旬には完成 直ちに掘鑿に着手」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年1月23日付夕刊)

「大宮農生徒 突然発狂 原因は不明」 (『静岡新報』1926年＝大正15年1月30日付夕刊)

「大宮浅間社 厄除祭執行 三日の節分会に」〔浅間大社〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年1月30日付)

「東口の坑夫を西口にへ廻して 谷田山内両隧道工事に着手 熱海線工事進む」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年1月31日付)

「僧と信徒の争議化した大石寺管長問題 新管長は選挙に抛れーと 文部省から有資格者へ通告」〔大石寺住職問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年1月31日付)

● 県立プリント『静岡新報 大正15年2月』

「悪化しさうな上野の小作争議 大宮署で警戒に努む」 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月2日付)

「露骨になった大石寺の醜争 地元檀家も奮起す」〔大石寺住職問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月5日付)

「売却される十万石の大木 斧を入れる大森林」〔御料林〕〔駿甲国境問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月5日付) ▲▲

「僧侶にあるまじき誓約書を作つて 無理矢理に辞職を迫る 白日の下に晒される宗門の醜争」〔大石寺住職問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月10日付夕刊)

「不信認の決議は価値なきものーと 日桂師擁護派は力説」〔大石寺住職問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月10日付夕刊)

「譲り合つて解決か 上野村小作争議 漸次和らぐ」 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月11日付)

「楽観を許さぬ上野の争議 誠意のない地主側 妥協の即答を避く」 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月14日付夕刊)

「醜を天下に曝して けふ管長の選挙 僧侶派の勝利か」〔大石寺住職問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月16日付)

「数日中に終る吸虫病検鏡 近く結果を発表して撲滅を計る」〔日本住血吸虫〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月17日付夕刊)

「尚波瀾を予想さる上野村の争議 誠意を欠く地主側」 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月17日付夕刊)

「大石寺管長に当選した堀慈琳師」〔写真〕〔大石寺住職問題〕 (『静岡新報』1926年＝大正15年2月19日付夕刊)

「大宮署員数名 大石寺へ急行 脅迫事件の取調べ開始 けふは僧侶を喚問」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年2月19日付夕刊）

「日桂師脅迫の僧侶取調べらる 大宮署に召喚され」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年2月20日付夕刊）

「前管長脅迫の証跡を握つて 大宮署引続き活動」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年2月21日付夕刊）

「蓮正寺住職 脅迫を自供 共犯も調べらる」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年2月21日付）

「次郎長の倅 今は保険会社員 入谷清太郎（六八）」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1926年＝大正15年2月26日付夕「浮世さまごま20」）

「日桂師脅迫事件 取調べを終り 意見書類を送局す」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年2月26日付夕刊）

「籠坂峠の大積雪 一尺五寸余で交通途絶」（『静岡新報』1926年＝大正15年2月27日付夕刊）

「富士山を背景に 茶摘の美人人形を 費府の万国博覧会へ中央会から出品」（『静岡新報』1926年＝大正15年2月27日付夕刊）

「全く解決した上野の争議 和解書へ署名捺印 きのみ双方代表者が」（『静岡新報』1926年＝大正15年2月28日付夕刊）

●**県立プリント『静岡新報 大正15年3月』**

「旧管長土屋日桂師 突如大石寺へ急行 醜争漸く解決近づく」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年3月9日付夕刊）

「相伝の会式と血脈相承の儀 大石寺紛争全く解決」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年3月9日付夕刊）

「大石寺檀家総代会」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年3月10日付夕刊）

「富士御料林 第三回入札」（『静岡新報』1926年＝大正15年3月19日付）

「富士製紙汚水問題で漁民八十余名殺到 廿五日は睨合ひで別れたが 今後尚紛糾せん」〔公害〕（『静岡新報』1926年＝大正15年3月27日付）→「[汚水放流口を移転せよ](#)」（1927年＝昭和2年1月20日付夕刊）に続報。

「清水市が産んだ一世の俠骨児 泣く児も鳴を鎮めた次郎長親分の墓」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1926年＝大正15年3月28日付夕刊「墓めぐり（13）」）

「現管長派の不誠意を憤り正法養護会再び起つ 大石寺に又復紛擾」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年3月31日付夕刊）

「初めて行ふ大宮浅間社の桜花祭 五日から一週間に亘り昼夜余興を添えて」〔浅間大社〕（『静岡新報』1926年＝大正15年3月31日付夕刊）

●**県立プリント『静岡新報 大正15年4月』**

「山火事 四百余町歩の山野消失す 富士郡上井出村で」（『静岡新報』1926年＝大正15年4月1日付夕刊）

「迷信家を集める大頂寺の幼児の墓地 大宮署で昨夜取壊す 信仰圧迫は酷いと信者が怒る」（『静岡新報』1926年＝大正15年4月2日付夕刊）

「竣工せる大宮浅間神社と今上天皇お手植えの枝垂れ桜」〔写真〕〔浅間大社〕（『静岡新報』1926年＝大正15年4月3日付夕刊）

「墓屋撤回は迷信打破の目的 衛生上にも有害一と大宮警察署の談」〔大頂寺〕（『静岡新報』1926年＝大正15年4月3日付夕刊）

「八分通り咲いた大宮浅間の桜 連日連夜大賑ひ」〔浅間大社〕（『静岡新報』1926年＝大正15年4月9日付夕刊）

「檀徒大会を開いて紛擾経過を報告 大石寺紛擾終熄か」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年4月11日付夕刊）

「下山客吸集に須走口が努力 種々な設備を施して」（『静岡新報』1926年＝大正15年4月13日付夕刊）

「横の隧道を豎に掘る 厄介な丹那山 出水多く工事進まず 遽かに設計を変更して逃場をも作る」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1926年＝大正15年4月14日付夕刊）

「晋山式を前に解決を見ぬ 大石寺前管長待遇問題 結局紛擾へ逆戻りか」〔大石寺住職問題〕（『静岡新報』1926年＝大正15年4月15日付夕刊）

「富士山一合目 廿五町焼く」〔表口東御料林〕〔ふじねむら〕（『静岡新報』1926年＝大正15年月4日18付）

「駒止めの桜 今が花盛り」（『静岡新報』1926年＝大正15年4月28日付夕刊）

●県立プリント『静岡新報 大正15年5月』

「大宮浅間の流鏝馬会 三日から執行中」〔浅間大社〕（『静岡新報』1926年＝大正15年5月5日付夕刊）

「夢枕に立った神代の大木 直径七尺五寸で長さ四丈 仏の仁三さん大喜び」〔駿東郡北郷村〕（『静岡新報』1926年＝大正15年5月6日付夕刊）

「丹那隧道の難工事を映画に」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1926年＝大正15年5月11日付夕刊）

「富士山に降雪 森林帯まで白皚皚」（『静岡新報』1926年＝大正15年5月14日付夕刊）

「立ち消となつた次郎長の銅像 帰朝歓迎者もない孤影落莫の平野代議士」〔平野光雄〕〔清水次郎長〕（『静岡新報』1926年＝大正15年5月16日付夕刊）

「山林課が卒先して調査を進める森林公園 第一候補地は浜名湖◇続いて富士山温泉地帯」（『静岡新報』1926年＝大正15年5月16日付）

「白糸の滝花盛り 瀑布に映じ天下の美観」（『静岡新報』1926年＝大正15年5月16日付）

「寺院境内地払下問題 文部省は無償意見 大蔵省は全然反対 妥協案作製か」（『静岡新報』1926年＝大正15年5月21日付）

「四十四年間の書類四百余貫 貫当り七十五銭で払下げ 富士郡役所で古物屋へ」〔古文書〕（『静岡新報』1926年＝大正15年5月27日付）

「丹那隧道西口 一年振りで着工 愈々六月一日から」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1926年＝大正15年5月28日付）

●県立プリント『静岡新報 大正15年6月』

「身延線の電化本月中に着工 十二月から電車運転」〔富士身延鉄道〕〔富士—大宮間〕
（『静岡新報』1926年＝大正15年6月1日付夕刊）

「登山者吸収に須走口の準備 昨年の不成績に鑑み」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月12日付夕刊）

「雪解けも早く今は山桜が満開 登山客を待つ富士山」〔吉田口〕（『静岡新報』1926年＝大正15年6月12日付）

「共有林問題で小山町紛擾 農家対商工者の反目 当局大いに憂慮す」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月13日付夕刊）

「電化を前に運転手を養成 身延鉄道で此程から」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕（『静岡新報』1926年＝大正15年6月13日付夕刊）

「富士全山に稀有の大雪 四合目まで白皚々」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月15日付夕刊）

「開山期を前にお守り札を謹製 大宮浅間社で四十三万部を 登山者六万の見込」〔浅間大社〕（『静岡新報』1926年＝大正15年6月15日付夕刊）

「水泳の練習と山岳旅行 県下各中等学校の夏期休暇中の催し」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月17日付夕刊）

「八十九の老体で今夏赤石へ登山 大倉鶴彦翁の山気」〔赤石岳〕（『静岡新報』1926年＝大正15年6月21日付）

「海浜生活と山岳剛健旅行（二）夏休みと学生団」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月24日付）

「富士と阿蘇の登山電車 鉄道省調査にかかる」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月27日付夕刊）

「遺骸を粉にしてお花畑から吹き飛ばす 大倉男の赤石登山は墓場探し 漸く世に出る遠信境」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕（『静岡新報』1926年＝大正15年6月27日付夕刊）

「五万円で買った山が絶大の富源 島田町は之で持てる 風葬は既に遺言済み」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕（『静岡新報』1926年＝大正15年6月27日付夕刊）

「海浜生活と山岳剛健旅行（三）夏休みと学生団」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月27日付夕刊）

「知事を動して濫伐防止 大倉翁に迫る」〔大倉喜八郎〕（『静岡新報』1926年＝大正15年6月27日付）

「富士開山遅る 五月下旬位の気候」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月29日付夕刊）

「海浜生活と山岳剛健旅行（四）夏休みと学生団」（『静岡新報』1926年＝大正15年6月30日付）

●県立プリント『静岡新報 大正15年7月』

「大宮口の開山式十一日執行」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月1日付夕刊）

「富士山の新切手 近く発売さる」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月1日付）

「鈴川競馬会」〔畜産組合联合会〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月3日付夕刊）

「県社は県官が郷社は町村長 例祭の供進使参向」〔郡役所廃止〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月4日付）

「富士山御殿場口 昨日開山式挙行 午後一時浅間神社で」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月6日付)

「大宮口開山 報告祭 七日浅間社で」 [浅間大社] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月7日付夕刊)

「竹馬で富士登山 東北帝大生一行が」 [変わり種登山] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月7日付) → 「大人気を呼んだ竹馬の登山隊」 (7月28日付) に続報。

「七合目以上は残雪が多い 八合目以上の登山は困難 清水土木技手の談」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月8日付夕刊)

「富士山中の警察電話 架設工夫登山」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月8日付夕刊)

「富士山開く (御殿場は五日、須走は十日、大宮口は十一日に)」 [コラージュ] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月9日付夕刊)

「須走口の開山式 十日浅間社で」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月9日付夕刊)

「山林課長 赤石登山 廿六日と決定」 [大倉喜八郎] [赤石岳] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月9日付) → 「どんな条件が持出される？」 (7月25日付)、 「南アルプスへ山林課長出発す」 (7月28日付) などに続報。

「海浜生活と山岳剛健旅行 (五) 夏休みと学生団」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月10日付)

「八合目でラジオを放送する目下準備中」 [ラジオ放送] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月10日付)

「試験を行つて営業を許可す 富士登山案内者に大宮署の新しい試み」 [ガイド試験] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月10日付夕刊)

「残雪の深い富士山嶺お鉢廻りは不可能 雪を掻き分けて足場を作る 山頂を視察した強力者の談」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月11日付夕刊)

「あす挙行する [大宮口] 富士開山式 頂上局も事務開始」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月11日付夕刊)

「十一日の登山者 大宮口から百数十名」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月13日付夕刊)

「富士山奥宮と頂上局へ泥棒 昨秋閉山後の犯行」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月15日付夕刊)

「雪の隧道も出来て頂上の設備整ふ 登山者日増しに増加」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月15日付)

「踏破せよ日本アルプス 仁丹」 [広告] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月15日付)

「山岳礼讃の道者に捧ぐ 森永ミルクキヤラメル」 [広告] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月16日付夕刊)

「登山者増加 頂上大賑ひ 十五日の富士便り」 (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月17日付夕刊)

「全員富士登山 元気で演習を終へ静岡聯隊将卒帰営」 [軍事演習] (『静岡新報』 1926年＝大正15年7月17日付)

「裾野の演習地で看護卒行衛不明 穴に墜ちたか脱走か 静岡聯隊で捜す」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月17日付）

「五位鷲に悩される駿東浮島沼 数百羽群をなし被害夥し 愈一斉に狩立つ」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月17日付）

「早大山岳部 五湖めぐり 十六日大宮へ投宿」〔富士五湖〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月18日付）

「本門寺の霊宝 虫干会 廿二日執行」〔北山本門寺〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月20日付夕刊）

「山上は快晴 登山者俄かに増加」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月20日付夕刊）

「富士裾野に追ひ剥ぎ 強力を荒縄で縛り四十九円奪つた一三怪漢」〔吉田口〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月21日付）

「四合目以上 登山危険 十九日の富士」〔強風〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月21日付夕刊）

「富士山の高さあやしくなって測量の仕直し」〔3778メートル〕〔富士山標高〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月22日付夕刊）→「富士山高くなる」（7月25日付）、
「富士の高さ1米位低くなる」（8月3日付夕刊）に続報。

「水泳の練習や登山に旅立つ 沼津市内の各学生」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月22日付）

「エリオ氏夫人富士へ登る 昨日頂上を極めて御殿場口に下山す」〔外国人登山〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月23日付夕刊）

「登山者の為 臨時列車身延線で運転」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月23日付夕刊）

「富士山だより△二十二日」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月24日付夕刊）

「富士山麓 野鼠退治」〔野ネズミ〕〔上井出〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月25日付夕刊）

「富士山だより」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月25日付夕刊）

「富士山高くなる 陸地測量部実測の結果前測量に狂ひを発見」〔富士山標高〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月25日付）

「どんな条件が持出される？ 大倉山林伐採問題と山林課長等の踏査 踏査日程」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月25日付）

「教育品展へ出品の岳麓の郷土模型」〔大宮小学校〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月27日付夕刊）

「沼津小学生富士登山」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月27日付夕刊）

「富士山だより」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月27日付夕刊）

「平塚小学生が富士へ登る 帰途はマラソン」（『静岡新報』1926年＝大正15年7月28日付夕刊）

「南アルプスへ山林課長出発す 大倉男は八月一日に来県 之も安倍口から登る」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕（『静岡新報』1926年＝大正15年7月28日付）

「大人気を呼んだ竹馬の登山隊 卅名の中二名丈成功」〔変わり種登山〕（『静岡新報』

1926年＝大正15年7月28日付)

「盲啞生十九名 昨日富士へ登山 開山以来最初の事」〔障害者登山〕(『静岡新報』1926年＝大正15年7月28日付夕刊)

「静岡少年団富士登山一行九十名で」(『静岡新報』1926年＝大正15年7月29日付夕刊)

「北山用水取入れの発電所設置は 御免蒙りたい」と四ヶ村代表が陳情」(『静岡新報』1926年＝大正15年7月29日付夕刊)

「大倉男爵 三百名近くで大名登山 冗談から駒が飛出して 一族郎党は大弱り」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕(『静岡新報』1926年＝大正15年7月29日付)

「演習中の兵士 砲車に轢かれ 一名即死一名重傷」〔軍事演習〕(『静岡新報』1926年＝大正15年7月29日付) → 「惨死砲兵告別式」(7月30日付夕刊) に続報。

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年7月29日付夕刊)

「惨死砲兵告別式 けふ三島で」〔軍事演習〕(『静岡新報』1926年＝大正15年7月30日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年7月30日付夕刊)

● 県立プリント『静岡新報 大正15年8月』

「一万三百尺の高峰さして 大倉鶴彦老一行愈々明日 静岡出発」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月1日付夕刊)

「翁は駕で 随行は徒歩で あすは玉川まで」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月1日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月1日付夕刊)

「自分の持ち山では我儘が出る 静岡駅へ降りた大倉男赤石へ大名登山」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月2日付)

「山籠に揺られ四時落合に着く」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月2日付)

「富士の高さ1米位低くなる 今度は箱根から測る＝川名技師は語る」〔富士山標高〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月3日付夕刊)

「山かごの鶴彦翁◇赤石への大名登山」〔写真〕〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月3日付夕刊)

「山かごの鶴彦翁◇赤石への大名登山」〔写真〕〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕大正15年8月3日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月3日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月4日付夕刊)

「鶴彦翁一行の赤石登山 翁の注文で風呂桶も用意し赤石めざして出発 井川にて 鈴木特派員」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月4日付)

「アメリカ村が給水を断られ 大会を開らいて善後策協議 御殿場地方大渇水」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月4日付)

「富士登山の映画を 文部省で作製」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月4日付) → 「岳麓の風光を」(8月10日付) に続報。

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月5日付夕刊)

「大名行列、大日峠へ 柿島のツリ橋にて 大倉一行」〔写真〕〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕

(大正 15 年 8 月 6 日付夕刊)

「大倉山林の伐採差支へあるまい 南アルプス実地踏査から帰つた中村山林課長語る」〔大倉喜八郎〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 6 日付夕刊)

「富士山頂で百額揮毫 安田呉竹氏が」〔金明水〕〔回数登山〕〔変わり種登山〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 6 日付夕刊)

「鶴彦翁一行の赤石登山 お山は大荒れ 明日はアブない 四日榎島にて 鈴木特派員」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 6 日付夕刊)

「お山は快晴 愈々赤石へ けふ下山の予定」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕 (大正 15 年 8 月 6 日付)

「泰山鳴動して鼠一疋出ず アツケなかつた大宮町会」 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 6 日付)

「新橋青年勝つ 富士登山競走」〔富士駅伝登山競走〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 6 日付)

「丹那隧道奥で空洞を発見 又しても工事に支障 支保工を施して作業」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 7 日付夕刊)

「富士山だより」 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 7 日付夕刊)

「高潔 抜群 最上の品質 無類の廉価 此の二は富岳の如く 花王石鹼」〔広告〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 7 日付夕刊)

「井川村民の歓迎と仮屋に元気な大倉翁」〔写真〕〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕 (大正 15 年 8 月 8 日付夕刊)

「富士山だより」 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 8 日付夕刊)

「鶴彦翁一行の赤石登山 山頂に国旗を掲げて万歳を三唱 七日赤石山頂にて 鈴木特派員初」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 9 日付)

「岳麓の風光を 映画に収めて教育の資料に公開 文部省社会課の新計画」 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 10 日付)

「富士山だより」 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 10 日付夕刊)

「富士山で頓死す 毛利弁護士が」〔遭難〕〔毛利文七〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 10 日付夕刊)

「山から山へ キャンプの朝に 昼のランチに 牛肉宝来煮 松下商店」〔広告〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 10 日付)

「赤石山頂で万歳歓呼の大倉翁一行」〔写真〕〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕 (大正 15 年 8 月 11 日付夕刊)

「富士山だより」 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 11 日付夕刊)

「鶴彦翁の一行昨夜井川宿り けふ午後静岡へ」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 11 日付)

「けふ帰京する大倉翁 大東館に投宿」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 11 日付)

「十二を頭に四人姉妹富士山頂を極む 付添ひの強力もなく大元気で」〔年少者登山〕 (『静岡新報』 1926 年=大正 15 年 8 月 12 日付夕刊)

「契約を無視して防風林を伐る 元吉原村民憤慨して保安林編入方を陳情」 (『静岡新報』

1926年＝大正15年8月12日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月12日付夕刊)

「四歳と九歳の子供が母と共に富士登山 お山初まつて以来のレコード」〔年少者登山〕
(『静岡新報』1926年＝大正15年8月12日付)

「南アルプスの神秘境 赤石登山記 一、お山の沿革」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月12日付)

「県道視察を兼ねて 知事が富士登山 けふ午後一時出発」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月13日付夕刊)

「大倉男無事帰京す」〔大倉喜八郎〕〔赤石岳〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月13日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月13日付夕刊)

「南アルプス赤石の大雪渓」〔写真〕(『静岡新報』1926年＝大正15年8月13日付)

「南アルプスの神秘境 赤石登山記 二、物凄き林相」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月13日付)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月14日付夕刊)

「南アルプスの神秘境 赤石登山記 三、大日峠の険」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月14日付)

「学務部長登山」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月15日付夕刊)

「九歳の少年が一人で富士登山 活動写真機を携へ風景を撮影しつつ」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月15日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月15日付夕刊)

「大宮自動車 運転時間改正」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月17日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月17日付夕刊)

「南アルプスの神秘境 赤石登山記 四、不遇村井川」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月17日付)

「南アルプスの神秘境 赤石登山記 五、南画の連続」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月18日付)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月19日付夕刊)

「国立公園の前提 施業に手心するやう営林署へ訓令」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月20日付夕刊)

「無免許で馬を屠殺し 区民全部検挙さる 肉の分配から傷害事件を起す 上井出村人穴の騒ぎ」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月20日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月20日付夕刊)

「唾者を装ふ少年富士へ登山 静岡の窃盗犯人か 大宮署で各方面へ手配」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月22日付夕刊)

「富士山だより」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月22日付夕刊)

「八分にされた一御嶽教の信者 凄い予言に村民慄え上る 静岡署でも内偵中」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月26日付)

「富士閉山期近づく 電話器取外しを始む」(『静岡新報』1926年＝大正15年8月28日付夕刊)

「富士山頂の縊屍体 死後一年を経過 廿六日仮埋葬」 (『静岡新報』1926年=大正15年8月29日付夕刊)

●**県立プリント『静岡新報 大正15年9月』**

「富士の登山者七万余に達す 女子の激増が目につく 大宮口は第二位」 (『静岡新報』1926年=大正15年9月3日付夕刊)

「けふ長尾峠から 雄大な富士山を御眺望遊ばさる…瑞国皇太子殿下」〔外国皇族〕(『静岡新報』1926年=大正15年9月17日付)

「大富士の雄姿を限りなく御讚美 湖畔のご遊覧を終らせられて 瑞国両殿下御西下 精進湖畔にて—鈴木特派員」〔外国皇族〕(『静岡新報』1926年=大正15年9月9日付)

「緑の河口湖畔に 考古学上の参考品を得させられて 瑞国殿下精進湖へ 精進湖にて鈴木特派員」 (『静岡新報』1926年=大正15年9月9日付)

「浮島沼干拓事業期成同盟会設立 愈々大運動を開始」 (『静岡新報』1926年=大正15年9月21日付夕刊)

●**県立プリント『静岡新報 大正15年10月』**

「丹那隧道工事に疑獄発生か 昨朝来の活動で直に予審を開始」〔沼津検事局〕〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月1日付)

「丹那の疑獄 愈々具体化す 数名三島署へ召喚され 深夜まで調べられる」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月2日付)

「芸妃を召喚して 引続き取調べ」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月2日付)

「富士山雪降る」 (『静岡新報』1926年=大正15年10月2日付)

「富士の天辺に測候所建設 材料は全く引揚げ済み 組立は来年の七月」〔頂上気象観測所〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月10日付)

「三島地内に入る熱海線工事」〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月15日付夕刊)

「岳麓一帯に 気温下がる 富士は大雪」 (『静岡新報』1926年=大正15年10月20日付夕刊)

「嶮崖を攀るも尚ほ平地に行くが如し 大黒葡萄酒」〔広告〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月22日付)

「浮島沼干拓 農相視察」 (『静岡新報』1926年=大正15年10月24日付)

「浅間社強力が雪の頂上を極む 森林帯悉く紅葉し美観此の上もない」〔雪中登山〕〔浅間大社〕〔吉野育太郎〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月25日付)

「徳富氏詩碑除幕式 廿四日盛大に」〔徳富蘇峰〕 (『静岡新報』1926年=大正15年10月26日付夕刊)

「太郎坊以上 白皚々」 (『静岡新報』1926年=大正15年10月29日付)

●**県立プリント『静岡新報 大正15年11月』**

「岳麓の保勝上新送電線に反対 東部県議と町村長」〔景観〕 (『静岡新報』1926年=大正15年11月4日付)

「全国の優秀馬を集め競馬大会を開催 岳南競馬場拡張祝賀を兼ね 来月五日から四日間」 (『静岡新報』1926年=大正15年11月10日付夕刊)

「雪の富岳写生に 小林観爾画伯 近く来岡す」 (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 11 月 26 日付夕刊)

「スタール博士 三方原を視察 一両日滞在の予定 浜松は三度目 お札博士語る」 (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 11 月 26 日付)

● 県立プリント『静岡新報 大正 15 年 12 月』

「鈴川競馬会 一月五日から開催」 (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 1 日付夕刊)

「水野氏令息が白骨を発見 熱海岩戸山観音像 探検に赴き頂上で」 [水野直] (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 8 日付夕刊)

「身延線電化 明年二月から 各駅改築も略完成」 [富士身延鉄道] (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 11 日付夕刊)

「神官を非常招集し 御平癒祈願祭 一昨夜大宮浅間社で」 [浅間大社] [大正天皇] (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 19 日付)

「実査完了した山麓電鉄計画いよいよ本省へ進達」 (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 21 日付)

「宮司以下全員 御平癒を熱祷 大宮浅間神社内に 日夜潔斎参籠して」 [浅間大社] [大正天皇] (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 22 日付夕刊)

「聖上陛下お手植の枝垂桜 大宮浅間神社神苑に於ける」 [大正天皇] [浅間大社] (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 23 日付夕刊)

「大行天皇御尊骸 廿七日夜皇城へ御帰還」 [大正天皇] (『静岡新報』 1926年=大正 15 年 12 月 26 日付)

■ 1927年=昭和2年

● 県立プリント『静岡新報 昭和2年1月』

「富士山麓一帯地鳴り震動 井水や湖も減水し住民は戦々兢兢」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月5日付)

「岳麓鳴動説岩石爆破の音か 井水の減少は降雨なき為 富士根村役場員談」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月7日付夕刊)

「天子ヶ岳の山頂に 長慶天皇の御陵らしい丘陵があるとの伝説 白糸村で慎重研究」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月9日付夕刊) → 「山頂の発掘は思止り」 (6月18日付夕刊)

「無法な東力の山麓無断伐採 内山組合の憤慨と県保安課の取締り」 [東京電力] [送電線] (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月12日付)

「富士裾野に於ける演習日割決定」 [東富士演習場] (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月20日付夕刊)

「白糸滝 氷結の美観」 [白糸の滝] (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月25日付)

「汚水放流口を移転せよと 富士東部九ヶ村から富士製紙に要求す」 [公害] (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月25日付夕刊)

「氷点下十六度 岳麓の寒気」 [須走口] (『静岡新報』 1927年=昭和2年1月26日付夕刊)

「飛行家の悩む富士の上空 フエン風捲き起こし」〔乱気流〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年1月31日付）

●**県立プリント『静岡新報 昭和2年2月』**

「汚水放流口の位置変更を 地元村民が結束して 富士製紙本社に迫る」〔公害〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月1日付）

「大宮浅間社 献詠会歌題決る」（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月1日付夕刊）

「大宮浅間豆撒」（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月1日付夕刊）

「雑踏を予想される鈴川毘沙門天 毎年十万以上の人出」（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月9日付）

「改元記念 富士身延鉄道株式会社」〔広告〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月15日付）

「大降雪 白糸附近で積雪七八寸」（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月24日付）

「汚水放流口変更の要求書を提出 組合から富士製紙へ」〔公害〕〔沼川石水門組合〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月25日付夕刊）

「丹那隧道坑夫 作業中重傷す 岩石の破片が当る」〔丹那トンネル事故〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月25日付夕刊）

●**県立プリント『静岡新報 昭和2年3月』**

「鈴川競馬大会 出場馬数百数十頭に上らん」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月1日付）

「初の国立公園 第一候補地は上高地」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月2日付夕刊）

「丹那トンネル赤心団総会 けふ午前開会」〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月2日付夕刊）

「三島二聯隊で 軍馬の碑を建立 各将卒が朝夕黙禱 陸軍部内の美談となる」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月4日付夕刊）

「漸く樂觀さる宗教法案 政府の泣を入れて 研究会通過に努む」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月4日付夕刊）

「鈴川競馬大会 第二日勝馬」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月4日付夕刊）

「鈴川競馬大会 けふが最終日」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月6日付）

「依然湧水甚しく 丹那隧道難工事 排水坑の完成に努む」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月9日付夕刊）

「鈴川競馬 四日目の勝馬」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月9日付夕刊）

「三島沼津間は工事後廻し 用地は地元へ貸付く 全力を丹那隧道へ注ぐ 熱海線工事」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月17日付夕刊）

「国立公園建設請願書を提出 関係地方の調印を纏めて十五日帝国議会へ」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月17日付夕刊）

「飛行機から射弾観測 裾野で聯合演習」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月19日付）

「富士山麓の鳥類調べ 農林省の調査報告（一）」（『静岡新報』1927年＝昭和2年3月22日付夕刊）

「富士山麓の鳥類調べ 農林省の調査報告(二)」(『静岡新報』1927年=昭和2年3月23日付夕刊)

「富士山麓の鳥類調べ 農林省の調査報告(三)」(『静岡新報』1927年=昭和2年3月24日付夕刊)

「富士山麓の鳥類調べ 農林省の調査報告(四)」(『静岡新報』1927年=昭和2年3月25日付夕刊)

「熱海線大竹に 小駅設置の運動 駿豆線の連絡と共に」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔函南駅?〕(『静岡新報』1927年=昭和2年3月27日付夕刊)

「丹那隧道の殉難者 七回忌の法要 廿七日盛大に営む 当時を偲ぶ涙新たに湧く」〔丹那トンネル事故〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1927年=昭和2年3月30日付夕刊)

●**県立プリント『静岡新報 昭和2年4月』**

「富士に語る(上) 井東憲」(『静岡新報』1927年=昭和2年4月3日付夕刊)

「富士に語る(下) 井東憲」(『静岡新報』1927年=昭和2年4月4日付)

「富士身■ 電化工■」〔富士身延鉄道〕〔電化工事〕(『静岡新報』1927年=昭和2年4月5日付夕刊)

「富士の頂上へ測候所を設け 登山期中天候観測」〔頂上気象観測所〕(『静岡新報』1927年=昭和2年4月8日付夕刊)

「組合の要求を会社で拒絶 汚水放流口問題で 組合から再交渉」〔公害〕〔沼川石水門組合〕〔富士製紙〕(『静岡新報』1927年=昭和2年2月9日付夕刊)

「町田農相 浮島沼視察」(『静岡新報』1927年=昭和2年4月10日付夕刊)

「白糸滝附近の桜花 数日間が見頃 瀑布に映えて美観を呈す」〔山室営業権〕(『静岡新報』1927年=昭和2年4月16日付夕刊)

「八合目以上の岩室営業を山梨県人に許可したとて須走口営業者憤る」〔八合目石室紛争〕〔富士山須走口山内営業組合〕〔菅沼平作?〕〔浅間大社〕(『静岡新報』1927年=昭和2年4月19日付) ▲▲

「信者から集めた参詣講金を横領 御嶽教々導職捕はる」(『静岡新報』1927年=昭和2年4月20日付夕刊)

「『富士山』創造 井東憲」(『静岡新報』1927年=昭和2年4月25日付「学芸」)

「富士裾野の陸軍演習 今秋まで引続いて挙る」(『静岡新報』1927年=昭和2年4月29日付夕刊)

●**県立プリント『静岡新報 昭和2年5月』**

「富士桜が綻び鶯が鳴く 須走口の昨今」(『静岡新報』1927年=昭和2年5月3日付)

「須走口取締り」〔富士山須走口山内営業組合〕〔菅沼兵作?〕(『静岡新報』1927年=昭和2年5月3日付)

「唸りを立てて大氷塊落下 危険な富士の雪崩 三合目の石室を全壊」〔御殿場口〕(『静岡新報』1927年=昭和2年5月4日付夕刊)

「『富士山』編輯経営に就て(上) 松平義央」〔雑誌『富士山』〕(『静岡新報』1927年=昭和2年5月8日付夕刊)

「『富士山』編輯経営に就て(下) 松平義央」〔雑誌『富士山』〕(『静岡新報』1927年=昭和2年5月8日付夕刊)

7年＝昭和2年5月8日付夕刊)

「隧道工事から灌漑用水欠乏 用水路敷設問題で 函南村二派に分れて紛擾」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月10日付)

「富士山と浜名湖 茶や蜜柑稲作を 農林省で活動写真に 昨日から映し初む」〔映画〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月12日付夕刊)

「大宮白糸間 電鉄計画 資金五十万円で」〔富士大石寺電気鉄道〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月18日付)

「士官校支那学生が裾野で演習中」〔陸軍士官学校〕〔東富士演習場〕〔中国人〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月21日付)

「十里木街道改修成る」(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月23日付)

「国立公園具体化し 四大候補地調査 内務省いよゝ乗出す」(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月24日付)

「白糸瀑畔の躑躅と藤花 廿五六日が見頃」〔白糸の滝〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月25日付)

「裾野演習予行 池田の作業地で 工兵迎へて静聯で」〔陣地攻防演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月27日付)

「大演習観兵式 陪観者希望者取纏」〔特別大演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月27日付)

「裾野を利用し酪農場を経営 既に牧草播種に着手」〔御殿場販売畜産組合〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月29日付)

「難工の丹那トンネル 又大難関に逢着 工程三分の一で遂に絶望か 小川鉄相検分に出張」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月29日付夕刊)

「大宮町東部に小学校を増築 敷地の地均しを行ひ 六月一日から着工」〔大宮町東部小学校〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年5月31日付夕刊)

●県立プリント『静岡新報 昭和2年6月』

「雪中富士登山 須走口から」〔雪中登山〕〔黒田初子〕〔外国人登山〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年6月1日付夕刊)

「病源地帯に小学校は危険一と 大宮町東部小学校 新築に大反対起る」(『静岡新報』1927年＝昭和2年6月2日付)

「治郎長の塑像 彫刻漸く終る 来る九月日本平の山上に 除幕式挙行之筈一」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年6月3日付)

「富士開山準備」〔御殿場口〕〔須走口〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年6月4日付)

「ハンガリーの山岳家 雪中の富士登山」〔雪中登山〕〔外国人登山〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年6月6日付)

「工事を妨げた坑内の湧水 去月末ピタリと止まる 丹那西口活気づく」〔丹那トンネル〕〔大出水〕〔熱海線〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1927年＝昭和2年6月7日付夕刊)

「八合目以上は氷の山に化して 目に新しかつた 米登山家ベスチ氏の讃辞」〔雪中登山〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月12日付）

「新兵器を網羅して大攻防演習 今秋九月裾野に挙行 歩砲工空の四兵科が参加」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月15夕刊日付）

「登山客を誘致し……伊豆遊覧客の吸収策に奔走 ポスターや案内所で」〔富士下山客〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月15日付）→「富士登山客を温泉場に吸収」（6月19日付夕刊）、「富士登山口に宣伝部を置き」（6月25日付夕刊）に続報。

「鈴川競馬大会」（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月17日付）

「廿一日一番から いよ電車運転 富身鉄道電化完了」（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月17日付）

「地方競馬復活 愈よ新規則を制定し 七月中に実施の方針」（『静岡新報』1927年＝昭和2年2月18日付夕刊）

「山頂の発掘は思止り 一行空しく下山 田貫沼池畔に発見した古墳を 更に近く実地調査」〔長慶天皇〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年5月18日付夕刊）

「山頂の参籠室は浅間社で直営 一般登山者に開放 大宮口の開山準備進む」〔浅間大社〕〔奥宮〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月19日付夕刊）

「横手沢を挟んで 猛烈な用水争ひ 今暁上野北山両村民大挙出動 形勢刻々不穏化す」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月19日付夕刊）

「富士登山客を温泉場に吸収 伊豆の各種団体が提携して猛運動を開始」（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月19日付夕刊）

「双方の主張強硬で依然睨合ひの姿 空気険悪な岳麓の用水争ひ 大宮署警戒に努む」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月21日付夕刊）

「四十年前には流血の争闘 調停者の奮起を一般に熱望」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月21日付夕刊）

「長慶天皇御陵墓は狸沼附近が有力 曾つて同所で発掘した曲玉は 明らかに当時のもの」〔田貫沼〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月22日付夕刊）

「田貫沼で発掘した曲玉」〔写真〕〔長慶天皇〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月22日付夕刊）

「植付不能の水田 五百町歩に達す 日照に苦む東駿地方 一週間も照が続けば苗も枯死」〔旱魃〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月22日付夕刊）

「分水地点を大宮署員が厳戒 依然暗雲頻りに去集」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月22日付夕刊）

「洲浚した三名引致さる」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月22日付夕刊）

「富士山上降雪」（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月24日付）

「富士登山口に宣伝部を置き 登山客を伊豆へ誘致 温泉組合で具体案を作り」（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月25日付夕刊）

「降りさうも無い昨今の天候 二日照り続けば 水争ひが起きさうな形勢」〔旱魃〕〔水争い〕〔駿東郡〕（『静岡新報』1927年＝昭和2年6月25日付夕刊）

「大宮西部に新駅設置」〔大宮西町駅〕〔西富士宮駅〕（『静岡新報』1927年＝昭和

2年6月25日付夕刊)

「頂上と八合目で気象放送を受信 日本放送協会関東支部できのふ本県へ手続」(『静岡新報』1927年=昭和2年6月25日付)

「田子の浦地続きの保安林を耕し 六十余名調べらる」(『静岡新報』1927年=昭和2年6月26日付夕刊)

「用水を送って植付を為さしむ 白糸村の二区民が 上野 富丘の二区に同情して」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕(『静岡新報』1927年=昭和2年6月28日付夕刊)

「富士山頂の高気象観測所 佐藤技師の実地検分」〔頂上気象観測所〕〔佐藤順一〕(『静岡新報』1927年=昭和2年6月28日付)

「富士登山案内 富士教育会発行」(『静岡新報』1927年=昭和2年6月28日付) ←
静岡県立図書館「おうだんくんサーチ」でヒットせず。

●県立プリント『静岡新報 昭和2年7月』

「青木区民百余名 横手沢を襲撃し 調停案を無視し洲浚ひを行ふ 岳麓の水争争議再び重大化す 大宮署徹宵して厳戒 洲浚ひした区民 二十余名召喚さる 山崎事務官急行す 分水点の決定は廿一日以後」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月1日付夕刊) →「横手沢用水」(8月17日付夕刊)に後日談。

「大洞山の消えたのを 四年後に発見す 根府川上流で海拔千五百尺の山 丸で夢のやうな話 陥没説は怪しい 中村博士談」〔関東大震災〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月2日付夕刊)

「早い富士登山 無事頂上を極む」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月2日付夕刊)

「富丘の陳謝で一先づ解決 暴挙者数名は留置され 大宮署で調べらる」〔上野村〕〔北山村〕〔水争い〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月3日付)

「誠心高女生 富士登山 廿八日に出発」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月4日付)

「大宮口からの登山は楽だ 他は未だ雪が深い 観察した—三崎禰宜談」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月5日付夕刊)

「富士開山式」〔御殿場口〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月5日付)

「富士山頂上の気象観測所 本年から開設」〔頂上気象観測所〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月6日付夕刊)

「登山期切迫で多忙な登山口 客の吸収に大活動」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月6日付夕刊)

「富士開山準備祭 昨日厳かに執行 御田植祭と併せて」〔お田植祭〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月9日付夕刊)

「登山放送延期」〔鋏守安太郎〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月9日付)

「女師生登山」〔静岡市女子師範学校〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月9日付)

「登山直通列車と自動車の便」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月10日付)

「けふ奥の宮で開山祭執行 残雪の少ない各登山路 頂上は雪解で美観」〔浅間大社〕〔奥宮〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月12日付夕刊)

「大宮西町駅」〔西富士宮駅〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月13日付夕刊)

「富士登山と天幕生活 少年団の催し」〔静岡市少年団〕(『静岡新報』1927年=昭

和2年7月13日付夕刊)

「三合目以上も廿日頃には完成 立派になる登山道」〔須走口〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月13日付)

「郡民総動員の大演習举行 富士郡で十二月十日 南北二軍に分けて」〔富士郡在郷軍人聯合〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月14日付夕刊)

「十二日の登山者 三百名に達す」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月14日付夕刊)

「登山自動車組合を組織」〔御殿場口〕〔富士登山自動車組合〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月14日付)

「富士山中の電話開通」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月15日付夕刊)

「電通社員の富士登山競争 廿一日吉田口から 頂上で通信部長の送別会」〔第3回富士登山競争〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月16日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月16日付夕刊)

「名声 富士よりも高し 花王石罅」〔広告〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月18日付)

「富士登山と赤沢山天幕生活 静岡少年団の催し」〔静岡市少年団?〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月19日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月19日付夕刊)

「次郎長親分に共鳴した塩原氏 降つても照つても 梅蔭寺のお墓へ日参」〔清水次郎長〕〔塩原時三郎〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月20日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月20日付夕刊)

「未明に登山して一気に帰営 静岡聯隊きのふ裾野板妻庵舎から」〔軍事演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月20日付)

「電通社長登山」〔第3回富士登山競争〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月20日付)

「登山臨時列車」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月20日付)

「富士登山客の伊豆誘致協議」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月20日付)

「登山客を乗せた自動車?落す 数名重軽傷を負ふ」〔須走口〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月21日付夕刊)

「富士山で昏倒」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月21日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月21日付夕刊)

「歓迎 電通富士登山隊 森永ミルクキャラメル」〔広告〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月21日付)

「大宮小学校 富士登山」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月22日付)

「電報通信社の登山競走 昨夜御殿場町繁多屋で本社主催の歓迎会」〔電通登山競走〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月23日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月23日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月24日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1927年=昭和2年7月25日付)

「登山者を襲った辻強盗毆らる 金剛杖で頭部を」〔富士表登山白糸口〕(『静岡新報』1927年=昭和2年7月26日付夕刊)

「地方競馬規則 大改正断行 来十日頃公布されん」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月26日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月26日付夕刊)

「富士山頂結霜 今暁三十三度」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月27日付夕刊)

「山頂上奥宮で御安産祈願 明二十七日富士山にて」 [香淳皇后] (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月27日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月27日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月28日付夕刊)

「御着带式当日 御安産祈願 大宮と富士浅間社で 御神符を奉持宮司上京」 [香淳皇后] (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月29日付)

「山階宮富士へ御登山」 [皇族登山] (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月29日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月30日付夕刊)

「富士登山に少年団員出発」 [静岡市少年団] (『静岡新報』 1927年=昭和2年7月30日付)

● 県立プリント『静岡新報 昭和2年8月』

「雷鳴と共に廿分間の降雪 きのふの富士山」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月1日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月2日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月3日付夕刊)

「登山者の必携品 森永ミルクキヤラメル」 [広告] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月3日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月4日付夕刊)

「横須賀県人会富士登山を決行」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月4日付)

「国立公園設置計画 癒明年度より実現 官民合同の国立講演調査会を設け 全国に七箇所を選定」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月5日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月5日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月6日付夕刊)

「富士五湖巡り 田方実業団事務署員が」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月6日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月7日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月9日付夕刊)

「熱海線大竹に停車場設置を 地元から鉄道省へ運動 実現の曙光を認む」 (丹那トンネル) [東海道本線] [函南駅?] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月10日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月10日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月11日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月13日付夕刊)

「架橋演習は中止して富士裾野へ けふ二俣を出発」 [東富士演習場] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月14日付)

「白糸滝に於ける秩父宮殿下 滝へ残された御高德の御逸話」 [写真] [白糸の滝] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月14日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月14日付夕刊)
「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月16日付夕刊)
「横手沢用水 取入口大改築 関係者が協議会を開く」 [上野村] [北山村] [水争い]
(『静岡新報』 1927年=昭和2年8月17日付夕刊)
「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月17日付夕刊)
「次郎長の銅像 十七日地鎮祭」 [清水次郎長] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月17日付夕刊)
「斃馬を喰ひ 十二名検挙さる」 [ふじねむら] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月19日付夕刊)
「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月19日付夕刊)
「三歳の幼児が富士へ登山 生後卅三日目にも登山 富士登山の最年少者」 [年少者登山]
(『静岡新報』 1927年=昭和2年8月20日付夕刊)
「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月20日付夕刊)
「富士山便り」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月21日付夕刊)
「登山者戦々競々」 [遭難] [吉田口八合目で落石] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月23日付) →次項も同じ事故のこと。
「岩石登山路に落下 登山者一名惨死」 [遭難] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月23日付)
「登山者の遺失か 富士四合目に登山用具」 [遭難] [大宮口] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月25日付夕刊)
「九ヶ年振りて帰つた白骨 生きてゐるかとも思つたにと一遭難者の父語る」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月25日付夕刊) ← 読めないのマイク
「富士自動車で新線運転開始」 [路線バス] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月25日付)
「富士電話撤廃」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月26日付夕刊)
「今後二年半で丹那隧道開通 八田次官も視察した 志賀工務課長語る」 [丹那トンネル]
[東海道本線] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月26日付夕刊)
「板妻廠舎飛行場 廿五日竣工す」 [東富士演習場] (『静岡新報』 1927年=昭和2年月日付)
「怪僧豊口日眼 再び現はる 天子ヶ岳の山麓に『三災七難を』説く」 [豊口茂治] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月27日付夕刊) →「白糸滝座談会(二)」(1929年=昭和4年8月10日付)に関連記事。
「昨年より二割多い大宮口の登山者」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月27日付)
「寺院建物には 家屋税を課せず」 (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月27日付)
「身延線工事を鉄道聯隊が応援 九月中旬出動して 身延甲府間完成は明春四月」 [富士身延鉄道] (『静岡新報』 1927年=昭和2年8月31日付)
●県立プリント『静岡新報 昭和2年9月』
「三島聯隊 裾野へ 出発準備成る」 [東富士演習場] (『静岡新報』 1927年=昭和2年9月4日付夕刊)
「二週間に亘る南京虫征伐 七日から静岡聯隊で 演習参加の不在中に」 [軍事演習] [害

虫駆除] (『静岡新報』1927年=昭和2年9月6日付)

「鈴木氏所有の 孟宗竹に開花」〔竹の花〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月6日付)

「裾野陸軍攻防演習に聖上陛下御観戦 政務の御都合から御予定は十九日一日と御変更」〔昭和天皇〕〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月7日付)

「難工の丹那トンネル 西口完成近し」〔東海道本線〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月7日付)

「所沢気球隊 裾野演習に参加 帰隊後千葉へ移転」〕〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月9日付)

「御殿場役場出張所 駅前に設けて演習の世話を」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月9日付)

「被害甚しかつた大宮地方の出水 身延線漸く開通す」〔豪雨〕〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月13日付夕刊)

「富岳の額面用写真 本県から献上申上ぐ」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月16日付夕刊)

「陣地破壊十五センチ加納砲 富士裾野陣地攻防演習に使用」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月16日付夕刊)

「八ヶ師団の精鋭と新兵器を網羅し 秋深む裾野に切つて落される 陣地攻防大演習の幕御殿場にて 鈴木特派員報 廳で展開される激戦を前に 攻防両軍の備へ？」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月18日付夕刊)

「梨一籠をを献上 聖上陛下に 本県から 演習天覧の後 主陣地後巡覧 聖上、十九日の後予定」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月18日付夕刊)

「御野立所の全景一」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕〔写真〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月19日付)

「偵察戦に入つて 秋雨の夜を徹す 演習気分いよゝ濃厚 御殿場町にて一鈴木特派員報 従来にない大規模な演習 新戦術の研究が目的 統監一武藤大将談」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月19日付)

「聖上、御迎への準備全く成る 戸毎に国旗を掲げ 行幸を待つ演習地の一带」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月19日付)

「二時間半の御親閲 終て戦線一带を御視察 実戦其のまゝに展開した凄じい場面！御殿場にて 特派員 鈴木秀夫」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月20日付夕刊)

「燦たる天皇旗を先頭に一聖上・演習場着御(前方より御五人目)」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕〔写真〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月20日付夕刊)

「御野立所に於ける御親閲」〔写真〕〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月20日付夕刊)

「聖上を御迎へした裾野一带の賑ひ」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1927年=昭和2年9月20日付夕刊)

「近世化学の粋を集めた裾野十里の戦線 聖上の臨幸を仰いで 士気弥が上に昂る」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕（『静岡新報』1927年=昭和2年9月20日付夕刊）

「岩石で埋つた白糸の滝壺 白糸上井出の両村で近く滝壺浚いの大工事」〔豪雨〕（『静岡新報』1927年=昭和2年9月21日付夕刊）

「新兵器の粋を集めた攻防演習終了す 壮快だつた最後の衝突 けふからは砲兵の実弾射撃」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1927年=昭和2年9月22日付）

「稀有の寒気で富士は大雪 八合目まで白皚々 昨年より十日早い」（『静岡新報』1927年=昭和2年9月24日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.98 昭和2年10月1日～15日』

「鳥獣の繁殖夥しい富士山麓の一带 猟友会員が密猟監視」（『静岡新報』1927年=昭和2年10月5日付夕刊）

「競馬場存置方 関係代表陳情」（『静岡新報』1927年=昭和2年10月7日付）

「静養中の東京高校生 富士山麓で縊死 強い神経衰弱から」（『静岡新報』1927年=昭和2年10月11日付夕刊）

「閉山後の富士 積雪は少ない 夕暮れの眺め美はし」（『静岡新報』1927年=昭和2年10月16日付夕刊）

「国立公園の選定 第一次候補地六箇所」（『静岡新報』1927年=昭和2年10月25日付夕刊）

「富士山上降雪」（『静岡新報』1927年=昭和2年10月30日付）

「競馬統一に付 畜産聯合協議会」（『静岡新報』1927年=昭和2年10月30日付）

「畦道を遮断され 区民憤激す 百数十名大挙して村議方を訪れ復旧を迫る」〔伝法〕（『静岡新報』1927年=昭和2年11月5日付夕刊）

「略成案を得たる国立公園法案 調査会の設置に依り 全国候補地より選定す」（『静岡新報』1927年=昭和2年11月6日付夕刊）

「富士の大雪 山麓まで白皚々」（『静岡新報』1927年=昭和2年11月10日付夕刊）

「岳麓早くも氷を見る」（『静岡新報』1927年=昭和2年11月10日付）

「求刑を裏切り よねに無罪 徳一に十五年の判決 上井出の局長殺し公判」〔上井出長殺し〕〔上井出郵便局長殺人事件〕（『静岡新報』1927年=昭和2年11月12日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.99 昭和2年11月16日～12月30日』

「大宮町長の後任で 又一波瀾か」（『静岡新報』1927年=昭和2年11月19日付）

「気象台の佐藤技師 雪中の気象観測 十二月下旬富士登山して」〔頂上気象観測所〕〔佐藤順一〕（『静岡新報』1927年=昭和2年11月25日付夕刊）

「三島町以西の熱海線工事 新駅位置決定と共に 着工方の運動開始」〔東海道本線〕（『静岡新報』1927年=昭和2年11月27日付）

「管長辞職や大杉伐採問題で 大石寺に又紛争惹起 檀徒総代が対策を協議」〔大石寺紛擾〕（『静岡新報』1927年=昭和2年11月30日付夕刊）付）

「新雑誌『富士』出づ 12月5日東京発売 大日本雄弁会講談社」〔広告〕（『静岡新報』1927年=昭和2年11月30日付夕刊）

「各団体総動員で行ふ富士郡の大演習 愈々来る十日挙行」〔富士郡総動員大演習〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月1日付夕刊)

「脱走軍曹は富士山で自殺か 八合目石室に変死体の噂 積雪深く調査困難」〔自殺〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月4日付夕刊)

「最後の決戦地は阿幸地附近 富士郡総動員大演習 愈々目睫に迫る」(『静岡新報』1927年=昭和2年12月6日付夕刊)

「大宮町長後任」(『静岡新報』1927年=昭和2年12月6日付夕刊)

「富士根村の山林中に 老爺の絞殺死体 被疑者二名引致さる」〔富士根殺人事件〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月6日付)

「痴情か物盗りか 富士根山中の老人殺し 情婦とその長男取調べを受く 疑ひは虎の子の廿円」〔富士根殺人事件〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月7日付夕刊)

「国立公園の一完成を期し 官民合同国立公園協会 昨日発起人会を開会」(『静岡新報』1927年=昭和2年12月7日付)

「新雑誌 富士 大日本雄弁会講談社」〔広告〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月9日付)

「丹那西口に小停車場 設置を陳情 地元で熱心に」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔函南駅?〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月10日付夕刊)

「未だ拳がらぬ—老人殺し犯人 但し端緒は得た模様」〔富士根殺人事件〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月10日付夕刊)

「岳麓の難路に道路標を建つ 登山者や猟師の為に 奇篤な飲食店の主人が」〔西口登山道〕〔本栖湖疎水〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月14日付夕刊) ▲▲

「千貫樋の窪地 埋立に決定 明三年度に工事完成」(『静岡新報』1927年=昭和2年12月14日付夕刊)

「三島町以西の熱海線工事 愈々近く着工の模様」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月15日付夕刊)

「白糸少年団が県道を修繕す 父兄にも知らせず 毎朝四時頃から出動して」(『静岡新報』1927年=昭和2年12月15日付夕刊)

「無罪のよねに反感昂まり 犯人徳一に同情集まる 上井出局長殺しの余聞」〔上井出郵便局長殺人事件〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月15日付夕刊)

「身延市川間 運転開始 身延線延長成る」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月16日付夕刊)

「三分の二まで進んだ丹那の隧道工事 国家の体面にかけて完成さす—と 池原所長概況を語る」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月20日付夕刊)

「富士根の老人殺しは人妻の所為と判る 十九日遂に検挙さる 屍体発見後十五日を費して 山中で出会い情交を迫られ 鎌の柄で殴り殺す」〔富士根殺人事件〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月20日付夕刊)

「大石寺管長後任 安部法雲師当選 十八日選挙終了す」〔大石寺紛擾〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月20日付夕刊)

「富士再版大增刷! 大日本雄弁会講談社」〔広告〕(『静岡新報』1927年=昭和2年

12月22日付)

「老人殺し犯人 けふ収容さる 昨日は現場で尋問」〔富士根殺人事件〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月23日付)夕)

「又しても大石寺に醜い大紛擾惹起 管長選挙の不正保安林伐採等 遂に法廷に持ち出さる」〔大石寺紛擾〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月23日付夕刊)

「水谷修道師が辞さぬ限り 大石寺は紛擾を続くと 識者は前途を憂慮す 水谷師の排斥に 檀信徒奮起」〔大石寺紛擾〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月25日付夕刊)

「水谷師への反感益々昂まる 大石寺の紛擾拡大す」〔大石寺紛擾〕(『静岡新報』1927年=昭和2年12月29日付)

■1928年=昭和3年

●歴史文化『静岡新報 Vol.100 昭和3年1月1日～2月15日』

「『山色新』河口湖より見たる白雪の富士」〔写真〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月1日付)

「浅間神社に使用の古釘を刀に 祐定60代の遺弟 宗景氏が鍛ふ」〔浅間大社〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月6日付)

「富士山中腹で熊を射止む 22貫余の大もの 富士山中での熊師は初めて」〔クマ〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月8日付夕刊)

「富士製紙芝川工場 争議化さんとす 各地より応援者来着昨夜は会社糾弾の演説を開催」(『静岡新報』1928年=昭和3年1月12日付夕刊)

「東京沼津間の時刻大改正 花の四月初旬には実施する 勤め人にもつて来い」〔御殿場線〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月12日付夕刊)

「鉄道工事中の『癌』丹那隧道に曙光を認む セメント凝結法が成功して 愈々本工事に着手 うまく行けば世界的記録 海外にも此種隧道はない 橋本工事課長語る」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月14日付夕刊)

「大石寺の醜争 司直の手に 警視庁に取調べを依頼 水谷師は東京に潜伏」(『静岡新報』1928年=昭和3年1月15日付夕刊)

「用水路問題で上野村紛糾 村民大会を開いて水路変更に反対の決議」〔半兵衛堀用水路〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月17日付夕刊)

「阿部師就任は総代が認めぬ 危機に立つ水谷師の地位 大石寺愈々紛める」〔大石寺紛擾〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月19日付夕刊)

「富士 又々再版大增刷」〔富士〕〔広告〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月19日付)

「身延鉄道全通近づく」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1928年=昭和3年1月20日付夕刊)

「御仏の精舎 思想涵養を目的に 富士休養学園 仏教女子青年会の主唱で 玉穂の高原に建設 同志の力で成就させたいと 本県仏教女子青年会 幹部の一員は語る」(『静岡新報』1928年=昭和3年1月22日付夕刊)

「白糸地方は一積雪七八寸 大宮町でも一寸余 大正九年以来の大雪」(『静岡新報』1

1928年=昭和3年2月7日付夕刊)

「世界一の難工事 悩みの丹那隧道 一尺千両、故障は続出 まだ々々お先
真つ暗の大作業」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1928年=昭和3年
2月8日付夕刊)

「大宮沼久保の小作争議悪化 或は法廷に持出すか 成行を重大視さる」(『静岡新報』
1928年=昭和3年2月12日付)

「裾野に於ける本年度演習日割 四月から間断なし」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静
岡新報』1928年=昭和3年2月12日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.101 昭和3年2月16日～3月31日付』

「岳麓明星山の山林四十町歩焼く 作業中の男焼死を遂ぐ」(『静岡新報』1928年=
昭和3年2月22日付夕刊)

「学生服を着た男 風穴内で死亡」〔駒門風穴〕〔自殺?〕(『静岡新報』1928年=
昭和3年2月24日付夕刊)

「富士登山人形 製品検査」(『静岡新報』1928年=昭和3年2月26日付)

「富士へ登りに還暦の女登山家 カナダ丸で珍客来朝」〔外国人登山〕(『静岡新報』1
928年=昭和3年3月4日付夕刊)

「孝明天皇御銅像を茗荷岳に建立 大遊園地をも設く 有力者連が頻りに奔走」(『静岡
新報』1928年=昭和3年3月8日付夕刊)

「久宮御平癒を祈願申上ぐ 大宮浅間の職員が」〔浅間大社〕(『静岡新報』1928年
=昭和3年3月8日付夕刊)

「愈々四月一日から 身延全線開通 十五日から試運転」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』
1928年=昭和3年3月14日付夕刊)

「未だラチの明かぬ富身線値下問題 省線と同率にせねば全通しても利用は出来ぬ」〔富
士身延鉄道〕(『静岡新報』1928年=昭和3年3月14日付) ▲▲

「北川東京高校教授、御殿場附近で情死 女だけの死体は青木ヶ原で発見 雪に悩む死体
発見 沼中出身の北川三郎氏 稿料を割いて愛人の父に没落の家を興す代に 一旦救はれ
て再び行方不明 二人は別れ々々に 雪解けまで発見は困難 精神的な恋愛」〔北川三郎〕
(『静岡新報』1928年=昭和3年3月18日付夕刊)

「まだ発見されぬ北川教授の屍体 酸鼻を極むる二人の辿つた道 昨日も引き続き捜索」
〔北川三郎〕(『静岡新報』1928年=昭和3年3月19日付)

「いよいよ国立公園 調査に着手 内務省に委員会を置き」(『静岡新報』1928年=
昭和3年3月20日付)

「当選はしても認可がなく 阿部師の管長就任困難 大石寺の醜争続く」〔大石寺紛擾〕
(『静岡新報』1928年=昭和3年3月27日付夕刊)

「将門の祟りで死病者続出 早速前蔵相死亡も其の為 大蔵省で鎮魂祭」〔平将門首塚〕
(『静岡新報』1928年=昭和3年3月27日付夕刊)

「北川三郎氏の屍体 密林中から発見 座頭沢の県道から四五十間の所 精進区長から急
報 長兄と次兄が現場へ急行 けふ友人達も現場へ」(『静岡新報』1928年=昭和3
年3月29日付夕刊)

「富士駅甲府線 明日全通す予定より二日早く」〔富士身延鉄道〕〔身延線〕(『静岡新

報』1928年=昭和3年3月29日付)

「けふから開通する富身線の甲府駅南口(上)と富士駅発車場」〔写真〕〔富士身延鉄道〕
(『静岡新報』1928年=昭和3年3月30日付)

「山と海を継ぐ身延全線の開通 海の静岡へー山の山梨へ けふから楽に出来る日帰りの旅 甲府市を繞る近郊の勝地 耶馬溪以上の『御岳』と善美を誇る甲斐善光寺 鉄相を招き開通式 八日盛大に」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1928年=昭和3年3月30日付)

「写真説明」〔甲府市全景〕〔精進湖より富士山〕〔御岳景勝〕(『静岡新報』1928年=昭和3年3月30日付)

「大宮浅間の桜咲く」〔浅間大社〕(『静岡新報』1928年=昭和3年3月31日付夕刊)

「富士身延鉄道全通 3月30日より 富士身延鉄道株式会社」〔広告〕(『静岡新報』1928年=昭和3年3月31日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.102 昭和3年4月1日～5月15日』

「正門前にズラリ並んだお国自慢の即売店 一際目立つ『お茶は静岡、山は富士』東京博団遊覧先ある記(1)」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月2日付)

「箱根山中大降雪 一時交通途絶」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月2日付)

「鑑定の遣り直しと実地検証許可 富士根の老人殺し事件で 被告は頑強に否認」〔富士根殺人事件〕(『静岡新報』1928年=昭和3年4月3日付夕刊)

「◎大宮自動車値下」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月3日付「ちまた百相」)

「富士山を背景の『静岡県』出品前へ人だかり 東京博団遊覧先ある記(2)」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月3日付)

「須走附近降雪」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月3日付)

「きのふ甲府南口駅で身延線全通式」〔富士身延線〕(『静岡新報』1928年=昭和3年4月10日付夕刊)

「文明の有難さ 山静岡両県の交驛 甲府全市の賑ひ」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月10日付夕刊)

「保勝会を設け白糸滝を改修 青年男女が労力奉仕」〔白糸の滝〕(『静岡新報』1928年=昭和3年4月10日付)

「山・静岡両県関係者が経済懇話会組織 身延線全通に備へ経済提携の第一歩」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1928年=昭和3年4月11日付)

「却々捗らぬ丹那隧道工事 一日の発掘僅に四尺 更に空気圧搾器を増設」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1928年=昭和3年4月17日付夕刊)

「大峰山一帯に心教大道場 毎年夏青少年を集め 思想善導の講習会」〔富士郡今泉村〕(『静岡新報』1928年=昭和3年4月18日付夕刊) →「八日より三日間 大和同園開園式」(7月7日付)に続報。

「愛鷹山払下 紀年祝賀祭」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月18日付)

「大倉翁依然重態 終日見舞客で大混雑」〔大倉喜八郎〕(『静岡新報』1928年=昭和3年4月21日付)

「高野を其儘築かれた新霊地 岩淵在の野田山に 松橋慈照師の苦行(一)」(『静岡新報』1928年=昭和3年4月21日付)

「蕎麦粉と水を常食に修行 野田山に新霊地の松橋慈照師の苦行（二）」（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月22日付）

「大倉翁全く危篤」〔大倉喜八郎〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月22日付）

「野田山に放つ久遠の光明 地方人士を霊導浄化する松橋慈照師の苦行（三）」（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月23日付）

「大倉翁遂に死去 昨日午後二時十分 特旨叙位」〔大倉喜八郎〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月23日付）

「高德を慕つて集る信者達 野田山に新霊地の松橋慈照師の苦行（五）」（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月25日付）

「寄附が少いとて御輿を練込む 湯山家滅茶々に戸障子を破壊さる」〔小山町伊奈神社〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月25日付）

「四十日間を無言の行で遍路 お伴の慈遍さん屁古垂る 松橋慈照師の苦行（六）」（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月26日付）

「故大倉翁に祭粢料」〔大倉喜八郎〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月26日付）

「虱を落すーと宿を断られた 四国遍路の懐しい思ひ出 松橋慈照師の苦行（七）」（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月27日付）

「美事に刻んだ大師の尊像 鑿一挺で大花崗石へ 松橋慈照師の苦行（八）」（『静岡新報』1928年＝昭和3年4月28日付）

「諸々の苦患を身に引受け 野田山の新霊場に 松橋慈照師の苦行（九）」（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月1日付）

「局長殺し事件で再度の实地検証 控訴院判検事出動し 六月八日現場で証人を喚問」〔上井出郵便局長殺人事件〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月3日付）

「軍隊や学生の演習で富士の裾野賑ふ」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月3日付）

「富士山に又大雪」（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月5日付夕刊）

「次郎長の銅像梅蔭寺へ送らる 除幕式は六月十日」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月9日付夕刊）

「一昼夜に亘り原野百町歩焼失 富士山麓の山火事」〔御料林〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月11日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.103 昭和3年5月16日～6月30日』

「富士山の山開き七月一日と決る」〔御殿場口〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月16日付）

「登山者の為に物価を統一 各登山口が協議の上」〔御殿場口〕〔須走口〕〔大宮口〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月20日付）

「一合目八町下迄自動車路が出来れば十時間で上下が出来る」（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月25日付夕刊）〔大宮新道〕

「八合目の室を山梨へ許可 須走口住民大いに憤慨し許可取消の運動」〔大森出〕〔浅間大社〕〔八合目石室紛争〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年5月30日付）→「須走村長が知事を相手取り」（6月28日付）、「富士山頂浄化の為に」（9月22日付）に続報。

「砲兵学校生徒が裾野で実弾演習 二週間に亘って行ふ」〔東富士演習場〕（『静岡新報』

1928年＝昭和3年5月30日付)

「十日位ひ早く登山が出来やう 今年には富士の雪が少ない 清水技手の視察団」〔残雪〕
(『静岡新報』1928年＝昭和3年5月31日付夕刊)

「連夜出沒して岳麓を荒す 岩窟に潜む怪盗の群 大宮署で大活動開始」(『静岡新報』
1928年＝昭和3年5月31日付夕刊)

「御料林所在地 御下賜金 各町村配当」(『静岡新報』1928年＝昭和3年6月6日
付)

「県下青訓生徒最初の聯合大演習 七月十六日から四日間 富士の裾野で」〔東富士演習
場〕〔青年団〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1928年＝昭和3年6月8日付)

「上井出局長殺し事件 けふ実地検証」〔上井出郵便局長殺人事件〕(『静岡新報』19
28年＝昭和3年6月8日付)

「登山道路は雪で荒れてゐる 一二合目は山桜が満開 水野電話技手談」〔大宮新道〕〔残
雪〕(『静岡新報』1928年＝昭和3年6月9日付夕刊)

「殺した覚えは毛頭ないーと 富士根の老人殺し 控訴院で否認」〔富士根殺人事件〕(『静
岡新報』1928年＝昭和3年6月10日付)

「次郎長像 除幕式は来月」〔梅蔭寺〕(『静岡新報』1928年＝昭和3年6月12日付)

「静岡高校旅行部員 山岳旅行案成る」(『静岡新報』1928年＝昭和3年6月14日付)

「下山客吸集に須走口で奔走 砂走りを宣伝して」〔須走口砂走り〕(『静岡新報』19
28年＝昭和3年6月19日付)

「浅間神社御田植祭 登山関係者も参列して」〔お田植祭〕〔浅間大社〕(『静岡新報』
1928年＝昭和3年6月22日付夕刊)

「富士山麓電鉄敷設認可さる 今二十三日付けで」〔御殿場－吉田間〕(『静岡新報』1
928年＝昭和3年6月24日付夕刊)

「甲府富士間に急行電車運転 富士登山者の為に終夜運転をも開始」〔富士身延電鉄〕(『静
岡新報』1928年＝昭和3年6月26日付)

「富士山の気象はラヂオで放送 一般登山者の為に七月十日から」〔ラヂオ放送〕(『静
岡新報』1928年＝昭和3年6月27日付夕刊)

「富士の裾野で野営講習会 七月十六日から五日間 本県青年団員が」〔東富士演習場〕
(『静岡新報』1928年＝昭和3年6月27日付)

「須走村長が知事を相手取り 須走口の新小屋裁判沙汰となる」〔八合目石室紛争〕(『静
岡新報』1928年＝昭和3年6月28日付) →「[富士山頂浄化の為に](#)」(9月22日付)
に続報。

「登山電車 来月十日から」〔富士身延電鉄〕(『静岡新報』1928年＝昭和3年6月
30日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.104 昭和3年7月1日～8月15日』

「静・山両県遊覧地投票 静岡新報社」〔社告〕(『静岡新報』1928年＝昭和3年7
月1日付夕刊)

「県下各地を脅した怪盗遂に検挙さる 昨夜大宮署員の為に 富士郡北山村山宮神社の境
内で」(『静岡新報』1928年＝昭和3年7月1日付夕刊)

「山の天気とニュースを放送 登山者の為東京放送局が アルプスと富士山で」〔ラヂオ

放送] (『静岡新報』1928年=昭和3年7月1日付)
「瓔珞の躑躅とやまめを献上 白糸村の渡辺定男氏が 御帰京の秩父宮様に」〔天子ヶ岳〕
(『静岡新報』1928年=昭和3年7月4日付夕刊) ←ヨウラクツツジについては「チ
ト妙な事だが」(1923年=大正12年7月18日付)の注釈を参照。
「山へ行く人海へ行く人の為に身延鉄道で料金割引き 富士甲府間を三割」〔富士身延鉄
道〕(『静岡新報』1928年=昭和3年7月5日付)
「山の出来事や石室の状況 御殿場駅前に掲示 放送局で登山者の為に」〔ラジオ放送〕
(『静岡新報』1928年=昭和3年7月6日付夕刊)
「富士山御殿場口けふ開山式 浅間神社境内で執行」(『静岡新報』1928年=昭和3
年7月6日付夕刊)
「富士山頂で天候観察 沼津測候所の技手二名登山」(『静岡新報』1928年=昭和3
年7月6日付)
「急行列車が富士駅に停車 九、十両列車が十五日から 身延線へ連絡の為に」〔富士身延
鉄道〕(『静岡新報』1928年=昭和3年7月6日付)
「阿部技師富士へ登山 昨日須走から」(『静岡新報』1928年=昭和3年7月6日付)
「大宮口から富士へ登山 天幕を用意した二青年 大宮口の初登山者」(『静岡新報』1
928年=昭和3年7月7日付夕刊)
「八日より三日間 大和同園開園式」〔品田俊平〕〔心教不三大和同園〕〔勢子辻〕(『静
岡新報』1928年=昭和3年7月7日付) →「霊峰富士山頂で 国民精神運動」(19
33年=昭和8年6月21日付夕刊) 参照。大和同園については『史話と伝説 富士山麓の
巻』(松尾書店編・発行、昭和33年)に紹介されている。
「開山準備祭」〔浅間大社〕(『静岡新報』1928年=昭和3年7月8日付)
「自転車ラーズを富士と改名す 大日本自転車・日米商会」〔広告〕(『静岡新報』19
28年=昭和3年7月8日付)
「大宮口の初登山者 元気で下山」(『静岡新報』1928年=昭和3年7月9日付)
「更に急行三列車を富士駅に停車 富士登山者の為に」(『静岡新報』1928年=昭
和3年7月10日付)
「富士の裾野に野営大演習 十六日から四日間 本県青年団員五百余名が」〔東富士演習
場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1928年=昭和3年7月10日付)
「団体登山の皮切りが静岡師範の五十名 富士山頂より(十一日)」(『静岡新報』19
28年=昭和3年7月13日付夕刊)
「国府津沼津間鉄道線路増設 十二日局長会で決定」〔御殿場線〕(『静岡新報』192
8年=昭和3年7月13日付)
「七十余名の女学生騎馬で登山 須走口から富士山へ」〔騎馬登山〕(『静岡新報』19
28年=昭和3年7月13日付)
「富士山頂の天候放送は二十日からに延期」〔ラジオ放送〕(『静岡新報』1928年=
昭和3年7月13日付)
「大蛇を見て発病重態に陥る 胴廻り二尺余長さ四五間 白糸村向山の珍聞」(『静岡新
報』1928年=昭和3年7月14日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1928年=昭和3年7月14日付夕刊)

「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月15日付夕刊）
「頂上まで連ながる富士山中の賑ひ 五湖探勝のお客様は民家へ 休泊所やホテルは満員」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月17日付夕刊）
「よねには求刑せず 徳一に十五年 けふ検事が求刑 上井出局長殺しの件」〔上井出郵便局長殺人事件〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月17日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月17日付夕刊）
「富士荒れる 女師生徒避難」〔静岡女子師範学校〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月18日付夕刊）
「今朝気温俄に下り 濃霧深く登山困難 静岡女師生八合目に滞在して天候回復を待つ」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月18日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月18日付夕刊）
「四合目に気球 墜落して居るとの説」〔大宮新道〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月18日付夕刊）→「気球と見たは残雪の大塊り？」（7月19日付夕刊）に続報。
「富士自転車 ラーヂを富士と改名す 大日本自転車・日米商会」〔広告〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月18日付）
「石室に閉込められた千余名の登山者 恟々として天候回復を待つ 富士山稀有の大暴れ 女師生と見付高女生 八合目に籠る」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月19日付夕刊）
「気球と見たは残雪の大塊り？ 人々はまだ大騒ぎ」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月19日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月19日付夕刊）
「電通社員登山」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月19日付）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月20日付夕刊）
「富士山頂に於けるクラブ歯磨デー開催」〔広告〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月20日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月21日付夕刊）
「清水処女会富士登山 一泊の予定で」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月21日付）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月22日付夕刊）
「蜂ブドー酒一本用意しての登山は強力を脊負ふてなほ余悠綽々」〔広告〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月22日付夕刊、8月8日付夕刊）
「次郎長親分の銅像 けふ除幕式挙行 夜は煙火や活動の余興」〔梅蔭寺〕〔清水次郎長〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月22日付）
「次郎長親分銅像除幕式 きのみ盛大に」〔梅蔭寺〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月23日付）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月24日付夕刊）
「登山者に宝丹 須走口で贈呈」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月24日付）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月25日付夕刊）
「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（一）山・静岡県に跨がる有名無名の勝地」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月25日付）
「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年7月26日付夕刊）

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (二) 用宗大崩の海岸」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月26日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月27日付夕刊)

「熱海線の電化を断然放棄して 沼津国府津間 四年度から電化」 [丹那トンネル] [御殿場線] [東海道本線] (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月27日付)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (三) 政治劇の楽屋にも避暑地にも…興津」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月27日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月28日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (四) 東照神君の御霊廟 久能から三保へ」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月28日付)

「本門寺御霊宝 虫干会」 [北山本門寺] (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月28日付)

「移転御通知 山一證券」 [富士山絵バックの広告] (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月28日付)

「御岳昇仙峡行電車賃三割引 富士身延鉄道」 [広告] (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月28日付、7月29日付、7月31日付、8月25日付)

「竹田宮恒徳王殿下富士へ御登山 けさ頂上を極められ御殿場口へ御下山」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月29日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月29日付夕刊)

「登山者頓死」 [大宮口九合目] [遭難] (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月29日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (五) 一幅の絵とも見ゆる伊豆三津の海岸」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月29日付)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (六) 香り床しい緑の世界 牧の原の大茶園」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月30日付)

「富士頂上で中学生が消える 父親がお鉢廻り中に 遭難学生がそれか」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月30日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月31日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (七) 四季の眺めに事欠ぬ岩水寺の遊覧地」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月31日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月1日付夕刊)

「ラーズ改名富士自転車 大日本自転車」 [広告] (『静岡新報』 1928年=昭和3年7月31日付)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (八) 関東別府の称ある伊東温泉の勝景」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月1日付)

「岩石飛び室は揺れ全山物凄い暴れ 登山全く不能に陥る 電話不通で山上の消息も不明」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月2日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月2日付夕刊) ←原紙破れてまったく読めず。

「岳麓を廻る (上) 山口生」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月2日付)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (九) 遠州七不思議の一つ桜ヶ池・応声
教院」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月2日付)

「郵便局長殺し 愈々明日判決 注目される事件の既決」〔上井出郵便局長殺人事件〕(『静岡
新報』 1928年=昭和3年8月2日付)

「県道大宮甲府線 地元から改修促進陳情」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕(『静岡新報』
1928年=昭和3年8月3日付夕刊)

「ツブ濡れの儘 秩父宮御閲兵 御勇壮なお姿に感激の涙に咽ぶ」〔東富士演習場〕(『静岡
新報』 1928年=昭和3年8月3日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月3日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (九) 世の詩人を悩殺する焼津玉の浦の
絶景」(『静岡新報』 1928年=昭和3年8月3日付) →8月2日付(九)と3日付(九)
の番号が重複したので、遅れ馳せながら、8月12日付(二一)の翌13日付(二三)で帳
尻を合わせたようだ。

「岳麓を廻る(中) 山口生」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月3日付)

「局長殺事件 一審通りの判決 徳一は無期、よねは無罪 けふ控訴院で」〔上井出郵便
局長殺人事件〕(『静岡新報』 1928年=昭和3年8月4日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月4日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月5日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十) 足柄山の夜半の月空澄み渡る笙の
音」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月5日付)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十一) 伝説・美女の失恋で名高い野守
るの池」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月6日付)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十二) 絶景、甲斐の御岳」 (『静岡新
報』 1928年=昭和3年8月7日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月7日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十三) 奇岸奔流絵の如き富士川の釜口
峡」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月7日付夕刊)

「岳陽少年団幹部のキャンプ生活 三日間富士山麓で」〔須走小学校〕(『静岡新報』 1
928年=昭和3年8月7日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十四) 霊峰の麓に展かれた水清き井の
頭滝園」〔猪之頭〕(『静岡新報』 1928年=昭和3年8月8日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月8日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十五) 滝沢川上流の勝景 滝の谷の不動
峡」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月8日付)

「約十分間に亘つて『仏の御光』を認む 去月廿八日富士山で」〔ブロッケン〕(『静岡
新報』 1928年=昭和3年8月8日付)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十六) 霊域に織込む勝景・芙蓉山下天
母山」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月9日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1928年=昭和3年8月9日付夕刊)

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞ぐりて (十七) 壮麗雄大を併せ見る長尾峠の大

富士」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月9日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月10日付夕刊）←原紙が破れて一部読めず

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（十八）変化極まりなき絶景・南豆堂ヶ島海岸」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月10日付夕刊）

「可愛い弟妹の製作品で 出征兵の慰問帳 つはもの達を感激させさうな富士根小学校の試み」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月10日付夕刊）

「ハワイ観光団富士へ登山 九日御殿場口から」〔外国人登山〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月11日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月11日付夕刊）

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（十九）夏に好し冬に良し修善寺・戸田海岸」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月11日付）

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（二〇）全国的に知られた名滝佐野の瀑園」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月12日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月12日付夕刊）

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（二一）宗法の神秘を蔵す桜ヶ池・応声教院」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月13日付夕刊）←「我等の誇り」（8月3日付）の注を参照。

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（二三）谷を隔て向ひ合ふ春埜山と金剛院」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月14日付夕刊）

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（二四）旧城廓をその儘に壮大な掛川公園」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月15日付夕刊）

「沼川改修工事促進を陳情 庄司代議士一行が」〔浮島沼〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月15日付夕刊）

「愈々今夜十二時限り 静・山両県遊覧地投票締切」〔社告〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月15日付）

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（二五）天を摩す老杉の森 昼猶暗き千葉山」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月15日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.105 昭和3年8月16日～9月30日』

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（二六）荘厳を誇る秋葉山と狐ヶ崎の遊園地」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月16日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月16日付夕刊）

「我等の誇り、遊覧地紙上探訪 富士を繞りて（二七）砂も水も珠玉と輝く絶景・御前崎海岸」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月16日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月17日付夕刊）

「富士山最初の頂上結婚式 国大教授の中村氏がきのふ、いと厳かに」〔中村至道〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月19日付）

「頂上結婚された中村氏」〔中村至道〕（写真）昭和3年8月21日付夕刊）

「静岡・山梨両県 遊覧地決定 四旬余の激戦を終り 昨日・厳密な審査会で」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月21日付）←「静・山両県遊覧地投票」（7月1日付夕刊）、

「癒々今夜十二時限り」（8月15日付）の社告参照。

「よくも当てたり一廿六万二千 遊覧地高点予想入選者決定」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月21日付）

「三方原と浮島沼 視察のため 農林省片岡技師来県」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月21日付）

「静・山両県遊覧地 八勝 十二景」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月21日付）

「富士をめぐるて 山・静両県下に選ばれた遊覧地 八勝・十二景案内記」〔一覽地図付き〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月21日付）

「静山両県遊覧地 選外八景」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月22日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月24日付夕刊）

「富士山の警電 廿九日まで」〔警察電話〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月25日付）

「富士山大雪 剣ヶ岳、三島岳の一带は一白皚の大雪景」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月25日付）

「大宮町を中心にアイヌの土石器―其時代の古戦場か」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月25日付）

「梅雨から一足飛びに秋になつた理由 これも例の太陽の黒点の悪戯 藤原お天気博士の話」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月28日付）

「富士の登山者 例年の半数 山中営業者は破産の惨状 何れも下山を急ぐ」（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月30日付夕刊）

「富士閉山期迫る 頂上局も明日限り」〔山頂郵便局〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年8月31日付夕刊）

「片岡技師が浮島沼を視察 干拓事業愈々実現か」（『静岡新報』1928年＝昭和3年9月1日付夕刊）

「富士山閉山祭 七日大宮浅間で」〔浅間大社〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年9月5日付夕刊）

「大淵（富士）の森林中で数十名の大賭博 変装警官十余名が周囲から包囲し 大格闘の末続々逮捕」（『静岡新報』1928年＝昭和3年9月7日付）

「富士山頂浄化の爲め石室撤去の珍訴訟 被告代理に山田社寺課長出廷 きのみ第一回公判」〔八合目石室紛争〕〔浅間大社〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年9月22日付）



「大和同園 教勅祭 二十三日執行」（『静岡新報』1928年＝昭和3年9月22日付）

「浮島の瓢部塚 史蹟に指定か 村当局へ調査方通達」〔浮島村〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年9月24日付）

「砂山問題解決して鈴川競馬復活」（『静岡新報』1928年＝昭和3年9月25日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.106 昭和3年10月1日～11月15日』

「富士木炭組合 紛糾解決」（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月1日付）

「静岡高校生十三名 閉山後の富士登山 一名の落伍者もなく 一同元気で帰校」（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月2日付夕刊）

「俄然丹那隧道に一大曙光を認む 今後三四年を出でず貫通せん 勇躍して工事を進む」

〔丹那トンネル〕〔熱海線〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月5日付）

「獵期迫る 岳麓地方鳥獸多し 快報頻りに伝はり 好獵連垂涎」（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月10日付夕刊）

「富士身延線の買収方陳情 山梨県南部町村長が」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月14日付）

「北山附近に熊が出没 養蜂場を荒す」（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月19日付夕刊）

「静岡生、愛鷹山中で 行方不明となる 級友と愛鷹横断の途中 豪雨と濃霧に襲はれ」〔遭難〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月19日付）→次項が続報。

「敏雄君発見さる 鋸山中に昏倒中」〔愛鷹山〕〔遭難〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月19日付）

「富士山頂に大降雪 これ度三度目」（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月19日付）

「四年度から四年間に熱海沼津間電化—工事費二百四十九万円—鉄道電化計画成る」（『静岡新報』1928年＝昭和3年3月20日付夕刊）

「愛鷹山で遭難の松永君蘇生せず 夕刻全く絶命」（『静岡新報』1928年＝昭和3年3月20日付夕刊）

「三日間に亘る富士の巻狩 十二月上旬一合目附近で 野兎野鼠駆逐すべく」〔野ウサギ〕〔野ネズミ〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月20日付夕刊）

「雉子や山鳥が例年になく豊富 獵友会と警察と協力 岳麓の密獵を警戒」（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月23日付夕刊）

「老副教務長の放火と判明 二ヶ所から発火した天照教教務所の火事」（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月27日付）▲▲

「水戸浪士と諸国を遍歴した義一の数奇な生涯」〔天照教〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年10月27日付）▲▲

「ミツワ石鹸 丸見屋商店」〔富士山絵の広告〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年11月6日付）

「国幣小社に昇格した伊豆山神社 平安朝時代の名神 頼朝の祈願以来名声揚る」（『静岡新報』1928年＝昭和3年11月13日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.107 昭和3年11月16日～12月30日』

「大宮浅間境内で官民合同奉祝宴 閉会後深更迄提灯行列」〔昭和天皇即位礼〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年11月18日付）

「丹那隧道工事 順調に進む 仮設導坑の掘鑿毎日五六尺づゝ」（『静岡新報』1928年＝昭和3年11月23日付）

「野荒しの警戒を 農家で出願」〔小山町〕（『静岡新報』1928年＝昭和3年11月23日付）

「富士郡下に小作争議勃発か 芝富村を皮切りに」（『静岡新報』1928年＝昭和3年11月24日付夕刊）

「富士山を世界に宣伝」（『静岡新報』1928年＝昭和3年11月29日付）〔ミュンヘン万国登山博覧会〕

「富士郡南部から食用蛙が市場へ 成績良く将来有望」 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月4日付夕刊)

「大佛次郎『月光山窩団』『平凡 新年号』」 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月6日付)

「吉原へ合併せねば納税やめて児童も休校せしむ…と 伝法村の合併派力む」 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月7日付夕刊)

「馬車馬暴れて二名を轢く 被害者は生命危篤」〔富士根村大岩・佐野茂作〕 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月14日付)

「村民の知らぬ間に講堂新築案可決 出し抜かれた全村民 かんゝゝになつて怒る」〔上野村〕 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月14日付)

「富士山麓の情死 身許判明す 男は二十・女は十六」〔大宮口一合目下〕 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月20日付夕刊)

「帝大独法科生 富士山で自殺か 大宮署へ捜索願ひ 家出僧侶も同じ運命？」 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月21日付夕刊)

「神釘を材料に献上刀謹鍛 浦上宗景氏が斎戒沐浴していよゝゝ一月献上」〔浅間大社改築で出た古釘を使用〕 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月22日付夕刊)

「村が勝つか国が勝つか 富士山地権問題公判」〔八合目石室紛争〕 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月23日付夕刊) ▲▲

「地質良好で潜函病も退減し 丹那西口工事捗らん」 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月24日付)

「三保の砂利採取 反対運動猛烈 けふ区長連県庁へ」〔三保松原〕 (『静岡新報』1928年=昭和3年12月26日付)

■ 1929年=昭和4年

● 歴史文化『静岡新報 Vol.108 昭和4年1月1日～2月15日』

「三角塔附近で凍死したか 愛鷹山で遭難した田代君の行方猶不明」 (『静岡新報』1929年=昭和4年1月6日付)

「大宮町高原に大遊園地の計画 工費約十万円を投じ」〔大宮町山本字高原〕 (『静岡新報』1929年=昭和4年1月6日付)

「西方二百里の彼方より 遺骨は取りに来る一と 遺書した轢死青年」 (『静岡新報』1929年=昭和4年1月6日付) →「裾野の轢死青年は商科大学生」(1月17日付)に続報。

「雪中登山 二合目から引返す」〔大宮新道〕 (『静岡新報』1929年=昭和4年1月6日付)

「大宮町沼久保区に小作争議勃発 小作側に労働組合が応援 解決至難と見らる」 (『静岡新報』1929年=昭和4年1月8日付夕刊)

「富士の山頂に珍しい雪風呂 雪中の高層観測を終へて 佐藤技師無事下山」〔頂上気象観測〕〔佐藤順一〕 (『静岡新報』1929年=昭和4年1月8日付)

「猿狩りがてら愛鷹の征服 杉山氏一行の壮挙 明朝静岡駅を出発」 (『静岡新報』1929年=昭和4年1月12日付夕刊) →「単身登山には賛成出来ない」(1月15日付)に

続報。

「三十余貫の大熊 富士山中腹の岩窟に」〔天照教付近〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月13日付夕刊）

「単身登山には賛成出来ない 登るなら数名がよい 愛鷹を征服して杉山氏語る」（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月15日付）

「『寒天』を利用して隧道開鑿の新研究 丹那トンネルの泥土で実地試験 山口東大教授の手で 世界に珍しい重要な実験 完成までにはまだ数年」〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月16日付）

「諸兵聯合演習に中等学生も参加 鈴川附近で三日間」〔軍事演習〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月17日付夕刊）

「裾野の轢死青年は商科大学生 身許も漸く判明す」（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月17日付）

「当地方に珍しき古墳を発見 駿東郡泉村に於て」（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月20日付）

「籠坂峠のスロープに大スキー場設置 冬期の客吸集策に 須走村で計画」〔籠坂峠スキー場〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月20日付）▲▲

「岳麓地方の井水枯渇 住民大困憊」〔大淵・富士根・北山・上井出の開墾地帯〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月24日付夕刊）

「昨夜富士郡大宮町で五ヶ所から出火 遂に四戸を全半焼す 放火狂のの所為と睨む」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月24日付夕刊）

「大宮町に又々放火 署長、消防組員総動員で警戒中 昨夜羽衣町の豚小屋に」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月25日付夕刊）

「恰度九年目の其前夜の騒ぎ 各区夫々自警を開始」〔大宮連続放火事件〕〔大宮大火〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月25日付夕刊）

「放火騒ぎで演説会解散 地主攻撃の最中」〔大宮町沼久保の小作争議〕〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月25日付夕刊）

「六十万円を投じて大貯池を築造 丹那畑両区水力救済の為 鉄道省が軽井沢へ」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月26日付夕刊）

「富士を国立大公園に 期成同盟会の運動」〔国立公園〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月26日付夕刊）

「阿部管長への反感高まり 関西信徒は不信任を決議 大石寺に又大紛擾」〔大石寺紛擾〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月29日付）

「大宮町の放火犯 漸く目星つく」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月30日付夕刊）

「大宮町の放火犯 保険関係者かとも伝へられる」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年1月31日付夕刊）

「大宮の放火事件遂に迷宮入りか 嫌疑者も放還さる」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月5日付夕刊）

「大宮町の放火犯人 火災保険の外交員 昨夜遂に犯行の一部を自供す 背後に教唆者あ

るらし」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月6日付夕刊）

「富士を中心とする大国立公園計画 静・山・神の三県協力で実現に努む 近く第二回協議会」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月6日付）

「大宮署の給仕 情婦と心中 放火事件にも関係か」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月7日付）

「講堂建築反対から小学児童遂に盟休 請負契約の成立を聞知した反対村民極度に憤慨」〔上野村講堂新築問題〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月8日付夕刊）

「岳麓地方 飲料水欠乏」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月8日付夕刊）

「留置室から…手紙を運んだ 大宮署給仕の情死動機」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月8日付夕刊）

「妙蓮寺境内に村民大会を開き 委員を挙げて当局に迫る 上野の講堂新築問題」〔上野村講堂新築問題〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月9日付）

「一日四尺から一丈 昨今の掘鑿状況 順調に進めば三四年で完成 難工を続く丹那隧道」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月9日付）

「死面に化粧し悲しき祝言 情死した松男ととし子 きのふ合葬を営む」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月9日付）

「富士山国立公園建設 三県聯合で調査 十四日から三日間の予定で」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月10日付夕刊）

「本省も乗り出して国立公園調査 佐藤技師当分滞在」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月10日付）

「信徒協議会を開き管長を弾劾 飽くまで辞職を迫る 悪化せる大石寺の紛擾」〔大石寺紛擾〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月14日付夕刊）

「大宮の放火犯」〔大宮連続放火事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月14日付夕刊）

「富士山地権争ひ 元組合村長杉山氏出廷 きのふ第三回公判」〔八合目石室紛争〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月14日付）▲▲

「柚野村の孝女 村民賞讃の的 近く表彰されん」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月15日付夕刊）

「三県聯合－国立公園の調査 一行けふ沼津を出発」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月15日付夕刊）

「国立公園調査 先づ伊豆から 一行十一名各温泉廻り」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月15日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.109 昭和4年2月16日～3月31日』

「浮島沼干拓と沼津漁港修築 衆議院へ建議案提出」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月16日付）

「国立公園調査員一行 箱根山に行ふ」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月16日付）

「登山人形 安くして多く売さばく」〔御殿場農家の副業〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月19日付）

「廿万の人出 賑った鈴川の毘沙門天」（『静岡新報』1929年＝昭和4年2月19日付）

「決議文を突付けて管長に退職を迫る 鈴木宗務総監に峻拒され先づ不得要領に終る」〔大

石寺紛擾) (『静岡新報』1929年=昭和4年2月21日付夕刊)

「五ヶ町村長 調停に立つ 上野村の講堂問題」〔上野村講堂新築問題〕(『静岡新報』1929年=昭和4年2月22日付夕刊)

「講堂反対の紛擾 調停不調に終る 双方の主張に大差」〔上野村講堂新築問題〕(『静岡新報』1929年=昭和4年2月23日付夕刊)

「富士山頂の甘酒屋を中心に詐欺事件が発生す これも不景気の生む悲劇」〔須走村堺屋・小松助次郎〕(『静岡新報』1929年=昭和4年2月23日付夕刊) ▲▲

「各地町村議選 大宮町では候補難に苦しむ—結局三十二三名か」(『静岡新報』1929年=昭和4年2月27日付)

「道路問題から猪之頭区大騒ぎ 激論中の村議井出勇吉氏 脳溢血を起して即死」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕(『静岡新報』1929年=昭和4年3月5日付夕刊)

「声明書を配布して 猪之頭反対猛烈 富士遊覧自動車道路」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕(『静岡新報』1929年=昭和4年3月13日付)

「富士山公園で三県知事協議会 愈々具体的運動に入る」〔国立公園〕(『静岡新報』1929年=昭和4年3月26日付夕刊)

「富士山嶺の地権問題 示談成立し」〔八合目石室紛争〕(『静岡新報』1929年=昭和4年3月26日付)

「富士山公園の三県知事協議会 五月中旬富士屋で」(『静岡新報』1929年=昭和4年3月29日付)

「富士山地権問題示談か」〔八合目石室紛争〕(『静岡新報』1929年=昭和4年3月29日付)

「富士自転車 大日本自転車」〔広告〕(『静岡新報』1929年=昭和4年3月31日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.110 昭和4年4月1日～5月15日』

「林間学校を須走で計画」(『静岡新報』1929年=昭和4年4月2日付)

「熱海線開通後は 沼津駅も移転 地点は厳秘中に研究」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1929年=昭和4年4月5日付)

「暴僧と信徒総代が本尊前で小競合 アワヤ流血の惨を見んとす 大石寺の醜争悪化」〔大石寺紛擾〕(『静岡新報』1929年=昭和4年4月16日付夕刊)

「富士!富士!!」(雑誌広告) 昭和4年4月17日付夕刊)

「大石寺のお虫払ひ 無事におはる」〔大石寺紛擾〕(『静岡新報』1929年=昭和4年4月17日付)

「大宮町議候補 定員の二倍に 各区とも混戦に陥る」(『静岡新報』1929年=昭和4年4月18日付)

「丹那隧道工事で灌漑用水枯渇 苗代時期を控へて狼狽」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕(『静岡新報』1929年=昭和4年4月23日付)

「大宮町議選挙に 異議の申立続出」(『静岡新報』1929年=昭和4年4月30日付)

「長尾峠にて富士山を御展望 御来朝の国賓殿下 関係町村で奉送迎打合せ」〔富士山眺望〕(英国王特使グロスター公) 昭和4年5月1日付)

「グロスター殿下に登山人形を献上 農民の製作品多数御覧に入れ 長谷川知事ゆり一組を」(『静岡新報』1929年=昭和4年5月5日付)

「用水補給策に 大貯水池を設く 鉄道省で丹那区へ」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月8日付夕刊）

「白糸滝の藤花」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月9日付夕刊）

「国立公園問題けふ関係者協議 沼津に七十余名が集つて」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月9日付）

「国立公園静岡協会を設立 展覧会出品物も決定 昨日沼津で大評議会」（『静岡新報』1929年＝昭和4年月日付）

「市町村議選挙と僧侶達の活躍 指導方法を講究する」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月10日付）

「工事の影響から水濁れに苦しむ 丹那隧道と三部落」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月11日付）

「軒灯を青く一遊興費の大割引 大宮町三業組合の反幹部派結束して」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月12日付夕刊）

「御覧に入れる富士山資料 グロスター殿下に 長尾峠展望台で」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月12日付）

「焦り出した浮島沼干拓工事 地元民猛運動開始」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月12日付）

「御殿場口開山は七月七日頃」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月12日付）

「長尾峠の御少憩中に県下物産を御台覧 あかず眺めらるゝ富士の秀峰 斯て同夜は精進へ」〔富士山眺望〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月14日付夕刊）

「精進湖を後に 一路関西へ お名残り惜しげに一御殿場駅からご乗車」〔グロスター殿下〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月15日付夕刊）

「富士徴兵検査」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月15日付夕刊）

「富士山の境界 当局もて余す」〔県境問題〕〔八合目石室紛争〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月15日付夕刊） ▲▲

●歴史文化『静岡新報 Vol.111 昭和4年5月16日～6月30日』

「国立公園問題で三県知事会合」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月17日付）

「町議選挙の違反暴露か 大宮署大活動開始」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月17日付）

「静岡留守隊 裾野で演習」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月17日付）

「次郎長親分の記念碑と縁日 清水隣保館の計画」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月19日付）

「風穴の模型を公園展に出品 家政女学校の山出教諭が実地調査して作製」〔印野風穴〕〔国立公園展覧会〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月19日付）

「御岳教信者を装ひ 祈祷料を騙取す」（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月22日付夕刊）

「丹那隧道工事 順調に進捗 一両年後には完成」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月24日付夕刊）

「国立公園実現に 三島町で大馬力 協会を設けて大運道」〔富士国立公園三島協会〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年5月24日付夕刊）

岡新報』1929年＝昭和4年5月25日付夕刊)

「富士山を中心の 絶景の写真出品 国立公園展覧会へ」(『静岡新報』1929年＝昭和4年5月26日付夕刊)

「丹那隧道西側 明年度着工 三島以西未着手分を」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年5月26日付夕刊)

「富士国立公園三島協会成る 役員会則其決定」(『静岡新報』1929年＝昭和4年5月27日付)

「富士に降雪」(『静岡新報』1929年＝昭和4年5月28日付)

「二百六十万個貯水の 大貯水池竣工す 鉄道省で丹那へ設置」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年5月30日付夕刊)

「今泉鈴川線」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月1日付) ▲▲

「大宮駅前から一合目室下まで定期自動車の運転」〔登山バス〕〔富士宮口砂走り〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月6日付夕刊) ▲▲

「白糸滝を中心に遊園地建設 運動場やホテルなども設く 地元が熱心に計画」〔白糸の滝〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月6日付夕刊)

「丹那隧道西口 工事好成績 本導坑八千九百尺に達す 意外に速に完成か」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月6日付)

「木立附近まで大雪が積る 岳麓地方稀有の寒さ」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月8日付)

「須走口開山式は七月七日」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月9日付)

「国立公園展 修善寺出品勧誘」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月9日付)

「難工の丹那隧道 七年度に竣工 一日四五呎づゝ進工」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月12日付夕刊)

「富士山山開き近し 大宮口登山組合物価協定」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月12日付) ▲▲

「大月、吉田間電気鉄道開通」〔富士山麓電気鉄道〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月13日付夕刊)

「次郎長親分の墓石を欠く 納骨堂の姪の骨もなくなる 迷信家の仕業らし」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月13日付)

「丹那トンネル 一万尺祝賀会 熱海町でも協賛協議」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月14日付夕刊)〔東海道本線〕

「函南村大竹に旅客専用停車場 設置方陳情の為に 村長等昨日状況」〔函南駅〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月14日付夕刊)

「登山者の為に救護所を開設 県衛生課で富士へ二ヶ所 御殿場口と大宮口へ」〔警察電話〕(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月22日付夕刊) →「登山者の為に」(6月22

日付夕刊)、「富士山中に二ヶ所の救護所」(7月13日付夕刊)、「富士山救護所」(7月21日付夕刊)に続報。

「国立公園の具体化 内務省の調査は進みまづ予算と法案を来議会に提出」(『静岡新報』1929年＝昭和4年6月14日付夕刊)

「富士国立公園三県聯合協議 十七日内務省内で」（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月14日付）

「土木委員問題で大宮町会紛糾 新旧両議員対立して」（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月18日付夕刊）

「浅間神社建築に大工組合が運動 先づ、公認組合を設置して猛運動」〔静岡浅間神社〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月18日付）

「青年団富士野営 具体的に決定す」（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月18日付）

「疣観音の岩窟内で 珍しい光藻を発見 此程大宮高女の津江教諭が 世界にも其数は稀れ」〔津江清太郎〕〔沼久保疣観音〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月20日付夕刊）

「国立公園へ修善寺音頭を 伊豆に大衆運動起る」（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月21日付夕刊）

「登山者の為に 救護所を開設 県衛生課で富士へ二ヶ所 御殿場と大宮口へ」〔ラジオ放送〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月22日付夕刊） ▲▲

「何としても植付出来ぬ 丹那盆地の水枯れ 農家益々恐慌」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月22日付）

「丹那トンネル西口に 旅客専用停車場 本省の諒解成り愈々 近く決定せん」〔函南駅〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年月日付）

「富士開山準備祭 七日大宮浅間で」〔浅間大社〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月22日付）

「須走口の甲州屋破産 遂に強制処分」〔須走口の衰退〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月22日付） ▲▲

「富士山四合目の室に 腐乱屍体横はる 死後十ヶ月位を経過」〔自殺〕〔御殿場口〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月23日付） ▲▲

「大月吉田間一岳麓電車開通式 きのみ吉田駅構内で」〔富士山麓電気鉄道〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月25日付夕刊）

「あと七百尺で達する 問題の丹那盆地 西口の本導坑既に九千八十八尺 順調に進む掘鑿工事」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月25日付夕刊）

「東海道電化と本省の発電所計画 県で報奨金を交渉」（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月25日付）

「富士登山道路を修繕」（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月25日付） ▲▲

「清水処女会で富士登山と水泳」（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月26日付）

「裾野の野営講習 白糸滝畔に於いて」〔白糸の滝〕〔静岡県青年団〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月26日付）

→「本県青年団の富士野営修養」（7月13日）、「けふは富士登山」（7月25日付夕刊）に続報。

「急行列車停車問題 三島町の協議会」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年6月26日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.112 昭和4年7月1日～8月15日』

「旅館の客引を断然止めたいーと大宮署で旅館に注意 二三旅館は相変らず反対」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月2日付夕刊）▲▲

「富士山頂で気象観測 沼津測候所で」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月2日付）中段

「沼商山岳部 登山計画」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月4日付）

「岳麓に慈雨」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月4日付）

「お山は暖か 富士山開き近し きのふ单身頂上を極めて吉野儀作君語る」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月5日付夕刊）

「富士山に登る桜府少年団 十四日大宮口から 沼津少年団で親切に歓迎」〔外国人登山〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月5日付）→「憧れの富士へ」（7月11日付夕刊）、「元気な桜府少年団」（7月14日付）、「サクラメント少年団大元気で静岡へ」（7月15日付）に続報。

「須走り口山開き」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月6日付）

「登山者のために AK が受信所 富士山麓は九日から」〔ラジオ放送〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月6日付）

「富士御殿場口開山式 きのふ盛大に」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月6日付）段

「富士山の雪が豪雨で解ける」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月6日付）

「登山者の為 臨時列車 身延鉄道で」〔富士身延鉄道〕〔登山バス〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月7日付夕刊）▲▲

「御殿場駅夏期の乗降客」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月7日付）▲▲

「富士大宮口開山祭 七日盛大に挙行」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月9日付夕刊）

「登山道検分に技手登山」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月9日付）

「憧れの富士山へ 十四日登山して サクラメント少年団 同日夕刻静岡へ」〔外国人登山〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月11日付夕刊）

「富士山本宮あす開山祭 公衆電話も十三日から」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月11日付夕刊）

「中腹以上は今尚雪が多い」〔残雪〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月12日付）

「富士山中に二ヶ所の救護所 御殿場口と大宮口へ 県衛生課員が交替で勤務」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月13日付夕刊）

「本県青年団富士野営収容 廿二日から四日間」〔静岡青年団〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月13日付）

「富士山頂公衆電話」〔頂上郵便局〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月13日付）

「元気な桜府少年団ー大宮口から登山 けふ御殿場口へ下山 沼津少年団からは木刀を贈る」〔外国人登山〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月14日付）

「サクラメント少年団大元気で静岡へ 三つ指の敬礼に湧く暖い親善 けふは久能三保へ」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月15日付）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月18日付夕刊）

「国立公園関係地調査」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月18日付）

「富士山頂より」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月19日付夕刊)
「源頼朝 馬繫の椋 近く浮島村から天然記念物指定の申請」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月19日付)
「電通の登山競走 来る廿日須走口から」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月19日付)
「富士山頂より」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月20日付夕刊)
「富士山頂へ女兒二人 九つと四つが見事に登山」〔幼児登山〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月20日付)
「富士山救護所 毎日の取扱い二三人平均」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月21日付夕刊)
「富士の裾野で壮快な飛行演習」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月21日付夕刊)
「富士山頂より」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月21日付夕刊)
「女教員の富士登山」〔静岡県教育会〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月21日付)
「八歳の少年一人で富士へ 海軍大佐の息」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月22日付)
「御岳昇仙峡行電車二割引 富士身延鉄道」〔広告〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月22日付)
「登山者の為定期運転 大宮口で自動車を」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月23日付夕刊)
「富士山頂より」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月23日付夕刊)
「富士山へ登るには今がよい時期 雪も解けて気温も高い 当分雨も降るまい」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月24日付)
「けふは富士登山 野営講習第二日目」〔静岡青年団〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月25日付夕刊)
「炊事中の野営青年団(別項参照)」〔写真〕〔静岡青年団〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月25日付夕刊)
「直接登山者が著しく増加 御殿場口の旅館淋し」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月25日付夕刊) 段
「富士山頂より」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月25日付夕刊)
「旅費欠の青年に馬車屋の同情 御殿場署を感激させた馬車屋林平の篤行」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月25日付)
「竹馬と一本歯の下駄で富士山頂を極む 大元気の福島県下の二青年」〔変わり種登山〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月26日付夕刊)
「富士山頂より」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月26日付夕刊)
「入江児童 富士登山 御殿場口から」〔清水市入江小学校〕(『静岡新報』1929年=昭和4年7月26日付夕刊)
「富士山頂より」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月28日付夕刊)
「富士山中宝永山の噴火口が崩落 夥しい砂煙に登山者仰天 昨朝の地震で」(『静岡新報』1929年=昭和4年7月28日付)

「三島女青登山」〔三島女子青年団〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月28日付）
「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年7月31日付夕刊）
「富士自動車 夜間運転開始」〔路線バス〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月1日付）▲▲

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月2日付夕刊）
「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月4日付夕刊）
「自動車賃金に新方式 当業者より出願」〔タクシーメーター〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月4日付夕刊）

「大宮登山自動車組合」〔登山バス〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月4日付）
▲▲

「頭だけ現した白骨屍体発見 富士山中八合目で」〔遭難〕〔大宮新道〕昭和4年8月6日付夕刊）▲▲→「富士山中の白骨屍体」（8月8日付夕刊）に続報。

「岳麓地方 旱天甚し」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月6日付夕刊）
「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月6日付夕刊）
「大宮浅間の放火被害者 犯行を自供す」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月7日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月7日付夕刊）
「熟睡中の女教諭を写真師が犯す 富士山四合目の室内で 即時下山を命ぜられる」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月8日付夕刊）

「富士山中の白骨屍体 地元富士根村に引渡さる」〔遭難〕〔大宮新道〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月8日付夕刊）▲▲

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月8日付夕刊）
「富士山金明水にもう、氷が張った 去年より一週間早い」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月9日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月9日付夕刊）
「国立公園 富士を中心に 内務省調査」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月9日付）

「熱海伊東線復活 二俣佐久間線は絶望」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月9日付）

「白糸滝座談会（一）七八両月には平均二百人位の遊覧客がある」〔写真あり〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月9日付）

「一日に十五尺 新記録で大喜び 進んだ丹那隧道工事」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月9日付）

「病気見舞で遅れたと思つた 三万円拐帯事件に就て 大宮支店では語る」〔三十五銀行拐帯事件〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月10日付夕刊）→「三万円拐帯逃走中の」（1931年＝昭和6年8月3日付）に続報。

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月10日付夕刊）
「白糸滝座談会（二）恋の怪僧一日眼の行衛 今でも時々尋ねては来る」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月10日付）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月11日付夕刊）

「国立公園協議会」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月12日付）

「富士八合目で老人頓死す」〔遭難〕〔高齢者登山〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月13日付夕刊）▲▲

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月13日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月15日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.113 昭和4年8月16日～9月30日』

「沼津三島から白糸滝まで視察 公園設計の田村博士」〔国立公園〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月16日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月16日付夕刊）段

「富士山大暴れ 登山全く不能に陥る」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月17日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月17日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月18日付夕刊）

「静岡、大宮、伊東の市、町議選挙は無効 県参事会に現れた採決案の骨子 サテどう裁く？」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月18日付）

「富士頂上の形状が変った？ 数十年来の暴風で岩石が崩れた模様」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月20日付夕刊）

「国立公園の候補地を視察 上井出から富士森林一帯を中越氏等の一行が」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月20日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月20日付夕刊）

「中村市議は失格せず 伊東、大宮両町も同様 県参事会昨夜裁決」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月21日付夕刊）

「富士公園 田村博士観察」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月21日付夕刊）

「富士山頂より」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月21日付夕刊）

「富士山郵便局 九月一日に閉鎖」〔公衆電話〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月24日付夕刊）

「丹那隧道西口 九千九百尺 九月中に一万尺 近く一万尺祝賀会」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月29日付夕刊）

「富士山電話全部取外し」（『静岡新報』1929年＝昭和4年8月29日付）

「けふ富士頂上で閉山式を挙行 気象観測所員だけは 九月末日まで頂上に」（『静岡新報』1929年＝昭和4年9月1日付夕刊）

「西口も十日迄に一万尺に達する 予定より早い丹那隧道」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年9月4日付夕刊）

「上井出村紛擾 尚納まらず」（『静岡新報』1929年＝昭和4年9月4日付夕刊）

「富士の山火事 吉田口五合目より出火 今尚盛に燃ゆ（三日午後四時報）」（『静岡新報』1929年＝昭和4年9月4日付）

「湖上観月会と富士五湖巡り 観月会は既に満員 運輸事務所の催し」〔静岡運輸事務所〕（『静岡新報』1929年＝昭和4年9月13日付夕刊）→「三班に分れて富士五湖巡り」（9月18日付）に続報。

「富士の初雪 八合目まで真白 今朝大宮の気温六十度 例年より一ヶ月早い」（『静岡

新報』1929年=昭和4年9月14日付夕刊)

「速力の使ひ分け あすからの列車時間改正に 今夜は従業員総動員」〔鉄道省〕(『静岡新報』1929年=昭和4年9月14日付夕刊)

「身延線時間表」〔富士身延電鉄〕(『静岡新報』1929年=昭和4年9月14日付夕刊)

「三班に分れて富士五湖巡り 静岡運輸事務所で三百名の団体旅行」(『静岡新報』1929年=昭和4年9月18日付)

「静岡県交通運輸系統図 伊東町三業組合 伊東町旅館組合 敏速製版 大島自動車部 伊東町温泉組合 福永自転車商会 伊東水力電気 阪上商店 旭自動車商会 東海軒 古知商店 阪七自動車部 原田自動車部 内野工業事務所 平和商会 丸井商会」〔共同広告〕〔静岡県内バス路線図〕〔静岡県内バス時刻表〕(『静岡新報』1929年=昭和4年9月24日付「県下交通号」)

「豊猟を予想される富士の山麓 解禁を前に控へて 狩猟家の偵察頗る盛ん」(『静岡新報』1929年=昭和4年9月28日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.114 昭和4年10月1日～11月15日』

「浮島沼附近に素晴らしい鴨の群 猟期愈々切迫して 天狗連の手ぐすね」(『静岡新報』1929年=昭和4年10月1日付)

「鈴川海岸の砂利採取紛擾 県当局の調停で解決」(『静岡新報』1929年=昭和4年10月10日付夕刊)

「前年より多さうな猟天狗」〔浮島沼〕(『静岡新報』1929年=昭和4年10月10日付)

「師団架設演習は富士裾野で行ふ 第三師団の秋季演習」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1929年=昭和4年10月11日付)

「砲兵团観測演習 十六日から四日間 大宮町を中心に」(『静岡新報』1929年=昭和4年10月13日付)

「浮島附近も豊猟 押寄せた大小天狗連 百五六十名」(『静岡新報』1929年=昭和4年10月16日付)

「全山紅葉して得も云へぬ美観 名画家の筆も現はし得ぬ 昨今の富士の眺め」〔眺望〕(『静岡新報』1929年=昭和4年10月24日付夕刊)

「富士裾野で観測演習 飛行五聯隊と重砲一聯隊と」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1929年=昭和4年10月29日付夕刊) 段

「英艦ク号乗組将校 雪中の富士登山 引続き昨日も二十名 同艦は卅日朝抜錨」〔清水港 クロンオール号〕〔雪中登山〕〔外国人登山〕(『静岡新報』1929年=昭和4年10月29日付)

「藤原の五卿を岳麓に合祀 敷地廿五町歩寄附を決議し地元で実現の猛運動」〔籠坂峠〕〔藤原光親〕(『静岡新報』1929年=昭和4年10月30日付夕刊)

「小政の五十回忌」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1929年=昭和4年10月30日付夕刊)

「身延鉄道沿線の紅葉」〔富士身延電鉄〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月2日付夕刊)

「得難き珍品五百余点 富士山資料展覧会」〔葵文庫〕(『静岡新報』1929年=昭和

4年11月4日付)

「丹那盆地の不作賠償問題 上京委員連帰村す」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月8日付夕刊)

「丹那隧道東口 又も集塊岩石に突当る 目下排水設備に全力を傾注 開鑿工事行悩む」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月8日付夕刊)

「うまい智慧を拝借したい 丹那観察の万国工業議員に 期待を持つ鉄道省」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月8日付夕刊)

「打首の塩漬を江戸へ送つた 送り状の写を発見 筑波騒動と田沼家」〔天狗党事件〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月8日付夕刊)

「岳麓今泉を中心に豪雨中の大激戦 夜を冒して三島方面へ強行軍 火蓋を切つた秋季大演習」(『静岡新報』1929年=昭和4年11月8日付)

「豪雨を衝いての夜襲戦から払暁戦へ 葦中、田方農生徒も参加して静聯諸兵聯合演習終る」(『静岡新報』1929年=昭和4年10月9日付夕刊)

「富士山麓で自殺 死に場所を求めてさまよひ歩いた青年」〔御殿場口一合目〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月9日付夕刊)

「けふ・大野原の遭遇戦を皮切りに 静・豊両聯隊対抗演習 裾野にて 中村特派員報」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月10日付)

「旅団演習第一日 雨の日疋ヶ原に 一大白兵戦を演ず 滝ヶ原にて 中村特派員報」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月11日付)

「旅団演習第二日 形勢俄に逆転し北軍追撃又追撃 裾野にて—中村特派員報」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月12日付)

「箱根山麓の暁を破る 大山地戦の壮絶! 今暁・旅団演習終る 三島にて—中村特派員報」(『静岡新報』1929年=昭和4年11月13日付夕刊)

「大宮町議訴願 原告側上京す」(『静岡新報』1929年=昭和4年11月14日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.115 昭和4年11月16日~12月30日』

「裾野で大巻狩 大宮町猟友会員が」(『静岡新報』1929年=昭和4年11月16日付夕刊)

「富士郡でも電力値下運動 先づ実行団体組織」(『静岡新報』1929年=昭和4年11月26日付)

「富士山を二米低く 修身書は口語体に 算術『九九』に新機軸 文部省が小学読本の大改正」〔富士山標高3778m→3776m〕(『静岡新報』1929年=昭和4年11月27日付夕刊)

「富士山大降雪 三合目下まで」(『静岡新報』1929年=昭和4年11月27日付夕刊)

「樹齡千年を経た名木 矢立の大杉焼く」(『静岡新報』1929年=昭和4年12月4日付)

「熱海戦西側 三島沼津間 愈々明年度着手」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1929年=昭和4年12月7日付)

「二合目下まで積雪す 富士の大降雪」(『静岡新報』1929年=昭和4年12月13日付)

「駿東農林生が雪中登山の計画 卅一日に出発して 元日の御来光を仰ぐ予定」〔農林学

校)〔元旦登山〕(『静岡新報』1929年=昭和4年12月13日付)

「北山小学校の訓導が奇怪な文書発送 郡教育会主事の不必要論や北山分団脱退の声明」
(『静岡新報』1929年=昭和4年12月17日付夕刊)

「丹那湯水見舞金 鉄道省と折合いが付く」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕
(『静岡新報』1929年=昭和4年12月18日付)

■1930年=昭和5年

●歴史文化『静岡新報 Vol.116 昭和5年1月1日～2月15日』

「富士国立公園静岡協会活躍 新たに評議員を決定し 近く打合会を開催」(『静岡新報』1930年=昭和5年1月7日付)

「富士の美さはあなた!雪の美さです 歯磨スモカ」〔広告〕(『静岡新報』1930年=昭和5年1年7月日付)

「五合目附近に凍死体横はる 雪中登山中遭難か」〔吉田口〕(『静岡新報』1930年=昭和5年1月8日付) ▲▲

「富士登山土産に 木彫りの人形 明るい気分の学生軍人姿 登山期までに売出す」〔富士登山土産製作組合〕〔御殿場〕(『静岡新報』1930年=昭和5年1月9日付)

「雪の富士山頂を完全に踏破 日本力行会の十一名 十一日帰京の途に就く」(『静岡新報』1930年=昭和5年1月12日付) ▲▲

「国立公園調査会 年度内に設置か」(『静岡新報』1930年=昭和5年1月13日付)

「けさ富士駅構内で身延電鉄正面衝突 客車の前部大破して 乗客六名重軽傷」〔富士身延電鉄〕(『静岡新報』1930年=昭和5年月日付)

「高松宮様、スキーに 雪の富士山麓へ 御都合に依つては登山の御壮挙 廿二三日頃御出発」〔雪中登山〕〔皇族登山〕(『静岡新報』1930年=昭和5年1月19日付夕刊)

「三島沼津間の熱海線工事 愈々四月から着手」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年=昭和5年1月23日付)

「丹那盆地の救済策を協議 耕地整理を終了して」〔大出水〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年=昭和5年1月25日付夕刊)

「天界の奉仕者!富士山頂の感激 慰問員の決死的登山」〔雪中登山〕〔山頂気象観測〕〔佐藤順一〕〔梶房吉〕(『静岡新報』1930年=昭和5年1月29日付夕刊) ▲▲

「毘沙門天祭に臨時列車」(『静岡新報』1930年=昭和5年1月30日付)

「御年度末には貫通出来るか 順調に進む丹那隧道」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年=昭和5年2月2日付夕刊)

「毘沙門祭典に臨時列車」(『静岡新報』1930年=昭和5年2月5日付)

「御殿場地方大雪」(『静岡新報』1930年=昭和5年2月7日付)

「寒さに祟られた毘沙門縁日 人出は十分の一」(『静岡新報』1930年=昭和5年2月7日付)

「高空気流観測の佐藤技師下山す 月余に亘る雪中苦難を終り 昨夜御殿場で歓迎会」〔佐藤順一〕〔頂上気象観測〕〔梶房吉〕(『静岡新報』1930年=昭和5年2月9日付夕刊) ▲▲

●歴史文化『静岡新報 Vol.117 昭和5年2月16日～3月31日』

「実現の気運に近づく 浮島沼干拓事業 新計画案を 農林省に提出 明年度予算に計上か」 (『静岡新報』 1930年=昭和5年2月27日付)

「原案の出来上った国立公園法 国立公園調査会に諮問して今冬議会に提出 国立公園法要綱」 (『静岡新報』 1930年=昭和5年3月6日付)

「丹那トンネル被害地 救済策決る 県と地元で研究の結果」 [大出水] [東海道本線] (『静岡新報』 1930年=昭和5年3月11日付)

「丹那隧道工事実況映画 三島町で公開」 (『静岡新報』 1930年=昭和5年3月15日付)

「丹那トンネル あと四千尺 西口の工事順調に進む 東口は水圧の為難工」 [東海道本線] (『静岡新報』 1930年=昭和5年3月19日付夕刊)

「富士遊覧道路 結局円満解決せん 北部町村長の調停で」 [富士山西麓遊覧自動車道路] (『静岡新報』 1930年=昭和5年3月21日付) ▲▲

「大宮浅間の桜 咲き初む 満開は三日頃」 [浅間大社] (『静岡新報』 1930年=昭和5年3月29日付)

「電柱は反対側にと富士山展望の便の為に 白根知事より逡・鉄両相へ上申」 [眺望] [昭和天皇巡幸] (『静岡新報』 1930年=昭和5年3月26日付) ▲▲→「北側の電柱悉く撤去」 (4月20日付夕刊)

「お札博士来岡 究明の女生徒と共に 静岡産業視察」 [スタール博士] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月9日付夕刊)

「一日六尺づゝ進む丹那隧道 残工は四千五十尺」 [丹那トンネル] [東海道本線] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月9日付)

「スタール博士昨夕静岡へ 実に五回目の訪問 けふは久能その他を視察」 (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月11日付)

「お札博士 静岡市民に挨拶す」 [スタール博士] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月12日付)

「お札博士のスピード行脚 けさ市内各所を視察」 [スタール博士] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月12日付夕刊)

「北側の電柱悉く撤去 各種広告も取除く 行幸を前にして鋭意努力 富士御展望の為め」 [昭和天皇巡幸] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月20日付夕刊)

「富士山爆発か 金明水、銀明水沸騰に 岳麓民恐怖す 仲木教育部長の受売予言」 [富士山噴火] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月25日付夕刊)

「御道筋を悉く拡築する 県で全部を調査中」 [昭和天皇巡幸] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月25日付夕刊)

「爆発の前兆などとは根もない誤伝 実地調査も中止す」 [富士山噴火] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月26日付夕刊)

「丹那の西口 工事進む」 [丹那トンネル] [東海道本線] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月27日付夕刊)

「白糸猪之頭間に一自動車道路開設 猪之頭区が区費を投じて」 [富士山西麓遊覧自動車道路] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月27日付夕刊) ▲▲

「電柱取除け始まる」 [昭和天皇巡幸] (『静岡新報』 1930年=昭和5年4月29日付)

夕刊)

●**県立プリント『静岡新報 昭和5年5月』**

「臨時県会に要求の奉迎予算決定す 総額約二十九万円 御警衛関係十七万八千余円」〔昭和天皇巡幸〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月1日付夕刊）

「富士畜産で牧場開始」〔富士郡畜産組合〕〔朝霧高原〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月1日付夕刊）

「白糸滝」〔白糸の滝〕〔写真〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月5日付「お国自慢を写真で語る[2]」）

「早くも登山客の争奪 御殿場と須走口で」〔自動車道路〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月9日付）▲▲

「順調に掘進む丹那トンネル 明年六七月頃貫通か 三島西側の工事に着手」〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月14日付夕刊）

「大宮でまたも白、青の喧嘩 芸妓花代五十銭に値下げ 青派の不意打に白派驚く」（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月15日付夕刊）

「美観を汚すな 富士の眺望を妨ぐ電線を取去れ!! 自然の姿が見えないと本県から鉄道省へ抗議 観光局も大賛成」〔昭和天皇巡幸〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月16日付夕刊）

「御巡幸平安祈願に富士へ登山 御殿場町の梶房吉氏」（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月18日付夕刊）

「乞食の村に立退きの命令 聖上御通過に際して 誠に見苦しいので」〔山窩〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月18日付夕刊）

「雪解けが早いので開山式も早める 富士山御殿場口で」（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月20日付）

「外人五名富士へ登山 梶氏と共に」〔外国人登山〕〔梶房吉〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月20日付）

「表彰される お山の主梶さん 永年気象観測を手助けして 大日本気象学会から」〔梶房吉〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年5月23日付）

●**県立プリント『静岡新報 昭和5年6月』**

「大石寺境内の本鏡坊焼失す 今晩三時半頃出火」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月5日付夕刊）

「御殿場口開山来月一日と決る 諸物価は平均二割安 登山組合の協定成る」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月5日付）

「次郎長の墓をかく困った賭博人 トバで勝つ迷信から 清水署で犯人厳探中」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月5日付）

「丹那用水問題 田植期を控へて 善後策に区民奔走」〔大出水〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月8日付夕刊）

「丹那口から沼津への工事 七月から着工する」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月8日付夕刊）

「国立公園から伊豆を除くな 伊豆で猛烈場運動」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月13日付夕刊）

「大野原の野芝盛んに盗まれる」〔芝生盗掘〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月14日付夕刊）

「裾野の『佐野原神社』地元が昇格運動 何うやら望みがありさうだと非常な意気込で」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月14日付夕刊）

「大宮登山口の諸物価協定 開山期ちかづいて昨日」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月14日付夕刊）

「大宮口の登山者 これが本年の走り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月17日付夕刊）

「丹那盆地で田植不能 損害補償陳情」〔大出水〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月18日付）

「お山の天候をラヂオで放送 沼津測候所が例年通り」〔ラヂオ放送〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月18日付）

「検番設置問題から大宮花街又紛擾」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月19日付）

「二日の旅程で富士五湖廻り 会費は十一円五十銭 旅行協会の主催で」〔静岡県旅行協会〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月19日付）

「丹那隧道西口工事愈々着手 トンネル工事も順調」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月20日付）

「静高山岳部の旅行計画成る 近く改めて出発期日決定」〔静岡高校〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月21日付夕刊）

「七月一日からいよゝゝ御殿場口開山 不況で団体申込み減り 各営業者悲観す」〔登山電話〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月22日付）▲▲

「昨暁、大宮町に大火 廿一戸十五棟を全焼 西新町から出火し 大社の附近とて一時は大混雑」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月23日付）

「一日から開山の丹宮口物価表」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月23日付）

「大火の翌日 大宮に又火災 四戸四棟を焼く」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月24日付）

「関西地方まで宣伝の旅 大宮口自動車組合が」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月24日付夕刊）▲▲

「富士山麓に運動場設置計画 滝ヶ原廠舎附近に」〔岳麓文化村〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月25日付夕刊）

「丹那トンネルの奥所で 土砂五百坪大崩落 同時に湧水して人夫等狼てゝ避難 今後の進工上に一難関」〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月27日付）

「開山前の登山客多く室開きを早める 東口の登山業者が」（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月27日付）

「登山マラソン練習」〔日本学生マラソン連盟〕〔富士登山マラソン競走〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月27日付）

「団扇太鼓の初登山」〔日蓮宗登山〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月28日付夕刊）

「今年も富士の山頂で気象観測を開始 中央气象台の佐藤技師 きのみ梶房吉氏と共に登山す」〔頂上気象観測〕〔佐藤順一〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年6月28日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和5年7月』

「夏！夏！夏！海へ！山へ！県教育会や静高等の此の夏の計画発表 少年団も負けるもんかーと 富士登山やらキャンプ生活 涼しい催しのいろゝゝ」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月2日付夕刊）

「大宮口の開山祭 十一日奥の院で」〔浅間大社〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月2日付夕刊）

「御殿場開山式 けふ盛大に」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月2日付夕刊）

「登山に絡む最初の喧嘩」〔路線バス〕〔富士山麓電気鉄道〕〔富士急〕〔須走〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月3日付夕刊）▲▲

「沼川改修促進に 地元で猛運動 昨日地元代表協議会」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月4日付夕刊）

「コノシロ池の氷も解ける お山の夏は例年より早く 好適の登山期に入る」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月4日付夕刊）

「金髪の二嬢元気で登山」〔外国人登山〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月5日付夕刊）

「馬車自動車■の志願者締切る 組合で正式に決定」〔御殿場口富士登山営業組合〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月5日付夕刊）▲▲

「十一日から登山列車」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月5日付夕刊）

「金明の滝は中旬までか 今は頗る壮観」〔金明水〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月5日付夕刊）

「旅客を扱へと 沼津でも請願 超特急に対して 機関車の付換時間を利用して」〔御殿場線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月6日付）

「頂上に丸裸で二時間 さても驚いた 熊谷氏の登山ぶり」〔変わり種登山〕〔大日本健康食物研究所〕〔熊谷■道〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月6日付）▲▲

「女子供に良い砂上乘合スキー 御殿場口で考案し近く砂走りに使用」〔大砂走り〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月6日付）

「砲術校生登山」〔海軍砲術学校〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月6日付）

「追善供養の鈴川競馬」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月8日付）

「山に！海に！酷熱を征服する各学校の計画」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月9日付夕刊）

「風致を害する広告物撤去 富士山中心のみでなく 広く全県下の名勝に適用」〔屋外広告〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月9日付）

「妨害になる案内記をよせと 御殿場口登山組合で 山麓電鉄に抗議する」〔富士山麓電気鉄道〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月9日付夕刊）▲▲

「大宮口開山は十一日執行 昨日盛大に準備祭举行」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月9日付夕刊）

「沼津駅を凌駕する 三島新停車場 丹那線の工事進捗し いよゝゝ近く着工と決る」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月9日付夕刊）

「流石魔の山、愛鷹も楽々と魔力を失ふ 例の熊谷氏の胃の力に 彼処の石はビスケットの味がすると突然沼津に現れた氏語る」〔大日本健康食物研究所〕〔熊谷■道〕（『静岡

新報』1930年=昭和5年7月6日付)

「富士登山マラソン競走 愈々廿日決行 学生聯盟を始め参加チーム猛練習」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月13日付)

「山中口新登山道路 十二日から開通 五湖巡りに都合よく 今後続々利用者ある見込」〔山中口登山道〕(『静岡新報』1930年=昭和5年7月14日付) ▲▲

「愛鷹山を宣伝 須山村と御殿場で 聯合保勝会作り」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月14日付)

「須山村長助役 突然辞職」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月14日付)

「三つの幼児が 母さんと登山 恵まれた快晴に 各口とも非常に賑ふ」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月14日付)

「静師生登山 一行七十余名元気」〔静岡師範学校〕(『静岡新報』1930年=昭和5年7月14日付)

「富士登山西口道路 五合目まで出来 第二期工事完成せば 白糸から一日で往復出来る」〔西口登山道〕〔人穴口登山道?〕(『静岡新報』1930年=昭和5年7月15日付夕刊) ▲▲

「砂上スキー 愈々正式に使用願」〔大砂走り〕(『静岡新報』1930年=昭和5年7月15日付夕刊)

「富士登山と五湖めぐり 外に沼津まで徒歩往復 静岡西訓練所の壮挙」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月15日付)

「浮島沼干拓 地元で猛運動 関係二町八ヶ村が 水防組合設けて」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月16日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月16日付夕刊)

「登山用具を半値以下で売る 組合員以外の商人が 大宮町で近く一悶着か」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月17日付夕刊)

「避暑客で賑ふ 御殿場附近」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月17日付夕刊)

「白根知事一行 魅惑に山愛鷹へ 廿二日御殿場に一泊し 翌朝愈々縦走の途に」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月18日付)

「下山の途中負傷 一抱への石が落ち」〔遭難〕(『静岡新報』1930年=昭和5年7月18日付) ▲▲

「富士山天気予報(十八日)」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月18日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月18日付夕刊)

「活気立つ登山マラソン」〔富士登山マラソン競走〕(『静岡新報』1930年=昭和5年7月18日付)

「富士山天気予報」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月19日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月19日付夕刊)

「天候不順から登山者に故障 手当を受けた者廿余名に及ぶ」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月20日付夕刊) ▲▲

「富士山便り」(『静岡新報』1930年=昭和5年7月20日付夕刊)

「富士山頂に於いてクラブ歯磨デー挙行 クラブ歯磨本店」〔広告〕(『静岡新報』1930年=昭和5年7月20日付)

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月22日付夕刊）
「お札博士 今日再度来岡」〔スター博士〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月22日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月22日付夕刊）
「沼川改修工事 県会に提案せよ 地元から県に陳情」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月22日付）
「荒も鎮つて 富士賑ふ」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月22日付）
「浜松高女生 富士登山」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月22日付）
「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月23日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月23日付夕刊）
「富士山救護所 成績だいぶよく八月十五日まで開設」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月25日付夕刊）
「恒徳王殿下 御登山」〔皇族登山〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月25日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月25日付夕刊）
「熱海線工事進む いよいよ八月初旬から 丹南西口沼津間の線路敷設工事着手」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月25日付）
「一切の涼味を一箇の中に潜めたる ミツワ石鱈」〔広告〕〔富士山の図柄が北アルプスに変更〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月25日付）
「登山する人へ 初心者の陥り易い弊 理学博士 武田久吉氏談」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月25日付夕刊）
「御殿場駅に 東側乗降口設置 有力者の応援を得て 地元が極力運動中」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月26日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月26日付夕刊）
「富士登山は警戒を要す 天候悪化の模様 きのふ气象台から警告」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月26日付）
「秋冷の裾野で 砲兵団演習 来る九月初旬に 想はれるその壮観ぶり」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月27日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月27日付夕刊）
「沼川改修計画 今一息といふところ」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月27日付）
「知事の登山は八月二三日」〔愛鷹山〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月27日付）
「国立公園の条件（上）林学博士 本多静六」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月28日付夕刊）
「山登りの準備と注意すべき事柄」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月28日付）
「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月29日付夕刊）
「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月29日付夕刊）
「国立公園の条件（中）林学博士 本多静六」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月29日付夕刊）
「砂上スキーを馬に曳かせる」〔大砂走り〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月30日付）

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月30日付夕刊）

「国立公園の条件（下）林学博士 本多静六」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月30日付夕刊）

「丹那隧道排水工事進む」〔大出水〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月31日付）

「沼川改修に曙光 補助一次審査会通過」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月31日付夕刊）

「これで八回目！ 東京大阪間高速電車 罷りならぬ一と却下 資本金二億五千万円の日本電気鉄道」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月31日付夕刊）

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月31日付夕刊）

「富士山中大荒れ 濃霧と暴風で登山不能 大宮口の石室避難者三百余名」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月31日付夕刊）

「自転車を背負つて富士登山」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月31日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年7月31日付夕刊）

● 県立プリント『静岡新報 昭和5年8月』

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月2日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月2日付夕刊）

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月3日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月3日付夕刊）

「浮島村の水田浮き上る 流失を警戒中」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月3日付）

「石室でダンス 退屈凌ぎの女学生が」〔神戸市立第二高等女学校〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月3日付）

「高山病で危篤」〔遭難〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月3日付）▲▲

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月5日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月5日付夕刊）

「富士登山客相手の 営業者が脱税 県当局徹底的に調査中」〔脱税〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月6日付）▲▲

「初秋の富士山を宣伝 御殿場口で」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月6日付）

「早天修養会員 富士登山」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月6日付夕刊）

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月6日付夕刊）

「富士の賭場割れ」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月6日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月6日付夕刊）

「富士山天気予報」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月7日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月7日付夕刊）

「素晴らしい快読物揃ひ＝富士＝九月号」〔広告〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月7日付夕刊）

「林間学校で 御殿場賑ふ」（『静岡新報』1930年＝昭和5年8月8日付夕刊）

「富士と語る 八合目附近は 既に冬のやうな寒さ ドテラで炬燵へもぐり込む」〔富士

山電話] (『静岡新報』1930年=昭和5年8月10日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月12日付夕刊)

「八十の老翁 孫と富士登山」〔高齢者登山〕(『静岡新報』1930年=昭和5年8月13日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月13日付夕刊) ←原紙が半分破れて読めず。

「浮島附近の稲作 浸水で全滅の惨状 先般の豪雨以来其儘で 地元では極力沼川の改修を要望」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月13日付)

「国際化した 富士登山客 昨日迄に登った外人百余名 中には美しい話もある」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月15日付)

「富士山便り」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月15日付夕刊)

「富士の救護所 十五日で閉鎖 非常な成績を収めて」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月17日付)

「時代に押された 馬力業者の陳情 税金を下げて危機の四千名を救へと」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月20日付)

「佐藤技師登山 夏の記録を作るべく」〔頂上気象観測〕〔佐藤順一〕(『静岡新報』1930年=昭和5年8月23日付) ▲▲

「丹那トンネル工事 又も大断層の試練 如何にして貫通するか? 大自然と闘ふ鉄道省」〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年=昭和5年8月23日付夕刊)

「御殿場附近に 農民福基学校 賀川豊彦氏が中心になり 目下敷地を選定中」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月24日付)

「雨と不景気で収入は半減 登山者も五万以下の見込 富士の閉山期迫る」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月28日付夕刊)

「丹那トンネル工事 順調に進む 明年度中には貫通 三島沼津間は十月に着工」〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年=昭和5年8月31日付夕刊)

「臨時救護所で救護された人々一ヶ月に二百廿三人 重態者は僅に二三名」(『静岡新報』1930年=昭和5年8月31日付夕刊)

●県立プリント『静岡新報 昭和5年9月』

「初秋の裾野に砲兵団演習 けふから三日の朝にかける 春仁王殿下も御参加」(『静岡新報』1930年=昭和5年9月1日付)

「面目一新の田子港 埋立地価暴騰」〔田子の浦港〕(『静岡新報』1930年=昭和5年9月2日付夕刊)

「沼川改修工事 県会に提出 工費百二十万円で」(『静岡新報』1930年=昭和5年9月2日付)

「岳麓開発の遊覧道路 紛擾納り近く着工か 県議の調停で地元が円満妥協し 出来れば五湖への近道」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕(『静岡新報』1930年=昭和5年9月3日付夕刊) ▲▲

「富士山頂上の岩石採取事件 富士閉山式の当日関係者より論議されん」〔浅間大社〕(『静岡新報』1930年=昭和5年9月4日付夕刊) ▲▲ 前後の記事が見つからないのでんな事件か見当がつかない。

「強力組合創立」〔御殿場口〕〔石田久雄、小宮山正〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月4日付夕刊）

「富士山頂に七十余日 佐藤技師に従つて滞在した 庄作少年二日に下山」〔頂上気象観測〕〔佐藤順一〕〔梶庄作〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月4日付）▲▲

「浮島の稲作被害 約三割の減収予想 村民極度の苦境に陥る」（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月5日付）

「秋冷の富士に登山者多し 六日には八百余名」（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月9日付夕刊）

「富士に降雪 九合五勺附近まで薄化粧 例年より一月早い」（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月14日付夕刊）

「クラブ白粉 クラブ石鹸」〔富士山写真バックの広告〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月14日付）

「紅葉の客誘致に岳麓一帯総動員 鉄道省と協力して」（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月16日付夕刊）

「富士山の初雪」（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月21日付）

「富士頂上の気象観測 今月で一先づ打切る」〔頂上気象観測〕〔佐藤順一〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年9月24日付）

●**県立プリント『静岡新報 昭和5年10月』**

「獲物を悲観される 裾野一帯の猟況」（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月1日付）

「富士山頂に残つて 気象観測中の佐藤技師下山 十二月初旬更に登山」〔頂上気象観測〕〔佐藤順一〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月3日付）

「臨時県会を目前に 大宮甲府線解決」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月4日付夕刊）

「空地聯絡して 実弾射撃演習 九日から富士裾野で 各務原機四機三島へ」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月7日付）

「実弾射撃演習参加の各務ヶ原の四機 けふ三島で練習飛行 あすから演習参加」（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月9日付夕刊）

「富士の降雪で 小鳥は山麓へ 解禁日をあすに控へ 狩猟家連中色めく」（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月14日付）

「嫉まれた久遠寺管長 僧籍を剥奪さる 檀徒総代が復籍の猛運動を開始 富士郡に又も醜僧争ふ」〔久遠寺騒擾〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月19日付夕刊）

「浮島のバン以外は 岳郎一帯に不猟」（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月19日付夕刊）

「大宮町の人口 二万四千七十七人 前回より千三百人増し 失業者は二百八十人と出る」（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月20日付）

「湧水と断層で 難工事続く 断層の先には尚多量の水 警戒を加へつゝ作業」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月22日付夕刊）

「国立公園法要項 特別委員会で可決」（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月28日付）

「断層に突当り 難工又難工 三度水抜坑を開鑿 障碍と闘ふ丹那トンネル」〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月30日付夕刊）

「断層の上部約四百尺 物凄い一面の水 現在の水抜坑では排水が出来ぬ 難工事を続く丹那隧道」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月30日付夕刊）

「伊豆半島と富士を結ぶ 南口登山道復活運動 国立公園協会員が実地踏査」（『静岡新報』1930年＝昭和5年10月30日付夕刊）

●**県立プリント『静岡新報 昭和5年11月』**

「大宮大淵線の路線紛擾解決 位置を変更して 両者の妥協成立し」（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月2日付夕刊）

「久遠寺の新貫主に 壇信徒が反対 入山当日を憂慮し 大宮署で警戒に努む」〔久遠寺騒擾〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月15日付夕刊）

「自殺するとて 雪の富士へ登山 由比町の酒屋の倅 雪中の富士を大搜索」〔望月武司〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月15日付）→[次項が続報。](#)

「まだ判明せぬ 青年の行方 一合目まで自動車で それから単身登山」〔自殺〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月16日付夕刊）

「身延線（大宮西町）駅長等 大掛りな乗車証偽造 静岡運輸事務所で発見し 県刑事課大活動開始」（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月19日付）

「大宮駅の出札係も 取調べを受く 事件は一段落を告げ 検事局に移されん」（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月21日付夕刊）

「富士遊覧道路 竣工は明後年 最近漸く着工す」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月23日付夕刊）

「羽衣松を蝕む 白蟻を駆除 十二月から一月までの間に 根本を掘り返して」（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月26日付）

「近年珍らしき大震 中央气象台午後発表」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月27日付）

「丹那断層帯の活動 震源地は此の内に点在（中央气象台三島支台発表）」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月27日付）

「凄惨目も当てられぬ 伊豆半島の被害地 家屋の倒壊焼失破損算なく 死者二百廿余名を数ふ」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月27日付）

「丹那隧道内で土砂崩壊し 工夫五名生埋めとなる」〔北丹那地震〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月27日付）

「五名中の一人 漸く救はる 残る四人の救護作業 頗る至難と伝へらる」〔北丹那地震〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月28日付）

「丹那盆地を縦に 十五町の大断層 此処にも見る惨状の数々」（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月28日付）

「丹那西口で埋没の 四名は生存か 救助作業中の工夫に 怪我はしたが元気だーと話掛く」〔北丹那地震〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月28日付）

「今朝八時に 卅秒に亘る余震 今後とも大した心配はない」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1930年＝昭和5年11月28日付）

報』1930年＝昭和5年11月29日付夕刊)

「丹那トンネル内で 今晩屍体二個発掘 残るは一人これも絶望か」〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月29日付夕刊)

「埋没されて卅余時間 奇蹟的に救はる 丹那トンネルの闇の地底から 残る三人の救助に努む」〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月29日付夕刊)

「平井から軽井沢へ 震害の跡を辿る うねゝと続く一尺余の大地割 軽井沢にて 小坂特派員報」〔北丹那地震〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月29日付夕刊)

「羽衣松を蝕む 白蟻を駆除 十二月から一月までの間に 根本を掘り返して」(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月26日付)

「東豆一帯は隆起し 反対に西部は低下 元箱根、浮橋(北鹿野)の線を境に 気象台の断層調査」〔北丹那地震〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月28日付)

「丹那トンネルは 工事続行に決定 小事故程度の被害と判り」〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月29日付)

「落差三十尺に及ぶ 二筋の大断層発見 丹那で国富技師一行が」〔北丹那地震〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月29日付)

「七十余町歩の耕地に 幅二間の大亀裂 丹那から畑へかけて生々しく 耕地約三町歩も陥没」〔北丹那地震〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月29日付)

「憂慮された丹那隧道 断然工事を続行 何等支障を発見せず きのふ技術者会議で内定」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年11月30日付)

●県立プリント『静岡新報 昭和5年12月』

「破壊箇所は復旧は容易 断層突破が難工事 丹那隧道工事継続問題に関し近く 鉄道で技術者会議」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年12月2日付)

「丹那隧道の善後策に けふ重大な協議 根本方針に変わりはないが 今後の対策について」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年12月4日付)

「西口坑内に三ヶ所の 喰違を発見」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年12月4日付)

「丹那隧道の復旧は 約二ヶ月掛る見込 工事費は約十一万円 技術者会議で工事続行に決す」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年12月5日付)

「雪中の富士山 踏破の壮挙 横浜山岳会員松竹蒲田 ニュース部員が登山」〔雪中登山〕(『静岡新報』1930年＝昭和5年12月7日付) ▲▲→「雪中籠城を企てた青年」(12月12日付夕刊) [に関連記事。](#)

「富士を中心に 大雪景を呈す 駿甲国境の大降雪」(『静岡新報』1930年＝昭和5年12月7日付)

「国立公園法案 農林側で研究 産業を阻害してはと 場合に依れば内務側に抗議」(『静岡新報』1930年＝昭和5年12月11日付)

「雪中籠城を企てた青年 家人に引渡さる」 (『静岡新報』1930年=昭和5年12月12日付夕刊) ▲▲

「丹那隧道西口で 土砂一坪崩壊 作業中の工夫重傷」 [丹那トンネル] [北丹那地震] [東海道本線] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月13日付)

「伊豆大震の断層説を 今村博士が反駁 三博士が伊豆地震の調査発表 奇想天外な半畳も出る」 (『静岡新報』1930年=昭和5年12月14日付)

「村民大挙して 県当局に陳情 途中大宮で喰ひ止められる 上野の水道問題続報」 (『静岡新報』1930年=昭和5年12月25日付)

「雪の富士山頂で 冬の気象観測 佐藤技師廿七日登山」 [頂上気象観測] [佐藤順一] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月25日付夕刊)

「太郎坊から三合目に スキー場を開く 山麓保勝会の計画」 [御殿場スキー場] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月25日付)

「長泉の山中に 約百間の崩壊 降雨があれば危険だと 山裾の住民戦々恟々」 [北丹那地震] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月25日付)

「伝法村の地主連が 組合を設立 全農運動への対策に 総会を開いて種々な決議」 [小作争議] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月27日付夕刊)

「流れた水の量が 丸ビルの卅五倍 丹那トンネル工事で 興味ある鉄道省技師の研究」 [大出水] [北丹那地震] [東海道本線] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月27日付夕刊)

「富士山と琵琶湖の伝説」 [広告記事] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月27日付)

「富士登山口の 鳥居竣工 昨日落成式」 [浅間大社] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月29日付)

「雪の富士へ 京大生が登山 廿三日頂上を極む」 [雪中登山] [今西錦司] (『静岡新報』1930年=昭和5年12月30日付) ▲▲

■1931年=昭和6年

●県立プリント『静岡新報 昭和6年1月』

「これでは堪らぬと 地主が会社組織で対抗 对小作人関係先鋭化し 富士郡下の珍現象」 [小作争議] (『静岡新報』1931年=昭和6年1月8日付)

「雪の富士山に登つて 此世に『さようなら』」 [自殺] (『静岡新報』1931年=昭和6年1月9日付夕刊) ▲▲

「丹那隧道内に 研究の装置 貴重な地塊運動を 世界に先んじて調査」 [丹那トンネル] [東海道本線] [北丹那地震] (『静岡新報』1931年=昭和6年1月9日付夕刊)

「岳麓一帯 銀世界 稀有の大雪」 (『静岡新報』1931年=昭和6年1月10日付夕刊)

「富士郡一帯に 地主会設立か 各町村で準備を開始 行くゝは財団法人組織に」 (『静岡新報』1931年=昭和6年1月11日付夕刊)

「宗祖六百五十年祭 大石寺で執行 今秋十月九日より八日間」 (『静岡新報』1931年=昭和6年1月14日付夕刊)

「昔は雇人の公休日 藪入りの話 左義長の儀式とどんど焼きの風習」 [藪入り] (『静岡新報』1931年=昭和6年1月14日付夕刊)

岡新報』1931年＝昭和6年1月15日付)

「鉄道で力を入れる 岳麓のスキー場」〔御殿場スキー場〕〔国立公園〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月15日付) ▲▲

「丹那隧道内の喰違ひ 工事に支障なし」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔北丹那地震〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月16日付) ▲▲

「東海道筋唯一の 好スキー場 太郎坊のスロープ いよゝ世に出る」〔御殿場スキー場〕〔国立公園〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月17日付) ▲▲

「北海道へ小山から五十家族 既に十八人には認可」〔北海道移住〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月17日付)

「氷点下卅五度 雪の富士山頂で 気象の観測 厳冬と闘い抜いた両技師 二十五日目で下山」〔頂上気象観測〕〔佐藤順一〕〔谷本■〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月22日付夕刊) ▲▲

「太郎坊スキー場を視察 鉄道で誘客の視察」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月22日付夕刊)

「須走口に出来る 富士博物館 二月中旬着工か 竣工後は本邦の一名物」(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月24日付)

「『桜』と『富士』日本に 新しい憧憬を 全国の富豪が秘蔵の名宝を公開し 外人観光客に展観」(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月25日付夕刊)

「高さ四百尺の 水層横はる 丹那隧道未着手分 ボーリングの結果」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月27日付)

「洪水の如き湧水の中に 難工を続く坑夫達 一万尺の坑奥に地震計を設置 工事を急ぐ丹那隧道」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月28日付夕刊)

「大宮助、収入役問題 改めて町長に一任 但し解決は長引く模様」〔大宮町政〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月29日付)

「富士裾野で 新兵器試験 砲兵学校生徒が二月中旬 観戦武官多数来県」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年1月30日付)

●県立プリント『静岡新報 昭和6年2月』

「丹那トンネルの工事は 震災前より好成绩 此分なら予想外に早く貫通か 勇み立つた技師連中」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔北丹那地震〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月1日付夕刊)

「富士山頂へ鮪を投下 中央気象台員へ 野菜と共に飛行機から」〔頂上気象観測〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月1日付夕刊) →「富士山頂への食糧投下」(2月5日付) に続報。

「位置を其儘にと 再度当局に陳情 熱海線新駅問題で 三島町が委員を選び」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月4日付夕刊)

「富士で自殺するとて家出」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月4日付夕刊) ▲▲

「国立公園としての指定推進を請願 県下各方面の代表者が上京して 近日中貴衆両院へ」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月5日付)

「富士山頂への食糧投下 けふ決行に変更」〔頂上気象観測〕(『静岡新報』1931年

＝昭和6年2月5日付)

「期待を掛けられた富士山頂の気象 最も貴重な参考資料として近く 国際気象学界に報告」〔頂上気象観測〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月5日付夕刊)

「熱海線十二工区 工事を急ぐ 六年度中には完成」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月6日付夕刊)

「富士裾野に於ける演習日割決定」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月6日付)

「スキー場の公認を申請」〔太郎坊スキー場〕〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月6日付)

「御殿場太郎坊間乗合 近く認可されん」〔乗り合いバス〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月7日付夕刊)

「印野の大賭博 二十九名引致さる」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月7日付夕刊)

「沼川改良補助 総額廿四万三千百円 補助年度割通牒」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月7日付)

「岳麓一帯に大雪」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月8日付夕刊)

「大宮の賭博 数名捕はる」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月8日付夕刊)

「丹那盆地の復旧を 鉄道側と協議 県当局が昨日会見し」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月11日付) ▲▲

「荷物を預けて 雪見に登山 成年行方不明となる 人穴区総出で捜索」〔遭難〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月14日付夕刊) ▲▲

《「貴い経験が役に立ち 富士山に観測所 期待される航空方面への寄与 近く設計に取掛る」〔頂上気象観測〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月15日付夕刊) ▲▲

「太郎坊スキー場を 鉄道省で視察 非常に有望だーとて 誘客に力を入れる」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月15日付)

「スキー場へ警電を架設 近く実現せん」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月15日付)

「全国有数と折紙ついた太郎坊スキー場 きのみ斯界の権威者が実地調査 スキーヤー誘致に乗出す鉄道省 スロープも広さも申分がない 交通施設が必要だ 鉄道省川上属談話」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月17日付夕刊)

「御殿場スキー場 太郎坊を改称して」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月17日付夕刊)

「右太プロ特作映画 清水次郎長 股旅篇」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月18日付夕刊)

「鈴川毘沙門祭 今年も臨時列車増発」(『静岡新報』1931年＝昭和6年2月23日付)

●**県立プリント『静岡新報 昭和6年3月』**

「国立公園は結局富士山麓 総ての条件を備へてあるので」(『静岡新報』1931年＝昭和6年3月13日付夕刊)

「富士山熔岩地帯の植物は千四百種 山梨県の石塚氏が四年目に完成 天然記念物に申請」〔石塚末吉〕(『静岡新報』1931年＝昭和6年3月24日付夕刊) ←本文中に出て

くる『富士山植物集』については「山梨県内図書館の総合目録」で検索できない。

「富士を中心に 気象状態の調査 国立公園候補地として 有望になったので」（『静岡新報』1931年＝昭和6年3月25日付夕刊）

「天然記念物になった 断層喰違ひ 保存費は文部省で 負担して欲しいと陳情」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年3月26日付夕刊）

●**県立プリント『静岡新報 昭和6年4月』**

「丹那西口工事場で 突如工夫百余名を整理 雀の涙ほどの解雇手当に 従業員極度に激昂 震害の復旧成り 人手の要る矢先 熟練工夫の解雇は不審 成行きを注目さる」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月5日付）→「解雇手当の増額を要求」（4月7日付）、「交渉決裂して持久戦に入る」（4月8日付夕刊）に続報。

「村営自動車の出願に村民挙つて反対 登山者が素通りされては堪らぬと」〔須走登山バス〕〔須走浅間神社から馬返しまで〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月7日付）→「登山専用道路 結局握潰しか」（4月9日付）、「紛争中の須走村営」（6月9日付夕刊）に続報。

「解雇手当の増額を要求 山川から井沢組へ 三島署で成行きを重大視」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月7日付）

「断層地帯の工事を鉄道技師が視察」〔丹那トンネル〕〔北丹那地震〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月7日付）

「交渉決裂して持久戦に入る 丹那山川飯場の争議」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月8日付夕刊）

「『美事な山よ』シヤム皇帝陛下 富士を愛でさせらる」〔眺望〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月8日付）

「卅年の歴史を持つ 乗合馬車廃止 時代の要求に抗し難く 自動車に権利譲渡」〔富士山御殿場口乗合馬車営業組合〕〔乗合自動車組合〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月9日付夕刊）▲▲

「登山専用道路 結局握潰しか 須走村の計画に対し 各方面に反対意見」〔須走登山バス〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月9日付）

「浮島沼の干拓 昭和排水路から 愈々事業に着手」（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月10日付）

「熱海線三島駅 予定地変更か 旅団地下道問題で 計画内容は目下極秘」〔三島野戦重砲兵旅団〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月11日付）

「桜の大山祭」（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月12日付夕刊）

「富士山国立公園を実現させて外客を誘致したい 観光客誘致の会で主張」（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月17日付）

「町営の病院 大宮町で開設か 大宮病院を買収せんと 町議が寄々協議中」（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月17日付夕刊）

「白糸滝の桜 今見頃 昨今大賑ひ」〔白糸の滝〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年4月18日付夕刊）

「裾野の山火事 六十町歩を焼失す」〔富士岡村〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年

4月24日付夕刊)

「次郎長の墓へ 師範生が参詣」〔静岡師範学校〕(『静岡新報』1931年=昭和6年4月24日付)

●**県立プリント『静岡新報 昭和6年5月』**

「丹那盆地の断層隆起を 天延記念物として保存 中大見のは保勝会で保護」(『静岡新報』1931年=昭和6年5月1日付)

「明治大帝の御立像を岳麓に奉安 遙拝所を設置 敬愛会で近く着工」〔十里木〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月3日付夕刊)

「大宮浅間社の流鏝馬賑ふ」〔浅間大社〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月7日付夕刊)

「開花に次ぐ自然枯 『箱根竹』に恐慌 当業者が対策考究」〔竹の花〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月11日付)

「籠坂附近は積雪二寸 素晴らしい岳麓の美観」(『静岡新報』1931年=昭和6年5月13日付夕刊)

「客満載の身延電車 芝川駅で脱線」〔富士身延電鉄〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月13日付夕刊)

「富士に降雪 六合目附近で二尺余」(『静岡新報』1931年=昭和6年5月13日付夕刊)

「富士山麓の大雪 甲州側では積雪三寸 五月に入つての雪は稀有のこと」(『静岡新報』1931年=昭和6年5月13日付)

「消えて無くなつた富士の宝永山 きのみ午後一時頃大音響轟き渡る 降雪中に崩壊したか」〔宝永山崩壊〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月14日付夕刊) ▲▲→「**宝永山には異常なし**」(5月14日付)に続報。

「富士の五合目に旅館を開設 マラソン王の金栗氏が実業家と提携して」〔御殿場口五合目〕〔金栗四三〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月14日付夕刊) ▲▲

「宝永山には異常なし 人を騒がせた崩壊したとの噂」〔宝永山崩壊〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月14日付)

「白糸に遊ぶ(上) 大石生」〔白糸の滝〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月14日付夕刊)

「白糸に遊ぶ(下) 大石生」〔白糸の滝〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月15日付夕刊)

「登山期を前にお札の準備 大宮浅間神社お札の収入 年六七万円に及ぶ」〔浅間大社〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月24日付)

「富士大宮口 七月一日開山 山中諸物の協定なる」〔物価〕(『静岡新報』1931年=昭和6年5月29日付夕刊)

●**県立プリント『静岡新報 昭和6年6月』**

「『風景日本』を代表する 国立公園指定地決る 十和田湖、日光、藤と箱根、日本アルプス、雲仙阿蘇別府等 先づ選ばれた五箇所」〔北アルプス〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月6日付)

「紛争中の須走村営 自動車問題解決 堀内県議鈴木署長等の 斡旋功を奏し」(『静岡

新報』1931年=昭和6年6月9日付夕刊) ▲▲

「桑原(函南)地先の砂防工事近く着手 山林局長等視察す」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月9日付夕刊)

「国立公園予定地から温泉場を除外 伊豆温泉場大失望 各地に不満の声漲る」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月10日付夕刊)

「夏の若人よ 山岳は招く 山の噂、山の記事は 初心者をも誘惑す」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月10日付)

「開山迫る富士(上) 九合目(下) 四合目の雪」〔写真〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月12日付夕刊)

「開山を二旬の先に富士頂上を極む 残雪深く非常な困難 酷く荒された五合目までの室」〔大宮新道〕〔山室荒らし〕〔残雪〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月12日付夕刊) ▲▲→この記事の別稿が「雪の富士から」(6月13日付夕刊)にある。

「富士山各登山口が登山客を誘致 ポスター十萬枚配布 県でも1準備を進む」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月12日付)

「雪の富士から 三合目から上は雪で路が不明 決死の覚悟で頂上を極む 大宮口処女登山」〔大宮新道〕〔残雪〕〔富士宮口砂走り〕〔石川自動車商会〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月13日付夕刊) ▲▲

「雪中の富士登山」〔写真〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月13日付夕刊)

「伊豆大震が生んだ 三つの天然記念物 世界学界の珍宝 同時に指定される他の四史蹟」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月13日付)

「現管長を無視して 前管長復活を決議 富士派本山久遠寺の 紛争益深刻化せん」〔久遠寺騒擾〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月13日付)

「富士山を繞る遊覽道路の計画 国立公園の指定近く県が近く設計に着手」〔富士山西麓遊覽自動車道路〕〔富士山一周道路〕昭和6年6月14日付)

「富士大宮口は七月一日開山 各室も同時に開業 例年より十日早く」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月14日付夕刊) ▲▲

「茨城県人五名雪中富士登山 大宮から登り御殿場へ下山 頂上は一丈余の雪」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月16日付夕刊)

「富士山に大雪 七合目以上二三尺積る」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月19日付夕刊)

「時勢は移る 清水の次郎長に一泡吹かした 新潟県簸神村の老侠客 熊五郎の悲惨な末路」〔羽鳥熊五郎〕〔清水次郎長〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月19日付)

「富士根から登るのが表本道だーと富士根村民が旧登山路復活宣言」〔富士根口登山道〕〔村山古道〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月19日付) ▲▲

「開山を前に富士登山 関係者や新聞記者団が」〔御殿場口〕(『静岡新報』1931年=昭和6年6月19日付)

「富士開山期中臨時電車運転 富士身延鉄道の整理説は嘘伝」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月20日付夕刊)

「県が選んだ富士の十二景 国立公園の順部設備」(『静岡新報』1931年=昭和6年6月21日付)

「女子青年団の夏期講習会 来月末御殿場に開催」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月21日付）

「登山業者と記者団 昨夕富士山へ」〔御殿場口〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月21日付）

「一日に開山の富士山大宮口 準備の完成は中旬頃」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月23日付夕刊）

「地表よりも隧道内が安全 両地点に置いた地震計の記録 丹那の安全も保証さる」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕〔北丹那地震〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月23日付）

「開山前の富士（上）濃霧を冒して三合目の室へ 悪天候に悩む記者団一行 御殿場口処女登山」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月23日付）←御殿場口登山営業組合による招待・提灯記事、「開山を前に富士登山」（6月19日付）、「登山業者と記者団」（6月21日付）参照。

「写真説明（上）踏破山頂に到着した一行（中）積雪一丈の久須志岳成就岳（下）万年雪の中を登る」〔写真〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月23日付）

「開山前の富士（中）五合目で素晴らしい御来光を拝す 山頂は積雪二丈に及び 未だ漸く初春気分」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月24日付）

「牛綱を切つた牝牛富士山へ逃込む 村民総出で捜索中」〔伝法〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月25日付夕刊）

「開山前の富士（下）御殿場口の誇り砂走りの壮観 郵便局や電話は七月中旬 山の浄化努めよ」〔大砂走り〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月25日付）

「国宝の価値ある実相寺の宝物 小泉代議士が訪れて 数十点を詳細に調査」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月26日付夕刊）

「大宮と富丘 合併実現か 合併すれば人口約三万 両町村準備調査進む」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月28日付夕刊）

「富士山頂の郵便局十一日に開局 局長には大宮局長が任命さる」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月28日付夕刊）

「電話の架設に工夫が登山 警官や防疫医も十日頃から滞在」〔救護所〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月30日付）

「富士登山者の為臨時列車」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月28日付）

「団体登山の申込多く大宮口活気づく」（『静岡新報』1931年＝昭和6年6月30日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 VOL.128 昭和6年7月1日～8月15日』

「全部の開室は十一日 富士山愈々けふから開山」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月1日付）

「御殿場口もけふ開山」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月1日付）

「富士山頂上へ出張所を設ける 沼津測候所が例年通り」〔天気予報〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月1日付）

「小青年講座（第二放送）登山季節に当りて 関野武夫」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月1日付「ラヂオ」）

「開山日の登山者は静岡の青年一人 けさ強力も雇入れず オートバイで大宮口から登る」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月2日付夕刊)

「けふから開く富士大宮口 山頂の雪も解けて楽になる富士登山」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月2日付夕刊)

「第一日目の登山者合計十三名 大宮口俄に色めく」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月3日付夕刊)

「富士登山マラソン三年間連敗の学生聯合軍 名選手を揃へ猛練習」〔富士登山マラソン競走〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月3日付)

「富士開山奉告祭 七日大宮浅間で」〔浅間大社〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月3日付)

「登山馬体検査」 (大宮署) 昭和6年7月4日付夕刊)

「開山二日目は登山者なし」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月4日付夕刊)

「大宮大社にさつき奉納開」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月4日付夕刊)

「山のお客さん達に 乗車賃割引き 省線社線ともに二三割」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月4日付夕刊)

「雪解が例年より十日程遅い 頂上は未だ五六尺ある 清水土木技師談」〔残雪〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月5日付夕刊)

「百匁もある馬糞石現はる 外に小馬糞石十二個も 馬肉屋思はぬ儲け」〔大宮町屠畜場〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月5日付夕刊)

「開山中の富士山中へ警電架設や救護所の設備 警察部から係員登山」〔電話〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月7日付)

「魔のトンネルに 別れる橋本技師 大正十二年以来難工と闘ひ 当分は三島に居住」〔橋本哲三郎〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年8月7日付夕刊)

「富士山中で屍体を発見」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月8日付夕刊) ▲▲

「富士 八月号」〔広告〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月8日付夕刊)

「富士名勝スタンプ押捺 本日から開始」〔山頂郵便局〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月10日付)

「富士登山マラソン十六日と決り 参加選手猛練習中」〔富士登山マラソン競走〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月11日付)

「登山期に入り衛生上の諸注意 緑川県衛生課長が 大宮町に出張し」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月11日付)

「登山者を迎ふ準備全く整ふ 各室も十一日から開業 バスも運転開始」〔登山バスは一合目下まで〕 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月11日付夕刊)

「連日悪天候で登山者悩む 頂上附近はまだ寒く残雪や氷柱が多い」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月12日付夕刊)

「身延電道乗車賃割引き 甲府方面行に限り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年月日付)

「許可にならぬ須走村営自動車 登山期に入り関係者焦慮す」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月12日付) ▲▲ →許可になったかどうか不明。

「富士登山と赤沢山キャンプ場 静岡少年団の行事」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月12日付)

「富士浅間社の開山祭 風雨中に執行」 [浅間大社] (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月12日付)

「富士山頂で気象観測」 [天気予報] (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月12日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月14日付夕刊)

「十一日の気温は 気象台開始以来の低温 今月に入つての降水量は既に 七月分の総量を突破」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月15日付夕刊)

「小山少年団のキャンプ生活 月末山中湖で」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月15日付)

「上野村の名誉職等 体刑を求めらる」 [洗職背任横領事件] (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月16日付夕刊)

「青年団長会議 今年御殿場で 終了後富士登山 五湖巡り等を決行」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月16日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月16日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月17日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月18日付夕刊)

「山へ! 山へ!! けふ富士山大賑ひ 正午迄に七百名 頂上は相変はず酷寒」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月19日付夕刊)

「電通社員百余名 吉例の富士登山 廿一日須走口から」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月19日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月19日付夕刊)

「南アルプスの処女コース踏破 鉄道省の川上氏が 約半月の予定で」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月22日付夕刊)

「富士で少年店員行衛不明」 [遭難] (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月22日付夕刊) ▲▲→「行方不明の登山者帰る」 (7月25日付夕刊) に続報。

「陽の光を見たのは一週間に五時間 珍しい富士の淋しさ 沼津測候所勝又技師談」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月23日付)

「愛鷹登山案内人の講習会を開く」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月23日付)

「趣味講座 富士に登る人のために (後七、三〇) 小長谷宗芳」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月23日付「ラヂオ」) ▲▲ ←小長谷宗芳氏の紹介に著書『富士山麓の伝説』が挙げられているが静岡県立図書館の「おうだんくんサーチ」・国立国会図書館サーチで検索できない。

「大宮の火事 戸田病院焼く」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月23日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月23日付夕刊)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月24日付夕刊)

「富士経子岳から 水晶軸の経巻物 日蓮聖人の記念物か? 発掘以来富士山中で大評判」 [富士宮口経ヶ岳] (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月25日付夕刊) ▲▲

「行方不明の登山者帰る」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月25日付夕刊) ▲▲

「富士山便り」 (『静岡新報』 1931年=昭和6年7月25日付夕刊)

「初めて登山する婦人への注意（上）日本山岳会委員 鈴木洋一氏談」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月26日付）

「富士経子岳から水晶軸の経巻物 日蓮聖人の記念物か？ 発掘以来富士山中で大評判」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月25日付）

「相州大山のケーブルカー開通」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月25日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月26日付夕刊）

「富士山大暴れ 閉じ込められた登山者数千名 大宮署警戒に努む」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月27日付）

「富士山漸次風ぐ」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月28日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月28日付夕刊）

「富士山中湖畔の大競馬場完成 来る八月七八九の三日間 第一回を開催」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月29日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月29日付夕刊）

「清水児童富士登山」〔清水市岡小学校〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月29日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月30日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年7月31日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月1日付夕刊）

「登山写真師が雲上で大喧嘩 客を取つた取らぬから 富士吉田五合目の珍事」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月1日付）

「震災記念の 丹那盆地断層 保存設備に着手」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月2日付夕刊）

「東海アルプスと 愛鷹山を改称 頂上には無料宿泊所 地元保勝会旺んに活躍」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月2日付）

「坂田の金時 誕生地を世に出したい 地元小山町の有志が 保存設備に奔走」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月2日付）

「三万円拐帯逃走中の 三五大宮支店員自首 一日夜横浜戸部署へ 何処をどう逃げたか？ 二年間の彼の行動 身柄は昨日大宮署へ護送」〔三十五銀行拐帯事件〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月3日付）←「病気見舞で遅れたと思つた」（1929年＝昭和4年8月10日付夕刊）が第1報。

「三万円拐帯行員の逃げ廻つた系路 岩淵に下車先づ銚子に飛ぶ 株に手を出し所持金を費消 遂に数回死を決す 申訳ないと泣き続ける 深沢支店長 犯人と接見」〔三十五銀行拐帯事件〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月4日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月4日付夕刊）

「済まなかつた 許して呉れ 拐帯犯と妻女涙の接見 大宮署取調べ始む」〔三十五銀行拐帯事件〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月5日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月5日付夕刊）

「芸妓を落籍し 相場に手を出し 三万円は殆ど蕩尽す 寝覚めの悪い夢 豪奢を極めた生活ぶり」〔三十五銀行拐帯事件〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月6日付夕刊）

「富士競馬の前景気盛ん」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月6日付夕刊）

「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月6日付夕刊)
「高層気流の観測所を富士山頂に開設 明年八月から明後年九月まで 万国気象観測の番が来て」〔頂上気象観測〕(『静岡新報』1931年=昭和6年8月6日付)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月7日付夕刊)
「三万円拐帯犯人の取調べ一段落」〔三十五銀行拐帯事件〕(『静岡新報』1931年=昭和6年8月7日付夕刊)
「富士納涼大競馬 山梨県畜産組合联合会 富士山麓電鉄」〔広告〕(『静岡新報』1931年=昭和6年8月7日付)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月8日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月9日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月11日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月12日付夕刊)
「知事警察部長の一行富士へ登山 けふ大宮口から 家族達を引連れて」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月14日付夕刊) → 「知事一行無事に下山」(8月16日付夕刊) に続報。
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月14日付夕刊)
「三万円拐帯犯 きのふ遂に送局さる」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月15日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月15日付夕刊)
●歴史文化『静岡新報 VOL.129 昭和6年8月16日～9月29日』
「知事一行無事に下山」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月16日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月16日付夕刊)
「国立公園法執行令 九月一日から実施さる」(『静岡新報』1931年=昭和6年9月17日付)
「大観の傑作『明け行く山々』表装料五百五十円投じて 鵜沢知事悦に入ること」〔横山大観〕(『静岡新報』1931年=昭和6年9月17日付)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月19日付夕刊)
「白糸の豪壮と伊佐布の清雅 県下の滝いろゝゝ 紙上避暑の旅」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月19日付)
「ブレーキと加熱の状況を 沼津国府津間で試験」〔御殿場線〕(『静岡新報』1931年=昭和6年8月19日付)
「富士 宝永山崩壊 昨日大音響と共に 今度こそは事実」〔宝永山崩壊〕(『静岡新報』1931年=昭和6年8月19日付) ▲▲
「日本一美味しい滋養になるどりこの 大日本雄弁会講談社」〔富士山を背景にした広告〕(『静岡新報』1931年=昭和6年8月19日付)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月20日付夕刊)
「『富士』の大奉仕」〔広告〕(『静岡新報』1931年=昭和6年8月21日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月21日付夕刊)
「富士山便り」(『静岡新報』1931年=昭和6年8月22日付夕刊)
「魔の丹那 三千五百樽のセメントをペロリ 更に二百樽を注入して 十一月から堀鑿」

〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月23日付）

「八十六歳の老人が 連続十回の登山 不老長寿は富士登山に限ると エライ元気の増田翁」〔高齢者登山〕〔変わり種登山〕〔増田善蔵〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月25日付）

「三十一日限り各室を閉鎖 警官は既に引揚げ 電話も二十八日に取外す」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月27日付夕刊）

「九月下旬から 再び掘鑿開始 セメント注入一先づ中止し あと八町で貫通の丹那隧道」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月28日付）

「山中湖畔の富士競馬 けふから三日間開催」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月28日付）

「来月七日富士閉山式」（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月28日付）

「富士山麓開拓地で 陸稲枯死廿町歩に及び 郡農会で対策講究中」〔富士郡北部〕〔早魃〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月29日付夕刊）

「身延電車に衝突して トラック大破す 搭乗者一名惨死、三名生命危篤 昨夜富士町地先で」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月30日付夕刊）

「丹那を中心に 地質の研究 学界の権威者が相次いで来豆し」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年8月30日付夕刊）

「いよゝゝ決る国立公園指定地 法の実施はあすから」（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月1日付夕刊）

「お山も不景気 富士登山者は例年の半分 婦人の登山者は激増 赤字に悩む営業者」（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月2日付夕刊）

「金明水の本家は丹那山だと 土地の人々が頑張る」〔丹那の金明水〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月2日付夕刊） ▲▲

「金、銀明水の石室を増築 明年から登山者収容」（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月6日付夕刊）

「富士八合目以上の地籍争ひ起る 大宮と富士根村とて 大宮では内務省へ陳情」〔大宮・富士根地籍争い〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月8日付夕刊） ▲▲

「大宮浅間社 富士閉山祭 七日盛大に行ふ」（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月9日付）

「富士山頂の地域問題で 大宮町吏上京」〔大宮・富士根地籍争い〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月10日付夕刊） ▲▲

「富士南麓郷土史談刊行 小長谷訓導」〔佐野要吉〕〔小長谷宗芳〕〔『富士南麓郷土史談』〕〔『体系国史年代表』〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月10日付夕刊） ▲

▲→「趣味講座 富士に登る人のために」（7月23日付「ラヂオ」）に関連記事があるが、見出しに《小長谷訓導》が出てくるのは謝りで《佐野訓導》とすべきであろう。なお見出しの『富士南麓郷土史談』、記事中に出てくる『体系国史年代表』ともに静岡県立図書館 おうだんくんサーチ・国立国会図書館サーチで検索できず。

「丹那の断層に 新温泉試掘 作物の枯死から気付く」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月11日付夕刊）

「丹那盆地の地下水 一日五寸宛減水 前途の不安一掃され 係員一同勇躍して工事を進

む」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月18日付）
「セメント注入を打切り 来月から発掘開始 水圧も漸次減退して 光明を認めた丹那トンネル工事」〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月23日付夕刊）
「富士山中の石室が地震で崩壊 人夫を同伴して室主が登山 復旧工事を開始す」（『静岡新報』1931年＝昭和6年9月29日付夕刊）→「石室の被害は中腹 頂上は被害軽微」（10月1日付夕刊）に続報。

●歴史文化『静岡新報 VOL.130 昭和6年10月1日～11月15日』

「石室の被害は中腹 頂上は被害軽微 八合目以上はもう厳寒のやう 調査した吉野君の話」〔北丹那地震〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年10月1日付夕刊）▲▲

「丹那隧道西口 堅坑掘鑿開始 先づ盆地下の排水を行ひ 本導坑の進工を計る」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年10月4日付夕刊）

「大石寺の大法会 九日から十七日まで」（『静岡新報』1931年＝昭和6年10月9日付夕刊）

「関東地方は安全 問題は富士 地塊運動の北進に就て今村博士が重要な研究発表」（『静岡新報』1931年＝昭和6年10月14日付夕刊）

「案外少ない 岳麓の猟鳥 雉山鳥の解禁を待ちわびる猟人達」（『静岡新報』1931年＝昭和6年10月21日付夕刊）

「富士山の大雪 例年より早い」（『静岡新報』1931年＝昭和6年10月23日付夕刊）

「富士の降雪で 鳥獣は山麓へ 狩猟家連中大喜び」（『静岡新報』1931年＝昭和6年10月24日付夕刊）

「丹那隧道西口 本導坑掘鑿 既に八十尺に達す 更にセメント注入を開始」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年11月1日付夕刊）

「富士山麓の森林帯 俄に紅葉し 頂上の白雪を背景に 雄大美観恍惚たらしむ」（『静岡新報』1931年＝昭和6年11月10日付夕刊）

「一年間無駄骨の 丹那トンネル工事 一万六千円のセメントがファイ 吃驚した鉄道局」〔東海道本線〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年11月14日付夕刊）

「国立公園の指定 三ヶ所に縮小さる 富士、日光、北アルプス」（『静岡新報』1931年＝昭和6年11月15日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.131 昭和6年11月16日～12月30日』

「三島大社の祭神は 大山祇命が本当 三島博士の発表から 識者間で研究始まる」〔大山祇命〕〔事代主命〕〔三島通陽〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年11月19日付夕刊）▲▲

「庚申の立像 何者かに盗まる 山梨県では国宝の仏像盗難 木像専門の怪盗出現」〔鷹岡村〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年11月19日付）▲▲

「富士の大雪 三合目まで真つ白」（『静岡新報』1931年＝昭和6年12月1日付夕刊）

「久遠寺法主の選挙問題悪化 本県側の七十五ヶ寺結集し 望月師一派に対抗」〔久遠寺騒擾〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年12月5日付夕刊）

「久遠寺後董 予選々挙取消し 山務に失変があつて 日を改めて更に行ふ」〔久遠寺騒擾〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年12月11日付）

「大山祇命か一事代主命か 論議される三島大社の祭神 宮司は後者を主張」〔事代主命〕

〔大山祇命〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年12月11日付夕刊）▲▲

「芝生を盗んだ上に 桑を植付く 富士裾野の演習地を 公然荒す不正漢続出」〔東富士演習場〕〔芝生盗掘〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年12月13日付）

「あすぞ、鹿島立つ 岳南の健児 守備隊の補充員として 勇躍満洲の曠野へ」〔満州事変〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年12月16日付）

「又も丹那西口で セメントを注入 前途が危険なので 絶望ではない—伊沢氏談」〔静岡新報』1931年＝昭和6年12月16日付）

「富士根村長外数名 起訴収容さる 何れも偽証罪として 事件は拡大の様相」〔静岡新報』1931年＝昭和6年12月19日付）

「富士身延鉄道 隧道崩壊し 一時運転不能に陥る 久那土富士間折返し運転」〔静岡新報』1931年＝昭和6年12月22日付夕刊）

「三商生がスキーの練習」〔三島商業学校山岳部〕〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1931年＝昭和6年12月26日付）

■1932年＝昭和7年

●歴史文化『静岡新報 VOL.132 昭和7年1月1日～2月15日』

「富士山西麓の 大沢スキー場 稀有の直線コースで……京大選手が猛練習中」〔大沢崩れ〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月5日付）

「趣味講座 清水次郎長の想出（後七、三〇）子爵 小笠原長生」〔静岡新報』1932年＝昭和7年1月6日付「ラヂオ」）

「スキー練習中 京大生重傷 富士西麓大沢尻の 五合目から過つて墜落し」〔大沢崩れ〕〔遭難〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月8日付）▲▲

「スキー練習中負傷した 京大生今暁京都へ 遭難現場五六間下に大断崖 危なかつた工楽君」〔静岡新報』1932年＝昭和7年1月9日付夕刊）

「箱根竹細工の原料竹に開花 当業者大恐慌を来し 県で善後策注意」〔竹の花〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月10日付）

「丹那盆地の補償金増額運動 関係者けふ上京す」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕〔北丹那地震〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月13日付夕刊）

「富延鉄道を 国営にbせよ 関係町村長が促進同盟会を 設けて運動を開始」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月15日付夕刊）

「次郎長親分が 三円の罰金 ピストルを持った為に 但し五十年前の話」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月17日付）

「富士の裾野で 現地攻防演習 歩兵学校の外に 第三聯隊等参加」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月19日付夕刊）

「富士身延鉄道 国営移管陳情 けふ東京に集つて」〔静岡新報』1932年＝昭和7年1月19日付）

「富士身延鉄道国営 清水市で猛運動 けふ代表者上京す」〔静岡新報』1932年＝昭和7年1月20日付夕刊）

「地元の出様次第で 山梨県側に移転 裾野の演習地買収問題で 陸軍側の態度強硬」〔東

富士演習場〕〔北富士演習場〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月24日付）▲▲「久保川に添った原野の一带を」（1933年＝昭和8年8月27日付夕刊）、「行悩みの演習地 買収問題好転す」（9月12日付）に関連記事。

「富士山麓で 白骨屍体発見 学生風で死後六ヶ月位を経過」（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月26日付夕刊）▲▲

「三島大社、大宮浅間神社に 皇太后陛下後参拝 伊勢大廟、山陵に御参拝の御途次 沼津御用邸に御一泊」〔浅間大社〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年1月30日付）

「排水坑を堀り 地下水を排出 一気に難関を突破せん 丹那隧道西口で」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年2月4日付夕刊）

「二日の大雪で 太郎坊スキー場 絶好のコンディション 鉄道では二割引き」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年2月6日付）

「鈴川毘沙門祭 臨時列車運転」（『静岡新報』1932年＝昭和7年2月12日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.133 昭和7年2月16日～3月30日』

「難工の丹那隧道に 開通の見込立つ セメンテーション無事に成功し 東口の大断層貫通す」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年2月16日付）

「富士根出身の水兵 上海附近で負傷 陸戦隊に加り交戦中 全身に散弾を受けて却々の重態」〔佐野正〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年2月25日付夕刊）

「裾野一帯に 一尺余の積雪 狩猟家連中大喜び」（『静岡新報』1932年＝昭和7年2月28日付夕刊）

「富士の裾野に緬羊を放牧 桜田金作氏の計画 出資者が近く実地調査」〔朝霧高原〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月10日付夕刊）

「『富士山』は動かず 政変其の他の関係で変った国立公園の選定」（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月14日付）

「富士山頂から電波が飛ぶ 東京中央气象台が無電で気象通報の計画」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月14日付）

「難工の丹那西口 更にボーリング続行 此の難関突破に全力を注ぐ」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月18日付夕刊）

「雨情氏の手になる次郎長音頭 十八日から稽古を開始 清水小唄も近く完成」〔清水次郎長〕〔野口雨情〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月19日付）

「遅くも八月末までに国立公園の指定 富士、日光、日本アルプス 三ヶ所に次ぎ紀州潮岬も有望」〔北アルプス〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月20日付夕刊）

「採草地を奪はれては死活問題だーと関係七ヶ村の村民が宮内省へ御料地植樹廃止の請願」〔上井出〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月25日付夕刊）▲▲→「林野局の植樹が」（3月29日付夕刊）に続報。

「満蒙移民対策に 調査期間設置か」（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月29日付夕刊）

「林野局の植樹が 採草地を減じた と富士北部町村で陳情」〔上井出〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年3月29日付夕刊）▲▲

●歴史文化『静岡新報 VOL.134 昭和7年4月1日～5月15日』

「富士山と日光は 愈々五月から着工 国立公園施設に着手」（『静岡新報』1932年

＝昭和7年4月1日付夕刊)

「丹那隧道工事を繞り 廿六万円の要償 河川枯渴し損害を蒙つたとて 東電が国家を相手に 自然事故に賠償の責ありや 応訴して黒白を争ふ 鉄道省池原計画課長語る」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕〔大出水〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月1日付夕刊)

「大宮浅間の吉野桜 根幹に花が咲く 何かの前兆かと風評」(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月17日付夕刊)

「三島二聯隊の裏に 珍しい風穴 巾一丈深長五十間 高さは三尺から五勺」〔三島風穴〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月21日付夕刊)

「昨夜大宮町の大火災 全町の半数以上を焼く 目貫の場所を悉くなめ尽し 今暁三時半頃鎮火 八日間授業休止 全郡の成年団員 総動員で労力奉仕 七千余人の被災者救助に県庁挙げて大活動」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月23日付夕刊)

「低資二百万円を借入れ 大宮町の復興計画」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月23日付)

「大宮署の調査に依る 焼失戸数と被災者」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月23日付)

「大宮に建築物放適用方を内申 町会でもけふ決定す」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月24日付夕刊)

「焦土の中に燃ゆ 復興意気 きのふまでの涙を棄て 一路復興へ振ひ立つた罹災者」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月24日付夕刊)

「街路事業費には 五十万円を要す 昨夜仮役場内で 県、町当局、有力者協議」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月24日付)

「大火の火元と原因判明 按摩業の斎藤方と決る」(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月24日付)

「家屋建築を差止め 市区改正断行 大宮町の復興方針に付 町の方針決定す」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月26日付夕刊)

「復興大宮町の街路網成る 県道は幅員七間に拡張」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月26日付)

「焼失区域一帯は 面目一新せん 復興を急ぐ大宮町 労力奉仕青年 大宮へ殺到 昨日の来援五百名」(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月27日付夕刊)

「市街建築物法 大宮町に施工 来る五月一日より きのふ閣議決定」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月27日付)

「大宮町の街路復興 工費総額十八万円 街路計画全く成り 直ちに実測に着手」(『静岡新報』1932年＝昭和7年4月28日付夕刊)

「富士を背景に 列車内でロケ 松竹の男女優廿余名が『乳姉妹』撮影に来岡」(『静岡新報』1932年＝昭和7年5月2日付)

「特種砲弾の 静止破裂試験 六日から十日まで 富士裾野で行ふ」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1932年＝昭和7年5月4日付)

「国立公園の候補地決定す 実地調査全部完了」(『静岡新報』1932年＝昭和7年5月5日付夕刊)

「富士身延鉄道国営に決定 十七八日頃最終的に決定 鉄道省議で決る」 (『静岡新報』1932年=昭和7年5月8日付)

「身延線買収決定に 関係者お礼に上京」〔富士身延鉄道〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年5月9日付)

「富士身延鉄道買上に応ず 昨日大株主会で決定」 (『静岡新報』1932年=昭和7年5月10日付)

「国有となれば賃銀は半減 身延線買収決定に就て お礼陳情の一行帰る」〔富士身延鉄道〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年5月13日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.135 昭和7年5月16日～6月30日』

「富士溶岩と愛染院の跡 天然記念物と史蹟記念物に指定されん」〔三島風穴?〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年5月24日付)

「丹那附近水飢饉に苦む」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕〔大出水〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年5月27日付夕刊)

「丹那隧道工事の灌漑用水問題 時期に入つて再燃 三十日代表者会合」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕〔大出水〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月29日付)

「県議加藤氏の偉業『駿河記』上巻出づ 三百部を限定出版して 全国大学、図書館に頒つ」〔加藤弘造〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年月日付)

「登山期に備へて『山の会議』を開く 鉄道が主催で十日大宮浅間社に各方面の代表者を集め」 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月3日付夕刊)

「富士身延鉄道の買収 飽迄も目的実現へ 他の私鉄とは趣を異にするとして 静山両県の期成同盟会奮起す」〔富士身延鉄道〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月6日付)

「次郎長音頭 発表会」〔清水次郎長〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月9日付)

「富士登山客の誘致策協議 地元鉄道等々お関係者が けふ大宮大社で」〔山の会議〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月10日付)

「丹那盆地の 渴水問題重大化 渴水区域漸次拡大す」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕〔大出水〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月11日付)

「名案続出したお山の会議 各方面の代表者百余名が 大宮浅間社に集つて」 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月12日付夕刊) ▲▲

「竹の実獲りで 山中賑ふ」〔竹の花〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月13日付)

「富士登山を試みた七人の老婆 五合目以上の雪に驚き遂に引返へす」〔高齢者登山〕〔雪中登山〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月13日付)

「登山の興味は南アルプスへ 静岡運輸が開発に努力 大井川口へ各種施設」 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月14日付)

「丹那隧道工事 意外に進捗 此分なら予定より早く完成 と一当局意気込む」〔丹那トンネル〕〔東海道線〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月14日付夕刊)

「富士山頂の気象観測所 愈々数日中に起工 連絡通信と灯火にガソリン動力を使用する 落下傘煙火で風向を観測 世界で最初の試み」〔頂上気象観測〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月15日付夕刊)

「富士御殿場口 物価協定」 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月15日付)

「富岡村からの富士登山道計画 一般からも興味視さる」〔富岡口登山道〕 (『静岡新報』

1932年=昭和7年6月17日付) ▲▲←裾野市下和田の人々に尋ねたが初耳のようだった。

「山の魅力(一) アルピニストを唆る雄大なその容姿 手近な処では先づ『富士』から 初歩登山家への手引」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月17日付)

「山の魅力(2) 登山家の興味は南アルプスへ 三千米以上の山が十三ヶ所 絶賛さる大井川口」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月18日付)

「静高旅行部の登山プラン」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月18日付)

「山の魅力(3) 溪谷美と大森林美と 更にお花畑の美 特異な山相の大絵巻 南アルプス素描『大無間』を加へた 今年の新コース 表口登山客誘引に 井川山岳会が宣伝開始」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月19日付)

「山の魅力(4) 鋭鋒重畳トシテ 実に荘厳の極み 山岳美の極地南アルプス 新コースを探る」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月21日付)

「富士山大宮口 物価協定成る 下山客は無料で案内」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月21日付) ▲▲

「大火後休業中の 大宮の花魁 借金が殖えて困ると 近く県へ救済の陳情」〔大宮大火〕(『静岡新報』1932年=昭和7年月日付)

「二米国人けさ富士へ出発 強力を雇ひ大宮口から 今年には雪が少ない」〔外国人登山〕(『静岡新報』1932年=昭和7年6月21日付夕刊)

「富士登山、先づ大宮の大社から 『富士と大宮』の標語入賞者発表さる」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月21日付夕刊)

「山の魅力(5) 寒温両帯に亘る 高山植物六百種 野棲動物も頗る多種多様 南アルプスの特異性 お山の相談所 静岡に設置 井川山岳会で鋭鋒重畳トシテ 実に荘厳の極み 山岳美の極地南アルプス 新コースを探る」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月21日付)

「富士山から三保松原へグライダーで飛ぶ 我国最初の大計画」(『静岡新報』1932

「清水の土産物に 次郎長人形製作 発売に先立ち展覧会 他府県の土産品と比較」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1932年=昭和7年6月22日付)

「富士開山日に登山状況を放送 七月十日AKが全国へ 登山座談会も放送」〔ラジオ放送〕(『静岡新報』1932年=昭和7年6月24日付夕刊)

「県内林道開鑿路線 四十九線決定す 工費総額五十二万円」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月25日付夕刊)

「完成の光明を認めた 丹那隧道西口 七月一日祝賀会開催」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1932年=昭和7年6月25日付夕刊)

「三保羽衣松附近を 公園地に貸せる」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月25日付夕刊)

「開山は一日 奥の宮開扉は十日」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月26日付夕刊)

「富士山の山開き」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月27日付「ラジオ AK産業ニュースから」)

「浜松高女生の山岳旅行計画 日本アルプスから富士登山 富士五湖廻り等々」(『静岡新報』1932年=昭和7年6月29日付夕刊)

「癒々シーズン 山を語る 登山家理学士 黒田正夫」 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月29日付)

「あす両登山口で富士山のお山開き 諸施設を急速に完備せしめ 大々的に登山客吸収」 (『静岡新報』1932年=昭和7年6月30日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.136 昭和7年7月1日～7月31日』

「御下賜御礼言上で 大宮町会一揉み 結局当局から近く陳謝する」〔大宮大火〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月1日付夕刊)

「臨時列車の運転や 臨時停車場開設 海水浴や登山者の為」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月1日付夕刊)

「山のニュースを江尻駅に掲示 登山者の便を計り」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月2日付夕刊)

「静岡青年団員が表口から夜中登山 折悪しく雨の富士開山日 奥宮の開扉は四日」〔夜間登山〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月2日付)

「静岡少年団 富士登山」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月5日付) →「静岡少年団 恒例の富士登山」(7月12日付)に続報。

「富士は招く 雨雪の被害少なく登山に楽な大宮登山路 四日六室が開業、奥宮は五日開扉」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月6日付夕刊)

「お山の天気予報を各駅へ掲示」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月6日付夕刊)

「富士頂上コノシロ池と剣ヶ峰」〔写真〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月6日付夕刊)

「断層は突破したが 湧水で進工不能 相垂ぐ難工に悩む鉄道当局」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月6日付夕刊)

「鉄道収入は本年も激減」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月8日付夕刊)

「河童やアルピニストに 乗車賃の大割引き 九日から八月末日まで 鉄道当局が最大のサービス」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月8日付)

「富士開山奉告祭 七日大宮浅間社で」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月9日付)

「富士山中湖上で 帝大生遭難 ボート転覆四名行方不明」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月9日付) →「遭難大学生 発見」(7月12日付)に続報。

「富・士・山・の・夕 富士山を語る座談会(後七、三〇)(省線富士駅より中継)」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月9日付「ラヂオ」)

「富・士・山・の・夕 富士と申年のいわれ 八十三翁 富士信造」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月9日付「ラヂオ」)

「富・士・山・の・夕 富士民謡」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月9日付「ラヂオ」)

「富・士・山・の・夕 富士登山の仕方 強力長 吉野幾太郎」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月9日付「ラヂオ」)

「暴風雨の富士山中で強力凍死す 四日頂上へ荷物運搬中 七合目附近で遭難」〔佐野長吉〕 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月10日付) ▲▲

「富士山頂郵便局十日に開局 電信電話は十一日から お山の準備全く整ふ」 (『静岡新報』1932年=昭和7年7月10日付夕刊)

「いよゝゝシーズン 山を語る 登山の医学(二) 医学博士 小島三郎」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月10日付夕刊)

「富士漫談 官幣大社浅間神社宮司 鈴木松太郎」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月10日付夕刊)

「世界の名山、富士が『名勝』の仲間入り 来月指定と決る」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月11日付)

「登山者漸く増加し大宮口賑ふ」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月12日付夕刊)

「いよゝゝシーズン 山を語る 山の温度 医学博士 小島三郎」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月12日付夕刊)

「静岡少年団で野営と富士登山 赤沢山野営 富士登山計画」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月12日付)

「静岡少年団 恒例の富士登山 百余名二十六日に」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月12日付)

「遭難大学生 発見」〔山中湖〕(『静岡新報』1932年=昭和7年7月12日付)

「いよゝゝシーズン 山を語る キャンプの話 医学博士 小島三郎」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月13日付夕刊)

「清商業は南アルプス 庵中は北へ それぞれ登山旅行 富士登山や五湖巡りも決行」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月14日付)

「婦人登山者へ注意 体質上特に注意すべき事項 日本登山会 手塚順一郎」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月17日付)

「灼熱地獄に狂ふ 見よ生々しき事実を 急行列車に衝突し トラツク粉砕 助手は即死 二名は瀕死の重傷 昨深夜鈴川駅の惨事」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月17日付夕刊)

「湧水と土砂の流出で 進工頗る困難 水抜の迂廻坑を堀る 丹那隧道西口」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1932年=昭和7年7月17日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月17日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月19日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月20日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月21日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月22日付夕刊)

「富士を中心の道路網成る 山の中腹にドライブ道路も 山麓廻遊車道 中腹廻遊車道 登山車道 登山歩道 中腹水平道」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月22日付)

「けふ正午までに 二千五百名登山 その大半は女学生達 賑ふ大宮の登山口」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月23日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月23日付夕刊)

「森永コーラス 富士山頂 無料御接待」〔広告〕(『静岡新報』1932年=昭和7年7月23日付夕刊)

「丹那トンネル 水圧 漸次下る 中心部には地下水なし 関係当局意気込む」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月24日付夕刊)

「富士山便り」(『静岡新報』1932年=昭和7年7月24日付夕刊)

「完成した下山道（大宮表口）」〔富士宮口砂走り〕（写真）昭和7年7月24日付
「一直線の砂走りで 下山客激増 都合良くなった大宮口」〔富士宮口砂走り〕〔定期登山バス〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月24日付）▲▲

「家族御同伴で富士山へゴ出張 羨まれる衛生課長サン 果然批難の的となる」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月24日付）

「中東学生の赤沢山合同野営 八月中旬の六日間 静岡少年団が主催で」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月24日付）

「富士山の頂上から三島へ四十分 伝書鳩が任務を果たす」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月26日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月27日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月28日付夕刊）

「山村に負債を整理し 山林払下を中止せよ 県内関係者が 一斉に立ち上る」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月29日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月31日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月29日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年7月30日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 VOL.137 昭和7年8月1日～8月31日』

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月3日付夕刊）

「富士の頂上で煙火打揚げ 気象観測の為本月末まで」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月4日付夕刊）

「太郎坊に白骨死体」〔自殺〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月4日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月4日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月5日付夕刊）

「失業救済の意味で次郎長会館開設 鈴木幸太郎氏の美学」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月9日付夕刊）

「国立公園候補地富士山を映画に 国立公園協会が八日間に亘り撮影」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月9日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月12日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月13日付夕刊）

「岳麓の勝地を撮影し大宮口から登山 国立公園候補地富士山視察団の一行」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月13日付）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月14日付夕刊）

「富士山頂上早くも結氷 快晴無風の登山日和だが登山者至って少なし」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月18日付夕刊）

「富士山便り」（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月18日付夕刊）

「風雨を冒して富士山の掃除 駿東青年団総動員で十七日も引続き活動」〔清掃登山〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月18日付）

「大宮町役場 三巴の争奪戦 浅間裏漸次有力化する」〔大宮大火〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年8月19日付）

「富士の清掃を終り 青年団下山」〔清掃登山〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年8

月 19 日付)

「富士山便り」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 8 月 21 日付夕刊)

「残った頂上は 近く大掃除 駿東青年団総動員で」〔清掃登山〕 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 8 月 23 日付)

「演習地に落ちる金 年にザツと百万円 四月から十月までの演習参加人員 軍人学生で約七万人」〔東富士演習場〕 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 8 月 24 日付夕刊)

「富士山の名勝地指定は今年中 他の名勝地も追加申請」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 8 月 25 日付)

「登山者の割に収入が激減 二三の石室は既に閉鎖 富士の閉山近づく」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 8 月 27 日付夕刊)

〔歴史文化にも県立プリントにも、昭和 7 年 9 月分見当たらず〕

●歴史文化『静岡新報 VOL.138 昭和 7 年 10 月 1 日～11 月 15 日』

「富士箱根始め最初の国立公園指定 内務省から八日発表」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 3 日付)

「鉄道、道路、ホテル等々 富士山観光大施設 けふいよいよ国立公園に指定さる」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 8 日付)

「国立公園実現に伴ひ富士南麓を開発 白糸瀑畔にホテル開設 狸沼に貯水し長者湖を作る」〔田貫湖〕 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 8 日付夕刊)

「富士川の流れに関する一考察 (一) 県立大宮高女教諭 伊藤只人」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 8 日付夕刊)

「富士外十一ヶ所 国立公園候補地 きのみ正式に決定す」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 9 日付)

「富士川の流れに関する一考察 (二) 県立大宮高女教諭 伊藤只人」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 9 日付夕刊)

「富士川の流れに関する一考察 (三) 県立大宮高女教諭 伊藤只人」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 11 日付夕刊)

「富士川の流れに関する一考察 (四) 県立大宮高女教諭 伊藤只人」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 12 日付夕刊)

「富士山に施設せよ 漸く動くか 県国立公園協会」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 15 日付)

「富士川の流れに関する一考察 (六) 県立大宮高女教諭 伊藤只人」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 16 日付夕刊)

「国立公園の施設 富士外二ヶ所を本年度内に測量 直に正式指定せん」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 18 日付)

「大宮町役場 敷地決る」〔大宮大火〕 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 19 日付)

「雉や山鳥の 密猟盛んに行はる 大宮吉原両署で取締る」 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 19 日付夕刊)

「演習地の芝切りや 無断で開墾耕作 不正漢の続出に憤慨した軍部 厳重な取締り開始」〔東富士演習場〕〔芝生盗掘〕 (『静岡新報』 1932 年=昭和 7 年 10 月 20 日付)

→「演習地芝泥」（11月5日付夕刊）関連記事。

「公園の発達と其の将来 林学博士 本田静六氏談」〔国立公園〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年10月22日付）

「狸沼に湧水を湛えて新湖水を 富士国立公園施設に本県側地元の意気込み」（『静岡新報』1932年＝昭和7年10月22日付）

「富士国立公園に 三島方面の施設 田村林学博士も大乗気で 明春来島実地踏査」（『静岡新報』1932年＝昭和7年10月28日付）

「出水で崩れた白糸の瀑頭 水枯期を待つて来春まで復旧」（『静岡新報』1932年＝昭和7年10月28日付夕刊）

「富士の大雪で 鳥獣は山麓へ 好猟家続々押寄せ 時ならぬ賑ひを呈す」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月2日付夕刊）

「演習地の芝泥 主犯の目星つく 近く検挙の見込み」〔芝生盗掘〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月5日付夕刊）

「富士山頂と無電で通話 中央气象台三島支台で毎日一回午前十一時」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月6日付夕刊）

「芝川の水源地へ 鱒の養殖場設置 第一期計画として十万尾放養 遊歩道路をも開鑿」〔富士養鱒場〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月12日付）

「昨夜の暴風中に鈴川駅附近大火 目下熾に延焼中（午後十時）」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月15日付）

「東海道線の運転時間台無しに破壊す 各列車悉く立往生」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月15日付）

「屋根瓦飛び板塀は倒壊 警察電話悉く不通 きのみ県下を襲った暴風に 各地建設物の被害続出」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月15日付）

「近づくシーズンに若人の胸は躍る 東海唯一のスキー場 太郎坊で早くも開場の準備」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月15日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.139 昭和7年11月16日～12月30日』

「廿二年ぶりの颱風 昨夜駿豆一帯を襲ふ 沼津附近未曾有の被害」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月16日付夕刊）

「猛火と暴風に見舞はれて本吉原村殆ど全滅 数百隻の漁船全滅」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月16日付夕刊）

「駿東富士両郡下の 稲作は三割の減収 畑作は吹き飛ばされて半作 県農会に集った状況」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月16日付）

「焼出された人々の為バラックを急造 三日間炊出しで救助 満足な家は一戸もない鈴川地方」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月16日付）

「日絹大宮工場 六棟倒壊す 大宮黒田、柚野両小学校々舎も倒る」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月16日付）

「浮島村の稲作 六十町歩全滅す 各地農産物の被害は 目も当られぬ惨状」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月17日付夕刊）

「元吉原村の被害概算 四十万円に達す 保険契約僅に一万二千元 大工や左官が引っ張り尻 復興を急ぐ風害地」（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月18日付夕刊）

「お山の権威が富士座談会 来月中旬頃静岡で」〔静岡運輸事務所〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月22日付）

「駿豆颱風被害復旧 所要低資二百卅万円 県から融通方申請」（『静岡新報』1932年＝昭和7年12月27日付夕刊）

「富士身延鉄道 国営移管陳情」〔身延線〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年12月27日付夕刊）

「雪の富士から墜落惨死す 東信銀行重役の令息 魔の北口七合目で」〔遭難〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年11月29日付夕刊）▲▲

「スキー、神詣、観梅に 乗車賃割引き 鉄道省の大サービス」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年12月2日付）

「頂上の積雪 六七尺に及ぶ 雪中富士登山を決行した 同志社大学生語る」〔雪中登山〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年12月4日付夕刊）

「富士山麓で実猟会」（『静岡新報』1932年＝昭和7年12月6日付）

「大宮復旧 未だ進まず」〔大宮大火〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年12月23日付夕刊）

「青年将校連がスキー練習 年末から新年の休暇中 御殿場スキー場で」〔満州事変〕（『静岡新報』1932年＝昭和7年12月27日付夕刊）

■1933年＝昭和8年

●歴史文化『静岡新報 VOL.140 昭和8年1月1日～2月15日』

●県立プリント『静岡新報 昭和8年1月』

「富士登山した一行が不明 四名の安否気遣はる」〔時事新報記者〕〔雪中登山〕〔遭難〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月5日付）

「雪中登山した四名依然消息なし 捜索隊出動 気遣はれる一行の安否」〔時事新報記者〕〔雪中登山〕〔遭難〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月6日付）

「兎と誤られ 猟銃で射たる 富士山麓で狩猟中 右眼は遂に失明か」（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月7日付夕刊）

「加藤時事記者一行無事頂上へ 六日風雪を衝いて下山」〔時事新報記者〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月8日付夕刊）

「武勲輝く多門将軍 懐しの故郷通過」〔多門二郎〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月8日付）

「雪の太郎坊妙法堂で 断食の荒行 遂に『相続倍額安国論』を 脱稿した岡崎俊郎氏」（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月9日付）

「職工八十名を動員し 夜中堰堤を破壊 富士製紙会社水に窮し 芝川発電所妨害 犯人取調べと 謝罪を要求 宮崎市長極度に憤慨 知事と議長から調停案提示」〔水争い〕〔水力発電〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月11日付）→「芝川水利権の争ひ」（1月15日付）、「芝川水利権問題で」（1月17日付夕刊）、「芝川水利権 癒々交渉開始」（2月18日付）

「丹那四百の農民が 事務所へ押し寄す 濁水の苦難を訴ふ」〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月11日付）

「清浄の死を富士に求めて病ひ疲れた婦人 危く須走口で救はる」〔自殺〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月12日付）

「問題の丹那隧道 六月に貫通？ 着工以来十三年目で 明春四月には初運転の予定」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月13日付夕刊）

「芝川水利権の争ひ 権利は確実に市のもの 宮崎市長声明 立派に民法上の優先権あり 富士製紙の主張」（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月15日付）

「沼津三島間の 鉄道工事着手 本年四月から早速」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月15日付）

「芝川水利権問題で 地元民極度に激昂 沼津検事局活動」（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月17日付夕刊）

「鈴川毘沙門天大祭 臨時列車運転」（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月29日付）

「霊峰富岳を背景に トラピスト建設 カトリック協会が日本への進出 敷地五十万坪買収計画」（『静岡新報』1933年＝昭和8年1月31日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和8年2月』

「工費三万六千円余で 大宮署の新築 最新式五層楼の設計」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月9日付夕刊）

「浮島村古墳の発掘器物 帝室博物館で鑑定 刀剣其の他は一千年前の遺物か？ 考古学会で重要視さる」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月11日付）

「御殿場附近は陸軍用地となる 国立公園指定から除外 本県の態度決定す」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月17日付）→「裾野の代りに愛鷹山はどうか」（3月14日付）に続報。

「芝川水利権 癒々交渉開始 けふも両社交渉続行」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月18日付）

「大吉原町 実現早からん」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月18日付）

「自動車に押され 人力車激減 浜松地方は盛期に比し 二百余台の著減振」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月22日付）

「山中湖の底に 温泉が湧く 大童で発見作業」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月22日付）

「吉原外四ヶ村 年度内に合併 白紙に返つて話進む」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月24日付夕刊）

「旭 遠州米 静岡県駅販売」〔富士山から旭光 広告〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月24日付夕刊）

「昨年秋から岳麓の地震十数回感受 浜松測候所の地震計 富士火山系統調査」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月27日付）

「過去帖を持ち出して 吉原町に合併反対 伝法村の反対理由」（『静岡新報』1933年＝昭和8年2月28日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和8年3月』

「富士根の山林内で 廿余名の賭博 大宮署員が踏込み 三名を捕ふ」（『静岡新報』1933年＝昭和8年3月3日付）

「富士国立公園と我社の施設 富士山麓電気鉄道株式会社 富士山麓土地株式会社」（広

告) 昭和8年3月8日付)

「富士国立公園に就て 岸衛」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月8日付)

「伝法村の吉原合併 村内に賛否両派 合併派の態度強硬」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月12日付)

「浪花節 読切連続(其一)(後八時五十分) 清水次郎長 玉川勝太郎」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月13日付「ラヂオ」)

「裾野の代りに愛鷹山はどうか 国立公園調査員一行」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1933年=昭和8年3月14日付)

「大宮、甲府路線は 五月中旬に完成 夏季には観光客増加」〔富士山自動車遊覧道路〕(『静岡新報』1933年=昭和8年3月15日付)

「大宮大火の低資供給 突如中止の通達 償還計画立つまではとの理由で 秋山議長 田中知事に陳情」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月18日付)

「富士根村議総辞職 農繁期の選挙日繰り上げのため」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月19日付)

「京浜地方から美人を抱へて 裾野駅の大発展策」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月27日付)

「江尻沼津駅間にバス運転 富士自動車の申請に静岡鉄狼狽」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月27日付)

「富士自動車会社 沼津清水間のバス運転計画 清水市は絶対反対表明」(『静岡新報』1933年=昭和8年3月19日付夕刊)

「田子浦海岸の 航空灯台起工式」〔田子の浦〕静岡新報』1933年=昭和8年3月30日付夕刊)

●県立プリント『静岡新報 昭和8年4月』

「滝ヶ原で野営演習」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1933年=昭和8年4月7日付夕刊)

「丹那トンネル 今秋までには完成 両口とも工事順調に 作業員大いに意気込む」(『静岡新報』1933年=昭和8年4月8日付夕刊)

「富士自動車乗入れと 市当局の態度に 非難の声起る」(『静岡新報』1933年=昭和8年4月11日付夕刊)

「今秋には大丈夫 丹南トンネル貫通 一尺当り千円もかゝった地魔 地元は早くも祝賀準備」(『静岡新報』1933年=昭和8年4月17日付)

「工費三百万円で 三島地内東岩崎に 大変電所建設」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1933年=昭和8年4月20日付)

「富士身延鉄道で 深夜運転の超特急電車運転」〔身延線〕(『静岡新報』1933年=昭和8年4月20日付)

「雪の富士御中道 みごと踏破」(『静岡新報』1933年=昭和8年4月27日付夕刊)

「丹那盆地補償問題に 一縷の曙光を認む 要求額二百二十五万円を 百五十万円程度に査定」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕(『静岡新報』1933年=昭和8年4月29日付)

●県立プリント『静岡新報 昭和8年5月』

「大宮の初町会 議長には谷川氏」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月6日付夕刊)
「浅間神社 流鏝馬祭 人出六万余」〔浅間大社〕(『静岡新報』1933年=昭和8年5月7日付夕刊)

「皇太后陛下 浅間神社御参拜」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月9日付夕刊)
「趣味講座(後六時廿五分) 山岡鉄舟と清水次郎長 佐倉孫三」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月16日付「ラヂオ」)

「光榮に輝く 富士山下の大宮町 田中知事謹話」〔皇太后〕〔浅間大社〕(『静岡新報』1933年=昭和8年5月20日付夕刊)

「大宮官幣大社」〔皇太后〕〔浅間大社〕(『静岡新報』1933年=昭和8年5月20日付夕刊)

「初めて霊峰富士を機上から見た 少年航空兵達は語る」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月24日付)

「富士山登山期近づく 今年自動車賃大いに値下げ 御殿場営業組合の諸物価協定」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月26日付夕刊)

「須走のつゝじ 廿七、八日頃が見ごろ」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月26日付夕刊)

「富士登山に関し協議会」〔運輸事務所〕(『静岡新報』1933年=昭和8年5月26日付夕刊)

「難工の丹那隧道最奥まで 鉄相身を挺して視察」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1933年=昭和8年5月26日付)

「連続講談(後零時五分) 森の石松(第二席) 神田ろ山」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1933年=昭和8年5月26日付「ラヂオ」)

「富士身延鉄道 国営問題実現運動 守屋理事甲府へ出張」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月27日付夕刊)

「連続講談(後零時五分) 森の石松(第三席) 神田ろ山」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1933年=昭和8年5月27日付「ラヂオ」)

「曾我兄弟追憶の夕

お話(後六時PKより) 曾我兄弟の仇討 富士郡鷹岡小学校 笹原隆次郎

唱歌 曾我兄弟 富士郡鷹岡小学校児童

趣味講座(後六時廿五分 PKより) 富士の裾野に曾我兄弟を憶ふ 富士郡白糸小学校 植松貞治」(『静岡新報』1933年=昭和8年5月28日付「ラヂオ」)

●県立プリント『静岡新報 昭和8年6月』

「富士開山迫る 表大宮口の迎客準備」(『静岡新報』1933年=昭和8年6月1日付夕刊)

「富士山間部地方 水田に亀裂」〔旱魃〕(『静岡新報』1933年=昭和8年6月3日付夕刊)

「富士山麓で小鳥大会」(『静岡新報』1933年=昭和8年6月3日付夕刊)

「猪の頭の県営養鱒池工事 来月中旬には完成」〔富士養鱒場〕(『静岡新報』1933年=昭和8年6月4日付)

「丹那隧道 残工事 三百五十尺」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』19

33年=昭和8年6月4日付)

「映画界稀有の大超特作品！燃える富士 日の出 七月号別冊附録」〔広告〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月6日付）

「慈雨を待ち田植 湯水池の函南村畑毛で」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕〔早魃〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月8日付）

「今暁出発した静岡聯隊 夜の愛鷹山を踏破 十二日夜は富士を決行」〔軍事訓練〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月8日付）

「輝く軍旗先頭に 愈よ富士登山 静聯の元気旺盛」〔静岡聯隊〕〔軍事訓練〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月11日付夕刊）

「富士高山植物採取」〔国立公園特有採花展〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月11日付夕刊）

「静岡聯隊富士登山 けふ板妻出発」〔東富士演習場〕〔軍事訓練〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月13日付夕刊）

「登山の静岡聯隊 伝書鳩で通信」〔軍事訓練〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月13日付）

「丹那盆地の農民 大挙救済方陳情」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕〔早魃〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月14日付夕刊）

「丹那盆地の住民 不穩の形勢を示す 県官調停のため急派」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕〔早魃〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月15日付夕刊）

「富士山頂から 二日間涼味放送 七月の中旬頃に」〔ラジオ放送〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月15日付夕刊）

「魔の隧道『水抜坑』の貫通 大臣の手で最後の爆破 来二十日午前十時から午後二時までの間に」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月15日付）

「愈々七月十一日に富士山の山開き 登山者のため極力暴利を取締る」（『静岡新報』1933年=昭和8年6月15日付）

「昭和十年四月に 熱海線開通予定 三島変電所は明春三月竣工」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月16日付夕刊）

「国府津沼津間 電化設備費」〔御殿場線？〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月16日付）

「国立公園の指定 或は『富士』遅れん」（『静岡新報』1933年=昭和8年6月16日付）

「お山開きの当日 富士山道の大掃除 駿東、富士両郡青年団に依つて」〔清掃登山〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月16日付）

「丹那隧道水抜坑 十九日に貫通 廿二日の爆破を繰上げ」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月17日付）

「丹那盆地の湯水救済案 鉄道省廿日に内示」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕〔早魃〕（『静岡新報』1933年=昭和8年6月18日付）

「鉄相のボタンを押すを合図に 丹那水抜坑の爆破 全山歓喜に動揺めきて 忽ち揚がる万歳の声！ 熱海にて 小坂本社特派員報 今や地獄の一丁目 カンテラの灯が見える

岩壁も砂塵と化し 両口全く開通す 感激狂奔して 坑の内外に喊声 大場にて 大杉記者報」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月20日付夕刊）

「廿人乗の索道で 新遊覧の施設 一時間に六回出発」〔日金山ロープウェイ〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月20日付夕刊）

「登山観光客の誘致座談会」〔大宮〕〔富士山西麓遊覧自動車道路〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月20日付夕刊）

「富士山観光道路 近くいよゝゝ竣工」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月20日付）

「水抜坑貫通の一瞬 騰つた地価 熱海に漲る丹那景気 小坂本社特派員報」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月20日付）

「伊豆の海岸を 自動車一周 平野雷治郎」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月20日付）

「今後どうなつてゆくか！丹那盆地一帯の二千農民 開通成功の歓喜の裏にこの犠牲」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月20日付）

▲▲

「霊峰富士山頂で 国民精神運動」〔大和同園〕〔国民精神運動登山〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月21日付夕刊）▲▲→詳しくは「大国旗を掲揚し」（6月22日付夕刊）参照。

「静岡聯隊将兵の富士登山決行」〔軍事演習〕〔重装備登山〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月21日付夕刊）

「大国旗を掲揚し 富士山頂に祈祷会 国威宣揚護国のため」〔大和同園〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月22日付夕刊）▲▲→「富士山頂の護国祈祷会」（7月9日付夕刊）、「大太鼓を打ち鳴らして」（7月15日付夕刊）、「愈大太鼓担いで富士山頂へ登る」（7月19日付夕刊）、「富士山を仰ぐ（前四時卅分より）富士山頂より中継」7月24日付「ラヂオ」）に続報。

「大場、来光両川の 改修及び国庫補助 内務省より昨日指令発せらる」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕〔渴水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月22日付）

「双方の歩み寄りに依り 来週中には落着か 丹那盆地渴水の鉄道省補償問題」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月22日付）

「鉄道に再考求め 一行は昨夜帰庁」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕〔渴水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月22日付）

「鶴が舞ひ下る」〔ツル〕〔榛原郡金谷町〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月22日付）

「両者のため 根本的に解決 丹那渴水問題で 高辻神田両課長帰来談」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月23日付夕刊）

「日本一富士自転車 大日本自転車」〔富士山絵柄の広告〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月23日付）

「富士身延鉄国営 近く猛運動開始」〔身延線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月25日付）

「丹那救済補償問題 あす最後の交渉 鉄道省の招きに本県から上京す」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月27日付）

「現在の国府津三島間鉄道を 新国道に改修希望 熱海線開通と共に交通業者の運動」〔御殿場線〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月27日付）→「『フジヤマ』眺望の為にも現行通り運行熱望」（7月15日付）に続報。

「熱海線の施行と沼津駅構内」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月27日付）

「丹那渇水被害地の補償 百十七万五千円を 鉄道省から支出に決定 十年来の難問題も昨日漸く手打ち 水利組合を設立して 灌漑用水、水道施設 約六十万円を工費に 残余は補償金に 隧道貫通以上のこの喜び 平山建設所長の談 先つこの程度で辛棒されたい 田中知事は語る」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月29日付）

「玉穂村に開催の 全国女青講習会 終つて一同富士登山」〔全国女子青年団指導講習会〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月29日付）

「田子浦海岸航空塔 卅日に点灯式」〔田子の浦〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月29日付）

「富士山南裏登山道 約一里短縮される 御殿場須走大宮に比して」〔富士山南口登山道〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月30日付夕刊）

▲▲→「富士山南口登山口」（8月22日付）に続報。

「久しき間の憂悶から 力強き更生へ 丹那渇水被害地方」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年6月30日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和8年7月』

「大宮大社の御田植祭」〔浅間大社〕〔お田植祭〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月1日付夕刊）

「手に、ゝ、鋏を持つて 猛り立つた数十名 堰を挟んで対峙 将に血の雨降らんとす」〔水争い〕〔沼津市門池用水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月2日付夕刊）

「血争惨闘の後に来る 丹那被害地の復興 水利組合区域と創立委員任命」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月2日付夕刊）

「富士御殿場口 開山式」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月2日付夕刊）

「富士はいよいよ後廻しか 国立公園の正式決定」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月3日付）

「裾野の演習で日射病患者続出 三島から医師十名急行 患者は約百名」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月3日付）

「演習中日射病で 兵士百余名死傷と発狂 自ら剣で突くやら舌を噛むやら 其の惨状目も当てられず 死亡者は七名 重傷者は十五名」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月4日付夕刊）

「六名の外国婦人 大宮から登山」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月5日付夕刊）

「富士登山道の清掃」〔清掃登山〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月5日付夕刊）

「十一日の開山祭準備」〔大宮口〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月5日付夕刊）

「病歿の七勇士 けふ帰隊す 本隊と共に御殿場発 他の十九名は経過良好」〔東富士演

習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月5日付夕刊）

「日射病惨事の 痛しき犠牲者遺骨 悲しき原隊入り 七日聯隊葬を営まる」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月5日付）

「裾野日射病事件の救護表彰」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月7日付）

「P・Kローカル 郷土の今昔（六）富士の今昔 静岡県会議長 秋山忠平 後六時廿五分」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月7日付「ラヂオ」）←この記事、左横書きが混じっている。

「白布に包まれたる 八つの英霊に御直拝 朝香旅団長宮殿下 畏くも神前に進ませられて」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月8日付）

「丹那隧道工事進捗 九月中旬頃貫通 現在残りは約一千尺」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月8日付）

「富士開山報告祭 大宮浅間神社に於て」〔浅間大社〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月8日付）

「汽車賃の割引と臨時列車の運転 海水浴や登山者のため」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月8日付）

「牧の原から富士を望む 田中柏蔭画伯の大作 静岡浅間神社に納むる 幅四尺長さ八尺の軸物」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月8日付）

「富士山頂の護国祈祷会 申込三千余に達す 来る十五日から四十日間行ふ」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月9日付夕刊）

「丹那水利組合 管理者を任命」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月11日付）

「賤機山頂に六丈余の大国旗 今十一日掲揚式举行」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月11日付）

「富士山頂奥宮で開山祭を举行」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月11日付）

「郷土芸術の登山土産 丸木彫刻の展覧会 本社大宮販売店で開催する」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月12日付夕刊）

「お山は例年より一ヶ月も陽気早い 昨日は俄かに登山者が激増」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月13日付）

「自殺すべく富士登山」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月15日付夕刊）

「大太鼓を打ち鳴らして富士山頂で合唱 田方北部青年修養団」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月15日付夕刊）

「富士山便り（十三日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月15日付夕刊）

「『フジヤマ』眺望の為にも現行通り運行熱望 御殿場初め附近町村民の猛運動」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔御殿場線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月15日付）→御殿場線の盛衰については藤井良晃著「山北・鉄道盛衰史」（『足柄の文化』第11号、1976年11月、山北町地方史研究会）を参照。

「沼津駅構内は八千九百坪拡張」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月15日付）

「富士山便り（十四日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月16日付夕刊）

「山は富士 保険も富士 富士生命保険」〔広告〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月17日付）

「愈大太鼓担いで富士山頂へ登る 男女団員二百名で 国家安泰と修養講習」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月19日付夕刊）

「静岡少年団の 富士登山と野営」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月19日付夕刊）

「富士山便り（十七日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月19日付夕刊）

「富士山便り（十八日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月20日付夕刊）

「富士山便り（十九日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月21日付夕刊）

「丹那被害関係村の 普通水利組合議員 十八区の当選者けふ告示さる」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月22日付夕刊）

「富士山便り（二十日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月22日付夕刊）

「水不足の脅威は依然 未だ被害千余町歩 丹那盆地一部は稲作絶望」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月23日付夕刊）

「鉄道省からの交附金を繞つて 問題が勃発」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月23日付夕刊）

「砂走り下山道整備」〔富士宮口砂走り〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月23日付夕刊） ▲▲

「富士山便り（廿一日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月23日付夕刊）

「電通の登山競走 御殿場口を出発」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月23日付）

「講演（後八時）富士山頂より 霊山と神話 柳田国男

富士山を仰ぐ（前四時卅分より）富士山頂より中継

講演（後八時十分）日本精神と富士山 官幣大社富士山本宮浅間神社宮司 高原正作

富士山頂より（前八時十分）挨拶 静岡県学務部長・静岡県青年団長 広田増太郎

（前九時四十分）四季を通じての頂上生活 中央气象台 菅原芳生」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月24日付「ラヂオ」）

「富士山便り（廿三日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月25日付夕刊）

「警鐘を乱打して富士根村の水争ひ 警官急行し漸く鎮撫」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月26日付夕刊）

「富士山便り（廿四日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月26日付夕刊）

「富士山便り（廿五日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月27日付夕刊）

「富士山上は大荒れ 登山者約一千名が避難」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月28日付夕刊）

「富士山便り（廿六日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月28日付夕刊）

「丹那渇水地救済の 普通水利組合総会 百余万円の使途決す」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月29日付夕刊）

「富士山便り（廿七日）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月29日付夕刊）

「富士山頂に青年団服の 木乃伊になつた死体 二三を経過したらしい」（『静岡新報』1933年＝昭和8年7月30日付夕刊）→「[富士山頂の白骨死体埋葬](#)」（8月1日夕刊付）
に続報。

「婦人参加の騎乗団 愛鷹山一周の壮挙」〔東京乗馬倶楽部〕（『静岡新報』1933年

＝昭和8年7月30日付夕刊)

「富士山便り(廿八日)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年7月30日付夕刊)

「富士山の暴風雨」(『静岡新報』1933年＝昭和8年7月31日付夕刊)

●県立プリント『静岡新報 昭和8年8月』

「富士山頂の白骨死体埋葬」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月1日付夕刊)

「富士山便り(三十日)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月1日付夕刊)

「富士山頂に初氷 早くも冬景色を呈す」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月2日付夕刊)

「大宮の火事 六戸十一棟を焼く」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月2日付夕刊)

「愛鷹山一週 騎乗団」〔東京乗馬倶楽部〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月2日付夕刊)

「富士山便り(卅一日)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月2日付夕刊)

「霊峰富士を繞る 観光道路網の完成 山麓高原地帯縦走」〔大宮甲府線〕〔富士山西麓遊覧自動車道路〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月3日付夕刊)

「丹那東口本道坑 遂に中心点に達す 忽ち揚がる凱歌」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月3日付夕刊)

「富士山便り(一日)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月3日付夕刊)

「富士山便り(二日)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月4日付夕刊)

「富士山便り(三日)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月5日付夕刊)

「富士山便り(四日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月6日付夕刊)

「鉄道省の見舞金 けふ受取る 百十七万五千元」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月9日付夕刊)

「富士山便り(七日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月9日付夕刊)

「富士山便り(八日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月10日付夕刊)

「富士山便り(九日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月11日付夕刊)

「裾野音頭 昨夜披露式を」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月11日付)

「六十五名の犠牲を払った 東洋一の丹那隧道 本月末には貫通 明春三月迄に完成する水を望んだ代り 黄金の洪水襲来」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月13日付夕刊)

「富士山便り(十一日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月13日付夕刊)

「六百年記念祭と昇格運動起る」〔裾野 佐野原神社〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月15日付夕刊)

「富士山便り(十三日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月15日付夕刊)

「静岡にも馴染深いお札博士 丸子では『とろゝ汁』を」〔スタール博士〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月16日付夕刊)

「富士山便り(十四日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月16日付夕刊)

「富士山便り(十五日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月17日付夕刊)

「公園、観光両協会を合併して 観光事業を整理統一 温泉協会は取締機関として存続」〔静岡県〕(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月17日付)

「富士山便り(十六日発)」(『静岡新報』1933年＝昭和8年8月18日付夕刊)

「富士山便り（十七日発）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月19日付夕刊）
「軍隊大部隊の列車輸送演習実施 御殿場で敵前下車演習」〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月19日付）
「富士山便り（十八日発）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月20日付夕刊）
「富士山便り（二十日発）」（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月22日付夕刊）
「富士山南口登山口 猛運動を起す」〔富士山南口登山道〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月22日付）▲▲
「急行停車駅の 争奪戦開始さる 熱海線開通と共に」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月22日付）
「丹那本導抗の貫通 来二十五日午前十時と決定 みごと来年末には完成開通の予定」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月23日付）
「最後の爆破を待つ 丹那西口本導抗先端 二十五日朝迄予定の残工五尺迄掘進」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月25日付夕刊）
「けふ・午前十一時 丹那トンネルの本導抗 最後の爆破！貫通！！山をゆるがす万歳と歓喜 次いで列車通過もいま一と息」〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月26日付）
「久保川に添った原野の一角を演習地とし 大廠舎を建設計画 軍隊、学生、青訓、青団を収容」〔富岡村〕〔演習場移転〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月27日付夕刊）
→「行悩みの演習地 買収問題好転す」（9月12日付）に関連記事。
「熱海線全通近づき 遊覧都市実現と 国立公園の猛運動 卅年目で鉄道の恵沢に浴す」〔伊豆半島〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月27日付夕刊）
「富士西麓道路修理 十月中旬に完成 軽井沢に劣らぬ避暑地」〔朝霧高原〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月29日付夕刊）
「富士川上流より隧道水路で 裾野一角の大開墾 県耕地課が非常な意気込みで計画中」〔朝霧高原開発〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月29日付）
「千本松原を開いた 長円和尚の事蹟 功労者の伝記編纂を」（『静岡新報』1933年＝昭和8年8月29日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和8年9月』

「山中に鎌や木刀を掲げて 四百名が睨み合ふ 長泉対大岡の草刈問題紛糾 各所に激論小競合 一方には憤激待機の長泉村区民 警官両村民に解散を命ず」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月11日付）
「両村の草刈り紛議 解決に関係者奔走 沼津署きのふ実地見分を行ふ 沼津署員の警戒裡に 委員会開かる 大岡村代表者の陳情 委員会けふ更に続行」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月12日付）
「行悩みの演習地 買収問題好転す 廠舎を移転されては堪らぬと」〔演習場移転〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月12日付）
「富士山に登って 心中をする覚悟 不心得の男女捕まる」（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月13日付夕刊）
「草刈事件は両村の意嚮を聴取裁断 組合常設委員会」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月13日付）

「草刈問題の解決に 沼津署長極力奔走 関係各町村町等に面談して」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月14日付）

「大宮町を中心に 演習場設置猛運動 印野原理両村は近く再交渉」〔演習場移転〕〔上井出〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月14日付）

「浮島村で発掘の古器物は 悉く博物館へ保存 太刀は国宝として近く指定されん 古墳に富む浮島沼」（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月15日付）

「愛鷹山に登らんとし 大岡村の一団 警官隊に喰止めらる 署長が双方に警告解散せしむ 中山署長調停奔走」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月16日付）

「富士西麓遊覧道路 バス運転の競願」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕〔石川自動車〕〔山麓電鉄〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月17日付夕刊）

「関係市町村長達に依り 草刈問題解決協議 沼津署長が斡旋の結果」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月17日付）

「大岡、長泉両村の草刈事件 近く解決 関係町村長会で裁断」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月21日付）

「大岡対長泉の草刈り問題 けふ関係町村長会開く」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月22日付）

「連日、野猪の群が現はれ 白糸の畑作大被害」〔イノシシ〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月25日付）

「大岡村対長泉村の 草刈事件解決す」〔長泉・大岡草刈り紛糾〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月28日付）

「富士山頂大降雪 九合目上は三尺余積る」（『静岡新報』1933年＝昭和8年9月29日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.146 昭和8年10月1日～11月15日』

「富士山麓や浮島沼 猟鳥の繁殖良好 解禁期いよゝゝ迫る」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月3日付夕刊）

「富士が見えるゝゝゝで 忽ち田が塞つた 安東三丁目」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月6日付「街を語る【二〇】」）

「補償の恩恵に浴せず 水利組合に一杯 喰はされたと脱退 五部落は別に鉄道省に迫る」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月12日付夕刊）

「狩猟の解禁日迫る 浮島沼水禽繁殖」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月12日付夕刊）

「小富士山頂の 県境争ひ 本県の権利あく迄主張」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月13日付）▲▲

「急行停車駅に熱海駅が確定」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月15日付夕刊）

「岳南の健児満洲の野に 強力な塩匪と衝突 約一時間に亘つて交戦 白井少尉の手記」〔芝富村羽鮒 白井正守〕〔満州事変〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月19日付夕刊）

「熱海・沼津間電化 経理局に内案を提示」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月19日付夕刊）

「大宮町の巻（上）甲州人が幅を利かす所 中心街は面目一新 霊峰富士を繞る人と物との動き＝太田生＝」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月20日付夕刊「駿遠豆経済行脚（十四）」）

「大宮町の巻（中）富士山が生む金は莫大 盛夏には山客雲集 安く踏めない山の経済＝太田生＝」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月21日付夕「駿遠豆経済行脚（十五）」）

「丹那トンネル東西両口で けふ行ふ輝しい祝典 坑外に慰霊塔除幕式 広場式場では工事功労者表彰式」〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月21日付）

「歓喜と感激裏に丹那隧道貫通祝典 煙火は間断なく打揚げられ 二台の花電車は坑内を走る 悪地質と多量の地下水に悩んだ 石川技師の談 西口は芸妓と青年連の踊り」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月22日付夕刊）

「大宮町の巻（下）附近は名高い養蚕地 一躍増加した生繭 製糸女工の唄で賑ふ此の頃＝太田生＝」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月22日付夕刊「駿遠豆経済行脚（十六）」）「」（『静岡新報』1933年＝昭和8年月日付）

「八年度中には国立公園決定」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月22日付）

「清水港の巻（一）次郎長親分の縄張範囲 昔は関船の配置場 血の気の多い『浜つ児』の意気＝太田生＝」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月24日付夕刊「駿遠豆経済行脚（十七）」）「」（『静岡新報』1933年＝昭和8年月日付）

「大本山大石寺内 連行庵の全焼」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月24日付）

「名瀑白糸の滝 石川自動車商会の発展」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月24日付「（県内自動車 早廻競争記念）郷土を語る（1）」）

「丹那濁水地の 分配金問題内紛 成行きを重大視さる」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月26日付）

「五部落対十四部落民 正面衝突して不穏 警官十数名出張警戒」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月27日付夕刊）

「興津駅＝吉原町 直通運転 富士自動車」〔広告〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月27日付夕刊）

「濁水部落間にも内紛 補償交付金分配について不満爆発 折角の懇談会も大混乱を呈す 調停村長達も 遂にサジを投ぐ 八溝用水関係部落側委員は上京 三部落名削除要求理由書 夜に入り小競合を演出 遂に検束者を出す」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月28日付附夕刊）

「大宮町の有力者 賭博で続々と検挙」〔大宮町紳士賭博〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月28日付夕刊）

「部落騒動混乱し 高橋村長辞表提出 濁水地補償金問題もつれ」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月29日付夕刊）

「富士山一合目迄降雪」（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月29日付夕刊）

「町議・歯科医等 賭博で検挙」〔大宮町紳士賭博〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年10月29日付夕刊）

「富士身延鉄道の国営移管運動 下部温泉に打合会」〔身延線〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月1日付）

「静岡聯隊諸兵連合演習（第二日）大宮町万野原に 壮烈なる白兵戦 豊橋聯隊の諸兵連合演習終る」〔軍事演習〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月2日付）

「函南村役場に 調停者協議」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月3日付）

「富士身延鉄道 国営実現の猛運動 鈴木期成同盟会長一行大挙上京」〔身延線〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月7日付夕刊）

「大宮の逐年滞納 断然たる大整理」（『静岡新報』1933年=昭和8年11月8日付夕刊）

「須走村消防組紛擾 組頭に辞職を迫る 聯合演習には僅か十九名参加」（『静岡新報』1933年=昭和8年11月9日付）

「富士山頂は零下十三度」（『静岡新報』1933年=昭和8年11月10日付）

「鉄道省の不当な民業圧迫に反対 鉄道運賃引上げ命令 富士身延鉄道の大恐慌で運動」〔身延線〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月12日付）

「大火記念日に 大宮町の復興祭」〔大宮町大火〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月14日付夕刊）

「梅蔭寺住職が次郎長逸話放送」〔清水次郎長〕〔ラジオ放送〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月14日付夕刊）

「趣味講座（後六、二五・PK）東海の侠客 清水次郎長翁の全貌に就て 梅蔭寺住職 田口月心」（『静岡新報』1933年=昭和8年11月14日付「ラジオ」）

●歴史文化『静岡新報 Vol.147 昭和8年11月16日～11月30日』

「太郎坊隣接地に 町営スキー場設備 四十町歩を利用して」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月17日付夕刊）

「明年十一月中に熱海線開通 頻りに坑内整理を急ぐ」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月19日付夕刊）

「来月三日第一日曜から発行致します 日曜夕刊発行 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月26日付夕刊、11月27日付、11月28日付夕刊、11月29日付夕刊、11月30日付夕刊、12月1日付夕刊、12月2日付夕刊、12月3日付夕刊）

「狸沼の貯水池計画 依然として解決せず」（『静岡新報』1933年=昭和8年11月29日付夕刊）

「裾野地方の巻（一）銀嶺を慕ふ若人の群 スキーで賑ふ岳麓 上古には大神宮の御供田=太田生=」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月29日付夕刊「駿遠豆経済行脚（四〇）」）

「富士山南口の 復活問題で訴願」〔富士山南口登山道〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年=昭和8年11月29日付）

「裾野地方の巻（二）篠竹を原料とする竹行李 農村に有利な副業 承久の役の殉難者を祀る鮎沢神社=太田生=」（『静岡新報』1933年=昭和8年11月30日付夕刊「駿遠豆経済行脚（四一）」）

「須走消防組の紛擾漸く解決」（『静岡新報』1933年=昭和8年12月1日付夕刊）

「柚野村の『天子ヶ岳』名勝地指定の申請」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月3日付）

「裾野地方（三）民衆的に利用する価値 富士山の国立公園 承久の役の忠臣が哀しき末路＝太田生＝」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月5日付夕刊「駿遠豆経済行脚（四二）」）「」（『静岡新報』1933年＝昭和8年月日付）

「富士山麓地帯開墾に 新たな促進勢力加重 全県下に亘つて水系調査」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕〔朝霧高原〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月6日付）

「冬山は招く スキーにはどこへ シーズンを待つ静岡スキーヤー」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月6日付）

「足柄駅新設で村民大会を開催」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月7日付夕刊）

「富士山の二合目で仰毒青年が苦悶 下山して民家に救ひを求む」〔自殺〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月7日付夕刊）

「裾野地方（四）救農の治績と伊奈忠順 盛大な祭典を執行 富士山麓の交通網と御殿場＝太田生＝」〔宝永山噴火〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月7日付夕刊「駿遠豆経済行脚（四三）」）

「丹那トンネル舗装工事 来年三月には完了 電化諸工事は十一月までに」〔東海道本線〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月7日付）

「裾野地方（五）水力利用の小山工場 紡績電化の嚆矢 巨人の遺徳を偲ぶ豊門公園の碑＝太田生＝」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月10日付夕刊「駿遠豆経済行脚（四四）」）

「裾野地方（六）関西財界の鬼才に見る槿花一朝の夢哀れ 箱根疎水と総ヶ原と芦湖水神社＝太田生＝」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月12日付夕刊「駿遠豆経済行脚（四五）」）

「野鼠の退治 鼬で鼠を退治 富士山麓の被害記録」〔野ねずみ〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月12日付夕刊）

「狸沼の貯水問題 調停者手を引く」〔田貫湖〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月13日付）

「山の設備や降雪を 各車輛に報知する スキー場行乗客割引券発売」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月14日付夕刊）

「御殿場附近町村 水源地の増設」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月16日付夕刊）

「富士山一合目に大修養道場建設」〔富士山南口登山道〕〔青年教団〕（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月19日付夕刊）

「年末の滞納整理に 大宮町民の非難」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月20日付夕刊）

「御殿場町民の 借金貸金の調査」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月20日付夕刊）

「富士身延鉄道の名で 広告料一万円詐取 五年間に亘り県下各地から」（『静岡新報』1933年＝昭和8年12月21日付）

「京大生四名が雪中富士登山」〔大宮口から吉田口〕（『静岡新報』1933年＝昭和8

年 12 月 26 日付)

「演習用地買上 借地契約延長」(『静岡新報』1933年=昭和8年12月27日付)

「連続講談(後八時五十分)清水次郎長(第一席)神田泊竜

講演(後六時廿五分)ウインタースポーツと衛生上の注意に就て 阿部忠一」(『静岡新報』1933年=昭和8年12月27日付「ラヂオ」)

■ 1934年=昭和9年

● 歴史文化『静岡新報 Vol.148 昭和9年1月1日～2月15日』

「二、一合目間は丁度よい」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月3日付)

「熱海沼津間の開業 本年九月十二日」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月11日付夕刊)

「丹那盆地で耕作復旧座談会」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月11日付)

「陸軍自動車学校練習隊の行軍 雪の太郎坊に露營」〔軍事演習〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月12日付夕刊)

「熱海線開通期に 三島で博覧会開催」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月12日付)

「裾野陸軍演習場の 今年の日割決定」(『静岡新報』1934年=昭和9年1月12日付)

「富士山頂観測 交替員の登山」(『静岡新報』1934年=昭和9年1月12日付)

「岳麓の鳥獣棲息 分布状況を調査 村上農林省畜産課長一行」(『静岡新報』1934年=昭和9年1月12日付)

「スキー芸者の艶姿も躍って 大雪に太郎坊は賑ふ」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月19日付夕刊)

「狸沼貯水問題 再度の調停会議」〔田貫湖〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月21日付)

「銀盤の太郎坊 スキーヤで賑ふ 雪の躍る群衆の壮観」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月22日付)

「沼津スキークラブ太郎坊で発会式 スキーヤー多数参加」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月23日付)

「太郎坊は大賑ひ 押しかけたスキーヤー無慮一千 自動車で運び切れぬ有様」(『静岡新報』1934年=昭和9年1月24日付夕刊)

「裾野地方強震」(『静岡新報』1934年=昭和9年1月24日付)

「狸沼貯水問題 妥協が成立 県当局に一任に決す」(『静岡新報』1934年=昭和9年1月24日付)

「大宮町駅頭へ大鳥居建設 復興祭を好機に」(『静岡新報』1934年=昭和9年1月26日付夕刊) → 「大宮駅々頭に大鳥居建設」(1935年=昭和10年6月2日付夕刊) に続報。

「大宮大社の廻廊 近く新築に着手 望月氏の寄進で」〔浅間大社〕(『静岡新報』1934年=昭和9年1月27日付夕刊)

「十余ケ年間紛擾を続けた 丹那湧水地問題も一切清算 あすの函南村三ヶ村水利組合総会で」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月1日付）

「丹那の湧水復旧工事 大貯水池設置」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月2日付）

「北駿五ヶ町村が共同で 大量的に寒天製造 来る十日須走村で協議会」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月2日付）

「大淵公設消防組 連袂総辞職 村長も引責辞職」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月3日付夕刊）→「大淵村の紛擾」（9年2月4日付夕刊）の続報。

「天保年間に作製された『富士見十三州』の地図 清水村徳倉の素封家梅田家から発見」〔『富士見十三州輿地之全図』秋山永年誌、衆星堂、天保13年〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月3日付）→[国立国会図書館デジタルライブラリー](#)では『富士見十三州輿地全圖』で登録されている。

「大淵村の紛擾 結局公設消防組織され 初代組頭に村長を推し解決か」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月4日付夕刊）

「岳麓地方に降雪 スキーヤーで賑ふ バス往還漸く開通」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月5日付日曜夕刊）

「附近農家が大儲け 焼津競馬新風景 厩舎料がころがり込む」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月5日付）

「大宮町の 上水道敷設計画 先づ希望者を調べて」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月6日付夕刊）

「滝の上不動堂の遊水池 上流に穿井から騒動 組合側連署して大宮署へ陳情」〔富士根村杉田〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月7日付夕刊）

「吉原署で近く 大賭博狩り 庄太郎殺しの取調べの結果」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月7日付）

「村長を初代組頭に 公設消防を組織 大淵村の紛擾全く解決」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月8日付）

「焼津競馬場で けふ馬体検査」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月8日付）

「丹那トンネル 十月から試運転 十二月には癒々開業」〔東海道本線〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月8日付）

「足柄村の白旗神社で 古墳を発掘 富士山噴火以前のものか」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月9日付夕刊）

「富士に製紙試験及び 見本品の製造工場 製紙工業組合に依つて設立」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月10日付）

「陣容更新に際して 江湖のご声援を乞ふ 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月10日付）

「予期以上の順調で 丹那隧道工事進む 三月中には癒々完成」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月11日付）

「鈴川の毘沙門天縁日 臨時列車を増発」（『静岡新報』1934年＝昭和9年2月14日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.149 昭和9年2月16日～3月31日』

「本県にも氷河の流れ 富士、庵原、安部の砂礫層から続々発見 静師、田中教諭の研究に依り確認さる」(『静岡新報』1934年=昭和9年2月17日付)

「御殿場の原野焼く」(『静岡新報』1934年=昭和9年2月17日付)

「銀嶺賑ふ スキーを肩に太郎坊へ遠征」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年2月19日付日曜夕刊)

「陸軍歩兵学校 実弾演習」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年2月19日付日曜夕刊)

「鶴田五郎氏の富士百景色展所感(一) 嶽陽美術会員 小林猶治郎」(『静岡新報』1934年=昭和9年2月27日付)

「富士川町挙げて 歓喜に満つ 古溪荘の献上に」〔田中光顕〕(『静岡新報』1934年=昭和9年2月28日付)

「鶴田五郎氏の富士百景色展所感(二) 嶽陽美術会員 小林猶治郎」(『静岡新報』1934年=昭和9年2月28日付)

「富士観光道路 地元町村で促進運動 須走・大宮口間の循環道路 四月から青年団を糾合し開鑿工事」〔富士山南口登山道〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月1日付)

「熱海線の営業哩 鉄道省の意嚮は 八キロを廿キロに 田方町村長会で値下運動」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔丹那トンネル割増運賃〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月1日付)

「太郎坊スキー場の 茶屋が焼失 大旋風に襲はれ」(『静岡新報』1934年=昭和9年3月2日付夕刊)

「富士山へ自殺しに」(『静岡新報』1934年=昭和9年3月2日付夕刊)

「鶴田五郎氏の富士百景色展所感(三) 嶽陽美術会員 小林猶治郎」(『静岡新報』1934年=昭和9年3月2日付)

「御殿場線と命名し現行通りの運転を 省線国府津沼津間の関係三十七ヶ町村の代表上京し議会へ陳情」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月6日付)

「大宮の水道計画 せめて大火災区域だけでも 第一期近く着工」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月8日付夕刊)

「早魃に各地の悲鳴 富士開墾地は飲料水が欠乏 汲取に遠く山道を通ふ」〔大淵、北山、富士揚〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月9日付夕刊)

「待望の丹那隧道は完成 冷酒を酌み交す けふ従業員が勢揃ひして」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月11日付夕刊)

「原里の射撃場」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月11日付夕刊)

「熱海線開通と三島の祝賀」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1934年=昭和9年3月11日付夕刊)

「鈴川駅 二月中の乗降客」(『静岡新報』1934年=昭和9年3月12日付)

「東海道線をガソリンカーの疾駆 本年十月初め頃から」(『静岡新報』1934年=昭和9年3月13日付夕刊)

「熱海線全通祝賀会場 各地で争奪戦 新三島駅は古典的建築」〔丹那トンネル〕〔東海

道本線] (『静岡新報』1934年=昭和9年3月18日付夕刊)

「熱海線の運賃 遞減方の猛運動 三島商工会で協議」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕
〔丹那トンネル割増運賃〕 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月18日付夕刊)

「吹雪を冒して技手の富士登山」〔頂上気象観測〕 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月18日付夕刊)

「富士青年団総会 表彰式行はる」 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月20日付夕刊)

「故多門將軍の慰霊祭を執行 富士郡下四団体で」 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月20日付夕刊)

「暗夜のコースを富士一週 騎兵隊習志野へ走る」 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月20日付夕刊)

「熱海沼津間の軌道 六月には敷設終了 三島大竹の両停車場着手」〔函南駅〕 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月20日付)

「アメリカ娘はととても朗らか 空から富士山見たいワ 兄さんのアナ君の話題に」 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月28日付夕刊)

「籠坂峠附近の禁猟延期の陳情」 (『静岡新報』1934年=昭和9年3月29日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.150 昭和9年4月1日～5月15日』

「沼川沿岸排水工事 地元負担金の歩合 組合議員総会で算定基準決定 本県へ実測方を依頼」 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月7日付)

「激昂せる農民 大挙腰弁当で押しかく 上野村の新鑿水路に憤慨」 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月11日付夕刊)

「観桜客で賑ふ 大宮大社の境内」〔浅間大社〕 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月12日付夕刊)

「上井出の心中 東京から来たといふ若い男女 白糸滝見物を名残りに」〔白糸の滝〕 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月13日付夕刊) →「岳麓の心中未遂」(4月15日付夕刊)に続報。

「須山村浅間神社例祭」 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月14日付夕刊)

「富士山中で恋に狂ふた六十翁の刃傷 愛の巢営む男女めがけて 自宅に潜伏中を取押へらる」 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月14日付)

「岳麓の心中未遂 晴れて夫婦に 二人はイソ、ゝ、帰京す」 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月15日付夕刊)

「函南村の道路 四幹線促進運動」〔函南駅〕〔東海道本線〕 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月15日付)

「五月に大宮で開催 全国名物土産品宣伝」 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月15日付)

「県道大宮甲府線の北山地内改修工事完成」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月16日付)

「裾野駅前に魔の如き怪盗 軒並みに七戸襲ふ 現金を専門に自転車も二台窃取」 (『静岡新報』1934年=昭和9年4月25日付夕刊)

「大宮町の復興姿 想ひ起す二ヶ年前の恐ろしかつたあの大火 来月二日から華々しくお祭り挙行 復興祭のプロ 十四組の山車も練り廻る事とて 手踊や囃子の稽古に日夜奔

命」（『静岡新報』1934年＝昭和9年4月29日付夕刊）

「熱海線開通と共に富士を廻る諸計画 南口登山復活やスキー場の設置など観光客の誘致に躍進」〔富士山南口登山道〕〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月3日付夕刊）

「佐野瀑園の貴重品 書画帖が行方不明 時価十万円もするのを客に貸したまゝ 大騒ぎとなり届け出づ」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月3日付）

「『おゝ、ワンダフル、、、』富士を見て雀躍り けふは三保から久能を廻り静岡へ 紅毛東海膝栗毛の一行」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月4日付夕刊）

「『復興行進歌』も高らかに 大宮の街を旗行列 幔幕と神灯で全町は美しく飾り立てられ 感激に深更まで大雑踏」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月4日付夕刊）

「熱海線開通を前に 早くも集荷争奪線 駅前売店等も共に開始さる 新三島駅をめぐる」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月9日付）

「十月から開始さる 電気機関車試運転 熱海線工事は着々と進捗」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月11日付夕刊）

「梅陰寺の主催で 次郎長際を執行 六月三日銅像前で」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月11日付）

「寛永富士川治水略記【上】古郡哲爾（寄）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月12日付）

「兵士の応援で 死体を捜査発見 滝ヶ原廠舎付近にて」〔東富士演習場〕〔自殺〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月13日付夕刊）

「狸沼の貯水問題 近く手打式 秋山県議等の調停に依つて 富士山西麓へ湖一つ」〔田貫湖〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月13日付夕刊）

「断髪的女と美少年『とても死ぬません』デ、警察へ保護願ひ 富士を死場所と定めて登山 二度も心中図つて失敗し握飯を貰つて下山」〔大宮口〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月13日付夕刊）

「精神満腹 清水みなとが生んだ男の中の男 次郎長親分 今年は四十年忌に当り来る三日に盛大に催される次郎長祭」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月14日付日曜夕刊）

「お札博士の墓標 富士山麓に建設 けふ建設委員が来県 七月中に工事竣工」〔スター博士〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月14日付日曜夕刊）→「[お札博士の碑](#)」（11月1日付）に続報。

●[県立プリント『静岡新報 昭和9年5月』](#)

「狸沼工事は 県営でやつて呉れ 地元民が猛運動開始」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月17日付）

「気象台の技手等 愛鷹で遭難か」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月19日付夕刊）

「川口湖畔に外人向の県営ホテル建設 山梨県会へ提案」（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月19日付夕刊）

「新緑の富士山麓へ風雅な探鳥行 文壇画壇の愛禽家二十余名」〔日本野鳥の会〕〔須走〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月19日付夕刊）

「田植期切迫に 下流農民の憤慨 上野村の用水問題」〔王子製紙芝川工場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年5月19日付夕刊）

報』1934年=昭和9年5月20日付夕刊)

「熱海線電化の送電設備開始」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1934年=昭和9年5月23日付)

「岳麓観光がてらの登山を宣伝 大宮町組合の意気込み」〔大宮町登山組合〕〔駅前大鳥居井〕(『静岡新報』1934年=昭和9年5月26日付夕刊) ▲▲

「夏山への魅力 日毎に深まり行く 富士登山口では早くも誘致策協議」〔富士山四登山口聯合協議会〕(『静岡新報』1934年=昭和9年5月27日付夕刊) ▲▲

「富士南口登山道 復活の運動 熱海線開通を機会に 三島地方の人々が」〔富士山南口登山道〕(『静岡新報』1934年=昭和9年5月27日付)

●**県立プリント『静岡新報 昭和9年6月』**

「次郎長祭延期 十二日に挙行」(『静岡新報』1934年=昭和9年6月2日付)

「演習中に赤痢 裾野で士官学校生徒」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月4日付)

「各登山口共通の 宿泊休憩券発行 大宮から打合会へ提議」〔富士山四登山口聯合協議会〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月5日付夕刊) ▲▲

「県道大宮甲府線 バス運転の開始 大宮上井出間は六十銭」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月5日付夕刊)

「伊豆から富士へ 本県道路の誇り 丹那トンネルをも通つて」(『静岡新報』1934年=昭和9年6月5日付)

「富士の残雪浅し 石室開け準備に着手」(『静岡新報』1934年=昭和9年6月6日付夕刊)

「富士を死場所に若い男女の家出 大宮駅で泣き沈む」〔心中〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月7日付夕刊)

「富士各登山口の 開山祭日割 今年は大いに変わった催し挙行 きのみ、聯合協議」〔富士山四登山口聯合協議会〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月8日付) ▲▲

「夏季旅客輸送打合会」(『静岡新報』1934年=昭和9年6月10日付夕刊)

「富士山へ死場所求む 若い男女 大宮署へ捜査願ひ」〔自殺〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月10日付夕刊)

「函南村桑原に アワヤ水騒動」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月12日付)

「次郎長大親分のけふ満四十年忌 梅陰寺で盛大なる次郎長祭」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月12日付)

「大井川電力で 鉄道へ電力供給 熱海線開通と同時に 東京沼津間電化」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月19日付)

「富士南口登山道復活運動具体化 認可あり次第青年団が開鑿」〔富士山南口登山道〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月19日付)

「開山祭を前に 御殿場口の装飾 道路舗装や広告塔建設」(『静岡新報』1934年=昭和9年6月23日付夕刊)

「岳麓に修養道場 清明苑建設 日満楔、両国青年の融和を図るべく計画」〔滝ヶ原〕(『静岡新報』1934年=昭和9年6月25日付日曜夕刊)

「富士の開山期」迫る 各登山口ではお客誘致策に必死 大宮大社では『お守』謹製」（『静岡新報』1934年＝昭和9年6月27日付夕刊）

「開山祭に魁けて続々と室開き」（『静岡新報』1934年＝昭和9年6月27日付夕刊）

「海水浴場・登山と鉄道の割引 七月八日から八月末迄」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月27日付夕刊）

「富士を慕ふて続々 集る修養の学徒 今夏各地から 御殿場地方へ」〔霊峰富士〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月28日付夕刊）

「榛原青年団の富士登山」（『静岡新報』1934年＝昭和9年6月28日付夕刊）

「夏期休暇に於ける 静岡高校のアルプス登高 旅行部のスケジュール決定」（『静岡新報』1934年＝昭和9年6月28日付）

「毎日四、五十名は登山 夏山の気分満つ 開山祭を前に御殿場口の準備」（『静岡新報』1934年＝昭和9年6月29日付夕刊）

「熱海線が開通すると共に名称も御殿場線に 列車の運転も大体決す」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年6月30日付夕刊）

「富士山麓で聯合演習」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年6月30日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和9年7月』

「富士山御殿場口けふ華々しく開山式 好晴と第一日曜日で 終日非常な賑ひ」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月2日付日曜夕刊）

「遙に在満将兵の労を犒う」〔静岡県下衆議院議員2人をトップに、沼津市・駿東郡・富士郡の市町村長はじめ区長・校長・青年団長など500人以上の名刺広告〕〔日中戦争〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月2日付日曜夕刊）→つづきが「遙に在満将兵の労を犒う」（7月30日付夕刊）にあり。

「案内状で紛擾 大宮町登山組合 聯合会が印刷せよ」〔案内状回収焼却〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月5日付）▲▲→次項に続報。

「大宮口登山聯合組合紛糾 幹部は狼狽」〔案内状回収焼却〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月6日付夕刊）▲▲

「元吉原村（富士郡）の松林中へ 真逆さまに墜落 機は大破し一名惨死、二名重傷 館山航空隊の飛行機」〔軍事演習〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月6日付）

「富士郡の放出汚水 永年の紛擾解決す 金子、秋山両県議の熱心調停で」〔富士製紙工業組合〕〔田子浦漁業組合〕〔岳浦漁業組合〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月6日付）

「揚水機で漸く吸水 戦場のやうな騒ぎ 韮山村では二町に亘る用水樋を設置 田方郡下の水涸れ」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔大出水（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月6日付）

「世界一の日章旗を 富士山頂に掲揚 二百五十畳敷」〔秀峰富士〕〔富士山国旗掲揚会〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月12日付夕刊）

「富士の開山祭」〔浅間大社〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月12日付夕刊）

「富士山を中心に浜松飛行隊演習 八月一日から一週間」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月13日付夕刊）

「熱海線開通を記念して 三島町に大共進会 祝賀準備を着々と進む」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月14日付）

「富士山二ヶ所に救護所開設 本年も十六日から」〔御殿場口七合〕〔大宮口八合〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月14日付）

「盲人ばかりで痛快な富士登山 二班に別れ大宮口から」〔障害者登山〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月15日付夕刊）

「富士山麓で 帝大選手の自殺 半月目に死体発見」〔大出山スキー場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月17日付夕刊）

「富士山頂から（十五日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月17日付夕刊）

「富士山頂から（十六日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月18日付夕刊）

「富士山頂から（十七日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月19日付夕刊）

「富士山頂への大国旗 掲揚中止に決定 富士山そのものが日本を表徴 人工の必要なし」と 〔富士山国旗掲揚会〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月19日付）

「富士山で自殺すると自宅へ遺書郵送 大阪から捜査願ひ」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月19日付）

「富士山頂から（十八日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月20日付夕刊）

「突如、鬼形検事出張 大宮町議取調べ 署員大活動を開始す」〔大宮町長選挙流職事件〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月21日付夕刊）

「大宮の登山客誘致策協議」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月21日付夕刊）

「富士山頂から（十九日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月21日付夕刊）

「富士山頂の大国旗掲揚に決定か 計画者の熱心から」〔富士山国旗掲揚会〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月21日付）

「大宮町の疑獄 拡大の模様 県刑事課員も急行」〔大宮町長選疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月21日付）

「富士五湖箱根遊覧団体員 けふ目的地へ」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月21日付）

「鈴木大宮町会議長 外三名ゆうべ収容 町長選挙に絡む流職事件」〔大宮町長選挙流職事件〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月22日付夕刊）

「富士山頂から（二十日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月22日付夕刊）

「来麓の盲人旅行団 先づ名所を耳で見物 きのふ元気で富士登山」〔障害者登山〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月22日付）

「富士山はやめ(?) 藤枝在で縊死 大井神社境内で商人風の男」〔自殺〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月22日付）

「大宮甲府線事件求刑」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月22日付）

「暑中御伺 富士登山御殿場営業組合 富士登山御殿場口自動車営業組合 御殿場館」〔共同広告〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月22日付）

「富士山頂大暴れ 八合目以上は登山不能に陥る 何れも石室内に避難」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月23日付）

「暴風を冒して盲人八合目へ」〔障害者登山〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月

23 日付)

「電■登山競走 霧深く風強き中を決行」〔電通〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月23日付)

「深夜を五百余名の農民 大挙して両部落を襲ふ 八ツ溝外五部落民が用水問題から上沢大竹へ 水道栓を破壊し両区長宅へ乱入す 警官隊に投石し大衝突 遂に二百余名検束」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月24日付夕刊) 一部▲▲

「富士山頂上で武運長久祈願祭」〔富士郡青年団〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月24日付夕刊)

「富士山頂から(廿二日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年7月24日付夕刊)

「検束者実に二百余名 逃亡した者には追跡続けらる 各部落は女子供を総動員し差入れ騒ぎ 田方の農民騒擾事件 曩きの補償金問題から 今また用水不足に 絡まる上沢区の水道問題紛擾等 感情的縛れは深刻化して 惨憺たる現状 検事一行の実地検証」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月24日付)

「岳麓玉穂村の 青年聯盟講演会」〔夜間登山〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月24日付)

「泉村にも水騒動 麦塚の堰を挟み北上側と対峙 沼津署が警戒中」〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月24日付)

「愛鷹山中の雑木林に 両翼が引っ懸り 飛行機大破し搭乗軍曹重症 上空で故障し不時着の際」〔所沢飛行学校〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月25日付夕刊)

「『富士山を綺麗にいたませう』聯合青年団の清掃」〔霊峰富士山〕〔清掃登山〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月25日付夕刊)

「富士山頂から(廿三日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年7月25日付夕刊)

「お山は荒れつゞき」(『静岡新報』1934年=昭和9年7月26日付夕刊)

「伊豆騒擾事件の 廿一名ゆうべ収容 引続き嚴重なる取調べ行はる 新検事正も立寄つて激励」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月27日付夕刊)

「富士山頂から(廿五日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年7月27日付夕刊)

「病床に父を呼続けて 少女憐れ息絶ゆ 検束されて愛児の死も知らぬ父親 函南騒擾事件の裏に此悲劇」〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月27日付)

「騒擾事件から石和村長辞職」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月27日付)

「後任村長の物色困難」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月27日付)

「農繁期を控へ 男手を取られ 途方に暮れる家族達 男女青年団救援に活動」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月27日付)

「騒擾関係者更に十名収容 計二十二名に及ぶ 沼津刑務所満員」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年7月27日付)

「被害部落民と 騒擾部落対立 憂慮される其成行」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕

〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月27日付）

「大宮前町議一名 更に召喚される 塩川氏の女婿も参考人として」〔大宮町長選挙流職事件〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月27日付）

「東京からも検事が来援 大車輪で取調べ 既に収容されたもの四十二名 沼津刑務所は満員に 今後は静岡へ収容」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月28日付夕刊）

「熱海線開通の祝賀会準備 費用約一万五千元」〔三島町〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月29日付夕刊）

「お山は静穏 富士登山者増加す」（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月29日付夕刊）

「後任村長の物色を 本県へ一任 仁田代議士が出県」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月29日付）

「遙に在満将兵の労を犒う」〔静岡県下衆議院議員2人をトップに、周智郡・磐田郡・富士郡の町村長はじめ区長・校長・青年団長など500人以上の名刺広告〕〔日中戦争〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月30日付日曜夕刊）

「速に取調を終り 帰へす者は帰へしたい 強制収容者は合計百三名に及ぶ 騒擾事件につき小野房検事談」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月31日付）

「重罪と見らる五十二名 静岡刑務所へ押送」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月31日付）

「起訴される者 結局廿名内外か 三島署の取調一段落」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年7月31日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和9年8月』

「日用品値段 静岡商工会議所調査部 登山用食料品其他」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月1日付夕刊）▲▲

「富士山頂から（三十日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月1日付夕刊）

「大宮甲府線事件の判決」〔富士山西麓遊覧自動車道路〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月1日付）

「俚謡（後四、〇五）一、富士山御殿場音頭 二、富士大宮音頭」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月1日付「ラヂオ」）

「鈴木氏函南村長に就任」〔鈴木宗覚〕〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月2日付夕刊）

「富士山頂から（三十一日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月2日付夕刊）

「打続く水不足に 水稻枯死に瀕す 八百余町歩の水田亀裂を生ず 北駿地方に憂色深し」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月2日付）

「函南村代理村長に 鈴木宗覚氏就任」〔函南騒擾事件〕〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月2日付）

「富士山頂から（一日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月3日付夕刊）

「登山者が少いので お山の八月を宣伝 十一日から物価をみな一割引」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月4日付夕刊）

「八十七老婆 元気で富士登山」〔高齢者登山〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8

月4日付夕刊)

「富士山頂から(二日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月4日付夕刊)

「富士登山音頭 鈴木信一郎・渡辺肇作詞」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月5日付夕刊)

「富士山頂から(三日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月5日付夕刊)

「冷用 白雪 小西酒造」〔富士山バックの広告〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月5日付夕刊)

「籠坂峠附近で墜落 女工等六名重傷す 自動車は大破す」〔富士五湖ドライブ〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月7日付夕刊)

「富士山頂から(五日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月7日付夕刊)

「富士山頂から(六日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月8日付夕刊)

「富士の森林中に圧死体発見 炭焼人夫の奇禍」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月9日付夕刊)

「富士山頂から(七日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月9日付夕刊)

「けさ、富士山頂に 老人の凍死体発見 前夜来お山は大荒れ」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月10日付夕刊) →「凍死老人の身許判明」(8月10日付)に続報。

「富士山頂から(八日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月10日付夕刊)

「函南騒擾事件の 予審決定は九月頃 収容者への差入れ家業の手伝ひ 地元男女青年が活躍」〔水争い〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月10日付)

「凍死老人の身許判明」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月10日付)

「大宮町民大会」〔大宮町長選挙流職事件〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月11日付夕刊)

「富士山頂から(九日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月11日付夕刊)

「富士山の高山植物 博物館を建設計画 観光客誘致策として大宮町へ」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月11日付)

「富士山頂から(十日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月12日付夕刊)

「東京沼津間ダイヤ編成 十二月の全通を前に」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月12日付)

「仰ぐ我が富士山に大国旗は掲揚さる きのふ荘厳なる奉納式を挙行」〔富士山国旗掲揚会〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月13日付)

「大宮の料亭 数軒から 帳簿押収 突如、鬼形検事来町して」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月13日付)

「富士山の中道巡り探勝会」〔御殿場山岳同好会〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月16日付夕刊)

「富士山頂から(十四日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月18日付夕刊)

「甲冑騎馬で富士登山 福島県相馬郡の古武士の一群 昨日は首相官邸を訪問」〔騎馬登山〕〔変わり種登山〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月17日付)

「小富士の県境問題 本県側確証を掴む 近く山梨県へ嚴重交渉」〔小富士県境争い〕(『静岡新報』1934年=昭和9年8月18日付夕刊) ▲▲

「富士山頂から(十四日)」(『静岡新報』1934年=昭和9年8月18日付夕刊)

「富士山頂から（十七日）」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月19日付夕刊）

「米の母 片倉栄養化学研究所」〔エベレストの写真バックの広告〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月20日付）

「大宮町議一名 更に引致取調べ 日掛無尽んの関係か」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月21日付夕刊）

「富士山麓に白骨死体 推定六十位の男」〔籠坂峠〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月21日付）

「淋しいお山 警電線取り外す 石室の泊り客は漸く昨年の半分 営業者もボツ、閉店準備」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月22日付夕刊）

「須走村の雑林中に溢死男」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月22日付夕刊）

「富士山救護所の救護成績」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月23日付）

「富士山頂で八日間の断食 祖国愛強調の村松健治氏 きのふ本社へ来訪」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月24日付）→「富士山頂での断食行者」（9月1日付）に続報。

「今年の富士登山者 漸く昨年の半分 各営業者はいつれも赤字に悩む中に 独りホク、の自動車業者」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月25日付夕刊）

「函南騒擾の在監者十三名 他は悉く出所」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月25日付夕刊）

「富士身延鉄の国営移管 三市各代表けふ上京」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月25日付）

「秋の富士裾野に壮烈なる重砲演習 伊東砲兵監統監の下に」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月25日付）

「宇宙線を富士山頂で観測 三島支台長川野氏あす登山」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月25日付）

「減水の河口湖底から 古代の『石橋』現る けふ鶴の島で盛大な島祭り」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月26日付夕刊）

「富士根外二ヶ村の慰問状」〔満州事変〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月26日付夕刊）

「大宮町の区長を 突如取調べ 大宮沼久保線に絡まる事件」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月28日付夕刊）

「世界的遊覧地 富岳を廻る 富士山麓を一週する富士山麓鉄道会社 颯爽たる沿線の風光 四通八達の富士自動車 地方開発に寄与甚大 山麓一帯の名勝、名物様々 名勝、旧蹟に富む身延鉄道の沿線 日帰り旅行者で賑ふ 静岡市の生命線芝川発電所 水都の都大宮町を語る 復興後の素晴らしい躍進振り」（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月28日付）

「右太プロが『次郎長』を撮影に 大がかりで近く来静」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月29日付夕刊）

「富士登山南口の復活猛運動 来月四日佐野に集つて 関係町村の大評定」〔富士山南口登山道〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月30日付）

「湧水に苦しみ 救済方陳情 函南村軽井沢区民が きのうふ水利組合へ」〔東海道本線〕

〔丹那トンネル〕〔大出水〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年8月30日付）

●**県立プリント『静岡新報 昭和9年9月』**

「三代目次郎長宅へ 暴れ込んだ男『俺は黒駒の勝蔵だツ』と言ひながら 清水署へ突き出さる」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月1日付夕刊）

「富士山頂での断食行者 今夕静岡で講演」（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月1日付）

「函南の騒擾事件 近く予審決せん」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月1日付）

「もう富士山には丈余の氷柱が垂る きのみで全く閉山す」（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月2日付夕刊）

「富士山頂の観測所に落雷騒ぎ」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月5日付夕刊）

「富士山南口登山道復活運動 益々猛烈となる」（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月5日付）

「三島須山口復興期成会を組織 南登山口の猛運動」〔富士山南口登山道〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月6日付）

「熱海線試運転の関係者打合せ 来る十日長岡で」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月6日付）

「有望になった 富士南口復活 三島町を中心に猛烈な運動を続ける」（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月10日付日曜夕刊）

「十月一日から公式試運転 開通迫る熱海線で」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月11日付）

「大宮町の土木技手 突如、検事局へ召喚 復興事業関係か」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月12日付夕刊）

「大宮町役場から 帳簿を押収引揚ぐ 復興事業疑獄事件は拡大か」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月12日付）

「大宮復興土木疑獄 事件は俄然進展 鬼形検事出張 引続き嚴重取調中」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月13日付夕刊）

「国際観光ホテル 百二十万円案 観光局も承認す 建設箇所は松ヶ崎から富士を正面に展望 通常県会に提案可能視さる」（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月13日付夕刊）

「熱海線の開通を機会に 名勝『静岡』の紹介 先づ記念展覧会に数々の出品 観光客誘致に大馬力」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月13日付）

「函南大騒擾事件 予審決定公判へ 調書実に十万枚に及ぶ」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月16日付）→[函南町立図書館の「吉村昭氏寄贈資料 No.10」](#)のなかに『丹那隧道工事に係る来光川濁水問題でおきた騒擾事件 昭和九年七月二十二日予審終結決定書』がある。

「岳麓を繞つて 山静を継ぐ 省営バス近く実現か」〔鉄道省バス〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月19日付）▲▲

「難工事の後とも思へぬ 滑かな進行ぶり きのみ丹那隧道非公式試運転」〔東海道本線〕

〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月26日付）

「騒擾事件以来 融和せぬ人心 村当局解決に苦心」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月28日付）

「裾野今里間にバスを運転 来夏の富士登山期を大いに期待される」〔富士山南口登山道路〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月28日付）

●**県立プリント『静岡新報 昭和9年10月』**

「伊豆を東西の窓開き けふ待望の丹那トンネル公式試運転 栄光と歓喜の中にみごと」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月2日付夕刊）

「ゆうべ富士の山林中で親子三人心中 {未遂} 水戸を逃げて来た若い夫婦」〔大宮口一合目〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月2日付夕刊）〔大宮口一合目〕1面下段

「弟一家は富士で（二日付本紙夕刊）その兄は三原山へ 僅か二日の間に奇しくも別れゝゝに 死に呪はれた宿命兄弟の自殺行 悲報に次ぐ悲報 重なる自殺の知らせに実家の悲嘆 母親は語る」（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月4日付夕刊）

「富士及び山麓の狩猟今年は悲観説」（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月5日付夕刊）

「熱海線の開通にバスは大打撃」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月6日付）

「大宮町長選挙疑獄 更に新人物登場」〔大宮町長選挙疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月6日付夕刊）

「大宮疑獄更に町議、前町議召還」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月9日6付夕刊）

「大宮疑獄更に 町議、前町議召喚 収容者既に十一名に上る」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年9月9日付）

「富士山麓一帯紅葉しはじむ 夕陽に頂上の白雪反映して美観」（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月11日付夕刊）

「浮島沼で実猟競技」（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月12日付夕刊）

「富士山五合目で青年の行方不明」〔遭難〕〔御殿場口〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月12日付夕刊）

「佐野氏の召還で大宮疑獄一段落 登場人物十四名に達す」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月13日付夕刊）

「富士で行方不明の青年 目撃者が首実検 高橋巡查よりも丈が二寸ばかり高いといふ これまた依然と迷宮中にあり」〔遭難〕〔御殿場口〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月14日付夕刊）

「ハンターの血は躍る!! けふ待望の解禁 大小天狗連が 出るわゝゝ 愛鷹山方面大賑ひ」（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月15日付）

「富士裾野に於ける特別砲兵演習 けふ午前で終了」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月15日付）

「熱海本線の開通から列車時刻大改正」（新時刻表付き）〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年10月17日付）

「井口東大教授一行 丹那隧道視察」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1

934年＝昭和9年10月19日付)

「欺された復讐に見事取押ふ 富士ホテル建設を種の詐欺事件」〔御殿場口二合五勺〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月19日付)

「死ぬんですから放つて置いて下さい 滝ヶ原附近を徘徊の美人」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月21日付夕刊)

「大宮町疑獄の五氏保釈」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月21日付夕刊)

「熱海本線全通の祝賀競争始まる 熱海、函南、三島等々で 三島町では既に提灯まで出来」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月21日付)

「大宮町助役召還 復興疑獄拡大か 町長疑獄は既に一段落」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月25日付)

「熱海線全通を機に 聯合大売出し 種々な余興も計画 沼津市の準備進む」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月25日付)

「大宮疑獄事件 益々拡大か 昨日も助役召還取調べ」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月27日付夕刊)

「大宮疑獄事件遂に 町長の召還迄発展 同時に八名新に召喚され 地方に大衝動を与ふ」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月27日付)

「今暁・大宮町の大火 貴船町廿六棟、卅戸を焼失」〔大宮貴船町大火〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月28日付夕刊)

「当時の小学校長青山氏召還さる」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月28日付夕刊)

「今年はスキーヤーを太郎坊下まで輸送 迂回路の新設に着手」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月28日付夕刊)

「熱海本線全通 費用一万円を計上 大祝賀の催し 巾十一間高さ五十尺の大緑門 三島町の式典準備」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月28日付)

「演習参加の岳南部隊 あす演習地へ出発 きのふ宮庭で軍装検査」(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月28日付)

「まるで蜂の巣を突付いたやうな大宮の騒ぎ 両疑獄で召喚者相次ぐ」〔大宮町長選疑獄〕〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月28日付)

「大宮の大火罹災民 救助に各団体活動 総動員して義捐金品を募集」〔大宮貴船町大火〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月28日付)

「大宮の大火は放火 火元の隣家が犯人 保険金目当の所業」〔大宮貴船町大火〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月29日付日曜夕刊)

「大宮の放火犯人 自殺を図る 茶わんの破片で」〔大宮貴船町大火〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年10月30日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 VOL.155 昭和9年11月1日～昭和9年11月30日』

「愈よ速度も常時に あすから公式試運転開始 熱海線の成績良好」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月1日付夕刊)

「失業をさせるな！岳南部隊除隊兵のために 関係当局総動員して運動」〔満州事変〕(『静岡

岡新報』1934年＝昭和9年11月1日付)

「沿線各地と合同し 開通祝賀の盛典を 三島町が頻りに奔走」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月1日付)

「お札博士の碑富士山麓に建立 来る十一日除幕式」〔スタール博士〕〔須走〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月1日付) → 「斎藤前首相も出席して」(11月7日付夕刊)、「精進湖畔の高台に」(11月12日付)に続報。

「沼津国府津間は御殿場線と改称 けふ正式に発表」〔12月1日より〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月2日付夕刊)

「本線としての 最期の姿を撮影 沼津国府津下院三十七哩」〔鉄道省観光局映画班〕〔御殿場線〕〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月3日付夕刊)

「熱海線開通－沼津の盛大な祝賀 費用五千円を計上して準備着手」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月3日付)

「中大山岳部員 富士で遭難 雪渓から断崖に墜落 行方不明となる」(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月5日付)

「大宮町土木課長と梅月主人召還さる 復興疑獄事件ブリ返へしか」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月7日付夕刊)

「斎藤前首相も出席して お札博士の記念碑」〔スタール博士〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月7日付夕刊)

「小室大宮町土木課長 芸妓と対質尋問 昨朝再度喚問され」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月8日付)

「熱海線開通祝賀会に 芸妓、女給総動員 種々な趣向を凝らし大サービス 空前の賑ひを見ん」〔三島町〕〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月9日付)

「今度は匡救事業に絡んで けさ十三名召喚 疑獄事件続く大宮町」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月10日付夕刊)

「新大宮八景 観光客誘致に大馬力」〔浅間大社 白糸の滝 駒止桜 神田川清流 村山浅間の大杉 明星山 猪之頭養鱒場 大石寺五重塔〕〔富士養鱒場〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月10日付夕刊)

「大宮町からなほ続々召還か 匡救事業の不正発覚」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月10日付)

「熱海線開通祝賀の 行進歌決定 三島の準備進む」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月11日付)

「函南村でも盛大な祝賀会 一千余名を招待し」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月11日付)

「三島駅時間表」(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月11日付)

「大宮罹災児童の 救護義捐金問題 二ケ年目に漸く解決」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月11日付)

「熱海線開通と 沼津駅の設備 工事着々と進む」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年＝昭和9年11月12日付)

「精進湖畔の高台に お札博士の碑 きのおふ盛大な除幕式」〔スタール博士〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月12日付）→記事見出し《精進湖畔》は誤り、《須走精進橋袂》が正しい。1989年＝平成元年に、現在の東富士五湖道路の須走IC側道に移築された。

「丹那三十六氏の『殉職記念碑』記号は園公に交渉中」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔西園寺公望〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月14日付夕刊）

「猪之頭及び根原 両区の稲作被害 富士郡農会では語る」〔冷害〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月15日付夕刊）

「婦人よ喜べ 農産展の参観者に『おさつ』を進上 熱海線開通祝賀に沼津の催し」〔農産物大共進会〕〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月15日付）

「中駿、北豆を挙げて 丹那開通の祝賀 盃あげて舞へよ唄への喜び 準備に転手古舞ひ」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月15日付）

「廿日試運転終り 全線の手直し 十六日には電気機関車 運転設備の試運転」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月15日付）

「富士南麓地方観光設備の計画 千五百町歩を開墾」〔大宮町外八ヶ村観光委員〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月16日付夕刊）

「熱海線開通を祝ふ 豪華な絵巻 呼物の三島花魁道中 三日間の催し物定まる」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月16日付）

「素晴らしい仮装行列 沼津の祝賀催し」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月16日付）

「熱海線開通と 奥伊豆各温泉場 非常な意気込みで宣伝」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月17日付夕刊）

「富士山二合目附近 積雪二三寸 早くもスキー場開設の準備を開始」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月19日付日曜夕刊）

「けふで丹那隧道の 試運転癒よ打切る 晴れの開通余す処十日に迫る」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月20日付）

「折角竣工した曾我橋 寄附金で紛擾 鷹岡町と自動車組合の睨み合」（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月21日付夕刊）

「大宮に火防組織」（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月21日付夕刊）

「丹那隧道で 超速度試運転 鋼鉄製ボギー車を連結し 六七十キロを出す」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月21日付）

「鉄道今昔 1 丹那は開通する 感慨深し 思ひ出す鉄道昔ばなし」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月24日付）

「演習のお蔭 御殿場地方へ落ちたお金 ざっと五十万円」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月25日付夕刊）

「丹那線開通の夜 新旧ダイヤ移り替えに 駅での待合わせ 長きは一時間短くも十数分 静運事管内関係の分発表」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1934年＝昭和9年11月27日付夕刊）

「静岡駅発の 丹那隧道いちばん列車」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』

1934年=昭和9年11月27日付夕刊)

「大宮浅間裏の新市街地 意外に早く実現せん」〔大宮町大火〕(『静岡新報』1934年=昭和9年11月28日付夕刊)

「大宮の大角力」〔大宮町在郷軍人分会〕(『静岡新報』1934年=昭和9年11月28日付夕刊)

「丹那開通と共に地方バスの値下げ 愈よ来月一日より実施」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年11月28日付)

「丹那は通る！いよいよ今夜半 祝へや唄へと沿道各地に あすから繰り上げらる豪華絵巻 その日を待つ三島」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年11月30日付)

「美妓十名を仕立て 時代別の花嫁行列 旗、提灯行列や消防演習芸妓の手踊り其他 沼津に一大歓楽境現出せん」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年11月30日付)

「全町に目も 綾なる満艦飾 泉都熱海の装ひ」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年11月30日付)

「各局の記念スタンプ」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1934年=昭和9年11月30日付)

[\[昭和9年12月分欠落\]](#)

■1935年=昭和10年

●歴史文化『静岡新報 VOL.156 昭和10年1月1日~昭和10年2月15日』

「岩松村の堤に山窩の群 早くも何れかへ」(『静岡新報』1935年=昭和10年1月8日付夕刊)

「丹那景気に割れ返る伊豆 各地の温泉場」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月8日夕刊付)

「十日から 四日間 伊豆長岡競馬 前景気頗る旺ん」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月8日夕刊付)

「お正月の伊豆景気は まさに記録破り 丹那トンネル開通の愉快さ 奥伊豆まで流れた人の群」〔東海道本線〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月9日付夕刊)

「高根村の紛擾 またしても悪化 御殿場署で警戒中」〔東富士演習場〕〔村有地〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月9日付夕刊) → [「県庁の廊下に」\(1月10日付\)に続報。](#)

「裾野のスキー大会」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月9日付)

「鉄道が意気込む盛り 沢山なスケジュール」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月9日付)

「県庁の廊下に 大挙ガン張った高根村民 村当局の不当を鳴らし 内務部長に陳情 十戸一人の代表 村長の交際費は 嵩むばかり 出県の杉山氏は語る」〔東富士演習場〕〔村有地〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月10日付) → [「地主怒って」\(1月26日付\)に続報。](#)

「『得物は持つてゆかぬ』各被告何れも否認 指揮者に対する厳しい追及 函南騒擾事件（第一回続行公判）」〔丹那トンネル〕〔水争い〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月13日付夕刊）

「昨年中の裾野演習 宿営延人員」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月13日付）

「ますゝ素晴らしい人気 伊豆長岡競馬（第二日）」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月13日付）

「大宮のスキー倶楽部」〔鳴沢スキー場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月15日付夕刊）

「御殿場スキー場毎日非常な賑ひ」（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月18日付夕刊）

「伊豆全半島の温泉地を 観光温泉都市に 広幅員の風光道路で連絡」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月18日付）

「御殿場小山から 鉄道省へ陳情 優秀な室や列車延長を」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔御殿場線〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月18日付）

「岡田紅陽氏の名士撮影」（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月21日付）

「訊問、詳細峻烈を極む 騒擾当夜の状況 首魁と見られる青野区長に対して 函南村水騒動の公判 被告五名悉く 犯行を認む けふは午前九時開廷」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月22日付）

「『得物は持つてゆかぬ』各被告何れも否認 指揮者に対する厳しい追及 函南騒擾事件（第一回続行公判）」（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月23日付夕刊）

「伊豆函南の水騒擾事件（第二回続行公判）」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月23日付）

「狸沼利用貯水組合委員会」〔田貫湖〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月24日付夕刊）

「各府県から集つて 裾野の猪大巻狩り 氣勢を揚ぐ農民生活擁護聯盟 先づ議会への運動を前に」〔農民食糧米一ケ年間差押禁止法〕

「被告五十八名悉く 予審の一部否認 大体に於て事件其のものは是認 函南水騒動続行公判」（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月24日付）

「駿東郡北部に 愈よ火葬場 御殿場外五ヶ村に依り」（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月25日付）

「狸沼利用 貯水組合負担」〔田貫湖〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月25日付）

「函南村の騒擾事件 第四回続行公判」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月25日付）

「地主怒つて 高根村民を訴ふ 名誉毀損並に業務妨害で」（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月26日付）

「富士を繞る一ケ年の遊覧者 百万人を突破 五湖巡りだけで八十万人 山梨吉田署の調査」〔富士五湖〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年1月26日付）

「印野村の原野 焼く」〔東富士演習場〕〔弾丸拾い〕（『静岡新報』1935年＝昭和

10年1月27日付夕刊)

「人絹工場の排水が 魚族に有害と断定 水産局の試験結果を得て 意気込む静浦漁民」
〔東京人絹工場〕〔工場排水〕〔公害〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月27日付)

「壮絶極まりない 雪中の登山」〔雪中登山〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月28日付日曜夕刊)

「函南の騒擾事件 実地検分行はる 続行公判二月十二日より」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月29日付)

「第一師団の精鋭が寒地雪営演習举行 富士裾野を中心に」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月30日付)

「御殿場でスキー競技大会 来月三日大規模に」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1935年=昭和10年1月30日付)

「伝法村の紛擾 村長助役辞職す 結局職務管掌か」(『静岡新報』1935年=昭和10年2月2日付夕刊)

「大宮浅間の節分祭」〔浅間大社〕(『静岡新報』1935年=昭和10年2月2日付夕刊)

「『それ積雪!』とスキーヤー殺到 御殿場地方大賑ひ」(『静岡新報』1935年=昭和10年2月2日付夕刊)

「御殿場スキー場 毎日非常な賑ひ 三島倶楽部では発会式を举行」(『静岡新報』1935年=昭和10年2月6日付夕刊)

「鈴川の毘沙門天」(『静岡新報』1935年=昭和10年2月6日付)

「丹那開通が齎らした 熱海駅の増収ぶり」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1935年=昭和10年2月8日付)

「東京で欲しがる 富士の清水 三島在の柿田川に目を付けて 水道の計画進む」(『静岡新報』1935年=昭和10年2月9日付夕刊)

「富士の石器採取家急逝」〔天照教〕〔柴田虎氏〕(『静岡新報』1935年=昭和10年2月10日付夕刊)

「中央气象台の村瀬外二技師 交代の為富士登山」〔頂上気象観測〕(『静岡新報』1935年=昭和10年2月11日付日曜夕刊)

「函南大騒擾事件 けふ検事の論告求刑」〔第二回続行公判〕〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕(『静岡新報』1935年=昭和10年2月13日付夕刊)

「最高一年六ヶ月以下 悉く体刑を求む 函南村騒擾事件の公判 三十二名に対し執行猶予を」〔第二回続行公判〕〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕(『静岡新報』1935年=昭和10年2月13日付)

「紛擾の函南村も急転直下 けふ、めでたく手打 調停者に白紙一任の結果解決 けふ双方の代表者役場に集つて」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕(『静岡新報』1935年=昭和10年2月14日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.157 昭和10年2月16日～昭和10年3月30日』

「桜咲く頃には正式決定か “富士の国立公園” 今月末内務省から調査に来県 県観光事業積極策」(『静岡新報』1935年=昭和10年2月16日付)

「函南村 又も一変 内紛をぶり返す 今後の成行を憂慮さる」〔水争い〕〔丹那トンネル〕

〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月16日付）

「狸沼貯水組合 管理問題で紛擾 上井出白糸両村が争奪」〔田貫湖〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月17日付夕刊）

「臨時スキー列車を運転 来廿三四両日」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月17日付夕刊）

「丹那開通の一面 桃色の悩み 教育査閲は特に厳にと陳情」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔都会の悪風〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月19日付）

「三島函南両駅の自動車乗入権 紛擾に目下調停中」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月23日付）

「道路がメリ込んで “バス” ひつくり返る 客二名と運転手負傷 きのみ富士郡大淵村地先で」〔富士自動車〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月24日付夕刊）

「大淵村の材木泥棒検挙」（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月24日付夕刊）

「国産 乾板・印画紙・フィルム 富士写真フルム」〔富士山をバックに使った広告、左横組み〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月24日付夕刊）

「身延鉄道国営の 促進に大協議会 今度は大掛りに関係府県全部で」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月26日付）

「大宮吉原街道 棍棒と鱒切の殺傷陣 一名は絶命 三名負傷し大騒ぎを演出 篩行商人と魚屋行商人」〔中道往還路上で喧嘩〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年2月27日付）

「富士身延鉄道 国営移管請願書 沿道町村の調印を集めて 近く貴衆両院へ」（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月4日付）

「大宮乙種実業校 浅間神社裏の敷地候補地 近く望月氏が視察」（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月5日付夕刊）

「雪の富士山頂で 国威宣揚の祈願 稲葉真風氏登山」〔陸軍記念日〕〔大日本鎮国会〕〔国威宣揚登山〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月8日付）→「[大吹雪の富士山頂に](#)」（3月12日付）に続報。

「丹那景気に煽られ インチキ師の出没 予約金を捲上げてはダハラ遊び」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月9日付夕刊）

「函南村用水問題 円満解決を告ぐ 互譲的精神から妥協案を認め」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月10日付）

「益々増加する 大宮町の滞納額 善後策を講究中」（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月10日付）

「大吹雪の富士山頂に 国威発揚の祈願 七日登山した稲葉真風君 きのみ無事に下山」〔雪中登山〕〔大日本鎮国会〕〔陸軍記念日〕〔国威発揚登山〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月12日付）

「水郷三島町の 湧水が減る 大震災以来特に甚し 水源地附近の発展も一因」〔三島湧水〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月13日付夕刊）

「河口湖畔の大火 折柄の烈風に既に八十戸を焼失 なほ熾んに燃焼中」（『静岡新報』1935年＝昭和10年3月17日付夕刊）

「河口湖畔の大火 百二十八棟焼失 損害十万円を超えて」（『静岡新報』1935年＝

昭和 10 年 3 月 17 日付)

「天然記念物に 丹那の断層 昨日委員会指定」〔北丹那地震〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 3 月 20 日付)

「富士山頂に大鳥居建設 登山客吸収に大宣伝 御殿場口に第一回総会」(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 3 月 30 日付) ▲▲→「頂上銀明水前に」(7 月 17 日付夕刊) に続報。

「名判決下る 函南騒擾事件の村人 漸く晴れの顔色 首謀者を除き何れも執行猶予 金森裁判長の口唇から運命下る」(『静岡民友新聞』1935 年=昭和 10 年 3 月 31 日付夕刊) ←『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 3 月 31 日付夕刊) は欠号のためこの公判報道を見ることはできない。

「今様宗五郎 歓こびの被告の波に 春雨冷めたく注ぐ わし等は村の為に覚悟を 温情の判決に更生の色」(『静岡民友新聞』1935 年=昭和 10 年 3 月 31 日付) ←『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 3 月 31 日付) は欠号のためこの判決後の報道を見ることはできない。

●歴史文化『静岡新報 VOL.158 昭和 10 年 4 月 1 日～昭和 10 年 5 月 15 日』

「名残りのスキーで こゝ数日大賑ひ 御殿場地方の積雪」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 3 日付夕刊)

「伊豆の緑地計画に対し 富岳を中心に 指定を静運事で運動」〔静岡運輸事務所〕〔国立観光協会〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 9 日付)

「自動車道路を富士山二合目まで 大宮口の誘客大宣伝」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕〔大宮口自動車道路〕〔富士宮口砂走り〕昭和 10 年 4 月 10 日付夕刊) ▲▲

「富士の景観を損ねる県購聯の倉庫 撤退せよーせぬーで抗争」〔三島駅展望〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 12 日付)

「名刹・大石寺の 盛大な改築落成式 来る十四日から三日間」(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 13 日付夕刊)

「富士出身の佐野君 敵弾のため重傷 満洲国緝私隊江橋分隊勤務」〔満州事変〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 13 日付)

「森永、明治両製菓で 岳麓に牧場」〔須走〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 14 日付夕刊)

「速に富士身延鉄道を 国営たらしめよ 山梨、長野、静岡の三県聯合し 全国県会議長会議に建議」(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 16 日付)

「鈴川の地曳網 弗々開始さる」(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 19 日付夕刊)

「大宮農学校の三年生 突如校外に脱出 きのふ、午後の授業不能に陥る 同級生の退学に同情し 夕刻に至るも 所在判らず 学校当局大いに憂慮」(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 20 日付)

「大宮署の望楼から 脱出学生漸く発見 けふは登校授業を受く」(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 21 日付)

「その広大と珍しき色 東海一を誇る 富士須走つゝじ園」〔レンゲツツジ〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 22 日付日曜夕刊「“つゝじ”を訪ねて」)

「青森県の三青年 雪中富士登山 全国を自転車走破の途中」〔雪中登山〕(『静岡新報』1935 年=昭和 10 年 4 月 22 日付日曜夕刊)

報』1935年=昭和10年4月23日付)

「開山期に間に合ふやう道路開鑿に着手 三島須山口登山道復活」〔富士山南口登山道〕
(『静岡新報』1935年=昭和10年4月24日付夕刊) ▲▲

「丹那隧道の殉職者に 青年が捧ぐ純情 高校受験の為通過して感激 手紙に添へた金五
円」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕(『静岡新報』1935年=昭和10年4月24日付)

「富士裾野で空地聯合演習 下志津飛行学校と重砲兵学校生徒が」〔東富士演習場〕〔軍
事演習〕(『静岡新報』1935年=昭和10年4月24日付)

「大宮で曾我祭り開催」(『静岡新報』1935年=昭和10年4月25日付夕刊)

「裾野演習場で人命救助美談二つ 名も告げず去つた両兵士」〔東富士演習場〕(『静岡
新報』1935年=昭和10年4月25日付夕刊)

「日本でも珍しい 芝川の河海苔 県指導の下に保護」〔芝川ノリ〕(『静岡新報』19
35年=昭和10年4月25日付夕刊)

「岳麓を繞つて…観光と事業紹介 富士郡下展望(1) 霊峰の下、普く巡る富士自動車株
式会社と営利を離れた其の奉仕 富士を繞る岳麓の自然美 石川自動車の活躍 富士身延
鉄道遊覧案内」〔広告付きの提灯記事〕(『静岡新報』1935年=昭和10年4月27日
付)

「佚名『森の石松』の墓石を建立 見付の大洞院境内に」〔清水次郎長〕(『静岡新報』
1935年=昭和10年4月28日付夕刊)

「大宮に登山営業聯合会」〔富士山表大宮口登山営業聯合会〕(『静岡新報』1935年
=昭和10年4月28日付夕刊)

「晩春の富士へ 雪中登山者多し」(『静岡新報』1935年=昭和10年4月29日付日
曜夕刊)

「数千町歩の箱根竹が開花 枯死の前提と大恐慌」〔竹の花〕(『静岡新報』1935年
=昭和10年5月1日付)

「開山期の七月七日ごろ曾我祭を盛大執行 大宮口の大宣伝」(『静岡新報』1935年
=昭和10年5月3日付夕刊)

「大宮の流鏝馬」〔浅間大社〕(『静岡新報』1935年=昭和10年5月3日付夕刊)

「山麓バス値下」〔富士山麓電気鉄道〕〔富士急〕(『静岡新報』1935年=昭和10
年5月3日付夕刊)

「求刑された大宮町議 日原氏は辞職」〔大宮町長選疑獄〕(『静岡新報』1935年=
昭和10年5月5日付夕刊)

「銘酒白雪 小西酒造」〔富士山をバックの広告〕(『静岡新報』1935年=昭和10
年5月5日付夕刊)

「射撃場に忍込んで砲弾の破片探し 危険な古金拾ひ出沒」〔弾丸拾い〕〔東富士演習場〕
(『静岡新報』1935年=昭和10年5月5日付)

「大石寺管長後任問題」(『静岡新報』1935年=昭和10年5月8日付夕刊)

「荒神山の出入に使つた 次郎長一家の差料 漸く発見され入谷さん東京へ」〔清水次郎
長〕(『静岡新報』1935年=昭和10年5月8日付夕刊)

「『富士登山三島口』設計方を県へ依頼 いよいよ開鑿に方針決定して」〔富士山南口登
山道〕(『静岡新報』1935年=昭和10年5月8日付)

「大宮町長と助役 辞意を漏す 刷新派は遺留に努む」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月12日付夕刊）

「芝川工場に対して 抗議書を突き付く 独断浚渫から灌漑水激減に」〔王子製紙〕〔渇水〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月14日付夕刊）

「英人二名富士登山」〔外国人登山〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月13日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.159 昭和10年5月16日～昭和10年6月30日』

「誰が町長になっても 現状ではやり切れぬ 辞表を提出した久保田大宮町長は語る 助役も追って辞職」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月16日付夕刊）

「義侠『森の石松』の生立ちが漸く判る 天宮神社の祭りから宇吉さんが世話して 大洞院境内に建てられる供養塔」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月17日付夕刊）

「大宮町長選挙の疑獄事件の判決」〔大宮町長選疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月19日付夕刊）

「富士山で自殺か 遺書に依り捜索開始」（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月20日付日曜夕刊）

「交替で三枝手の登山」〔山頂気象観測〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月20日付）

「後任管長に 水谷氏就任せん 評議会では邁進に決す」（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月21日付夕刊）

「竹内金庫」〔富士山をバックの広告〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月22日付夕刊）

「富士山頂に軍艦旗を掲揚 東京海洋少年団登山」〔海軍記念日〕〔雪中登山〕〔国威宣揚登山〕新報』1935年＝昭和10年5月22日付夕刊）

「大宮町長後任 寺田氏に交渉」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月24日付夕刊）

「岳麓でカメラハイク 京浜から三千」（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月25日付夕刊）

「海軍旗並にゼツト旗を富士山頂に掲揚 海洋少年団員の手に依って ラツパ吹奏裡にいと厳粛に」〔海軍記念日〕〔雪中登山〕〔国威宣揚登山〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月26日付）

「非常時突破 雪の富士山頂へ 軍艦旗を掲揚 海洋少年団代表者の一行 今暁大宮口から登山」〔海軍記念日〕〔雪中登山〕〔国威宣揚登山〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月27日付日曜夕刊）

「富士山頂に燦たり旭日旗 海洋少年代表下山す」〔海軍記念日〕〔雪中登山〕〔国威宣揚登山〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月28日付）

「三原山で失敗し富士山へ志す 死場所を探す青年」（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月29日付夕刊）

「富士自転車 日米商店」〔富士山マークの広告〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月29日付夕刊）

「富士を見るハイキング 富士身延鉄道で団体募集」（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月29日付）

「狸沼貯水工事 来月いよゝゝ着手」（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月30日付夕刊）

「富士山麓の大盗伐」〔山梨県有林〕〔中野村〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月30日付）

「難産の大宮町長 結局輸入か、元署長 二三氏話題に上る」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年5月31日付夕刊）

「大宮駅々頭は大鳥居建設 高さ卅一尺、幅卅五尺」〔駅前大鳥居〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月2日付夕刊）→「大宮町の大鳥居」（9月8日付）に続報。「駅前大鳥居でチエ集め」（『岳南朝日』1966年＝昭和41年4月29日付）に後日談、建設中の写真が『写真集 懐かしの富士宮』（遠藤秀男編著、羽衣出版、平成21年）に掲載されている。

「岳麓の『つゝじ』三鉢を 皇太后陛下に献上 昨日村長青年団長が携へ伺候」〔須走村〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月4日付）

「廿数万株の『つゝじ』今や正に花盛り 連日見物人で素晴らしい賑ひ 須走の『つゝじ園』東海の名所となる」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月4日付）

「朝な夕なの“富士”の 麗姿を満喫しやう 何なら白雪を踏んで心ゆくまで…と 憧れて居残る庭園クラブの若い姉妹」〔米国庭園クラブ〕〔眺望〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月5日付夕刊）

「鉄道旅客課員の富士登山 須山口を下る」〔東京鉄道局〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月6日付夕刊）

「富岡村の水騒動 撤去方 指令さる」〔湧水争い〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月6日付）

「富士山の諸物価＝前年と大体同様」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月7日付夕刊）

「森の石松の碑 小笠原中将揮毫」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月7日付夕刊）

「次郎長の家と所持品を 清水保勝会で保存」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月8日付）

「富士山麓地方に 山葵の栽培 中京関西方面へ移出の計画 経済更生策として」〔富士郡北部〕〔富士山葵〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月8日付夕刊）

「死場所を御殿場に求めて 宿屋から突き出さる」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月9日付）

「大宮浅間神社 当局排撃の烽火 職員間の暗闘から」〔浅間大社内紛〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月11日付夕刊）

「三島駅前の運送店 大競争を開始」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月12日付）

「大宮後任町長 諏訪部三沢両氏に交渉」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月12日付）

「義侠『森の石松』墓碑建立されて」〔大洞院〕〔清水次郎長〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月14日付夕刊）

「清水の壮士の墓 盛大なる供養式 任侠次郎長の徳を讃えて」〔咸臨丸事件〕〔清水次郎長〕〔山岡鉄舟〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月14日付）

「地域四ヶ国に跨がる 富士山国立公園 愈々今秋指定されん 遊覧区域は焼津附近まで」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月15日付夕刊）

「登山客誘致の大評定 富士大宮口で」〔登山組合联合会〕〔「富士登山大宮表口」ポスター〕〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月16日付）

「夏の富士山登山のトツプ きのみ御殿場口から 名高商桜木講師が」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月17日付日曜夕刊）

「富士岡の水争ひ 双方譲らず 事態を憂慮さる」〔湧水争い〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月17日付日曜夕刊）

「植付不能の水田 三百卅町歩 天を恨む岳麓地方」〔駿東郡北部〕〔空梅雨〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月17日付）

「富士登山期近付く 営業者の服装を統一しサービス講習会開催 大宮口の物価決定す」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月18日付夕刊）

「丹那の開通で 人出は倍加 夏の準備に多忙を極む沼津市当局」〔東海道本線〕〔丹那トンネル〕〔千本松原〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月18日付夕刊）

「ハイキング新コース 天子ヶ岳に着目 名鉄局で大いに宣伝」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月18日付夕刊）

「開山期を目睫に 御殿場口が大童の準備 登山実況放送の計画着々と進む」〔「富士登山ハ御殿場口ヨリ」ポスター〕〔ラジオ放送〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月19日付夕刊）

「静高山岳部 今夏のプラン 例年の如く七月初旬から南北アルプスへ」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月19日付）

「富士名勝の写真帖 本県から献上」〔皇太后〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月20日付）

「箱根山腹に 大牧場の計画 馬を主とし牛も放牧」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月21日付）

「大宮大社の登山期準備」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月22日付夕刊）

「富士山頂に 風力観測室増築 現在の観測所は剣ヶ峰に移転」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月23日付夕刊）

「御殿場音頭」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月23日付夕刊）

「非常時の再認識に 曾我兄弟慰霊祭 大宮町が主体となり盛大に」（『静岡新報』1935年＝昭和10年6月29日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.160 昭和10年7月1日～昭和10年8月15日』

「南アルプスー若人の血を躍らせる 大井川流域登山」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月1日付日曜夕刊「山は招く」）

「山は招く『六根清浄、お山は晴天』富士のお山開き 各登山口の準備成る」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月1日付日曜夕刊「山は招く」）

報』1935年＝昭和10年7月1日付日曜夕刊「山は招く」)

「男性的な愛鷹山 変化に富む理想的な登山地 最近斯界の寵児に」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月1日付日曜夕刊「山は招く」)

「大井川奥地 井川村に持つ 大自然の秘境 南アルプスの核心」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月1日付日曜夕刊「山は招く」)

「恩讐を超越し 曾我兄弟と 工藤祐経の慰霊塔 地元上井出で建設」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月1日付)

「曾我兄弟慰霊祭 準備に着手 子爵は六日に来宮」〔曾我子爵〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月2日付夕刊)

「御殿場口の開山式 一日執行さる」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月3日付)

「登山期を迎へ富士の準備 八日警電架設に登山 頂上奥の宮は十一日に開扉」〔電話〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月3日付)

「小富士をめぐる境界争ひ 愈よ両県で協調」〔小富士県境争い〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月4日付夕刊) ▲▲

「精鋭二千余名 裾野で演習 四日から六日まで」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月5日付夕刊)

「鎮国会の稲葉氏登山」〔稲葉真風〕〔大日本鎮国会〕〔国威宣揚登山〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月5日付夕刊)

「水利組合解散に 上部々落反対 函南村再び紛擾か」〔水争い〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月5日付)

「夏・山の魅力 どの山にもある それ々の特長 忘れ得ぬ山々の姿 田部重治」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月5日付)

「あすから三日間豪華な曾我祭 岳麓大宮を中心に」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月5日付)

「夏・山の魅力(二) 南山アルプスー何れも特色豊か 白峰三山コースをふんで(1) 静岡 森川生」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月6日付)

「岳麓の地に けふから三日間 豪華なる曾我祭り まづ大宮で兄弟の慰霊祭を執行 非常な賑碑を呈さん」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月6日付)

「天気予報もこれからは くだけた口語体で 五十年來の殻を破つて 十五日から全国実施」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月7日付夕刊)

「富士登山期 大宮口の準備成る」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月7日付夕刊)

「沸き返へる岳麓一帯 盛んな曾我祭」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月7日付)

「夏・山の魅力(三) 北沢仙丈岳から 懐しの農鳥小屋 此附近では水の用意が必要 静岡 KM生」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月7日付)

「夏・山の魅力(四) 真に雄大を知る 高峰北岳の頂き 感ずる鳳凰の登路の手入れ 静岡 KM生」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月8日付)

「富士の開山祭」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月9日付夕刊)

「仮装の曾我兄弟を先頭に繰り出して 夜更くるまで踊り抜く 紅白幔幕を張り廻した大宮の街路は大賑ひ 夜更くるまで踊り抜く」(『静岡新報』1935年＝昭和10年7月9日付夕刊)

「掛中五湖めぐり」〔掛川中学〕〔富士登山〕〔富士五湖〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月9日付夕刊）

「富士は招く 十一日厳かな開山式」〔浅間大社〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月10日付夕刊）

「夏・山の魅力（五）南アルプスの 雨の日の思ひ出 一刻を競つて沢を下つた時 黒田初子女史談」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月10日付）

「夏・山の魅力（六）女神の姿もかくや 神秘的な山の色 大自然の技巧の偉大さ!! 冠松次郎氏談」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月11日付）

「大宮浅間社の湧水も濁る」〔浅間大社〕〔安倍川地震〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月12日付）

「大宮署で 中西町議又召喚 新しい疑獄発生か」〔大宮町■疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月13日付）

「小富士に登山して両県が現地で折衝 今度こそは解決の意気込み」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月13日付）▲▲

「富士頂上電話」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月13日）

「頂上銀明水前に 大鳥居を建立」〔御殿場口〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月17日付夕刊）

「富士登山は最も安全で楽な大宮表口から 其コース附近の名所旧蹟」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月17日付）

「日本電通社の富士登山競争 本年も来る廿一日決行」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月18日付）

「霊峰富士への新コース 駿河駅から須走口へ 日帰り登山に好適」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月19日付夕刊）▲▲

「富士山中で発見した金華苔と熔鉱岩 何れも我国では最初の発見 服部、小川両理学博士の鑑定を求む」〔服部慶太郎〕〔小川啄治〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月20日付）

「電通の富士登山競争参加三百五十名 定めし盛観を呈さん」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月20日付）

「電通社長寄贈の大鳥居」〔久須志神社〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月21日付夕刊）

「昨晩決行された電通の登山競争 頂上で盛大なる鳥居献納式」〔久須志神社〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月22日付）

「富士山だより（二十一日）」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月23日付夕刊）

「暑中御伺 富士登山御殿場自動車組合 御殿場宿屋 同業組合」〔共同広告〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月21日付夕刊）

「富士山だより（二十三日）」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月25日付夕刊）

「富士山だより（二十四日）」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月26日付夕刊）

「富士山だより（二十四日）」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月27日付夕刊）

「富士山だより（二十六日）」（『静岡新報』1935年＝昭和10年7月28日付夕刊）

「静岡の少年団 勇しく富士登山 昨日は 八合目に一泊」（『静岡新報』1935年＝昭和

和 10 年 7 月 28 日付)

「観光局の撮影 富士を背景に」〔国際観光局〕(『静岡新報』1935年=昭和10年7月28日付)

「須山村別荘園も路線に含まれて 復活三島須山新登山口の強味」〔富士山南口登山道〕(『静岡新報』1935年=昭和10年7月29日付)

「富士山だより(二十八日)」(『静岡新報』1935年=昭和10年7月30日付夕刊)

「登山客に御殿場の賑ひ」(『静岡新報』1935年=昭和10年7月31日付夕刊)

「富士山だより(二十九日)」(『静岡新報』1935年=昭和10年7月31日付夕刊)

「富士山だより(三十日)」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月1日付夕刊)

「富士山で集金した雇人がフラ、ハツ 伊豆各地を豪遊し廻つて使ひ果した末に 無理心中の一步手前で捕る」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月3日付夕刊)

「小富士をめぐる両県の県境争ひ 本県側実測に着手す」〔小富士県境争い〕(『静岡新報』1935年=昭和10年8月3日付夕刊) ▲▲

「北駿青年校耐熱演習」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1935年=昭和10年8月6日付夕刊)

「富士山だより(四日)」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月6日付夕刊)

「世界学界共通の謎 富士の頂上で宇宙線の打診 我国では最初の研究に 近く理研所員登山」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月7日付) →「浮世離れて半ヶ月」(9月1日付夕刊) に続報。

「富士山国立公園いよゝゝ今秋正式決定 判任官の管理人も置く」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月7日付)

「裾野を横断の新ハイクコース 御殿場山岳同好会の発見」〔富士山南口登山道〕〔須山口登山歩道〕(『静岡新報』1935年=昭和10年8月7日付)

「駿河大震始末記 静岡県建築技手 大村巳代治」(『静岡新報』1935年=昭和10年月日付)

「富士山だより(九日)」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月11日付夕刊)

「何とマア驚いた陽気 富士山に大降雪 頂上では積雪二尺、七合目以上はお化粧 数十年来の大異変」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月17日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.161 昭和10年8月16日~昭和10年9月30日』

「大宮町長後任を 深沢氏へ交渉 果して受けるか疑問」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1935年=昭和10年8月18日付)

「浅間山の爆発で 岳麓地方に降灰 上層気流に乗つて南へゝゝ 農作物に相当被害」(『静岡新報』1935年=昭和10年8月21日付)

「大宮町長 遂に久保田氏の復職説 町会で満場推薦すべく議を進む」〔大宮町復興疑獄〕(『静岡新報』1935年=昭和10年8月27日付夕刊)

「役場に籠城し 回答を待つ 函南村の水騒動」〔渇水〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕(『静岡新報』1935年=昭和10年8月29日付)

「浮島沼 再び浸水 数日続けば 数十町歩水稻全滅」〔豪雨〕(『静岡新報』1935年=昭和10年8月29日付)

「浮世離れて半ヶ月 謎の宇宙線正体 大きな機械を運びあげて富士山頂で観測 理研の

両学士成功して下山」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月1日付夕刊）

「身延鉄道復旧」〔富士身延鉄道〕〔豪雨〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月1日付夕刊）

「天然記念物指定の岳麓大日穴 世に出す計画」〔万野風穴〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月2日付）

「長岡競馬場の三島移転実現か 後援者を訪ねて 関係者北海道へ」〔三島競馬場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月4日付）

「さう易々と 承諾は出来ない 大宮町長就任の交渉に 久保田氏は語る」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月5日付）

「新競馬場の第一候補地に三島 昨日の県畜産聯合評議員会」〔三島競馬場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月5日付）

「大宮町長に遂に 久保田氏再起 反対派は城山荘に立籠つて なかゝ町会に出席せず」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月8日付夕刊）

「大宮町の大鳥居 近くお目見得」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月8日付夕刊）

「大宮町湧玉の池を中心に公園化 観光客向きに計画」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月8日付）

「反対派欠席のまゝ 黒田校地拡張可決 終て久保田氏就任挨拶—大宮町会 町長再任と各派の態度」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月8日付）

「富士山の横腹に大穴あけ 山頂まで隧道 座つた儘で運ばれる計画 行程六キロ半を僅か四十分 どうも感心せぬ 内務省衛生局では語る」〔トンネルケーブルカー〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月12日付夕刊）→「[富士山頂へのケーブルカー](#)」（1936年＝昭和11年4月22日付）に続報。

「“小富士を繞る県境争ひ” 有力な古図発見 御殿場町の旧家佐藤氏から 非常な意気込で近く県へ提出」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月17日付）



「沼川河口に 荷上場築造計画 近く組合総会へ附議」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月20日付夕刊）

「久保田町長の回答を待つ 反対町議派 町民に対しても重大声明書」〔大宮町復興疑獄〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月20日付夕刊）

「大淵村に疑獄か 数名引致取調べ中」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月20日付夕刊）

「大淵村疑獄進展か 収入役引致さる」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月20日付）

「颱風の余波、物凄い豪雨 吉原町の浸水家屋四百 潤井川堤防決潰 身延線不通 徒歩連絡行はる」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月26日付夕刊）

「山梨県下の被害甚大 山中湖増水七尺」〔富士五湖〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月26日付夕刊）

「駒門陸軍廠舎 癒々近く着工 来春三月には竣成の予定」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月27日付夕刊）

「国勢調査近付く 県下富士山頂から橋の下まで 五十六名の女性も委員となつて」（『静岡新報』1935年＝昭和10年9月27日付夕刊）

岡新報』1935年＝昭和10年9月29日付)

「裾野演習場に新築の駒門廠舎 来る六日盛大な鍬入式」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年9月29日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.162 昭和10年10月1日～昭和10年11月15日』

「富士山頂の国調申告者九名 気象台員と工事中の大工さん 氷柱に噴火口的美観」〔国勢調査〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月1日付)

「河口湖の増水で 開発老人廿年の苦心 水泡に帰す 建築物も植物も水中に没す」〔富士五湖〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月2日付)

「馬の改良上 登録制度を設く 第二次計画に於て 種類固定促進」〔軍馬〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月6日付)

「内地及び外地の 馬政の聯絡協調 内地馬政計画を根幹として」〔軍馬〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月12日付)

「四十年迄に 種牡馬六千頭 保護施設を為し 半数を民間に」〔軍馬〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月22日付)

「駒門廠舎の地鎮祭を執行」〔東富士演習場〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月22日付)

「名勝天然記念物に白糸滝指定 史蹟として、明治天皇聖蹟 二ヶ所も指定さる」〔白糸の滝〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月23日付)

「明年開山期迄に亜細亜会館建設 須山口水ヶ塚の勝地に 松本君平氏実地踏査を終る」〔青年教団〕〔富士山南口登山道〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月24日付)

「来月五日より開催の 本県役馬共進会 鞍馬競走コース決定」(『静岡新報』1935年＝昭和10年10月28日付)

「山駕籠に乗つて田村博士の視察 富士の眺めは足柄山が最も優れてみると激賞」〔国立公園〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年11月5日付)

「長岡競馬場の三島町移転 癒々有望となる」〔三島競馬場〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年11月8日付)

「岳麓楽山荘に 法輪塔建立 仏誕二千五百年を記念」(『静岡新報』1935年＝昭和10年11月9日付)

「アメリカへの石の答礼使 富士の新雪わけて大いに念を入れて銚衡すべく 一週間の予定であす五人が登山」(『静岡新報』1935年＝昭和10年11月11日付) 2面上段

「烈風に足をこらせて崖下に墜落重傷 雪中富士登山を試みた東京市体育課山岳部員三名」(『静岡新報』1935年＝昭和10年11月12日付夕刊) 1面下段

「米国へ答礼の富士山の石 千家内務局が採取に登山 きのみ御殿場口から」(『静岡新報』1935年＝昭和10年11月13日付) 2面中段

「日米親善の『石の使節』五候補を見出してきのみ富士山頂から一行帰京 御殿場の浅間神社で盛大なる歓迎式」〔タコマ富士〕(『静岡新報』1935年＝昭和10年11月15日付)

●県立プリント『静岡新報 昭和10年11月』

「十周年を迎へて輝く本県耕地協会 本日記念式典挙行 誇るべき大きな足跡 本県耕地事業概況 法令発布の因を作つた耕地整理の功績 難工事の沼川排水事業 一町七ヶ村に

跨る狸沼用水の沿革 浮島沼排水事業」〔田貫湖〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年11月18日付）

「大雪と激寒のため 大工さん達下山す 富士山頂に移転新築中の観測所一時中止 残るは技手さん達四人」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年11月21日付）

「岳麓一帯の鈴竹、箱根竹殆んど全部枯死 北駿地方の竹行李製造業者 材料皆無に悲鳴を揚ぐ」〔竹の花〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年11月22日付）

「三島競馬場俄に具体化する」（『静岡新報』1935年＝昭和10年11月22日付）

「朗かな寒天製造景気 地味気候に恵まれて世界各国から注文が続々」〔須走〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年11月22日付夕刊）

「四郎兵衛堰を繞つて 玉穂、御殿場紛争 表面化して激化の様相」〔水争い〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年11月24日付） →「四郎兵衛堰をめぐる紛争」（1936年＝昭和11年4月16日付）に続報。

「軍馬払下げ 三島旅団で卅七頭」（『静岡新報』1935年＝昭和10年11月24日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和10年12月』

「熱海線の開通以来 乗降客激増 素晴らしい景気の沼津駅」（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月3日付夕刊）

「秣場管理は結局 両村役場分担か 紛擾近く解決せん」〔富士郡北部6カ村〕〔入会地〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月5日付夕刊）

「愛鷹山縦走コース 愈々近く公認 東鉄の招電に依り上京」〔沼津商工会議所観光部〕〔須山村保勝会〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月9日付）

「明春早々正式決定の富士国立公園 区域は静山神三県に跨る きのふ委員会で決定 当初の計画より拡張変更さる」（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月12日付）

「驚くべき寄生虫村 印野村民の九十五%が保卵者」〔回虫〕〔十二指腸虫〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月15日付夕刊）

「足柄山頂への 観光道路成る 神奈川県側の竣工を待つて 来春盛大な開通式」〔小山町〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月15日付）

「駒門廠舎の用水路 愈よ近く着工」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月17日付） →「一時に五ヶ聯隊収容の」（1936年＝昭和11年3月14日付）に続報。

「中央気象台の四技手登山 富士山頂へ交替の為」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月18日付）

「スキーヤー大歓迎 御殿場の準備」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月20日付）

「裾野演習場地方へ ザツと五十万円 今年落ちたお金」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月21日付）

「地主が否認して 調停裁判不成立 根のよい小作人と地主 七回目の調停裁判」〔富士郡鷹岡町〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月27日付）

「“日本平から見た富士の雄大な姿” 石井柏亭画伯に依つて」〔展望〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月27日付）

「白雪を踏んで元旦の 富士山頂に起つ 海洋少年団の壮挙」〔元旦登山〕〔雪中登山〕

〔稲葉真風〕〔国威宣揚登山〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月29日付）
「スキーヤーで賑ふ太郎坊」〔写真〕〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月30日付）
「富士山は大雪」（『静岡新報』1935年＝昭和10年12月30日付）

■1936年＝昭和11年

●県立プリント『静岡新報 昭和11年1月』

「東西から押掛け 太郎坊は大賑ひ 絶好のコンディション」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月6日付）

「銀盤上を縦横に 星予学務部長一行も見えて 素晴らしい太郎坊の賑ひ」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月7日付）

「東海春競馬のトツプ 来る廿五日から 焼津競馬始まる 前景気を煽り殺到の出走馬申込み 先づ騎手の評判記」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月8日付）

「富士山麓に新スキー場 連日非常な賑ひ」〔籠坂峠スキー場〕〔富士ゴルフ場〕〔富士山麓会社〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月8日付）▲▲

「国立漸く指定が完れば お次は府県立公園 内務省が全国に百ヶ所を選定 本県では“千本浜”が有力候補」〔国立公園〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月10日付夕刊）

「上井出村根原の山中で 炭焼老婆が変死 他殺の疑ひ濃厚となり 県刑事課、大宮署活動を開始 殺人と決定 犯人は附近の者か」〔根原老婆変死事件〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月10日付）

「林間道路工事費 三千円行方不明？ 関係者数名召喚さる 小山町に又疑獄事件発生か」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月10日付）

「根原の老婆死因 他殺か病死か依然として不明 けふ屍体を解剖に付す」〔根原老婆変死事件〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月11日付夕刊）

「上井出の怪死老婆 大宮署緊張」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月11日付）

「四圍の情况から見て 病死と断定か 外部から侵入した形跡なし 根原の老婆怪死事件慎重を期して 関係者取調べを続く」〔根原老婆変死事件〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月12日付）

「男子従業員は 全部挙手の礼 各工場前には大国旗掲げ朝夕敬礼 富紡小山工場で実施」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月12日付夕刊）

「雪中の富士で滑り落ちて重傷 東海紙料の宇部宮氏 観測所員と掛中教諭が救助」〔遭難〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月12日付）

「根原山中老婆の死因は 脳溢血と決定 村民の屍体異動が疑ひのもと」〔根原老婆変死事件〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月14日付）

「昨日の委員総会で富士国立公園決定 愈よ二月一日正式指定」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月15日付）

「太郎坊で華々しくスキー講習会 来る十九日開催」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月15日付夕刊）

「国立公園地帯から漏れた伊豆温泉地 箱根や富士に負けぬやう観光施設 阿部知事は語

る」〔国立公園〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月16日付）

「名称問題は結局『富士箱根』に 委員総会で議論沸騰」〔国立公園〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月16日付）

「大宮町上水道」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月22日付夕刊）

「上井出の山火事 約二百町歩焼く」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月22日付夕刊）

「素晴らしいコンディションに 東西から大勢殺到 来月二日からは連続的にいろゝの催し 御殿場スキー場活況を呈す」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月28日付）

「巨匠の手で世界へ映す 我が富士の姿 其他各地の火山、温泉等を撮影 フランク博士が近く来朝」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月29日付夕刊）

「鈴川の毘沙門祭典に 臨時列車運転 準急も停車せしむ」（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月29日付）

「御殿場小学校の児童が 竹スキー行進」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月29日付）

「寒天の製造工程を 映画に収む きのふから撮影開始」〔須走〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年1月31日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和11年2月』

「名称は『富士箱根』けふ愈よ国立公園指定」（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月1日付）

「社屋移転に付謹告 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年月日付）

「富士地方に暴風襲ひ 黒雪化す」（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月7日付夕刊）

「横山留守隊の雪中行軍 来る廿五日から岳麓へ」〔軍事演習〕〔富士山麓を時計回り〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月8日付夕刊）→「大雪の岳麓へ」（2月25日付夕刊）、「降りしきる雪を衝いて」（2月27日付）に続報。

「御来光と同時に富士山頂で建国祭 単身白雪を冒して稲葉氏登攀」〔雪中登山〕〔稲葉真風〕〔国威宣揚登山〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月11日付夕刊）

「大雪の岳麓へ壮烈なる行軍 横山部隊留守隊」〔軍事演習〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月25日付夕刊）

「待ち兼ねてゐるスキー大会 御殿場地方絶好のコンディション」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月26日付夕刊）

「長岡競馬を廃して 三島に新設されん 明年度は競馬五回挙行」〔三島競馬場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月27日付）

「降りしきる雪を衝いて 勇しく行軍 昨夜は一同大元気で吉田に宿泊 けふ帰還する横山部隊留守隊」〔軍事訓練〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年2月27日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和11年3月』

「万国村の村長さん 三十年ぶりで帰国 御殿場地方民から慈父の如く慕はれてみた ボ博士の盛大なる送別会催さる」〔アメリカ村〕〔ボールデン〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年3月4日付）

「御殿場のスキー競技大会 岳南山岳会が優勝」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年3月4日付夕刊）

「雪のために 野鼠が大暴れ 御殿場地方の農作物被害甚大」〔野ねずみ〕（『静岡新報』1936年=昭和11年3月7日付夕刊）

「一時に五ヶ聯隊収容の 駒門の一大廠舎 癒々本月末までに完成」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1936年=昭和11年3月14日付）→「裾野陸軍演習場に 新築の駒門新廠舎」（4月16日付夕刊）に続報。

「富士山麓の名勝 勝手な施設厳禁 山梨県の申請を却下」〔国立公園〕（『静岡新報』1936年=昭和11年3月15日付夕刊）

「富士箱根国立公園の積極的施設（概要）縦横に出来る自動車道」（『静岡新報』1936年=昭和11年3月16日付）

「急激の暖かさに富士に凄い大雪崩 太郎坊上の大石茶屋は約六町も押流され粉碎 附近山麓の姿は一変す」〔太郎坊スラッシュ雪崩〕（『静岡新報』1936年=昭和11年3月17日付夕刊）

「富士箱根国立公園 観光道路網決定 延長十万八千九百米、工費二百十一万円 本県の計画内容」（『静岡新報』1936年=昭和11年3月19日付）

「村有林に帰属して 更生案を樹立 吉永、須津両村の入会問題解決」〔入会地〕（『静岡新報』1936年=昭和11年3月28日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和11年4月』

「扶桑教の女教士 浜松署へ泣き付く 内縁の夫を追ひ出して下さいと」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月3日付）

「大宮の怪火事件 遂に自供す 保険金詐取のため」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月8日付夕刊）

「青年会造営林の 檜を盗伐売却 大宮署に訴へ出づ」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月10日付）→「大宮青年会営林委員 自責の仰毒」（5月3日付）に続報。

「小富士をめぐる県境問題の折衝 本県からの督促で近く会合 一挙解決の意気込み」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1936年=昭和11年4月12日付夕刊）▲▲

「大宮浅間大社の桜は満開 例年より一週間遅る」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月16日付）

「国立公園指定の大祝賀会を大宮で 来る十五日举行」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月14日付夕刊）

「大宮のギャング団 十余名を突如検挙 関根団と称し荒し廻る」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月15日付夕刊）

「国立公園指定祝賀の催し きのふ御殿場と大宮で」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月16日付）

「四郎兵衛堰をめぐる紛争 両者主張し共に譲らず 本県から出張 引続き斡旋中」〔水争い〕（『静岡新報』1936年=昭和11年4月16日付）→「四郎兵衛堰を繞る 三年越の紛争解決」（5月13日付夕刊）に続報。

「裾野陸軍演習場に 新築の駒門新廠舎 来る二十四日盛大なる竣工式」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月16日付夕刊）

「駒門廠舎の竣工式 二十四日盛大に」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月21日付）

「富士山頂へのケーブルカー 愈々認可の申請出づ」〔富士登山鉄道〕〔トンネルケーブルカー〕（『静岡新報』1936年=昭和11年4月22日付）→「富士山にケーブルカー」（11月20日付）に続報。

「鉄道はホクヽヽ 静運事管内各駅昨年度の成績」（『静岡新報』1936年=昭和11年4月22日付夕刊）

「大宮の大火五周年 全町民が黙祷」〔大宮町大火〕（『静岡新報』1936年=昭和11年4月23日付夕刊）

「大宮青年会営林委員 自責の仰毒 会へ無断で檜数百本を売却 発覚、解決はしたが？」（『静岡新報』1936年=昭和11年5月3日付）

●県立プリント『静岡新報 昭和11年5月』

「須走のつゝじ園月末が見頃 早くも誘客の施設」〔レンゲツツジ〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月4日付日曜夕刊）

「大宮浅間神社の 流鏝馬祭 非常な雑踏を呈す」〔浅間大社〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月7日付夕刊）

「史蹟、名勝、天然記念物 本県からも指定『保存顕彰規程』を設定 きのみ、県公報を以て告示」（『静岡新報』1936年=昭和11年5月9日付）

「三島須山口富士登山道計画 国立公園調査員と共に観察」〔富士山南口登山道〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月9日付）

「富士山を担ぎ出して 村中を練り廻る 須走浅間神社の祭典大賑ひ」〔国立公園〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月10日付夕刊）

「四郎兵衛堰を繞る 三年越の紛争解決 勝又代議士等の熱心調停に依り」〔水争い〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月13日付夕刊）

「初夏の山岳旅行に先づ愛鷹の縦走 登山者の為 鉄道が大サービス」（『静岡新報』1936年=昭和11年5月13日付夕刊）

「三保・久能・日本平も 国立公園内へ編入 並に大井川改修促進の二建議案 本県政友代議士より提出」（『静岡新報』1936年=昭和11年5月18日付）

「水田の床填に ローラー使用 廃田に等しい水田 二百余町歩が蘇生」〔富士根村〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月18日付）

「大宮の 登山客誘致策協議 近く総会を開いて」〔大宮町登山联合会ポスター〕〔富士宮口砂走りの完成〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月27日付夕刊）▲▲

「業を煮やして 山梨県側へ督促 小富士をめぐる両県の境界争ひ 結局交渉は六月中旬か」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1936年=昭和11年5月29日付）▲▲

●県立プリント『静岡新報 昭和11年6月』

「須走のつゝじ 満開近づく『つゝじ音頭』で観客誘致」〔「つゝじ音頭」歌詞〕（『静岡新報』1936年=昭和11年6月2日付夕刊）

「東海地方競馬協議会議題 けふから浜松で開催」（『静岡新報』1936年=昭和11年6月5日付夕刊）

「近づく登山期 大宮口で準備開始」（『静岡新報』1936年=昭和11年6月5日付夕刊）

「三代目次郎長の弟分だと啖呵 無銭飲食の揚句に」〔清水次郎長〕（『静岡新報』19

36年＝昭和11年6月5日付夕刊)

「来月廿二日に行ふ 豪華な次郎長祭り 多数名士出席して座談会 次郎長茶屋を新設設計」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月14日付夕刊)

「来春から実現の関節式弾丸列車 東京－静岡間を一時間廿分 料金は等級なき一律」〔東海道本線〕(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月15日付日曜夕刊)

「富士登山者への諸物価協定 登山は大宮口から一と大宮町で宣伝開始」〔国立公園〕(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月17日付夕刊) ▲▲

「富士一周ドライブ・ウエー関係町村で協議」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月18日付)

「開山期を控へて大宮登山联合会 廿二日総会やら座談会」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月18日付)

「国立公園第一年の 華々しい富士開山祭 あと一句に迫る 登山営業組合が大童の宣伝戦」〔御殿場口登山営業組合〕(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月20日付) ▲▲

「三島登山道復活に地元で大童の運動 伊豆各温泉業者も合流して」〔霊峰〕〔富士山南口登山道〕〔最古の登山道説〕(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付) ▲▲ ←本文中、富士山初の三島口登山道について、《古事記によると人皇四十二代(文武天皇)三年五月》とあるが、『古事記』記載の天皇は33代推古天皇までであり、42代文武天皇の記載は『続日本紀』である。しかも文武天皇3年5月の条に書かれているのは《役ノ君小角伊豆ノ嶋ニ流サル》事件である。

「招く・夏山 各校それぞの計画 十一班に分れて南、北アルプスへ 静高山岳部今夏のプラン」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊)

「招く・夏山 各校それぞの計画 冬山の偵察踏破で 山を科学的に生活 浜高工山岳部のプラン大変」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊)

「招く・夏山 やっぱりやめられぬ強力稼業 お山の主の話」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊)

「招く・夏山 お山開きは七月一日 誰でも安心して登山出来るやう 県当局の施設と取締り」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊)

「招く・夏山 開山と同時に各口とも室を開く 表口大宮へは早くも団体申込みが殺到」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊)

「招く・夏山 雪崩の被害も少なく 近く登山道修理 意義深い開山を控へて 御殿場口準備に賑ふ」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊)

「招く・夏山 時代と共に遷る 早くなった登山期 御殿場口では八月山宣伝」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊) ▲▲

「物価昨年通り」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月22日付日曜夕刊)

「招く・夏山 処女コースの多い南アルプス 艶やかな山肌に化粧し アルピニストを招く 登山者に至大の便益－大井川鉄道」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月23日付夕刊)

「富岡(駿東)村政疑獄 村上層部に及ぶ? 任意出頭の形式で西島村長召喚」(『静岡新報』1936年＝昭和11年6月23日付)

「招く・夏山② 南アルプスへのコースとその日程 赤石附近の小屋と野営好適地」(『静岡

岡新報』1936年=昭和11年6月24日付夕刊)

「郵便切手 富士四態 七月十日から売出す」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月25日付夕刊)

「招く・夏山③ 虎岩氏から聞く“赤石”の縦走 東海道線からの南アルプス登攀路」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月25日付夕刊)

「富士山の趣味 林下庵」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付夕刊「文芸」)

「富岡村の事件 取調べ一段落 近く一件書類送局」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて お山は招く!! 諸設備全く成つて 登山客を待つ大宮町 七月一日開山式挙行」〔国立公園〕〔国威発揚〕〔大宮新道〕〔お鉢巡り〕〔富士宮口砂走り〕〔お中道回り〕〔登山組合联合会〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付) ▲▲
←ここに使われている駿河湾海岸から富士山の写真は、「今年こそ富士へ」(1937年=昭和12年7月19日付)(1938年=昭和13年7月28日付)(1939年=昭和14年7月9日付)にも使用されている。

「霊峰富士を繞りて お山は招く!! 諸設備全く成つて 登山客を待つ大宮町 七月一日開山式挙行」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付) ▲▲

「霊峰富士を繞りて 凡て登山者本位に規定された各種の料金」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付) ▲▲

「霊峰富士を繞りて 製紙工場並立する 富士郡下の偉観 郡製紙工業組合の活躍」〔提灯記事〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて 創業日浅きに拘らず 隆々たる業績を示す 富士繊維工業株式会社」〔提灯記事〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて 霊峰の下、普く巡る 富士自動車株式会社と 営利を離れた其の奉仕 由緒も深き附近名所旧蹟」〔提灯記事〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて 世界に誇る 王子製紙の活躍 富士五工場の現況」〔提灯記事〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて 富士を繞ぐる 岳麓の自然美と 石川自動車の活躍」〔提灯記事〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて 白糸の滝」〔写真〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて 富士身延鉄道株式会社 富士瓦斯紡績株式会社 富士郡銀行同盟会 大宮町銀行組合」〔協賛広告〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「霊峰富士を繞りて 国立公園富士五湖遊覧行程 代表コース 富士山麓電鉄」〔協賛広告〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付)

「招く・夏山④アルプス道案内 極大体を記せばー」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月26日付夕刊)

「招く・夏山⑤今夏はどこへ? 各地山岳会のプラン」(『静岡新報』1936年=昭和11年6月27日付夕刊)

「大宮口で計画している日帰り富士登山 三合目迄はレールカーを利用」〔王子製紙〕(『静岡

岡新報』1936年=昭和11年6月27日付夕刊) ▲▲

「芝川発電所 水路修繕費 廿八日の市会へ提出か 市長等きのふ視察」〔水力発電〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月27日付)

「観光地に理想的な 大競馬場を建設 長岡競馬の三島移転決定 九月竣工 十月には会場開き」〔三島競馬場〕(『静岡新報』1936年=昭和11年6月27日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.168 昭和11年7月1日～8月15日』

「“口”に自信たっぷり 鳥寄せの名人に挑戦 名乗り出でたる東京の豊屋さん 近く岳麓で大試合」〔須走〕〔高田兵太郎〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月2日付夕刊)

「富士の高さが四米低くなる 御殿場線の揭示訂正」〔霊峰〕〔陸地測量部地図〕〔富士山の高さ〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月2日付)

「大宮口から六名登山 本年開山の先陣」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月3日付)

「須走口の開山祭あす盛大に」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月5日付夕刊)

「太郎坊附近の山中で 若い男女の心中(未遂) 清水の宿屋の息子と女給」〔自殺〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月8日付夕刊)

「富士登山」〔富士講〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月8日付夕刊)

「静岡県観光協会編 富士登山案内 定価金五十銭」〔広告〕〔『富士登山案内』静岡県観光協会編・発行、1936〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月8日付)

「岳麓高冷地方に 特別指導を要望 駿東郡農会」〔高冷多湿地帯農業改善に関する事項〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月9日付)

「大宮口開山祭」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月10日付夕刊)

「大宮町駅前に登山案内所 案内嬢に二美人を採用」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月10日付)

「笠焼や模擬巻狩で 曾我祭りを盛大に 来る二十七日の大宮町」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月11日付夕刊)

「御殿場口の 登山土産物改善 近く聯合協議して」〔品質低下〕〔量目不ぞろい〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月13日付日曜夕刊)

「第一候補地纏まらず 第二候補地物色 実現を急ぐ三島競馬場」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月13日付日曜夕刊)

「大宮は県衛生課 御殿場は日赤支部 登山者増加につれて救護に万全を尽す」〔救護所〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月15日付夕刊)

「曾我節発表会に 日蓄から出演 来る廿七日」〔曾我祭り〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月17日付夕刊)

「富士山上に救護所」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月17日付)

「近付く大宮の 曾我祭り 非常なる前人気」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月23日付夕刊)

「侠客次郎長の 銅像建立記念式 来る廿四日梅蔭寺で」〔清水次郎長〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月23日付)

「お山は大荒れ 登山者は各室に避難」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月25日)

付夕刊)

「おらが知事さん お山初巡視 元気で御殿場口から下山」〔斎藤寿夫〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月28日付)

「大宮町の曾我祭り 夜に入り益々賑ふ けふは神田川の水上で傘焼供養」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月28日付)

「中央線との連絡に 東部に新線敷設か 熱海建設事務所で測量着手」〔現在の富士急線〕(『静岡新報』1936年=昭和11年7月30日付) →「富士山麓を繞る山岳鉄道」(8月12日付)、「御殿場大月間」(9月20日付夕刊)に続報。

「富士山で自殺すると遺書」(『静岡新報』1936年=昭和11年7月31日付夕刊)

「富士浅間神社に満願参拝」〔焼津漁業組合〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月2日付)

「御殿場富士山頂間往復駅伝競走 暴風雨中に決行」〔全国マラソン聯盟〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月4日付)

「三老人打揃つて富士登山 元気で大宮口に下る」〔高齢者登山〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月11日付夕刊)

「死場所に富士山を選び 登り得ず麓で仰毒 大宮町の墓地で苦悶の青年」〔自殺〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月12日付夕刊)

「富士山麓を繞る山岳鉄道実測開始 十月までに完了の予定」(『静岡新報』1936年=昭和11年8月12日付)

「富士山上で篤行の青年 救はれた人から御殿場署への依頼 漸く本人判明す」〔遭難〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月13日付夕刊)

「東海地方競馬聯合 臨時協議会 農林省よりも出席して」(『静岡新報』1936年=昭和11年8月13日付)

「富士郡下の養豚 全滅に瀕す 豚コレラ益々猖獗」(『静岡新報』1936年=昭和11年8月15日付夕刊)

「山岳地帯は隆起 海岸沿線は沈下 静岡沼津間は三寸乃至七寸 五十年間の変化を実測」(『静岡新報』1936年=昭和11年8月15日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 VOL.169 昭和11年8月16日～9月30日』

「富士山中道巡り登山会」〔富士登山営業組合〕〔お中道〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月16日付)

「林長二郎一行が富士裾野でロケ 夏の陣真田勢の活躍」〔映画撮影〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月16日付)

「静か山か 小富士を繞ぐる四年越しの紛争 愈々廿六、七両日 両県当事者の大論争」〔小富士県境争い〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月19日付) ▲▲←紙面掲載の地図は、1:20000正式図「富士15号 富士山」(明治20年、同23年製版、同24年2月28日出版、大日本帝国陸地測量部)の一部である。

「蕎麦団子に交ぜた 強烈なチフス菌 駿東郡下七千余町歩に撒布 大々的な野鼠退治」〔野ねずみ〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月19日付)

「太郎坊の砂地で 蒙古の場面 松竹の田中絹代一行がロケ」〔映画撮影〕(『静岡新報』1936年=昭和11年8月22日付)

「静岡聯隊の富士野営演習 けふ堂々出発す」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月25日付夕刊）

「川奈ホテル完成と 富士を中心の観光道路へ主力 東京オリンピックを目指して 県の外客誘致対策」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月25日付）

「東京－静岡間をたつた二時間 明秋・登場する砲弾型列車」〔〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月27日付夕刊）

「芝富村の対市電水騒動 妥協案を両者内諾 堰堤改築工事に着手す」〔水力発電〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月27日付夕刊）

「小富士を繞ぐる静、山県境線争ひ最終的の決定協議会 けふは午前十時から開会」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月27日付）▲▲

「小富士をめぐる県境争ひ 呆気なく物別れ 結局、山梨側の案も公式で無く 更に九月下旬吉田で会見に決す」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月28日付）▲▲

「富士山麓に籠り“山雲”と共に十年 浮世をよそに探る悠々変幻の姿 阿部正直伯の貴き精進」〔阿部雲気流研究所〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月29日付夕刊）→『雲の伯爵 富士山と向き合う阿部正直』（西野嘉章著、平凡社、2020年）参照。

「富士箱根国立公園地域 拡張と施設促進 三県正副議長聯合協議会で 森（静岡）議長強く要望 富士箱根国立公園に関する陳情書」（『静岡新報』1936年＝昭和11年8月29日付）

「騒音の街よりは閑静な山間へ 丹那開通後の興味ある現象 避暑期の伊豆温泉総決算」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月5日付）

「扶桑教会支部を襲ふて押収取調べ 浜松署特高係の大活躍」（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月5日付）

「富士を繞る延長卅里の 観光道路の改修計画 総工費三百万円三ヶ年継続で 東京オリンピック大会への豪華施設」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月8日付）

「国立公園の施設につき陳情 けふ三県会代表上京」（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月9日付）

「観光道路計画案 通常県会提案は至難 今秋山神静三県知事会議を開き 根本的計画案を樹立」（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月10日付）

「絶勝十国峠にケーブルカー 東京大会までに実現」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月11日付）

「富士山を死場所に家出」〔自殺〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月11日付）

「富士箱根国立公園協議会 理事は久保田氏」〔久保田貞次郎〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月12日付夕刊）

「蜜蜂の巣を荒しに 笹熊がぞろゝゝ 最近富士山中から富士根村へ」〔ツキノワグマ〕〔天照教〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月13日付日曜夕刊）

「先づ岳麓十五村に 更生計画の指導 本県が特別助長の要ある五十六ヶ町村を選定 第一年次計画として」（『静岡新報』1936年＝昭和11年9月14日付）

「国立公園地区を走る将来の機関車 きのふ御殿場線で試運転行はる」〔ディーゼル機関

車] (『静岡新報』1936年=昭和11年9月17日付)

「御殿場大月間 下測量終了」(『静岡新報』1936年=昭和11年9月20日付夕刊)

「富士山県境の談判 二十五日再び開始 徳川時代の有力なる新資料を握り 大いに意気込む本県」〔小富士県境争い〕(『静岡新報』1936年=昭和11年9月23日付) ▲▲

「三島競馬場愈よ 賀茂ヶ洞に決定 地主との交渉漸く纏る」(『静岡新報』1936年=昭和11年9月23日付)

「国立公園指定展余興に 御殿場少女出演 スキー民謡や御殿場おけさ 芸妓も参加猛練習中」(『静岡新報』1936年=昭和11年9月24日付)

「五会社共同でバス会社設立か 国立公園地域内へ」(『静岡新報』1936年=昭和11年9月25日付夕刊)

「山梨県側不誠意と 憤慨して帰県す 小富士をめぐる県境の協議会 両課長の出席無きため 代理者では余りにひどい 松浦地方課長談」〔小富士県境争い〕(『静岡新報』1936年=昭和11年9月26日付) ▲▲

「小山町議選挙 立候補卅四名 大激戦を予想さる」(『静岡新報』1936年=昭和11年9月26日付)

「日本一の鈴与の煉炭」〔富士山カットの広告〕(『静岡新報』1936年=昭和11年9月26日付)

「白糸ハイコース賑ふ」〔白糸の滝〕(『静岡新報』1936年=昭和11年9月26日付) 「廃液の被害を恐れて 人絹工場に反対 沼津附近の漁民再び起ち猛運動 本県並に両省へ陳情」〔東京人絹工場〕〔排水公害〕(『静岡新報』1936年=昭和11年9月27日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.170 昭和11年10月1日～11月15日』

「勝景日金山頂に 大遊園地の計画 既に土地の実測を終る」〔展望〕(『静岡新報』1936年=昭和11年10月1日付夕刊)

「大宮口二合目附近に挙動不審の男女 樵夫が発見して大騒ぎ」〔自殺〕(『静岡新報』1936年=昭和11年10月2日付夕刊) →次項が続報。

「富士山ではとても寒くて心中出来ず 拐帯の会計係とカフェーの女給 諦めましたと警察へ」〔自殺〕(『静岡新報』1936年=昭和11年10月3日付夕刊)

「八年来の懸案!! “宗教団体法案”の前途 難関は憲法抵触の点にあり」(『静岡新報』1936年=昭和11年10月6日付夕刊)

「男子よりも女子に 盲信者が多い 宗教団体法案の前途 難関は憲法抵触の点にあり」(『静岡新報』1936年=昭和11年10月7日付夕刊)

「裾野で実弾射撃中 兵二名重傷」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1936年=昭和11年10月9日付夕刊)

「今暁大宮の火災 十五棟を全半焼 鎮火して間もなく附近から出火 大事に至らず消止めたが 原因に放火の疑ひ」(『静岡新報』1936年=昭和11年10月21日付夕刊)

「バス崖下に墜落 女学生等十三名重軽傷 富士箱根巡りの途中 昨夕、上井出村人穴地先の惨事」(『静岡新報』1936年=昭和11年10月22日付夕刊)

「東京オリムピック準備に 岳麓鉄道を国営へ 両方面から東京と富士をつなぐ 鉄道の外客誘致策」〔富士山麓電鉄〕(『静岡新報』1936年=昭和11年10月24日付)

「駿東岳麓山村民に満洲移民を慫慂 移住協会より来県協議」〔満蒙開拓移民〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年10月25日付）

「富士山頂測候所の電話線窃取さる 五合目と三合目間で二ヶ所 御殿場署で犯人捜査」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年10月26日付日曜夕刊）

「岳麓の野に行はれる近衛師団秋季演習 空軍の精鋭も参加」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年10月28日付）

「百九十尺の眺望台 鈴川海岸へ建設 富士製作所から出願」（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月2日付日曜夕刊）

「行方不明の両学生九合目付近で救助 無事御殿場口へ下山す」〔雪中登山〕〔遭難〕〔梶房吉〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月5日付夕刊）

「活躍めざましき 満洲の静岡村建設 花嫁さがしに帰郷した両君 愉快極まる毎日の作業」〔満蒙開拓移民〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月5日付夕刊）

「軍隊も分宿し大宮は大賑ひ 浅間神社の大祭に」〔浅間大社〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月5日付夕刊）

「大宮大社例祭」〔浅間大社〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月6日付夕刊）

「岳麓の近衛師団 壮烈な旅団演習」〔岳南一帯〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月6日付）

「富士箱根国立公園の道路を大改修 東京大会と万国博開催を前に」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月7日付夕刊）

「定期除役馬の売却」〔軍馬〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月7日付夕刊）

「新たに経更計画を立て超過だけ満洲へ 駿東郡北部で調査開始 本県の満洲農業移民」〔満蒙開拓移民〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月7日付）

「もめる大宮町 町長派、反町長派 対立から激化して」（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月7日付）

「富士箱根国立公園に 道路開設の計画 東京オリンピック大会万国博に備へて 十六日の総会で最後の決定」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月13日付）

「空軍掩護下に近代科学戦 近衛師団秋季演習 きのみ、好成績裡に終了」〔軍事演習〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月15日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.171 昭和11年11月16日～12月30日』

「セルリー・アスパラガス 夏のほうれん草 岳麓高冷地帯に栽培」〔駿東郡〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月16日付）

「オリンピックに備え 観光施設大評定 名勝史蹟に富む各地代表者が きのみ清水に集つて」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月16日付）

「富士箱根国立公園 道路改修並に新設 けふ委員会で審議」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月17日付夕刊）

「富士箱根国立公園施設完備の為 三県知事会議を召集せよ 斎藤知事から提議」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月19日付）

「小富士をめぐる県境の折衝 地元から解決促進方を県へ陳情」〔小富士県境争い〕〔籠坂スキー場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月20日付夕刊） ▲▲

「富士山にケーブルカー 架設計画は絶望 以ての外と主務省反対」〔鉄道省〕〔トンネルケーブルカー〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月20日付）

「オリンピックを目指し富士箱根に新装を 本県側の提唱容れられて 明春関係三県長官会議」〔オリンピック〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月21日付）

「上井出外三村に 診療所設置 三菱寄附金で」〔三菱合資会社〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月22日付夕刊）

「競馬場誘致に 再び沼津が乗出す 市民の熱心に動されて」〔東部競馬場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月22日付）

「富士身延鉄の民有国営案 漸く有望に一層猛運動」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月22日付）

「生芝を盗み 馬車で搬出 監視人に捕まる」〔印野〕〔芝生盗掘〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月12日付）

「東部競馬場は鈴川へーと地元で猛運動開始」（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月23日付日曜夕刊）

「観光都市“大宮”街路計画と風致地区、公園 けふ都計静岡地方委員会で諮問答申決定す」（『静岡新報』1936年＝昭和11年11月25日付夕刊）

「岳麓景勝地 猪の頭の県営富士養鱒場 漸次に施設を増加完備し あす盛大な竣工式」（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月3日付）

「富士養鱒場 竣工落成式 きのみ盛大に行はる」（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月5日付）

「富士畜産組合で 種馬を購入 産馬奨励の為め」（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月5日付）

「富士身延鉄道を借入経営に決定 十九日の鉄道会議へ 正式決定と同時に 料金は半額以下に 富士甲府間は一円卅八銭（現在二円八十三銭）」（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月8日付）

「鈴川海岸の大遊園地計画 砂山一帯十万坪に対して」（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月10日付夕刊）

「山中湖畔に合宿してスキー基本練習 静岡市山岳部の計画」〔岳麓馬返しスキー場〕〔山中湖畔スキー場〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月12日付）▲▲

「山林詐欺団発覚か 続々と引致取調べ 大宮署が緊張極秘裡に」（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月16日付夕刊）

「バットの原料耕作で 岳麓の農家潤ふ 富士郡煙草耕作人の企て」〔タバコ〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月17日付）

「次郎長親分愛用の護身刀発見 同田貫又八作 二尺九寸二分の大業物 本阿弥光了師の折紙付」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月19日付夕刊）

「スキー場までの賃金割引」〔沼津駅〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月20日付）

「スキー、スケート場への 乗車賃割引 三等往復券購入者に対して」〔鉄道省〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月21日付）

「明後年までに 六百名の移民募集 満洲国へ静岡村建設のため」〔満蒙開拓移民〕（『静岡新報』1936年＝昭和11年12月21日付）

岡新報』1936年=昭和11年12月23日付)

「着任早々の思ひ出—函南の騒擾事件 栄転の水田検事正は語る」〔渇水〕〔丹那トンネル〕〔函南騒擾事件〕(『静岡新報』1936年=昭和11年12月23日付)

「御殿場スキー場毎日大賑ひ 遠来の客続々押しかく」(『静岡新報』1936年=昭和11年12月24日付夕刊)

「流行歌 石松ぶし キングレコード」〔広告〕〔清水次郎長〕(『静岡新報』1936年=昭和11年月日付)

「大宮町への補助を 北山村で横取り きのみ、両町村当局を 県へ招致して事情取調べ」(『静岡新報』1936年=昭和11年12月24日付) → 「[県からの寄附還付金](#)」(11年12月27日付) に続報。

「宝永山附近でスキー大会 来月四日勇しく集合」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1936年=昭和11年12月25日付夕刊)

「富士駅好成绩」(『静岡新報』1936年=昭和11年12月26日付)

「県からの寄附還付金 誤つて北山村へ返還…補助金横取りと云はれた事件の真相」(『静岡新報』1936年=昭和11年12月27日付)

「山中湖畔に合宿スキーの練習 銀盤に勇む静岡市役所山岳部員の壮挙」〔岳麓馬返しスキー場〕(『静岡新報』1936年=昭和11年12月29日付) ▲▲

■ 1937年=昭和12年

● 歴史文化『静岡新報 VOL.172 昭和12年1月1日～2月15日』

「変態的天候にスキーヤー失望 雪飢饉に悩まされる」〔岳麓馬返しスキー場〕〔山中湖畔スキー場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月6日付)

「あす三県知事が観光聯合協議会 斎藤知事の発起で内務省内に 本県には観光施設委員会」(『静岡新報』1937年=昭和12年1月8日付)

「大宮町町会議長銓衡 町理事者に波及か 現町長派苦境に立つ」(『静岡新報』1937年=昭和12年1月9日付夕刊)

「岳麓に来年度 子馬の育成所設置 本県畜産聯合会の計画」(『静岡新報』1937年=昭和12年1月10日付) → 「[馬の育成所は](#)」(2月9日付夕刊) に続報。

「満洲国農業移民 大々的に募集を開始 満洲事情を周知せしめ 県下から五年間に千五百戸 移住者一人につき八百九十円補助 一戸に耕地十町歩を譲渡」〔満蒙開拓移民〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月14日付)

「港湾及び登山も道路の実現協議 三島町自治協会」〔オリンピック〕〔富士山南口登山道〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月16日付)

「太郎坊でスキー けふ静岡市吏員連中が」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月24日付)

「太郎坊スキー場賑ふ」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月27日付夕刊)

「暖い列車から俄に外気に触れてスキーヤー御殿場駅で頓死」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月27日付夕刊)

「御殿場口観光協会」〔オリンピック〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月30日

付夕刊)

「田子の浦駅に改名の運動起る 関係町村の調印纏めて」〔鈴川駅〕〔吉原駅〕(『静岡新報』1937年=昭和12年1月31日付夕刊)

「鈴川駅の改名問題 元吉原村は気乗薄 田子浦村では大賛成」〔吉原駅〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月4日付夕刊)

「大宮後任町長に満場 角田氏を推す 同夜両派が手打の宴」〔角田源作〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月7日付夕刊)

「馬の育成所は 岳麓北上村の設置 三ヶ年継続事業として計画」(『静岡新報』1937年=昭和12年2月9日付夕刊)

「大宮後任町長に角田氏」〔角田源作〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月10日付夕刊)

「山中スキー場行き 会員募集」〔山中湖畔スキー場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月10日付)

「日章旗掲揚のため 雪中を富士登山 あす建国祭を行ふため」〔雪中登山〕〔稲葉真風〕〔梶房吉〕〔国威宣揚登山〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月11日付夕刊)

「富士箱根国立公園観光ルート決定 東京よりの航空路開設も計画」〔オリンピック〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月13日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 VOL.173 昭和12年2月16日～3月30日』

「大宮町長決定 角田氏就任す」〔角田源作〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月13日付)

「柴富小学校のリンチ事件 村民から非難される」(『静岡新報』1937年=昭和12年2月14日付)

「本県東部の競馬場 下土狩を復活か 地元本宿区との交渉漸く進む」(『静岡新報』1937年=昭和12年2月14日付)

「印野村民が揃って勝間田村へ墓参 城主勝間田氏は鎌倉以来の名族 印野村を開拓して」「大宮大社へ 南洋の石貨献納 ヤツプ島の羽山支庁長から」〔浅間大社〕〔国立公園〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月19日付夕刊)

「鈴川のお開帳」〔毘沙門天〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月19日付夕刊)

「下土狩の競馬場 貸地料に開き 一頓挫を来たす」(『静岡新報』1937年=昭和12年2月19日付)

「東部競馬場問題 地主との交渉纏る 一任されて永井長泉村村長奔走の結果 認可ありしだい直ちに着工の予定」〔三島競馬場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月24日付)

「満蒙宝庫開拓の 重大使命帯びて 今夕静岡駅出発の農業移民」〔満蒙開拓移民〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月24日付)

「地方馬検査で 発見した無届け」〔軍馬〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月26日付夕刊)

「岳麓道路愛護 隣県山梨と対峙 上井出村の団体結成」〔大宮甲府線〕〔富士山西麓遊覧自動車道路〕(『静岡新報』1937年=昭和12年2月27日付夕刊)

「御殿場町に 日本最古の招魂霊神の碑 吾妻神社境内に発見」〔西南戦争〕(『静岡新

報』1937年=昭和12年3月6日付)

「高冷地農作指導地に 四十八ヶ所選定」(『静岡新報』1937年=昭和12年3月7日付) 一部▲▲

「富士箱根国立公園の棧橋・航路計画 特別委員会に諮る」(『静岡新報』1937年=昭和12年3月7日付)

「没落の過程を辿る 県下自作農業者 耕地を失ふ者年々二割余に及ぶ 救済方を願出づる者続出」(『静岡新報』1937年=昭和12年3月24日付)

「先づ岳麓十五ヶ町村の 総合具体策を樹立 来三十日沼津市で地方産業振興委員会開催 本県の地方農山村経済更生」(『静岡新報』1937年=昭和12年3月24日付)

「表大宮登山口に“世界道場”建設 一般人にも公開」〔身延山〕〔海良日照〕〔カケスバタ〕(『静岡新報』1937年=昭和12年3月25日付夕刊)

「須山村の山中へ 所沢機不時着す 機体を大破し一名負傷」(『静岡新報』1937年=昭和12年3月26日付)

「約七百名の委員を動員 県下肥料の諸調査 改善配給の根本方針確立のため」(『静岡新報』1937年=昭和12年3月27日付)

「東部競馬場敷地 漸く交渉纏まる いよゝゝ近く着工」〔三島競馬場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年3月27日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.174 昭和12年4月1日～5月15日』

「山林内で賭博 富士根で五名捕はる」(『静岡新報』1937年=昭和12年4月2日付)

「大宮から吉田を経て 御殿場へ省営バス 身延鉄の国営移管を機に計画」〔富士身延鉄道〕〔国立公園〕〔オリンピック〕(『静岡新報』1937年=昭和12年4月19日付)

「“静岡村”建設をめざして勇躍出発 第六回満洲国移民先遣隊一行 静岡駅の盛んな見送り」〔満蒙開拓移民〕(『静岡新報』1937年=昭和12年4月19日付)

「国幣社宮司会議 七日伊豆山で」(『静岡新報』1937年=昭和12年5月2日付)

「五県神職会議 けふ賑々しく開催 関係県より一千余名出席し 静岡市公会堂にて」(『静岡新報』1937年=昭和12年5月7日付夕刊)

「弾丸拾ひの細民を恐喝 金品を捲き上ぐ 四人組の不良団遂に捕はる」〔弾丸拾い〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月7日付夕刊) →「玉穂村の廃弾恐喝」(5月8日付夕刊)に続報。

「竹の寿命を追ふ 研究リレー実に三百年 一老学究の精進に同情して 菌部博士が後援に立つ」〔竹の花〕〔地野英吉〕〔菌部一郎〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月7日付夕刊)

「玉穂村の廃弾恐喝 更に二名を検挙 被害者中には婦人も数名あり 徹底的に取調べ」〔弾丸拾い〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月8日付夕刊)

「須山村の村外居住者 寄附金問題で紛擾 管理者の態度を究明すると憤慨」〔東富士演習場〕〔演習地売却金の分配〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月9日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 VOL.175 昭和12年5月16日～6月30日』

「富士登山は御殿場口より」〔ポスター〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月20日付)

「富士登山期近付く 御殿場口の協議」(『静岡新報』1937年=昭和12年5月20日

付)

「身延線国営運輸は 本年八月一日から 他の買収線と共に決定」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月21日付夕刊)

「山つゝじ美しき狸沼附近」〔ヤマツツジ〕〔田貫湖〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月21日付夕刊)

「須走つゝじ園」〔レンゲツツジ〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月21日付夕刊)

「裾野のつゝじ 大賑ひ」〔須走〕〔レンゲツツジ〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月26日付夕刊)

「富士山救護所の設置」〔日赤〕〔慶応医科〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月28日付夕刊)

「藤原光親卿の慰霊祭」〔須走〕(『静岡新報』1937年=昭和12年5月28日付夕刊)

「東部競馬場愈々 三島在新宿へ新設 六七日頃盛大に地鎮祭」〔三島競馬場〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月4日付)

「登山道を視察 御殿場署長」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月7日付日曜夕刊)

「巴川河畔の“壮士の墓”七十年祭 灯籠流しの日共に盛大に挙行 次郎長伝に有名な話」〔清水次郎長〕〔成臨丸事件〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月9日付)

「富士箱根二期計画 廻遊路の大改修 工費総額三百万円(内地元負担二百万円) 衛生局明年度予算に要求」〔国立公園〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月9日付)

「三島競馬場新設 昨日正式に認可さる 直に工事に着手し 年内に二回競馬開催」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月10日付)

「富士バス事務員 両社重役へ要求 二十名結束して」〔富士自動車〕〔富士山麓電気鉄道〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月11日付夕刊)

「富士山で賭博」〔大宮口一合目〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月12日付夕刊)

「大宮登山口の座談会」〔大宮町登山組合联合会〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月13日付)

「岳麓地方産業計画 各文科委員並に指導奨励員を決定して 調査に着手」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月15日付)

「富士山の中腹に“仏法僧”の鳴き声 小舎番の話を聞いて一行登山」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月16日付夕刊)

「大宮で廿七、八両日曾我祭りを執行 二十七日夜は煙火大会」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月17日付夕刊)

「富士登山道 南口復活問題 馬場新内相に猛運動」〔富士山南口登山道〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月17日付夕刊)

「美しい娘さんが富士登山の案内 処女会員から十余名を選抜 大宮口が誘客の妙案」〔大宮町登山組合联合会〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月18日付)

「映画で富士大宮口を宣伝」〔大宮町登山組合联合会〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月18日付)

「大宮町改称問題 慎重研究に決定」〔富士大宮町〕(『静岡新報』1937年=昭和12

年6月20日付)

「白糸富丘の農民 水門へ殺到 植付不能のため」〔水争い〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付夕刊)

「本流の川底を浚渫して 大堰方面へ引水 富丘、上野方面の農民殺到 大宮署員が急行鎮撫」〔水争い〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付)

「百十歳翁 一生の思ひ出 富士登山決行 来月岩村将軍と共に ハイキングだと非常な元気」〔伊藤東一郎〕〔岩村俊武〕〔高齢者登山〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付夕刊) → 「百十歳翁いよゝゝ十一日に富士登山」(7月7日付) 以下続々続報。

「裾野耐熱演習」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付夕刊)

「雪中の富士登山 七合五勺にて引返す」〔雪中登山〕〔吉田口〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付夕刊)

「愛鷹、箱根方面へに 馬の放牧場計画 畜産聯合会で実地調査」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付夕刊)

「満洲農業移民 先遣隊より(第二信) 安藤生」〔満蒙開拓移民〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付)

「本流の川底を浚渫して 大堰方面へ引水 富丘、上野方面の農民殺到 大宮署員が急行鎮撫」〔芝川〕〔水争い〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月24日付)

「御殿場署管内の狩猟成績」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月25日付夕刊)

「岳麓地方産業 小委員会開催さる」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月25日付)

「半野用水取入口の騒動 又もぶり返す 水量激減に白市側憤慨」〔水争い〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月27日付夕刊)

「自作農創設施設 田畑価格の昂騰から貸付資金増額猛運動」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月27日付)

「風致を害する 国鉄沿線の広告撤去 東京大会を前に営業改善刷新」〔オリンピック〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月27日付)

「亜細亜青年教団が 修養道場建設 岳麓須山村に計画」〔松本君平〕〔水ヶ塚〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月27日付)

「静岡少年団の富士登山」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月29日付)

「富士を見て暮すキャンピング “アメリカ村” に開催」〔ジャパントーリストビューロー〕(『静岡新報』1937年=昭和12年6月30日付夕刊) → 「岳麓のキャンピング」(7月17日付夕刊) に続報。

「山開き近付く 本年も山中に救護所設置」(『静岡新報』1937年=昭和12年6月30日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.176 昭和12年7月1日～8月15日』

「道路掃除府夫を常備 寝所も成可く区別 富士開山を前に営業者の協議」〔大宮署〕(『静岡新報』1937年=昭和12年7月1日付夕刊)

「新三島競馬場愈よ工事に着手 開場は九月下旬か」(『静岡新報』1937年=昭和12年7月2日付)

「岳麓地方更生資源たる 産業計画の種類 きのみ委員会にて骨子決定」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月2日付)

「満洲国の新天地に 静岡健児の活躍 移民団第六信 安藤生」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月2日付)

「富士登山と赤沢山キャンプ 今夏静岡少年団のスケジュール決定」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月2日付)

「昨年に倍しての富士登山前景気 御殿場に続々と団体申込み」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月4日付夕刊)

「岳麓山村地帯の増産計画を樹立 平均生産額まで引上げべく 経更地区委員会設置」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月4日付)

「快晴つゞきに山気分横溢 須走口では五日開山式」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月7日付夕刊)

「大宮口の山中営業者 けふから開始」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月7日付夕刊)

「百十歳翁いよゝゝ十一日に富士登山 強力も話相手になるやう年長者を選んで」 [伊藤東一郎] [高齢者登山] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月7日付)

「大宮町青年団幹部総辞職」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月7日付)

「演習中の我が兵に支那側突如不法発砲 即時嚴重謝罪を要求 事件急転悪化し (午前六時) 日支両軍激戦中」 [盧溝橋事件] [日中戦争はじまり] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月9日付夕刊)

「富士山開山奉告祭 御田植祭執行」 [浅間大社] [お田植祭] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月9日付夕刊)

「名鉄が大宮口を撮影」 [名古屋鉄道局] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月10日付夕刊)

「百十歳翁を護り賑やかに富士登山 案内役は七十六歳の町長さん 大宮を挙げての歓迎陣」 [伊藤東一郎] [高齢者登山] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月10日付夕刊)

「百十歳翁 今夜はゆつくり大宮泊り 少年のやうな眼を輝かして来著 あすいよゝゝ富士登山」 [伊藤東一郎] [高齢者登山] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月11日付夕刊)

「身延鉄の民有国営 愈よ八月一日から 陳情隊に対し鉄道次官は答ふ」 [富士身延鉄道] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月11日付)

「元気で百十歳翁きのみ大宮へ着 浅間様に一路平安祈願」 [伊藤東一郎] [高齢者登山] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月11日付)

「元気な百十歳翁 八合目泊り けさ愈々頂上へ」 [伊藤東一郎] [高齢者登山] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月12日付)

「百十歳翁 頂上を極め砂走りを快走 元気で御殿場へ下山」 [大砂走] [伊藤東一郎] [高齢者登山] (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月13日付) → [「日本一の長寿者が」 \(1938年=昭和13年7月22日付夕刊\) に関連記事。](#)

「富士山上の救護所 県と日赤協力」 (『静岡新報』 1937年=昭和12年7月14日付)

夕刊)

「須走局風景スタンプ」〔写真〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月14日付）

「富士山救護所に慶応医部助手 六名勤務のため登山」（『静岡新報』1937年=昭和12年7月15日付）

「大日本青年党で修養道場と飛行場 岳麓上井出村麓に建設」（『静岡新報』1937年=昭和12年7月16日付夕刊）→「富士修養農場と道場」（1938年=昭和13年4月20日付）に続報。

「岳麓のキャンピング」〔アメリカ村〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月17日付夕刊）

「国立公園観光道路費 五十万円を計上」（『静岡新報』1937年=昭和12年7月17日付）

「大宮町の横溝川 一時危険に瀕す」〔豪雨〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月18日付夕刊）

「潤川鉄橋附近で線路へ山崩れ ダイヤにはさして影響なし」〔豪雨〕〔潤井川鉄橋〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月18日付夕刊）

「今年こそ富士へ 今が登山の好期節!! 諸設備と共に固く 安心して登山の出来る大宮表口登山道 凡て登山者本位に規定された各種の料金」〔霊峰〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月19日付）▲▲→大宮新道の提灯記事。写真は「霊峰富士を繞りて」（1936年=昭和11年6月26日付）をそのまま使用。全体の構成はほぼ同じで、各記事内容も前回に多少加筆したものである。

「今年こそ富士へ」（『静岡新報』1937年=昭和12年7月19日付）▲▲

「今年こそ富士へ 今が登山の好期節!! 諸設備と共に固く 安心して登山の出来る大宮表口登山道」〔富士宮口砂走り〕〔お中道廻り〕〔登山組合联合会〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月19日付）▲▲

「今年こそ富士へ 凡て登山者本位に 規定された各種の料金」〔大宮町宿泊料及物価表〕〔山中休泊所〕〔登山自動車 賃金規程〕〔強力案内料〕〔乗馬賃〕〔富士身延鉄道運賃大割引〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月19日付）▲▲

「今年こそ富士へ 名瀑白糸の滝」〔写真〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月19日付）

「今年こそ富士へ 国立公園富士五湖の旅 富士山麓電気鉄道株式会社」〔協賛広告〕〔富士急〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月19日付）

「富士登山賑ふ」（『静岡新報』1937年=昭和12年7月21日付夕刊）

「富士山頂奥宮で武運長久祈願祭 三回にわたつて」〔武運長久登山〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月23日付夕刊）

「熱海少年団登山」（『静岡新報』1937年=昭和12年7月23日付夕刊）

「本県競馬」〔三島競馬〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月23日付）

「岳麓のキャンプ村」〔東山湖〕〔写真〕（『静岡新報』1937年=昭和12年7月25日付夕刊）

「“雪溶けの水音” □ “富士登山の□ ラヂオ納□」（『静岡新報』1937年=昭和12年7月25日付夕刊）

「登山の旅費を国防献金」（『静岡新報』1937年＝昭和12年7月25日付夕刊）

「角田大宮町長 辞意を固め廿六日以来引籠る」（『静岡新報』1937年＝昭和12年7月29日付夕刊）

「榛原養成所員富士登山」（『静岡新報』1937年＝昭和12年7月29日付夕刊）

「大宮の曾我祭」（『静岡新報』1937年＝昭和12年7月29日付夕刊）

「大宮の空株事件 関係者続々召喚さる」（『静岡新報』1937年＝昭和12年7月30日付夕刊）

「失恋の青年 富士山で自殺 検視の結果太田と判明」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月1日付夕刊）

「富士山に遭難 屍体二個 山口高校生徒か」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月1日付夕刊）

「汽車を追ひかける厄介な狂人 富士へ登ると家出」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月1日付）

「大宮の空株事件 取調べ一段落となる いよゝゝ近日中に送検されん」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月2日付）

「払暁を期して富士山頂の祈願祭 約一千名が参列して」〔国威発揚〕〔武運長久〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月4日付夕刊）

「忘れてならない 登山の護身薬 体力増強と遭難時の用意に」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月6日付）

「富士山の頂上は早くも“冬仕度”＝一と朝毎に伸びゆく氷柱」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月12日付夕刊）

「満洲農業移民 町村から各一名 市町村当局に選抜依頼」〔満蒙開拓移民〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月13日付夕刊）

「大宮町万野原へ大工場の建設 計画いよゝゝ具体化す」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月13日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 VOL.177 昭和12年8月16日～9月30日』

「お札博士慰霊祭 須走村で盛大に執行」〔スター博士〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月16日付）

「東京オリンピックに備へ 籠坂峠附近舗装 政府補助三万七千円交付」〔オリンピック〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月17日付夕刊）

「竹から強い縄 竹細工屋さんの発明」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月17日付） ▲▲

「三段跳の田島君 裾野の耐熱演習に“日本選手諸君の健闘を祈ってます”と語る」〔田島直人〕〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月26日付夕刊）

「今秋完成する 三島新競馬場 初競馬は十月十日」〔三島競馬場〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月28日付夕刊）

「燃え旺る→愛国熱、銃後美談（15）お札のお菓子代と落葉を拾って 少年団員達が可愛い献金」（『静岡新報』1937年＝昭和12年8月29日付）

「産業の富士山麓（其一）経済的に見た富士山の価値 金原翁の予言違わず 山麓に煙突

林立」〔金原明善〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月1日付）

「支那事変と称す けふ閣議で決定」〔日中戦争〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月3日付夕刊）

「身延鉄道国営促進の陳情」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月7日付）

「オリムピツクの開催は取止め 閣内の意見大体一致す」〔オリンピック〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月8日付夕刊）

「オリムピツク大会 既定方針に邁進 ゆうべ主催者側の協議」〔オリンピック〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月9日付夕刊）

「主要四観光道路 三ヶ年継続で施工 改修並に舗装に乗出す」〔オリンピック〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月10日付）

「重大事務の終了後 角田大宮町長 いよゝゝ 辞職せん」（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月12日付夕刊）

「名誉の戦死傷者 田上、石井両部隊本県出身勇士」（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月13日付）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月14日付夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月14日付）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月17日付夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月17日付）

「江南の華と散り 或ひは傷つく 勇士の家庭を訪問」（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月17日付）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月19日付夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月21日付夕刊）

「誉れの家を訪ふ」（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月21日付夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月23日付夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月24日付夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月26日付）

「けふ凱旋する白衣の勇士」（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月26日付）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年9月30日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.178 昭和12年10月1日～11月15日』

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月1日付夕刊）
「田上部隊 五弓部隊 星部隊」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月3日付夕刊）
「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔中島部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月3日付）

「田上部隊 中島部隊 石井部隊」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月5日付夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔中島部隊〕〔石井部隊〕〔武田部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月5日付）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月7日付）

「三島初競馬は 十日から四日間 新設競馬場で華々しく」〔三島競馬〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月8日付）

「内閣情報部にて“愛国行進曲”懸賞募集 仁丹本舗」〔広告〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月9日付）

「田上部隊 中島部隊 石井部隊」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月10日付）

「田上部隊 石井部隊」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月12日付夕刊）

「田上部隊 白衣の勇士 今明日凱旋」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月12日付夕刊）

「銃後に響く鉄蹄に 三島競馬の馬場開き いよゝゝあす十三日から」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月13日夕刊）

「名誉の戦死傷者」〔田上部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月13日付夕刊）

「製紙界を襲ふた大嵐に 失業二千 富士・庵原両郡下の工場」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月14日付）

「堂々威容を誇る 新設三島の初競馬 東西からファン殺到」〔三島競馬〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月14日付）

「田上部隊」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月15日付夕刊）

「田上部隊 中島部隊」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月15日付）

「三島初競馬（第二日目）」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月16日付）

「富士山を天延記念物に」（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月28日付）

「富士の八合目に 老人変死体」〔自殺か〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年10月31日付）

「富士山八合目の変死体身許判明 アパート雅荘園止宿中」（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月2日付）

「馬の改良を提唱（上）東京帝大農学部講師 岡部利雄氏談話」（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月4日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 VOL.179 昭和12年11月16日～12月30日』

「函南村で挙行の 県馬耕競犁会 選手百名が東西に分れ」（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月19日付）

「暴支膺懲の聖戦に散る 忠烈・護国の人柱【一】」〔田上部隊〕〔中島部隊〕〔石井部隊〕〔武田部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月20日付）

「暴支膺懲の聖戦に散る 忠烈・護国の人柱」〔田上部隊〕〔中島部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月21日付夕刊）

「暴支膺懲の聖戦に散る 忠烈・護国の人柱」〔石井部隊〕〔田上部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月21日付）

「暴支膺懲の聖戦に散る 忠烈・護国の人柱」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月22日付）

「田上部隊の勇士 白衣の凱旋」（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月22日付）

「暴支膺懲の聖戦に散る 忠烈・護国の人柱」〔田上部隊〕〔石井部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月23日付夕刊）

「暴支膺懲の聖戦に散る 忠烈・護国の人柱」〔田上部隊〕〔石井部隊〕〔中島部隊〕〔川並部隊〕〔栗岩部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月23日付）

「生前愛する景勝 真富士山頂に比翼塚建設 故千葉上等兵夫妻のために きのみ清水市山岳研究会員に依つて」（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月23日付）

「高冷地帯で麦の裏作 富士山麓で成功 農業界驚異的となる」〔都留郡小立村〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月24日付夕刊）

「応召の家族のために 銃後国民の雄々しき姿 模範とされる勤労奉仕班の活動ぶり」（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月27日付）

「“燃料の節約”全国に方針指示 愈々木炭自動車時代化」（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月28日付夕刊）

「田上部隊の諸勇士」〔負傷者〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年11月28日付）

「田上部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月4日付夕刊）

「無言の凱旋 懐しの家郷へ」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月4日付夕刊）

「田上部隊 名誉の戦死者」〔川並部隊〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月5日付夕刊）

「田上部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月5日付）

「石井部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月5日付）

「十二年第二回 三島大競馬 静岡県畜産聯合組合」〔広告〕〔三島競馬〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月5日付、12月8日付）

「田上部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月7日付夕刊）

「田上部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月7日付）

「三島競馬 第二日午後」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月7日付）

「田上部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月8日付夕刊）

「三島競馬大会 第三日午前の成績」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月8日付夕刊）

「三島競馬大会（第四日目）」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月9日付夕刊）

「田上部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月9日付夕刊）

「三島競馬 盛会裡に終る」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月9日付）

「富士山中腹で 大仕掛けの野兎巻狩り 皇軍将兵の防寒用に献納すべく」〔野うさぎ〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月10日付夕刊）

「田上部隊 名誉の戦死者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月10日付）

「南京遂に陥落す」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月12日付夕刊）

「馬の家畜化と系統 加茂儀一」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月16日付夕刊）

「馬の家畜化と系統（下）加茂儀一」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月17日付夕刊）

「元旦・富士の頂上から 武運長久の祈願 親友の為め清水倶楽部員が スキーで登山して」〔雪中登山〕〔スキー登山〕〔武運長久登山〕〔清水市スキー倶楽部〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月19日付夕刊）

「猟友会の後援で 野兎の捕獲奨励 毛皮は取纏めて联合会へ」〔野うさぎ〕〔大日本聯合猟友会〕（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月19日付夕刊）

「注文は多いし値は騰る 素晴らしい沢庵景気 裾野地方は眼の廻る忙しさ」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月23日付）

「田上部隊 名誉の戦死傷者」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月24日付）

「北支散華・護国の英霊 あす無言の凱旋 五弓部隊長以下二十一柱」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月26日付）

「スキーヤーの為 乗車賃の割引き 駅待合室やデパートなどに スキー場便り掲出」（『静岡新報』1937年＝昭和12年12月26日付）

■1938年＝昭和13年

●歴史文化『静岡新報 VOL.180 昭和13年1月1日～2月15日』

「日独青年の握手 霊峰富士へ独乙の若人 互ひに本国を五月に出発」〔ヒトラージュメント〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月6日付）▲▲

「三島競馬大会 十五日から四日間 出場馬二百頭に及ばん」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月9日付）

「戦友に護られ 無言の凱旋する 護国の英霊 十四日原隊にて合同慰霊祭執行」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月12日付夕刊）

「岳麓プロツクの 経済更生計画 明年度から五ヶ年事業」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月13日付夕刊）

「田上部隊 名誉の戦傷者」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月13日付夕刊）

「三島競馬大会 第一日午前の成績」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月16日付夕刊）

「大宮町長辞表」〔角田源作〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月16日付夕刊）

「奇病 岳麓地方を悩ます フィラリア病 恩師の意志を継ぐ竹内氏 調査研究に乗り出す」〔竹内衛三〕〔フィラリア病〕〔風土病〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月16日付）

「三島競馬大会 第一日目午前の成績」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月16日付夕刊）

「午後は大穴二つ 三島競馬大会第一日」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月16日付）

「三島競馬 第三日目午前の成績」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月18日付夕刊）

「長編小説 清水次郎長 小島政二郎著 新潮社」〔広告〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月18日付夕刊）

「売場の窓口から 馬券を驚ぶかみ 忽ち観衆に囲まれ捕まる」〔三島競馬〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月18日付）

「三島競馬（第三日午後の成績）」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月18日付）

「三島競馬 盛況裡にきのふ終了」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月19日付）

「大宮に新設の 工業、商業校 工五十名商百名生徒募集 四月一日より開校」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月21日付）

「田上部隊 名誉の戦傷死者」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月23日付）

「富士出身兵だけで催した陣中座談会 何れも立派なるその戦死ぶりを聞いて感激 渡辺定男君の皇軍慰問歴訪談」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月26日付夕刊）

「ガソリン節約に 営業者苦心惨憺 バスの運転回数を減じ 或ひはバス運転中止等 続出」（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月27日付）

「富士山中腹を 大型バスの運行 計画着々と進む」〔御殿場口富士登山小型自動車組合〕〔富士山麓電気鉄道〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月28日付夕刊）▲▲

「富士山境界争ひ 円満妥協か 小富士附近を折半して」〔小富士県境争い〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年1月29日付）▲▲

「武装も凛々しく 岳麓に女軍出動 みぞれ交りの寒風を衝いて 佐野実業校女生徒の発火演習」〔軍事演習〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月1日付）

「岳麓の電線荒し 山中で大格闘 丈余の崖を警官諸とも転落 半年目にて遂に就縛」〔御殿場〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月2日付）

「爆弾的意見に 地方競馬出直し 馬匹改良から種目変更」（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月4日付夕刊）▲▲

「蒲原、富士川町にかけ 大工場建設計画 地方民は大いに期待」〔日本軽金属工業？〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月4日付夕刊）

「内地の春に魁して 富士に匂ふ桜花 金子議長土産の大写真 ○○部隊と田上部隊へ寄贈」（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月5日付）

「五十柱無言の凱旋 本月中旬ころ原隊へ」（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月5日付）

「鈴川毘沙門天 空前の賑ひ お賽銭が二千余円」（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月9日付夕刊）

「スキーヤーに 御殿場地方賑ふ」〔御殿場スキー場〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月10日付夕刊）

「陋劣極まるイギリス 東京大会に反対 開催地奪取の策動を開始」〔オリンピック〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月14日付）

「軍馬の慰霊塔 末広山に建立 来月十二日 除幕式举行」〔三島市〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月14日付）→三島市・末広山公園に現存している。

●歴史文化『静岡新報 VOL.181 昭和13年2月16日～3月31日』

「田上部隊 名誉の戦傷者」（『静岡新報』1938年＝昭和13年2月16日付）

「富士身延鉄道 国営促進運動 関係者が鉄道省訪問」（『静岡新報』1938年＝昭和

13年2月18日付)

「先づ富士登山から 大島ではキャンプ ナチ青少年三ヶ月の日程決定」〔ヒトラージャーゲント〕(『静岡新報』1938年=昭和13年2月21日付)

「富士山頂の勤務交代」〔頂上気象観測〕〔梶房吉〕(『静岡新報』1938年=昭和13年2月23日付)

「これは珍 雉と鶏の混血児 裾野の山小屋で育つ 性獐猛犬も猫も近づけぬ」(『静岡新報』1938年=昭和13年2月28日付)

「富士山で自殺 屍体発見さる」〔御殿場口〕(『静岡新報』1938年=昭和13年3月4日付)

「永へに！我日本の誇り 霊峰“富士”の姿 癒よ今秋 天然記念物に指定」(『静岡新報』1938年=昭和13年3月12日付)

「御殿場地方の降雪」(『静岡新報』1938年=昭和13年3月12日付)

「田上部隊 名誉の戦死者」(『静岡新報』1938年=昭和13年3月13日付)

「田上部隊 名誉の戦死者」(『静岡新報』1938年=昭和13年3月15日付夕刊)

「国家総動員法案 衆院 無修正通過せん きのふ政民両党の大勢決す」(『静岡新報』1938年=昭和13年3月15日付)

「第十二回オリンピック 東京開催 正式に決定す 米英の主張敗れ 会期は九月末」〔オリンピック〕(『静岡新報』1938年=昭和13年3月17日付夕刊)

「自動車 古溪荘に突入 生垣を破壊」(『静岡新報』1938年=昭和13年3月18日付)

「山腹の小御岳こそ 富士には“親”だ 愛鷹などゝほゞ同時代の出現 津屋博士が突止めた意外な事実」〔津屋弘達〕(『静岡新報』1938年=昭和13年3月18日付)

「盟邦の使節“フジヤマ見ました 美しい”と感嘆 知事や市長らと固い握手 けふ静岡駅を通過」〔眺望〕〔イタリア親善使節団〕(『静岡新報』1938年=昭和13年3月20日付夕刊)

「霊峰富士に接す 快適のハイコース 厚生省体力局の照会に依り 本県で五ヶ所を選定」〔眺望〕(『静岡新報』1938年=昭和13年3月22日付)

「富士山頂の 霊石を寄贈 独伊両国と大本営へ」(『静岡新報』1938年=昭和13年3月30日付)

「収容さる十三ヶ国 二百余名の学生達 朝夕に仰ぎみられる“フジヤマ”」〔三保松原〕〔眺望〕〔国際学友会サンマーハウス〕(『静岡新報』1938年=昭和13年3月31日付) → 「[愈々出来上つた](#)」(6月15日付夕刊)に続報。

「竹製ランドセル 岳麓へ注文殺到 思ひがけぬ明朗話題」〔印野〕(『静岡新報』1938年=昭和13年3月31日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.182 昭和13年4月1日～5月15日』

「中小学校教員大異動 実に千七百五十八名 休退職者二百三名に達す」(『静岡新報』1938年=昭和13年4月1日付夕刊)

「祈・連勝皇軍武運長久 レートクレーム」〔富士山カットの広告〕(『静岡新報』1938年=昭和13年4月3日付)

「砂の搬出を恐れ その路へ植樹 元吉原村の三区民が敢行準備 その一步前で漸く鎮撫

さる」〔鈴川の砂山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年4月15日付）

「富士修養農場と道場」〔朝霧高原〕〔大日本青年党〕〔満蒙開拓移民〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年4月20日付）

「霊峰富士と共に 世界に誇る静岡茶の真価 製産増加と風味の向上 相俟つて他県産を凌駕」（『静岡新報』1938年＝昭和13年4月21日付夕刊）

「富士郡下在住 半島人団結 新生会を組織 近く発会式」〔朝鮮人〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年4月21日付）

「グライダー飛行場を 富士山麓に開設 上井出村に五町歩を選定 井上少将がけふ調査」〔朝霧高原〕〔オリンピック〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月5日付）

「三島競馬大会 出場馬二百五十余頭 前人気盛ん」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月5日付）

「理想的とさる富士高原の“朝霧”東京大会のグライダー競技場候補地として きのみ井上少将等視察」〔オリンピック〕〔朝霧高原〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月7日付夕刊）

「上井出村地先に選定の グライダー飛行場 敷地寄附決定次第格納庫建設 十国峠は正式競技場に」〔オリンピック〕〔朝霧高原〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月10日付）

「賃金値上を叫び ストライキ断行 富士繊維会社ファイバー部 三百名が争議団を結成」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月12日付）

「田上部隊 名誉の戦死者」『静岡新報』1938年＝昭和13年5月12日付）

「富士繊維の争議 昨夜円満に解決 先づ昇給と入浴料の全廃」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月13日付夕刊）

「田上部隊の勇士 英霊〇〇柱 今夜声なき凱旋」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月13日付夕刊）

「三島競馬 第一日午前の成績」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月13日付夕刊）

「本月末凱旋の英霊と合せ 原隊で合同慰霊祭」〔田上部隊〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月13日付）

「三島競馬大会（第一日午後）」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月13日付）

「激減した 本県の小作争議 こゝ数年見ざる現象」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月14日付夕刊）

「三島競馬 第二日午前の成績」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月14日付夕刊）

「回効散 森田製薬所」〔富士に虹カットの広告〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月14日付夕刊）

「富士駿東の十ヶ村を 特別地域に制定 風致維持の為め各種の設備」〔国立公園〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月14日付）

「三島競馬（第二日午後）」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月14日付）

「田上部隊 名誉の戦傷者」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月15日付夕刊）

「三島競馬 第三日午前」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月15日付夕刊）

「トラックに代り 現はれた牛馬車 茶の盛期に入ると共に」（『静岡新報』1938年＝昭和13年5月15日付）

「三島競馬 第三日目午後の成績」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年5月15日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.183 昭和13年5月16日～6月30日』

「三島競馬 好成績裡に終了」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年5月16日付)

「伊国青年マンヂテー君 へふ、富士へ登山 昨日五湖巡りをなし」〔外国人登山〕〔雪中登山〕〔富士五湖〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年5月26日付)

「武運長久ハイキング」〔御殿場駅〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年5月26日付)

「半島人に日本精神訓練」〔清水署〕〔朝鮮人〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年5月26日付)

「中柏原区が 新駅設置の運動 鈴川、原両駅間」〔東田子の浦駅〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年5月28日付夕刊)

「松平伊豆守信綱 関係の古文書を発見 磐田郡御厨村医王寺で 何れも得難い資料」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月3日付)

「登山期に一ヶ月 吉田口で静岡茶の接待 其の外 内地販路拡張策いろゝゝ きのふ内販常務委員会で協議」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月4日付) →「フジ山吉田口で 静岡茶宣伝」(7月2日付夕刊)に続報。

「滞日日程 富士山麓で共同キャンプ 熱海、箱根を見学 ヒトラーユージェント派遣団」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月8日付)

「初夏に寄せる言葉 登山好きの私に 忘れえぬ新緑の富士 登山家 黒田米子女史談」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月9日付夕刊)

「徴発を恐れ馬籍を削った 不心得者に厳罰 嘘偽の届出をなし禁錮二ヶ月の判決 時局的重大警告の新判例」〔軍馬〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月9日付)

「八百米掘り下げれば 大量の石油が出る 富士郡大淵村で大掛りに着手 動機は天津教の神様のお告」〔富士山に石油を掘る〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月11日付夕刊) ▲▲→「原油にして一日七石」(10月9日付夕刊)、「学説が勝つか」(1939年=昭和14年5月17日付夕刊)、「富士は陸のもの」(6月24日夕刊)、「石油はやめて金鉱の採掘」(9月29日付夕刊)に続報があるほか、松尾四郎編『史話と伝説 富士山麓の巻』(松尾書店、昭和33年)に「富士山で石油を掘った話」(吉原、月橋隆正、元用度係長)が収録されている。

「オートバイで富士登山の壮挙 大阪キャプトン会社の大山選手 今夏登山期に決行？」〔変わり種登山〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月13日付)

「悪性ガスの泌み込んだ草を食べ 馬斃る 駿沼畜産組合でも対策協議」〔東京人絹沼津工場〕〔大気汚染〕〔汚水〕〔公害〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月14日付)

「愈々出来上った 三保松原の保健寮 七月十五日に入所式」〔国際学友会サンマーハウス〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月15日付夕刊)

「富士登山営業者懇談会」〔御殿場口〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月15日付夕刊)

「臭気と胸苦しき 眠られずと大挙し陳情 ガス問題に今度は附近住民 水産会が汚水分析調」〔東京人絹沼津工場〕〔大気汚染〕〔汚水〕〔公害〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月16日付)

「静岡出身の戦死者」〔田上部隊〕 (『静岡新報』 1938年=昭和13年6月16日付)

「ガソリンの節約 更に“遊覧バス”や“自家用”へ 競争路線へも相当手心」（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月18日付）

「硫酸場の操業中止」〔東京人絹沼津工場〕〔大気汚染〕〔汚水〕〔公害〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月18日付）

「岳麓にて歩砲聯合 実戦を偲ぶ夜襲戦 壮烈なる演習を挙行」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月21日付）

「富士山御招待 森永製菓」〔富士山麓廻遊きっぷ抽選の広告〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月21日付）→「当籤発表」（7月17日付）に抽選結果。

「毒ガスの発散に 附近民逃げ出す 人畜死傷し農作物枯死の騒ぎ 丸和製紙工場に強硬抗議 鼻を刺戟されフラ、となる 咽喉は爛れ吐瀉す 吉原署で取調べ中」〔塩素ガス〕〔大気汚染〕〔公害〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月23日付夕刊）

「木炭自動車の 認可願ひが殺到 心細くなつた補助金」（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月23日付夕刊）

「大宮町登山联合会」（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月24日付夕刊）

「祖国へ無言の凱旋 三州山系戦闘に赫々たる武勲 田上部隊の英霊四十五柱」（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月26日付夕刊）

「本県へお目見得の 薪炭瓦斯自動車 六台連つて来月八日」〔木炭自動車〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月28日付）

「旧幕時代の規程通り 下流へ水を送れ 名のみの方野用水に 大宮署が上流二ヶ村へ警告」〔水争い〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月29日付）

「富士観測署員 廿七日登山 菅原技師以下五名」〔頂上気象観測〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年6月29日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.184 昭和13年7月1日～8月15日』

「浮島沼の堤防決潰 原町は忽ち水浸し 一時は非常な騒ぎ」〔豪雨〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月1日付夕刊）

「フジ山吉田口で 静茶宣伝 冷涼快適な無料喫茶所」（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月2日付夕刊）

「浮島沼の氾濫で 路上三四尺浸水 原浮島間は船で交通 再度の雨に駿東沼津の惨害」〔豪雨〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月3日付）

「排水に使用する 重油欠乏で大困苦 元吉原の三新田組合の耕地」〔豪雨〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月3日付）

「陸の荒鷲九勇士 英霊悲しく凱旋 けふ原隊で合同慰霊祭」（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月3日付）

「愛憎のつきた雨 此四五日間の雨量だけで既に 毎年の梅雨期の実に三倍」〔豪雨〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月4日付）

「鷹岡村にて潤川決潰し 怒濤の如き水勢 附近身延線及び県道を切断 伝法、吉原方面へ進出」〔豪雨〕〔潤井川〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月4日付）

「浮島沼で船転覆 青年一名行方不明 二名は辛くも救助さる」〔豪雨〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月5日付夕刊）

「富士登山者」〔初登山者〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年7月5日付夕刊）

「ガソリン節約から 修学旅行中止説 遊覧バス使用は絶対禁止」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月5日付夕刊)

「開山の第一日に 一年ぶりで検挙 富士山頂の盗み発覚」 [窃盗] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月5日付)

「富士山麓の養兔王国 (上) 駿東郡農会技手 田代和男」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月5日付夕刊)

「富士山麓の養兔王国 (下) 駿東郡農会技手 田代和男」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月6日付夕刊)

「国防貯蓄に徴兵保険・出世保険 富国徴兵」 [富士山カットの広告] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月8日付)

「スポーツは急転か? 次の寵児はラヂオ体操やハイキング どう響く鉄鋼製品の制限 金剛杖に草鞋履き 登山姿の昔に返つて」 [銑鉄鋳物の使用統制] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月9日付夕刊)

「戦争に必要な馬 馬は可愛い動物です 日本の三名馬に就ての話」 [軍馬] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月10日付夕刊「小学生のページ」)

「ガソリンの配給 八月分は更に削減」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月10日付)

「猛暑の夏に鍛へよ 健康の山へ海へ 歩け♪と鉄道当局が ハイコースを選奨」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月10日付)

「清水山岳研究会員 今夏のプラン 三班に別れて出発」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月12日付夕刊)

「軍馬候補の鍛錬を兼ね 耐熱騎馬を決行 東西名士や女子も参加して 三島より箱根芦之湖へ」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月13日付夕刊)

「手を焼いた小作争議も 今年はどうし♪解決 非常時色は 濃く農村にしみ込んで」 (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月13日付夕刊)

「富士山頂で 戦歿勇士の慰霊祭 今夕登山を決行して」 [戦勝祈願登山] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月14日付)

「万国博覧会を延期し オリンピックを中止 関係相より閣議に報告 正式に決定す」 [オリンピック] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月16日付夕刊)

「大宮口の砂走り 改善して盛んにしたい」 [富士宮口砂走り] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月17日付夕刊) ▲▲

「当籤発表 富士山御招待 森永製菓」 [広告] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月17日付)

「防共盟邦登山隊 きのふ富士山へ 頂上で皇軍将士に感謝の黙禱」 [防共登山] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月18日付)

「日本一の長寿者が 富士頂上へ記念額 昨年登山した伊藤百十一歳翁」 [高齢者登山] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月22日付夕刊)

「富士山頂で 武運長久祈願 清水出身勇士の為 郷軍が夜間登山し」 [清水市在郷軍人会] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月24日付夕刊)

「県水試一行 富士登山」 [武運長久登山] (『静岡新報』 1938年=昭和13年7月

24日付)

「ゆふべ富士町身延鉄の 機関庫、車庫焼く 機関車、客貨車六輛焼失す」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付夕刊）

「飯沼知事の富士登山」（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付夕刊）

「謝出火御見舞 富士身延鉄道」〔広告〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付夕刊）

「今年こそ富士へ 今が登山の好期節!! 凡て登山者本位に規定された各種の料金」〔富士宮口砂走り〕〔お中道巡り〕〔登山組合联合会〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付）←大宮新道の提灯記事。トップの写真は「霊峰富士を繞りて」（1936年=昭和11年6月26日付）、「今年こそ富士へ」（1937年=昭和12年7月19日付）と同じものを使い、全体の構成も各記事内容も前回とほとんど同文。

「今年こそ富士へ 今が登山の好期節!! 諸設備年と共に固く 安心して登山の出来る大宮表口登山道」〔お鉢巡り〕〔富士宮口砂走り〕〔お中道巡り〕〔登山組合联合会〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付）←全体の構成も各記事内容も前回とほとんど同文。

「今年こそ富士へ 凡て登山者本位に規定された各種の料金」〔大宮町宿泊料及物価表〕〔山中休泊所〕〔登山自動車規定料金〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付）▲▲←〔強力案内料〕〔乗馬賃〕〔富士身延線運賃大割引〕の項消える。

「今年こそ富士へ 暑中御伺 王子製紙株式会社 三菱製紙株式会社」〔協賛広告〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付）

「今年こそ富士へ 祝発展 石川組 割烹旅館井沢屋 誉関醸造元山下本家 料亭旅館大孫 静岡官報販売所 東内科医院」〔協賛広告〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月28日付）

「お山詣り風景（大宮口）（後八、一五）大宮口大宮浅間神社境内より中継」〔浅間大社〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月30日付「JOPKラヂオ」）

「剛健登山旅行 浜名青年団で」〔武運長久登山〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月31日付）

「半島人百五十名 富士登山 皇軍武運長久祈願」〔朝鮮人〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月31日付）

「清水市女青団員 夜間富士登山 御来光を仰いで武運長久祈願」〔清水市女子青年団〕（『静岡新報』1938年=昭和13年7月31日付）→「清水市女青団富士登山」（8月10日付夕刊）に続報、台風で日程がずれたらしい。

「富士山大暴れ 山頂の風速四十米 登山者三百余名各室に避難 大宮御殿場両署で警戒」（『静岡新報』1938年=昭和13年8月3日付夕刊）

「東駿古代文化を示す 藤原時代の経塚 中には得難い経筒、白銀銅、刀剣等の遺品 駿東郡泉村茶畑で発掘」（『静岡新報』1938年=昭和13年8月4日付）

「富士山中荒れ続く 当分登山危険」（『静岡新報』1938年=昭和13年8月4日付）

「ドイツ青年使節 富士裾野で 戦時気分の幕営 刺身以外は何でも結構といふ」〔ヒトラユーゲント〕（『静岡新報』1938年=昭和13年8月7日付夕刊）

「保健寮の留学生登山」〔国際学友会サンマーハウス〕（『静岡新報』1938年=昭和

13年月日付)

「清水女青团富士登山」〔清水市女子青年団〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月10日付夕刊）

「優秀軍馬育成に 競馬にも改善を加ふ 新味を盛る特殊レース」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月11日付）

「日本平頂上で 次郎長劇ロケ PCLの一行で」〔映画〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月13日付夕刊）

「鈴木部隊 名誉の戦死傷者」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月13日付夕刊）

「八十二翁が 元気で富士登山 孫と共に大宮口から」〔高齢者登山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月14日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.185 昭和13年8月16日～9月30日』

「両隧道建設者に 叙勲と賜杯 有難き御沙汰拝す」〔丹那トンネル〕〔清水トンネル〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月16日付夕刊）

「学生の行軍には草鞋 ズツク靴の代りに藁草履・靴下も全廃 校長会議を開いて種々懇談」〔軍事演習〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月17日付）

「鈴木部隊 名誉の戦死傷者」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月18日付夕刊）

「盟邦の若人一けふ晴れの帝都入り 歓呼の嵐を浴びつゝ行進」〔ヒトラーユーゲント〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月18日付夕刊）

「横山部隊の戦死者 静岡市出身」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月18日付夕刊）

「駿東郡の要望で 県当局も諒解 県営甘藷問題円満に遂行せん」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月19日付）

「北満に散つた護国の英霊 あす無言の凱旋」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月19日付）

「富士大宮駅に改称 鉄道省へ陳情」〔大宮駅〕〔富士宮駅〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月19日付）

「憧憬れの富士へ ドイツ青少年団 きのみ先づ山中湖畔へ」〔ヒトラーユーゲント〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月20日付）

「ドイツ青少年団 待望の富士山へ けふ午前十一時半旭ヶ丘を出発 元気で登山の途に就く」〔ヒトラーユーゲント〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月21日付夕刊）

「紐育万国博へ 富士山の大写真 岡田紅陽に撮影させて」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月21日付夕刊）

→この仕事は岡田紅陽ではなく六桜社が仕上げることになり、「両万博出品 五十畳敷き」(10月5日付)に続報。

「深紅の空を背景の 富士に思はず歓声 モンペ姿で現れた松井大将 山中湖畔の野営第一夜」〔ヒトラーユーゲント〕〔外国人登山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月21日付夕刊）

「百貫男の富士登山」〔坂本彦作〕〔霊峰〕〔武運長久登山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月21日付夕刊）

「霊峰富士の頂上に固む 日独防共の誓ひ 両国の若人、暁かけて頂上へ 御殿場で本県の歓迎」〔ヒトラーユーゲント〕〔外国人登山〕〔防共登山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月22日付）

「鈴木大治少年 満洲で病死 産業戦士として 大宮町で準町葬」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月22日付）

「木暮部隊の四勇士 名誉の戦士」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月24日付夕刊）

「富士山上の救護所」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月24日付夕刊）

「富士山頂に航空医学研究所 けふ盛大に開所式」（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月24日付）

「富士十二姿態の日本画を贈呈 田方青年団からヒ総統へ」〔ヒトラーユーゲント〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月25日付夕刊）→「富士の画帖を」（9月30日付）に続報。

「ビンカケは国の恥 山中の物価は高い 三たび富士登山して 太白堂主人から本県へ注意」〔山中物価〕〔ごみ〕〔不衛生〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月25日付）

「五十年目 結ぶと云ふ 煤竹の実十数俵 軍馬の飼料に献納」〔竹の花〕〔富士郡大淵〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月25日付）

「自動車組合員富士登山」〔大宮町富士登山自動車組合〕〔武運長久登山〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年8月25日付）

「潤川の鉄橋工事」〔潤井川橋梁〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月3日付）

「富士山の閉山祭 七日大宮で」（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月4日付夕刊）

「身延鉄道の速度と輸送能力の試験 国鉄借上を前に仮試験」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月7日付）

「ヒトラーユーゲント 沼津で盛んに歓迎」〔ヒトラーユーゲント〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月11日付）

「富士身延鉄 癒よ来月から国営 賃金も廉くなつて 貨物等も増発して輸送円滑を期す 期待される産業の大開発」〔富士身延鉄道〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月12日付）

「女青团教員等を集め 大陸の花嫁講習 廿三日から富士郡上井出で」（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月12日付）

「本県の富士登山者 三万四百五十八人 下山者は六万四千二十四名 昨年に比し各減少」〔登山者数〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月14日付）

「郷土の誇り＝富士の雄姿」〔写真〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月16日付「皇軍慰問号」）

「鈴川海岸に大遊園地を新設 三ヶ年計画で工事」（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月18日付）

「富士で発見した帯“渦糸雲”麗はしき気象の芸術二題 廿二、三両日の学会で発表」〔天文学会〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月21日付夕刊）

「汚水の沿岸流出に 製紙工場側へ交渉 富士の両漁業組合から」〔公害〕〔田子浦村漁業組合〕〔岳浦漁業組合〕（『静岡新報』1938年＝昭和13年9月21日付夕刊）

「身延鉄道の輸送貨物 当分横浜経由か 電気機関車の増配給まで」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1938年=昭和13年9月22日付夕刊)

「身延鉄移管と各駅々長 抜擢される人々」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1938年=昭和13年9月24日付)

「富士身延鉄道 国営に移管 近く正式調印 来月一日より」(『静岡新報』1938年=昭和13年9月28日付)

「祝富士身延鉄道国営移管 富士鉄移管に沿線の歓呼 各種産業一段の発展を見ん 移管に活躍した人々 車窓に縫ふ気象絶景 産業と観光策愈々本格的へ」〔全ページ広告の提灯記事〕(『静岡新報』1938年=昭和13年9月28日付)

「霊峰を仰いで心身の鍛練に!! 富士山麓電鉄」〔広告〕(『静岡新報』1938年=昭和13年9月28日付)

「富士の画帖を 独逸青少年団へ 田方郡青年団から」〔ヒトラーユージェント〕(『静岡新報』1938年=昭和13年9月30日付)

「沼津の風光を絶賛 富士を眺め大喜び ペルー経済使節団一行」〔眺望〕(『静岡新報』1938年=昭和13年9月30日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.186 昭和13年10月1日～11月15日』

「身延線国有移管 けふ大宮町で調印式 料金は従来半額以下に」〔富士身延鉄道〕(『静岡新報』1938年=昭和13年10月1日付夕刊)

「富士山を死場所に 思案中の青年」〔自殺〕(『静岡新報』1938年=昭和13年10月1日付夕刊)

「国営移管と共に 従業員も引継ぐ 運輸保線で百余名増員 身延線初代駅長 一日付で十二名任命」(『静岡新報』1938年=昭和13年10月1日付)

「祝富士身延鉄道国営移管 富士鉄移管に大清水港の本格的飛躍 移管運動に終始専念された鈴木与平氏と今後の鈴与商店 市制へあと一步大宮町の躍進 崇巖の極官幣大社浅間神社」〔全ページ広告の提灯記事〕(『静岡新報』1938年=昭和13年10月1日付)

「今朝からいよゝゝ 身延線と改称運転 本月中旬大宮で盛大な祝賀会」(『静岡新報』1938年=昭和13年10月2日付)

「富士身延鉄道の国鉄移管に方りて 堀内良平」(『静岡新報』1938年=昭和13年10月2日付夕刊)

「両万博出品 五十畳敷き 富士の大写真 近くでは利かぬ眺望」〔秀麗富士〕〔ニューヨーク万国博〕〔六桜社のちの小西六〕(『静岡新報』1938年=昭和13年10月5日付夕刊) ▲▲ →伊豆箱根鉄道・修善寺駅構内に現物7分の1大の複製が掲示されており、『富士幻景—近代日本と富士の病』(小原真史監修・著、IZU PHOTO MUSEAM、2011年)に詳しい解説がある。

「国営身延線 初の事故 大宮富士間一時不通」(『静岡新報』1938年=昭和13年10月6日付夕刊)

「大石寺の僧侶 服毒自殺を遂ぐ」(『静岡新報』1938年=昭和13年10月6日付夕刊)

「原油にして一日七石 良質の石油湧く 八百米掘れば二千石 あす滝企画員総裁等視察」〔富士山に石油を掘る〕(『静岡新報』1938年=昭和13年10月9日付夕刊) ▲

▲←本文中に《昨報》《あす企画員総裁視察》とあるが、昨報も続報も見当たらない。「学説かつか」（1939年=昭和14年5月17日付夕刊）、「富士は陸のもの」（6月23日付）、「石油はやめて」（9月29日付）に見るように、富士山からは一滴の石油も出なかったのになぜこういう記事が載ったのか意味不明である。

「田子浦海岸の 大遊園地計画 近くいよゝゝ着工」（『静岡新報』1938年=昭和13年10月9日付夕刊）

「三島野重聯隊の 実弾射撃演習 来二十日から裾野で」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1938年=昭和13年10月15日付）

「富士身延鉄道 国営移管祝賀会 昨日大宮町で盛大に」（『静岡新報』1938年=昭和13年11月12日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.187 昭和13年11月16日～12月31日』

「大宮署が続々 国策違反で検挙 既に二十余名」（『静岡新報』1938年=昭和13年11月19日付）

「大宮町に計画の 理想的“公園墓地” 第一期工事を来月着工」〔舞々木〕（『静岡新報』1938年=昭和13年11月24日付）

「今秋の馬券売上げ 一億五千万円」〔競馬〕（『静岡新報』1938年=昭和13年11月29日付夕刊）

「富士裾野の滑空場にも補助 愛国切手寄附金初の割当決る」〔グライダー〕（『静岡新報』1938年=昭和13年11月30日付）

「雪の魅惑 スキーの季節 躍るスキーヤー 附近では富士山麓」〔御殿場スキー場〕〔山中湖畔スキー場〕（『静岡新報』1938年=昭和13年12月11日付）

「岳麓地方を脅かした 放火魔検挙さる 富士山一合目の山小屋で 空腹から火事泥の目的で」（『静岡新報』1938年=昭和13年12月17日付夕刊）

「清水スキー倶楽部」（『静岡新報』1938年=昭和13年12月20日付）

「大自然猛威と闘って 富士は俄に活況 科学挺身隊が浄雪蹴つて登山」〔中央气象台富士山頂観測所〕〔陸軍航空医学研究所〕〔雪中登山〕（『静岡新報』1938年=昭和13年12月27日付夕刊）

「少年少女勇しく 雪中の富士登山 元旦に頂上で遙拝すべく」〔小国民寒中富士登山隊〕〔稲葉真風〕〔雪中登山〕〔武運長久登山〕（『静岡新報』1938年=昭和13年12月29日付夕刊）

■1939年=昭和14年

●歴史文化『静岡新報 Vol.188 昭和14年1月1日～2月15日』

「伊豆・達磨山から眺めた富士山」〔写真〕（『静岡新報』1939年=昭和14年1月1日付）

「烈風と飛雪冒して みごと頂上を極む 日章旗を掲げ武運長久を祈願」〔兼岩元城〕〔雪中登山〕〔武運長久登山〕〔単独登山〕（『静岡新報』1939年=昭和14年1月4日付）

「身延線電車脱線 一時不通となる 今朝開通 原因不明で調査中」（『静岡新報』1939年=昭和14年1月11日付夕刊）

「日本一を誇る 大はさみを献納 岳麓“山の神社”の大祭に」〔御殿場在原里〕（『静岡新報』1939年=昭和14年1月18日付夕刊）

岡新報』1939年=昭和14年1月19日付)

「戦歿馬に感謝のため 全国一斉に大慰霊祭 二月、十八万の僧侶を動員執行」〔軍馬〕
〔仏教联合会〕(『静岡新報』1939年=昭和14年1月20日付夕刊)

「富士教育会 移民準備教育 四日から上井出村で」〔満蒙開拓移民〕(『静岡新報』1939年=昭和14年1月20日付)

「三島の春競馬 二月十九日から」〔三島競馬〕(『静岡新報』1939年=昭和14年1月21日付夕刊)

「岳麓一帯に亘り 乳牛増殖計画 取敢へず三百四十頭購入」(『静岡新報』1939年=昭和14年1月21日付夕刊)

「スケート場として 申し分のない狸沼 富士山西麓に唯一つの湖沼」〔田貫湖〕(『静岡新報』1939年=昭和14年1月15日付夕刊)

「吉原と附近四ヶ村 一気に合併実現へ 同時に市制を施行すべく邁進」〔吉原市〕(『静岡新報』1939年=昭和14年1月26日付) →「工業、富士市誕生へ」(4月7日付) に続報。

「競馬ファンに痛手 払戻し一割八分の減 今議会に提出される改正法案」(『静岡新報』1939年=昭和14年1月26日付夕刊)

「二市一村の地帯縫ふ 工業用水の大動脈 総工費百四十八万円の起債も諒解済み 県会提案の事業内容発表さる」〔日本軽金属清水工場〕(『静岡新報』1939年=昭和14年1月28日付夕刊)

「大宮のゼラチン工場 三月から着工」〔日本皮革〕(『静岡新報』1939年=昭和14年月日付)

「大宮町に続々と 工場を設置 敷地の買収行はる」(『静岡新報』1939年=昭和14年2月1日付夕刊)

「来る五日 狸沼でスケート大会」〔大宮町スキー倶楽部〕(『静岡新報』1939年=昭和14年2月3日付夕刊)

「大宮町に設置さる 日本三極製織工場 資本金百五十万円 三月初旬から着工」(『静岡新報』1939年=昭和14年2月9日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.189 昭和14年2月16日～3月31日』

「十九日から四日間 三島春季競馬挙行 前人気頗る旺ん」〔三島競馬〕(『静岡新報』1939年=昭和14年2月16日付)

「釜ヶ淵の釣橋折損し トラツク激流へ転落 昨夜、富士川中での難所にこの惨事 五名死体となつて引揚らる」〔釜口橋〕(『静岡新報』1939年=昭和14年2月18日付夕刊) →この記事末尾は《同所は二十年前の大正九年行軍中の豊橋輜重兵大隊の兵馬が墜落多数の犠牲者を出した事がある魔の釣橋である》と結んであるが、これは記者がうろ覚えで書いた間違いである。正しくは大正7年7月に発生した〔釜口橋切断事故〕であり、「◎豊橋歩兵第六十聯隊第八中隊の」(1918年=大正7年10月29日付)以下の記事を参照のこと。

「三島競馬大会 愈々けふ幕開き 素晴らしい盛況を予想さる」(『静岡新報』1939年=昭和14年2月19日付)

「愈よ軽金属両工場 仮事務所を新設 来月中旬から浚渫工事」〔日本軽金属蒲原工場〕

〔日本軽金属清水工場〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年2月21日付）

「人気ますゝ沸騰 雨中を最後まで緊張 三島春季競馬（第二日）」（『静岡新報』1939年＝昭和14年2月21日付）

「大穴の続出に フアン益々熱狂 三島春季競馬」〔三島競馬〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年2月23日付）

「工場地帯を設定し 誘致に乗り出す 大宮町積極的の活動」（『静岡新報』1939年＝昭和14年2月24日付夕刊）

「三島競馬（第四日）」（『静岡新報』1939年＝昭和14年2月24日付夕刊）

「秋山大尉等、護国の英霊 近く無言の凱旋 三部隊の勇士」（『静岡新報』1939年＝昭和14年2月24日付）

「地方競馬始つて以来の最高成績 三島春季競馬終る」〔三島競馬〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年2月24日付）

「富士少年隊八十三名 拓土戦士に応募 内七十七名合格決定」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年3月5日付）

「ゼラチン大宮 工場の敷地買収 二十六日地鎮祭」〔日本皮革〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年3月26日付夕刊）

「永久に刻むア号来航の盛儀 感激の版画 富士と桜を背景に 山本画伯の作品を贈る」〔巡洋艦アストリア号〕〔山岸主計〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年3月28日付夕刊）

「退職希望の多い割に 小範囲に止めた異動 小、中、青年学校教員異動けふ発表 通算総数千六百九十七名」（『静岡新報』1939年＝昭和14年3月31日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.190 昭和14年4月1日～5月15日』

「愛林日に表彰 模範村及び団体」〔白糸村〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年4月2日付）

「工業、富士市誕生へ 五ヶ町村が邁進 吉原を中心に伝法、島田、今泉、原田等が合併」（『静岡新報』1939年＝昭和14年4月7日付）

「けふ“愛馬の日”に厳かな“軍馬祭”大堀部隊長始め関係者多数参列 春雨冷たき宝台院で」（『静岡新報』1939年＝昭和14年4月8日付夕刊）

「青少年義勇軍富士少隊員 本県壮行会に臨み直ちに原訓練所へ」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年4月9日付夕刊）

「軍馬資源保護と種馬統制」（『静岡新報』1939年＝昭和14年4月19日付夕刊）

「身延線第二井之沢隧道内で列車脱線 長時間の不通に一時大混乱」（『静岡新報』1939年＝昭和14年4月24日付）

「存続か廃止か焼津競馬場 六月の競馬が最後 さてどうなるか？」（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月14日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.191 昭和14年5月16日～6月30日』

「学説勝つか、神がかり勝つか まだ出ぬ石油 八百九十五米まで掘り下げた大淵村岩倉の石油井」〔富士山に石油を掘る〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月17日付夕刊）▲▲

「岳麓上井出村に建設の修養（修養）道場竣工 十六日盛大に落成式 海拔一千米全国一

の理想郷」〔富士道場〕〔満蒙開拓青少年義勇軍〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月18日付夕刊）

「吉原、島田合併 本年中に実現 次で市制施行へ邁進」（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月21日付夕刊）

「相良に蘇峰会組織」〔徳富蘇峰〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月21日付夕刊）

「富士高原一帯で綿羊飼育の大計画 県畜産練が三百頭を試飼」〔朝霧高原〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月21日付）

「三島競馬場存置 焼津は廃止に内定す」（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月23日付）

「蒲原町当局の要求には月末回答 軽金属側工事は続行」〔日本軽金属〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月23日付夕刊）

「登山用品の物価協定」〔登山口営業組合〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月25日付夕刊）

「殺した牛の妄念 取調中も牛の如く唸る 廿余頭薬殺を自供してぐつすりと眠る 富士郡下の怪事件解決」（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月28日付夕刊）

「三島競馬大会は七月一日から 焼津は十二月十五日から」（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月28日付夕刊）

「富士登山期を前に 各営業者の協定 大体前年より幾分値下」〔物価〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月29日付）▲▲

「大宮芸妓組合 線香代値上げ 一時間一円卅二銭」（『静岡新報』1939年＝昭和14年5月31日付夕刊）

「小料理屋を一ヶ所に 大宮町で集団」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月2日付夕刊）

「第二次満蒙開拓青少年義勇軍 三十名 来る六日出発」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月2日付夕刊）

「登山客誘致の具体方法」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月2日付夕刊）

「ニッサン トラック・バス 日産自動車販売」〔広告〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月2日付）

「時局柄遊山旅行などよくないと檄文 三ヶ日町議の箱根旅行に横槍 処分問題も起り紛糾」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月5日付）

「東海道線北側の電柱取除け工場制限 車窓から眺む霊峰“フジヤマ”守るべく 岩淵原間 名勝地指定の申請」〔景観〕〔電線撤去〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月7日付）▲▲

「県に精動事務局 富士山の美化神聖運動 きのみ部長会議で種々決定」〔霊峰〕〔皇紀二千六百年記念事業〕〔美化運動〕〔電線撤去〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月8日付）一部▲▲

「下田富士雑記 深津政照」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月9日付夕刊「文芸」）

「岳麓で戦闘訓練 静聯初年兵けふ出発 十一日に大堀部隊長視察」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月9日付）

「午後十時以降の列車運転を陳情 大宮町で名鉄局へ」〔身延線〕〔国営化〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月11日付夕刊）

「営林委員九名辞表を提出 大宮の紛糾尚続く」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月12日付）

「納税滞納で競売 大宮の鳥岩方」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月12日付）

「現行制度最終を飾る三島競馬の開催 雨天順延で来る廿四日より四日間」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月13日付）

「高峰上原等ロケ」〔高峰美枝子〕〔上原健〕〔映画ロケ〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月13日付）

「第二期検閲を兼ね岳麓へ耐熱行軍 三泊露營の予定で」〔静岡聯隊古年次兵〕「上井出村」〔軍事演習〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月18日付）

「静清国道から岳麓へ炎天下演習行軍 静聯精鋭けさ二回に出発」〔静岡聯隊古年次兵〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月21日付夕刊）

「静岡村は第一の肥沃地 今年は大豊作 農作物の高価に大はじやぎ 花嫁探しの青木君談」〔満州農民移民〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月21日付夕刊）

「富士登山は大宮口から 鉄道省が大童で誘致」〔身延線国営化〕〔霊峰〕〔登拝〕▲▲

「富士登山は御殿場口 と一誘客に大童」〔霊峰〕〔御殿場口富士登山協会〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月22日付夕刊）▲▲

「新池を清掃 大宮町青年団の奉仕」〔浅間大社〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月23日付）〔浅間大社〕

「富士は陸のもの 海底火山に非ず 石油発掘から新学説」〔富士山に石油を掘る〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月24日付夕刊）▲▲

「植付不能の水田へ狸沼の水を放流 廿三日から数日間」〔田貫湖〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月24日付夕刊）

「岳麓へ緬羊試験場 農林省で設置の計画 三百町歩の放牧場を買収 此の機会に本県でも緬羊飼育奨励」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月24日付）

「三島競馬 静岡県畜産組合联合会」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月24日付）

「用水の放流から 漁場壊滅の恐れ 蒲原町漁業組合代表者が 出県して対策の陳情」〔日本金属工業〕〔富士川発電〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月24日付）

「現制度のお名残り 盛況予想の三島競馬 いよゝゝ本日より四日間」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月24日付）

「夏の海山は招く 登山も国策型で 草鞋ばきこそ理想的」〔統制品〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月24日付「家庭」）一部▲▲

「三島競馬大会延期 けふ第一日」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月25日付）

「雨中疾走のスリル 三島競馬大会（第一日）」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月26日付）

「複勝三着に十円の大穴 三島競馬（第二日）」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月28日付夕刊）

「護国の人柱 名誉の戦死者」（『静岡新報』1939年＝昭和14年6月28日付）

「人気益々沸騰 フアン熱狂 三島競馬大会二日目」（『静岡新報』1939年＝昭和14

年6月28日付)

「三島競馬 大穴続出」(『静岡新報』1939年=昭和14年6月29日付夕刊)

「御殿場口山開き 七月一日盛大に挙行」(『静岡新報』1939年=昭和14年6月29日付) ▲▲

「国威宣揚を祈願 静岡女友青年団の富士登山 体位向上を期して」〔国威宣揚登山〕(『静岡新報』1939年=昭和14年6月29日付)

「三島競馬 第三日(夕刊に続く)」(『静岡新報』1939年=昭和14年6月29日付)

●歴史文化『静岡新報 VOL.192 昭和14年7月1日～8月15日』

「三島競馬(最終日午後)」(『静岡新報』1939年=昭和14年7月1日付)

「在京防共聯盟国 親善の富士登山 一行六十名、十五日吉田口から 十六日大宮口へ下山」〔防共登山〕〔日独伊親善協会〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月2日付夕刊)

「勝手に他人の山で焚火をすれば罰金 指導標に悪戯しても罰金です」〔森林法〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月3日付)

「米人も富士登山」〔外国人登山〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月4日付夕刊)

「人口過剰の緩和策に 満洲へ農業移民 北駿五ヶ町村代表者が 満洲国へ実地調査に出発」〔満洲農業移民〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月5日付)

「南アルプスは島田口から 奇勝コースを紹介し 登山客の便宜を図る？」(『静岡新報』1939年=昭和14年7月5日付)

「登山者救護の警官配置」(『静岡新報』1939年=昭和14年7月7日付夕刊)

「八十八の老人 富士登山 孫の武運を祈って下山」〔高齢者登山〕〔霊峰〕〔武運長久登山〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月7日付夕刊)

「富士の見える東海道線 名勝として指定 岩淵から三島まで北側約十里」〔景観〕〔電柱〕〔煙突〕〔広告〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月8日付夕刊)

「富士山頂で国威宣揚の祈願 事変記念日に各団体が続々登山」〔霊峰〕〔満州事変〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付夕刊)

「富士開山奉告祭」〔浅間大社〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付夕刊)

「憲兵隊員が富士登山」〔満州事変〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付夕刊)

「本年も富士山に救護所開設 愛婦支部と県衛生課」(『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付)

「今年こそ富士へ 祈願登山の好期節!! 凡て登山者本位に規定された各種の料金」〔霊峰〕〔満州事変〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付) ▲▲←大宮新道の提灯記事。トップの写真は「霊峰富士を繞りて」(1936年=昭和11年6月26日付)、

「今年こそ富士へ」(1937年=昭和12年7月19日付)、(1938年=昭和13年7月28日付)と同じものを使い、全体の構成も各記事内容も満州事変が言及される以外は前回とほとんど同文。

「今年こそ富士へ 祈願登山の好期節!! 諸設備全く整ふ 安心して登山出来る大宮表口登山道」〔大宮口の特徴〕〔富士宮口砂走り〕〔お中道巡り〕〔登山組合联合会〕(『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付) ←全体の構成も各記事内容も前回とほとんど

同文。

「今年こそ富士へ 凡て登山者本位に規定された各種の料金」〔物価〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付）▲▲

「祈 武運長久 王子製紙株式会社 三島製紙株式会社 吉原町長・井出義昨 富士町長・松永安衛 原田村長・保科芳雄 静岡県蚕種業組合長・大石健蔵 富士梨業■購販■組合 東京電灯株式会社大宮出張所 東京電灯株式会社吉原出張所 合資会社寺田醬油店 大宮町合同運送株式会社 富士郡銀行同盟会 大宮町銀行同盟会」〔以上提灯記事の協賛広告〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月9日付）←この協賛広告は「霊峰富士を繞りて」（1936年=昭和11年6月26日付）、「今年こそ富士へ」（1937年=昭和12年7月19日付）、「1938年=昭和13年7月28日付」、そして今回の（1939年=昭和14年7月9日付）と、毎回目まぐるしく入れ替わっている。

「九合目の山小屋で番頭が重体 三人の人夫が発見 背負つて下山生命を救ふ」〔遭難〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月10日付）

「岳麓、三方原等で二百五十町歩開墾〔墾〕 輸出振興資源増産に大馬力をかける県当局」〔アルコール原料〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月12日付夕刊）

「富士山に救護所 十五日から」（『静岡新報』1939年=昭和14年7月13日付）

「在京防共聯盟国人富士登山団一行 十六日大宮口に下山 大宮町で簡素な歓迎の準備」〔防共登山〕〔日独伊親善協会〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月15日付夕刊）

「けふ登山する防共聯盟国人 あす大宮で県主催歓迎会」〔防共登山〕〔日独伊親善協会〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月15日付）

「熱海少年団富士登山」〔武運長久登山〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月15日付）

「防共富士登山隊 昨夜八合目目へ けさ頂上を極む予定」〔防共登山〕〔日独伊親善協会〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月16日付）

「防共の精神を一層に深めて富士登山隊一行大宮に下山 盛んなる歓迎を受け帰京す」〔防共登山〕〔日独伊親善協会〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月17日付）

「石室の満員から夜通しの登山者 富士山は非常な賑ひ」（『静岡新報』1939年=昭和14年7月17日付）〔夜間登山〕

「登山した三佐ちゃん」〔年少者登山〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月17日付）

「岳麓滝ヶ原で戦闘射撃演習 大堀部隊今夜出発」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月18日付夕刊）

「山も海も人の山 寄席、映画館も超満員 これでも事変下のお盆か？ 素晴らしく賑つた三日間」（『静岡新報』1939年=昭和14年7月18日付夕刊）

「満蒙開拓青少年義勇軍 明年は二ヶ中隊 五百名を県下から派遣 八ヶ所に於て講習会を開催 富士郡から既に二百廿名の希望 全部に聴講を許可」（『静岡新報』1939年=昭和14年7月18日付）

「自転車を負ひ二人が富士登山 武運長久を祈るべく」〔変わり種登山〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月20日付）

「田中第三師団長 岳麓の演習視察 今夕直ちに静岡へ」〔東富士演習場〕（『静岡新報』1939年=昭和14年7月21日付夕刊）

「満洲の静岡村に浅間神社の分社 建設補助費を県で交付」〔静岡浅間神社〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月21日付）

「全社員参加の電通富士登山会 来る廿三日 須走口で決行」（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月21日付）

「東京府各校児童が岳麓で訓練」〔御殿場小学校〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月22日付夕刊）

「駿東郡でも拓士を養成 大量に送り出すべく」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月22日付夕刊）

「登山客を喰ふ悪商人取締り 大宮署が陣営強化」〔富士泥〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月22日付夕刊）

「中等校生徒の富士登山激増 廿一日大宮口の登山 約二千名に達す」（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月23日付夕刊）

「松田バス愈々山麓へ合併 十五台従業員と共に」〔松田自動車〕〔富士山麓電気鉄道〕〔富士急〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月24日付）

「少年・富士山中で重傷を負ふ 室の石が落下して」〔遭難〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月24日付）

「遺失者と拾得者が感激の献金 富士山に咲いた美談」（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月24日付）

「御殿場実業 耐熱訓練」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月24日付）

「国立公園を中心 県内の開発を目的に勝地保護 県景勝地協会の設立」（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月27日付）

「新興パルプ工場の汚水 子持皮へ流入 流域水田の被害に当局へ陳情」〔東京人絹沼津工場〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月27日付）

「開拓青少年五百万計画 拍車を掛け邁進 義勇軍を全国に編成」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月29日付夕刊）

「管轄違ひ一と遭難者を見殺し 御殿場で昏睡の重態」〔救護所〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月29日付夕刊）

「富士へハイキング」〔清水市歩から会？〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月30日付）

「沼商生徒百卅六名 富士へ登山 頂上で武運長久」（『静岡新報』1939年＝昭和14年7月30日付）

「第二次ノモンハン事件 極東赤軍の大量侵攻」（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月3日付夕刊「時事解説」）

「岳麓で開始されたグライダー猛訓練 全国中等学校選抜教員に依り」〔朝霧帝国飛行協会〕

「咲いたりな 一本の山百合に百十五輪の花 素晴らしい美しさ」〔駿東郡北郷村〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月3日付夕刊）

「富士山全山を史蹟、名勝記念物に指定 本県から文部省へ申請」〔霊峰〕〔景観〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月3日付）

「第二次ノモンハン事件の概要（中）悉く優勢を示した 日満軍の機動・攻撃力」（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月4日付夕刊）

「お子供さんと知事富士登山 二日払暁大宮口から」〔小浜八弥〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月4日付夕刊）

「富士に憧れ少年家出」（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月5日付）

「望月大宮町長 辞意を決す 十五日町葬直後決行」〔望月文司〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月10日付夕刊）

「未教育の補充兵 岳麓で猛訓練 駒門廠舎に宿営」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月13日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.193 昭和14年8月16日～9月30日』

「隻脚白衣の十三勇士 富士登山の壮挙 付添ひ人十名と共に今夕大宮口から 十九日御殿場口へ下山」〔障害者登山〕〔武運長久登山〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月18日付夕刊）

「無能な者を町長にした町会も責任を負へ 望月町長への辞職勧告を繞つて 大宮町民の強硬意見」（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月18日付夕刊）

「御殿場・須走両口登山者五万九千廿九人 下山十二万九千八百五十人 記録破りの富士登山」〔登山者数〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月18日付夕刊）

「富士登山者にお中道廻り推奨 大宮町で実地調査」（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月18日付）

「景勝地協会を設けて補が開発に努力 富士登山者の為共同宿泊所」〔太郎坊ヒュッテ〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月18日付）→「太郎坊スキー場に」（12月1日）に続報。

「隻脚をお国に捧げた鉄脚の十三勇士 昨夕勇躍富士登山を決行 今夕頂上を極め、あす御殿場口へ下山」〔障害者登山〕〔武運長久登山〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月19日付夕刊）

「富士山頂に祈る 戦友の武運長久 亡き戦友達の冥福 鉄脚十三勇士吉田口へ下山」〔障害者登山〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月21日付）

「焼津競馬場 存続を要望さる 最終大会は十二月末」（『静岡新報』1939年＝昭和14年8月27日付夕刊）

「富士けふ閉山 登山者十八万余人 各営業者五割乃至十割の増収」〔登山者数〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年9月1日付）

「裾野で学生七万 近代的演習举行 今秋十一月 静岡外一府二県に依り」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年9月1日付）

「二万四千の学生を動員 秋の岳麓で決戦 十月二十三の二日間 一府三県軍教記念の大演習」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年9月4日付）

「富士御殿場口閉山式」〔武運長久祈願〕（『静岡新報』1939年＝昭和14年9月8日付）

「富士山名勝地として三ヶ所の指定要請 きのふ本県から文部省へ」（『静岡新報』19

39年＝昭和14年9月14日付)

「日ソ停戦協定成立 けふ午後一時発表さる」〔ノモンハン事件〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年9月17日付夕刊)

「岳麓人穴附近へ大演習場を設置 関係町村、土地売却を応諾」〔陸軍少年戦車兵学校〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年9月17日付夕刊)

「富士の初雪 三合目附近まで」(『静岡新報』1939年＝昭和14年9月22日付)

「石油はやめて金鉱の採掘 富士根大淵の村境で」〔富士山に石油を掘る〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年9月29日付夕刊) →原紙を綴じた喉側にかかっている本文はまったく読めず。静岡県立中央図書館のマイクロフィルムもその通りで、原紙閲覧を申し入れたが拒否された。

●歴史文化『静岡新報 Vol.194 昭和14年10月1日～11月15日』

「静岡女青团 岳麓巡り旅行 一泊二日の予定で」〔静岡女子青年団〕〔富士五湖〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月3日付)

「若人二万五千を動員し岳麓に展く立体戦 飛行部隊も参加 中等校聯合演習」〔陸軍現役将校学校配属令〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月5日付夕刊)〔軍事演習〕

「岳麓を中心に展開の壮烈なる近代立体戦 本県は伊豆混成並に甲駿隊として参加 記念学徒大演習の想定成る」〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月8日付)

「七分搗実行すれば県下で七万石浮ぶ 県農会では大賛成」〔精白米禁止〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月8日付)

「兎を沢山獲れ! 県から各猟友会支部へ激励」〔野うさぎ〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月8日付)

「岳麓の一大攻防戦 先づ沼津に敵前上陸 あす海洋部隊軍艦に乗込んで」〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月11日付夕刊)

「加藤御幸主務官一行 岳麓一帯を検分 小浜知事県首脳の案内で 各地とも奉迎準備進む」〔昭和天皇〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月11日付夕刊)

「天覧に供する 本県農産工芸品 千余点の製作に着手」〔昭和天皇〕〔軍事演習〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月11日付夕刊)

「壮烈千本浜の敵前上陸 松林中の敵と激戦 学徒隊大演習の火蓋は切らる 今暁を期して戦闘は開始さる」〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月12日付)

「岳麓に勇む若人二万 氷雨下に一大白兵戦 力強き学徒隊の活躍を完爾と見守る 香貫山統監部の河原田文相」〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月13日付夕刊)

「錦織なす裾野高原に 屍山血河の大攻防戦 大富士も震ふ、空軍の爆撃重砲の轟音 一府三県学徒聯合演習終る」〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月14日付夕刊)

「井出部隊の九勇士 名誉の戦傷」(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月14日付夕刊)

「二日に亘る学徒の演習 好成績に終了」〔軍事演習〕〔陸軍現役将校学校配属令〕(『静岡新報』1939年＝昭和14年10月14日付夕刊)

岡新報』1939年=昭和14年10月14日付)

「日本特殊繊維会社で大宮に工場設置 敷地三万坪の幹旋方を依頼 富丘村地内に決定か」(『静岡新報』1939年=昭和14年10月20日付夕刊)

「工業都“吉原市”の実現に向つて邁進 島田、今泉、原田、伝法への内交渉」昭和14年11月3日付夕刊)

「汚水に悩まざる岳浦漁業組合 転業資金要求の陳情」〔公害〕(『静岡新報』1939年=昭和14年11月3日付夕刊)

「秋深む富士大平原に天覧近衛師団大演習 最新科学兵此の威力を發揮」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1939年=昭和14年11月5日付)

「皇室御殊遇の近衛師団と今次演習 西大条参謀長語る」〔東富士演習場〕〔軍事演習〕〔昭和天皇〕(『静岡新報』1939年=昭和14年11月5日付)

「岳麓大平原に拝し奉る大元帥陛下の御英姿 錦旗の下に展かれた近代立体大攻防戦 畏し御乗馬にて御熱心に天覧 富岳も為めに震ふ 機械化部隊の活躍 壮烈・歩騎兵部隊の肉弾突撃 実戦宛らの大白兵戦」〔軍事演習〕〔昭和天皇〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1939年=昭和14年11月9日付夕刊)

「錦旗霊峰に映ゆる御馬前に大激戦展開 畏し六時間に亘らせられて御観戦 薄暮沼津御用邸に還幸」〔軍事演習〕〔昭和天皇〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1939年=昭和14年11月9日付)

「神社局を拡大強化し愈々神祇院創設 祭儀も全国的に統一せん」(『静岡新報』1939年=昭和14年11月15日付夕刊)

「三島三聯隊 富士で観測演習 十八日から四日間」〔軍事演習〕(『静岡新報』1939年=昭和14年11月15日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.195 昭和14年11月16日～12月31日』

「清水猟友会員 裾野で兎狩り 廿三四日三十余名で」〔野うさぎ〕(『静岡新報』1939年=昭和14年11月22日付)

「名勝地として 愛鷹連峰の奇勝 指定受くべく準備進む」(『静岡新報』1939年=昭和14年11月22日付)

「岳麓に設立される伊豆寒天会社 早くも各方面で期待される」(『静岡新報』1939年=昭和14年11月26日付夕刊)

「駿河湾内の汚泥水 徹底的に調査開始 県水試渡辺技手に依り」(『静岡新報』1939年=昭和14年11月29日付)

「太郎坊スキー場に建設さるヒュッテ 乾燥室のあるのが自慢」〔御殿場スキー場〕〔太郎坊ヒュッテ〕(『静岡新報』1939年=昭和14年12月1日付)

「丹那隧道に関して畏き御下問拝し鉄道省恐懼“工事誌”献上」〔丹那トンネル〕〔『丹那隧道概要』書誌不明〕〔『丹那隧道工事誌』鉄道省熱海建設事務所編、土木学会発行、1936年〕〔『熱海線建設要覧』鉄道省熱海建設事務所編・発行、1934年〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1939年=昭和14年12月3日付夕刊)

「大宮大相撲」〔石川自動車商会〕(『静岡新報』1939年=昭和14年12月3日付夕刊)

「スキー・スケート場の状況を掲出 ウィンタースポーツ奨励に 浜松駅の新たな試み」

(『静岡新報』1939年=昭和14年12月9日付)

「大宮町の元旦年賀式」〔門松〕(『静岡新報』1939年=昭和14年12月22日付夕刊)

■1940年=昭和15年

●歴史文化『静岡新報 Vol.196 昭和15年1月1日～2月15日』

「皇紀二千六百年と本社の記念事業 開山祭当日全国青年団代表一千人富士登拝 あらゆる部門に亘り史蹟百ヶ所指定 児童陸上競技大会優勝校の表彰」〔霊峰〕〔武運長久〕〔静岡県青年団〕〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月1日付) 一部▲▲

「寒風を冒し登山 山頂に献額 成功し無事御殿場へ下山す」〔雪中登山〕〔稲葉真風〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月4日付)

「三保から見た雪の富士を嘆賞 寮に入つた留学生達」〔国際学友会サンマーハウス〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月6日付)

「青少年義勇軍 岳麓で修養 富士郡下の七十名」〔富士道場〕〔満蒙開拓青少年義勇軍〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月7日付夕刊)

「世紀の謎 宇宙線を探る 地下、改訂に観測班 成層圏へもメスを下す」(『静岡新報』1940年=昭和15年1月9日付夕刊)

「競馬場の整理から 本年の競馬は一回か 県は三島を存続の意嚮」(『静岡新報』1940年=昭和15年1月10日付)

「廿数年の歴史もつ焼津競馬場 いよゝゝ廃止の運命 近く総会を開いて清算」(『静岡新報』1940年=昭和15年1月11日付)

「富士山十番林で三十四貫の大熊 大宮の上総氏が射止む 昨年十一月も卅二貫の大物を」(『静岡新報』1940年=昭和15年1月12日付夕刊)

「富士箱根国立園 道路計画発表さる」〔国立公園〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月12日付)

「富士町に温水湧出」〔温泉〕〔富士町蓼原〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月15日付)

「櫃原神宮の神火を捧持し富士山頂へ 紀元節の払暁荘厳なる建国祭」〔雪中登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月23日付夕刊)

「湯気を立てる井戸水 三十四度に達す 温泉として有望視さる」〔温泉〕〔富士町蓼原〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月24日付夕刊)

「浜高工山岳部員 雪中の富士登山 紀元の佳節頂上で御来迎を仰ぐ」〔浜松高等工業〕〔雪中登山〕〔建国祭登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月28日付)

「早大スケート選手 狸沼で練習」〔田貫湖〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月28日付)

「滝ヶ原の山火事 十町歩焼く」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1940年=昭和15年1月30日付)

「聖火富士山頂へ 二日櫃原を出発東上 十一日頂上本宮へ献納」〔雪中登山〕〔櫃原神宮〕〔建国祭〕(『静岡新報』1940年=昭和15年2月1日付夕刊)

「予定より二日早く 聖火大宮に入る 一先づ浅間神社に奉安 八日富士登山の壮途に就

く」〔建国祭〕〔雪中登山〕〔櫃原神宮〕〔浅間大社〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月7日付夕刊）

「井出部隊の十二勇士 壮烈な戦死」（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月7日付夕刊）

「勇躍御殿場口から聖火富士に登る 雪深き為め一行スキー姿で」〔雪中登山〕〔櫃原神宮〕〔御殿場口〕〔建国祭〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月9日付夕刊）

「富士宝永山頂からグライダー訓練 翼の誕生日を迎えて 花の四月・全国に航空週間」（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月11日付夕刊）

「鈴川毘沙門天祭典」（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月11日付夕刊）

「統制令を無視 地代値上げ お坊さん調べらる」〔伝法村妙栄寺〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月11日付夕刊）

「鈴川毘沙門天祭典 十四日から三日間盛大に執行 上下廿三本の臨時列車」（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月13日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.197 昭和15年2月16日～3月31日』

「昨日の参詣者 十三万人とは凄い 鈴川毘沙門天の賑ひ」（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月17日付夕刊）

「宗教団体法案 愈々四月一日から実施 各地に当事者を集めて打合せ」（『静岡新報』1940年＝昭和15年2月22日付夕刊）

「岳麓（山梨）に地震」（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月2日付）

「青少年義勇軍 静岡中隊々長決定 富士根出身の植松氏」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕〔植松貞治〕〔大宮町小学校〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月3日付）

「金!!出るぞ金!! 富士山麓と十勝沖 露天掘りも出来さうな岳麓」〔富士吉田〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月5日付夕刊）

「焼津競馬場 全然絶望に非ず 地元農林省の決定を期待」（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月9日付夕刊）

「四月一日の興亜奉公日 花見の享楽厳禁 闇取引売惜み買溜め排撃 けふ各方面へ示達」（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月17日付夕刊）

「行楽旅行はやめませう 鉄道側で懇談会」（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月17日付夕刊）

「日本一の折紙ついた富士山麓の寒天 二万五千斤目標に製造開始」〔駿東郡〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月18日付）

「北山村の山火事 折柄の烈風に忽ち四方に延焼 漸く消止む」（『静岡新報』1940年＝昭和15年3月29日付）

●歴史文化『静岡新報 Vol.198 昭和15年4月1日～5月15日』

「中、小、青校を通じて未曾有の大異動断行 各校合算の総数二千名突破 優良教員を普遍的に配置 人的資源の不足に 思ふに任せぬ異動 高野本県学務部長談」（『静岡新報』1940年＝昭和15年4月1日付）

「岳麓の原野百町歩 陸軍省へ提供 大宮町外六ヶ町村が買収して」〔陸軍少年戦車兵学校〕〔秣場組合〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年4月6日付夕刊）

「物云はぬ勇士に 感謝捧げよ けふ、愛馬デーの催し」〔軍馬〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年4月6日付夕刊）

0年＝昭和15年4月7日付)

「愈よ鉄道沿線の美化運動に乗出す 各駅には空地を利用し草花を」〔景観〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年4月7日付)

「汪、周両氏に富士の霊石贈呈 アジア防共懇談会から」〔汪精衛〕〔周仏海〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年4月7日付)

「摂政・御登山記念日の七月二十七日を期し 山頂に全国青年記念大会 大日本青年団後援、県団並本社主催にて」〔霊峰〕〔武運長久〕〔二千六百年〕〔昭和天皇〕〔静岡県青年団〕〔静岡新報社〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年4月13日付)

「岳麓四ヶ町村で紙幣用三椏栽培 富士郡農会で斡旋指導」〔ミツマタ〕〔富士根村〕〔大宮町〕〔北山村〕〔大淵村〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年4月14日付)

「“旭日の富士”の写真を汪精衛氏に寄贈 静岡の荒井氏から」〔荒井勝衛〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年4月26日付) →「富士の写真に汪首席から謝需」(7月12日付)に続報。

「お茶は静岡・山は富士」〔写真〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年4月9日付)

「いよゝゝけふより三椏工業操業」〔日本三椏工業〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年5月1日付)

「富士山麓で静岡聯隊猛訓練 六日から廿一日まで」〔上井出村〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年5月4日付)

「本年の神饌田 大宮町に決定 奉耕者は塩川政次氏」(『静岡新報』1940年＝昭和15年5月8日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.199 昭和15年5月16日～6月29日』

「大宮郵便局 旧役場跡に移転 通信省直営で新築」(『静岡新報』1940年＝昭和15年5月22日付)

「山麓自動車墜落し乗客廿余名負傷 昨日蒲原地先で操縦を過り」〔富士山麓電気鉄道〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年5月22日付)

「富士開山を前に登山期物価協定 静岡・山梨両県で」(『静岡新報』1940年＝昭和15年5月25日付) ▲▲

「吉原へ合併 伝法村意見一致 大吉原建設軌道に乗る」(『静岡新報』1940年＝昭和15年5月31日付)

「焼津競馬場 本格的存続運動 近く県から発表されん」(『静岡新報』1940年＝昭和15年6月2日付)

「紀元二千六百年記念 富士山頂全国青年大会 主催 静岡県青年団・静岡新報社 後援 大日本青年団・静岡県大宮町」〔社告〕〔霊峰〕〔浅間大社〕〔国威宣揚〕〔武運長久〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年6月9日ふ・6月10日付・6月11日付・6月12日付・6月13日付・6月14日付・6月15日付) ▲▲

「賃金の引上を行ひ 木炭増産の奨励 減産著しき駿東郡で」(『静岡新報』1940年＝昭和15年6月14日付)

「霊峰富士の登拝者 二十万を突破か 各地から団体申込の殺到 大宮口で準備を開始」〔登山者数〕〔浅間大社〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年6月15日付夕刊)

「紀元二千六百年 霊峰登拝 七月十一日より八月卅一日まで 富士山本宮浅間大社奥

宮」〔登山期間〕〔広告ポスター〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月15日付夕刊）

「静岡聯隊 岳麓で耐熱演習 きのふ軍用列車で出発」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月19日付）

「富士登山路に静岡茶の接待所 大宮口二合目附近で」（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月21日付夕刊）

「各府県から続々参加 富士山頂青年大会 徳島外二県からは早くも参加八名の通告」〔富士山頂全国青年大会〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月25日付夕刊）

「拾った不発弾が爆発し 無惨、夫婦即死す 嬰兒と馬一頭も大火傷」〔上井出村〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月28日付）→「家財道具も滅茶々々」（6月29日付夕刊）に続報。

「富士八合目に日赤救護所 七月十六日から開設」〔大宮口〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月29日付夕刊）

「富士郡下の小学生が野鼠退治に奉仕 御料林詰所に交替で宿泊し」〔野ねずみ〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月29日付夕刊）

「家財道具も滅茶々々 恐しい爆発の現状 火薬を抜取らんとして此惨事」〔不発弾〕〔上井出村〕〔軍事演習〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月29日付夕刊）

「富士山表口の諸物価協定会 来月三日大宮小校学で」（『静岡新報』1940年＝昭和15年6月29日付夕刊）

●歴史文化『静岡新報 Vol.200 昭和15年7月1日～8月15日』

「屋外窃盗罪で大宮署へ告訴 大麦を刈り取られ」〔野荒らし〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月1日付）

「講演 軍用保護馬の検査について 静岡県経済部長 沖森源一」〔軍馬〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月1日付「JOPKラヂオ」）

「沖縄からは、けふ電報で参加申込み 県青年団、本社共同主催の 富士山頂青年大会盛況」〔富士山頂全国青年大会〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月3日付夕刊）

「山は招く 営業者の『自粛』暴利を貪ぶることなきやう設定した協定値段」〔物価〕〔大宮登山口営業組合〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月3日付）▲▲

「下内田で発見された次郎長夫妻の写真 乾分高田新亀の親戚方から」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月4日付）

「富士山頂で厳粛な献茶式 六日早朝登山して」〔二千六百年〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月5日付）

「三勇士戦死 二十勇士戦傷 井出部隊原隊発表」（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月5日付）

「富士登山口に救護所開設 県衛生課と日赤で」〔大宮口〕〔御殿場口〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月5日付）

「夏山は招く 登山者に必要な天気予測法【上】冒険が最もいけない 理学士 原田三夫」（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月6日付）

「登山も自粛 登山者増加の割合に金の落ちぬ地元」〔日の丸弁当〕〔日帰り登山〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年7月6日付）

「夏山は招く 登山者に必要な天気予測の知識【下】向ふ見ずの冒険を慎め 理学士 原田三夫」(『静岡新報』1940年=昭和15年7月7日付)

「紀元二千六百年記念富士山頂全国青年大会」〔社告〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月7日・7月8日・7月9日・7月11日・7月12日・7月13日・7月14日・7月15日・7月18日・7月22日・7月24日夕刊・7月24日) ▲▲

「富士と茶摘み 写真を撮影 岩松村高原茶園で」(『静岡新報』1940年=昭和15年7月8日)

「登山期を前に大宮口の施設 滞りなく整備さる」〔電話〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月8日)

「紀元二千六百年記念 仰げ霊峰 富士山展覧会 伊勢丹」〔広告〕昭和15年7月9日付)

「三極栽培に就いて 篤農青年座談会発表録 上野村青年団 佐野鉄男氏」〔ミツマタ〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月10日付夕刊)

「外地からも参加し他府県申込六十余名 静岡県青年団及本社主催 富士山頂青年大会盛況」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月10日付)

「富士山二合目に青年の屍体 既に白骨と化して」〔大宮口〕〔遭難〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月11日付夕刊)

「富士の写真に汪首席から謝需」(『静岡新報』1940年=昭和15年7月12日付)

「富士山頂全国青年大会 けふ実行方法打合 主催者側と地元後援者等 大宮町役場に集合して」(『静岡新報』1940年=昭和15年7月13日付)

「富士御殿場口 物価協定決定」(『静岡新報』1940年=昭和15年7月14日付) ▲▲

「富士山頂全国青年大会 準備着々進む 今後、大宮町役場に事務所を」(『静岡新報』1940年=昭和15年7月15日付)

「富士山頂青年大会に磐田から五十余名 正副団長以下参加に決定」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月16日付夕刊)

「身延線の乗客激増 国鉄移管前の五倍 富士登山期に入り更に増加」(『静岡新報』1940年=昭和15年7月16日付)

「水田十五町歩 泥沼と化す 鈴川地先で一騒ぎ」〔豪雨〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月16日付)

「富士山中の強風 四合目以上は登山不能」〔豪雨〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月17日付夕刊)

「浮島沼一帯の水田 完遂七尺に及ぶ 海水逆流水稲全滅の恐れ」〔豪雨〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月17日付) →「五十町歩の被害水田」(7月24日付) に続報。

「国学院大学生 富士山で行方不明 九日下山の途中から」〔遭難〕〔大久保春道〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月18日付夕刊) →「国大生の行方」(7月20日付夕刊)、
「行方不明の国大生」(8月10日付夕刊)、
「富士に遭難白骨死体」1941年=昭和16年8月4日付) に続報。

「土曜から日曜へ 夜間富士登山 奨健歩行会支部の催し」〔夜間登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年7月19日付)

「国大生の行方 依然手係りなし 近く第二次捜索開始」〔遭難〕〔大久保春道〕(『静岡

岡新報』1940年＝昭和15年7月20日付)

「富士山頂で武運長久祈願 白衣の天使達の登山」〔日赤静岡病院看護婦養成所〕〔夜間登山〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月21日付)

「富士山頂に於て森永紅茶接待 七月廿日より末日まで」(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月22日付)

「富士登山新記録 きのふ一日で三万五千人」〔登山者数〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月23日付夕刊)

「元吉原村で 青年修養道場 内原訓練所に模して」(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月23日付夕刊)

「参加六百五十余名 富士山頂青年大会 二十六日山麓大会の状況 廿七日夕・録音放送さる 知事も参加決定 山麓大会で訓示」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月23日付)

「五十町歩の被害水田 全部植替へ終了 肥培さへ充分なら普通作予想」〔浮島沼〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月24日付)

「けふ二千六百年を記念し全国青年大会開催 神域に六百代表参集して＝第一日山麓の行事」〔浅間大社〕〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月27日付夕刊)

「式に続いて講演会 四王天中将の熱弁 大盛況裡に第一日を終る＝全国青年記念大会 小浜知事訓示」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月27日付)

「大会の序曲から本社映画班活動 大会の華 大行進等を撮影 青年大会状況の録音放送は今夕」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月27日付)

「皇紀二千六百年記念 祝富士山頂上全国青年大会」〔全面協賛広告〕昭和15年7月27日付)

「奥の宮社頭に額き国威宣揚を祈願 天機並後機嫌奉伺の後皇軍感謝決議＝全国青年大会 第二日」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月28日付夕刊)

「皇紀二千六百年記念 祝富士山頂上全国青年大会」〔全面協賛広告〕昭和15年7月28日付夕刊)

「富士山頂青年大会 行事滞りなく終了 山頂で解散下山の途につく」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月28日付)

「富士山頂青年大会 本県青年団並本社主催 写真グラフ」〔写真〕〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月29日付)

「金剛杖に“日の丸”鉢巻 超豆部隊が登山 正月生れの赤ちゃんも背に」〔変わり種登山〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月29日付)

「青年団に先行して霊峰登拝の記 芦川生」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月30日付)

「富士山頂全国青年大会 参加登山感想記【1】大石森太郎記」(『静岡新報』1940年＝昭和15年7月31日付夕刊)

「青年団に先行して霊峰登拝の記(二) 芦川生」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』

1940年=昭和15年7月31日付)

「富士山頂全国青年大会 参加登山感想記【2】大石森太郎記」(『静岡新報』1940年=昭和15年8月1日付夕刊)

「九十五歳を先頭に老人連の富士登山十二名で昨夜大宮泊り」〔高齢者登山〕〔国威宣揚〕〔武運長久〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月1日付)

「富士山頂全国青年大会 参加登山感想記【3】大石森太郎記」(『静岡新報』1940年=昭和15年8月2日付夕刊)

「九十五の老翁を先頭に 今暁・富士へ登山 素晴らしい元気で大宮出発」〔高齢者登山〕〔敵国降伏〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月2日付夕刊)

「お握り三個ペロリ スタコラ七合目へ 元気な九十五翁部隊長 けふ、敵国降伏祈願」〔高齢者登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月2日付)

「米一俵背負って富士へ登山 八十八老翁の壮挙」〔高齢者登山〕〔武運長久〕〔国威宣揚〕〔変わり種登山〕〔米寿登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月2日付)

「老人鉄脚部隊 無事頂上へ 感激の涙で敵国降伏祈願」〔高齢者登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月3日付)

「富士山頂青年大会に出席して

此の感激を永遠に 福井県丹生郡萩野村青年団長 佐々木稔

記念大会に出席して 埼玉県聯合青年団幹事 池田耕三」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月6日付)

「米一俵を背負って八十八翁富士登拝 きのふ元気で大宮口から」〔高齢者登山〕〔武運長久〕〔変わり種登山〕〔米寿登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月8日付)

「富士山頂青年大会に出席して

感銘深き大会 福井県足羽郡■生青年団長 前川広

生涯の感銘 山口市青年団 吉田弘」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月8日付)

「行方不明の国大生 第三次大捜査 大沢を中心として開始さる」〔遭難〕〔大久保春道〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月10日付夕刊) →「富士に遭難白骨死体」(1941年=昭和16年8月4日付)に続報。

「大吉原市実現へ 先づ伝法村と合併 続いて原田、今泉両村と交渉」(『静岡新報』1940年=昭和15年8月10日付夕刊)

「大宮の接客業者代表 富士山頂上で祈願 武運長久と国威の宣揚」(『静岡新報』1940年=昭和15年8月10日付夕刊)

「富士山頂青年大会に出席して

山頂を極める勇猛心 聖業を完遂せよ 下田町青年団支部長 渡辺春野

大会に列して 愛知県代表 有我三郎」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月11日付)

「富士山頂青年大会に出席して

感激の至り 栃木県安蘇郡堀末町青年団中 五箇作次郎

言語に絶する感激 石川県鳳至郡住吉村青年団 横山広政」〔富士山頂全国青年大会〕(『静岡新報』1940年=昭和15年8月12日付)

「富丘村と合併して市制を施行か 大宮町が県の意嚮打診」 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 8月 14日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.201 昭和 15年 8月 16日～9月 30日』

「中部第三部隊 裾野で野外演習 根岸大佐以下全員参加」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 8月 16日付夕刊)

「今年の富士登山者ザツト廿五万人 前年に比し九万人増」〔登山者数〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 8月 22日付夕刊)

「寺院教会等の不要金具献納運動 来二日県に各代表を集め打合」〔金属回収〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 8月 23日付)

「大宮署管内 各種結社解散 新体制に即応して」 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 8月 28日付)

「登山家冠松太郎氏 富士登山」〔冠松次郎〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 8月 28日付) ▲▲

「中部第三部隊一岳麓で演習 六日から十四日まで」〔軍事演習〕〔山岳戦〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 4日付)

「根府川駅構内に大岩石が落下 上下線とも一時不通となり大混雑」〔東海道本線〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 6日付)

「白衣勇士の慰問に霊峰富士の額献納 平口画伯筆、西益津郷軍より」〔平口勝雄〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 6日付)

「ドンキ性(亜炭の一種)大鉱脈 富士郡下で発見 二百万坪の採掘許可さる」〔土瀝青?〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 13日付)

「富士タクシー 吉原署管内の業者大同団結」 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 18日付)

「競馬も土・日・休日に お酒持参も禁止 競馬の大改善案漸く決定」 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 21日付夕刊)

「富士山から水蒸気 山梨側大沢附近から噴出」 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 28日付夕刊)

「富士・鈴川両駅に拾年目で人力車 十台づゝ颯爽と出現」 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 9日付夕刊)

「田貫沼へ稚魚一万五千尾放流」〔魚種不明〕〔田貫湖〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 9月 20日付)〔田貫湖〕

●歴史文化『静岡新報 VOL.202 昭和 15年 10月 1日～11月 15日』

「岳麓に露營し演習 壮烈なる払暁線へ 駿東部二市四郡青校生聯合」〔軍事演習〕〔青年学校〕〔東富士演習場〕〔二千六百年記念〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 10月 5日付)

「焼津競馬場の存置方を陳情 軍用保護馬指導員会」〔軍馬〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 10月 8日付)

「岳麓に前線を偲ぶ戦闘演習を展開 けふ暁暗を衝いて屯営進発」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 10月 12日付)

「愛鷹山登山のハイク」 (『静岡新報』 1940年＝昭和 15年 10月 12日付)

「神饌田拔穂式 廿六日厳かに執行」〔塩川正治〕〔大宮町野中〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年10月13日付夕刊）

「秋色濃き岳麓に一大攻防戦展開 廿四五両日 県下青校聯合演習」〔軍事演習〕〔青年学校〕〔東富士演習場〕〔二千六百年記念〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年10月17日付）

「不急旅行や遊覧旅行者 強権で乗車禁止 不急品の輸送をも統制」（『静岡新報』1940年＝昭和15年10月24日付夕刊）

「岳麓の秋を彩る青校生の攻防演習 今夕いよゝゝ行動を開始」〔軍事演習〕〔青年学校〕〔東富士演習場〕〔二千六百年記念〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年10月24日付）

「森林資源開発に詳細な調査実施 本県下全山林に対して」（『静岡新報』1940年＝昭和15年10月26日付）

「秋空一碧の裾野高原に壮烈な遭遇戦展開 青校聯合演習滞りなく終了」〔軍事演習〕〔青年学校〕〔東富士演習場〕〔二千六百年記念〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年10月26日付）

「大宮浅間神社 祭典近づく 町内は明朗な装飾」〔浅間大社〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月2日付夕刊）

「富士山中に男の変死体」〔大宮口〕〔自殺〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月7日付）

「大宮招魂祭」〔浅間大社〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月6日付）

「霊峰一きは映え 二百万県民の熱誠奉祝 夜は盛んなる提灯行列行はる」〔二千六百年記念式〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月11日付）

「神饌田米穀奉頌式を執行」〔大宮町〕〔塩川儀作〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月12日付）

「けふは十石峠で富士山に対面 熱海に着いたヒットラー・ユーゲント」〔ヒットラーユーゲント〕〔展望〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月13日付）

「日本平より眺望 其の景勝を賞讃 ヒットラー・ユーゲント来静」〔ヒットラーユーゲント〕〔展望〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月15日付）

「憧れの富士を見て協和会少年の歓喜 玉穂小学校で美しき交驩」〔満洲国内鉄道愛護団選抜協和会少年団派遣〕〔展望〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月15日付）

●歴史文化『静岡新報 VOL.203 昭和15年11月16日～12月31日』

「前線慰問袋に“次郎長物語” 田中屋百貨店で発売中」〔清水次郎長〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月16日付）

「突風に吹飛ばされ噴火口に墜落惨死 雪中富士登山の少年」〔雪中登山〕〔遭難〕〔梶房吉〕（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月19日付）

「焼津競馬存置に鍛錬馬指導員が奮起」（『静岡新報』1940年＝昭和15年11月22日付夕刊）

「本県の競馬場は遂に三島と決定 けふ県畜産会から申請手続き」（『静岡新報』1940年＝昭和15年12月3日付）

「六代目から清水へ 次郎長の定紋調べ“次郎長物語”の著者方へ速達」〔清水次郎長〕〔尾上菊五郎〕〔『実説次郎長物語』河原井喜久雄著、清水次郎長会発行、1940年〕

(『静岡新報』1940年=昭和15年12月5日付夕刊)

「岳麓地帯の寒天工場 統合を計画」(『静岡新報』1940年=昭和15年12月5日付夕刊)

「大陸の花嫁候補 大石寺に参籠訓練 五十三名元気で朗かに」〔大日本聯合女子青年団〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月5日付)

「大宮浅間神社に一ヶ年十五石 日本米の配給許可」〔浅間大社〕〔米穀国家管理法〕〔供米〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月8日付夕刊)

「画壇の歴々が岳麓に彩管道場 美術界にも新体制」(『静岡新報』1940年=昭和15年12月12日付夕刊)

「山麓御料林地内に十町歩記念植樹 大宮町が二千六百年で」(『静岡新報』1940年=昭和15年12月18日付夕刊)

「お布施は寺院の収入に 僧侶は月給制度 地獄の沙汰も金次第を一掃」(『静岡新報』1940年=昭和15年12月19日付)

「三島・初の競馬 一月廿四日からと内定」〔三島競馬〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月19日付)

「職員生徒三百余名 印野山麓で製炭 御実校が製炭報国の第一線へ」〔御殿場実業学校〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月20日付)

「山麓の寒天工場 いよゝゝ製造開始」〔日本寒天統制株式会社〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月20日付)

「軍用保護馬競走 出場馬百四十頭」〔三島競馬〕〔軍馬〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月21日付)

「保護馬鍛錬競走 出場馬下検査」〔三島競馬〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月23日付)

「八高山岳部員 富士雪中登山」〔元旦登山〕〔極地法登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月26日付)

「全山上に白一色 白雪蹴つて登山 意気天を衝く八高山岳部員」〔極地法登山〕〔雪中登山〕〔元旦登山〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月28日付夕刊)

「分村の『富士郷』へ 急遽第一次本隊を 来月八日五十名を選抜」〔満州農民移民〕(『静岡新報』1940年=昭和15年12月28日付)

■1941年=昭和16年

●歴史文化『静岡新報 Vol.204 昭和16年1月1日～2月15日』

「満洲国牡丹江省へ 愛鷹村分村計画 近く代表者二名現地へ出発」(『静岡新報』1941年=昭和16年15年1月4日付)

「雪の富士へ研究の八高山岳部員一行 頂上は零下三十度前後」〔極地法登山〕〔雪中登山〕〔元旦登山〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月4日付)

「軍用保護馬競走に出場馬決定」〔三島競馬〕〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月9日付)

「御用商人合併経営 裾野演習場で」〔板妻・滝河原廠舎〕〔駒門廠舎〕〔東富士演習場〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月9日付)

「富士郡農会の神饌田 田子浦に決定」(『静岡新報』1941年=昭和16年1月9日付)
「太郎坊スキー場附近 積雪八九寸 スキーヤを待つ準備なる」〔御殿場スキー場〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月10日付)

「印野村少年警防団 自転車隊組織 少女団はバケツ部隊」(『静岡新報』1941年=昭和16年1月10日付)

「新体制下の神道 十三派聯合会成る 二月四日教育会館に結成式举行」(『静岡新報』1941年=昭和16年1月11日付) → 「十三派を一丸に」(2月7日付夕刊) に続報。

「準備なつた三島初競馬 出場百三十頭決定」〔三島競馬〕〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月12日付夕刊)

「軍用保護馬競走 廿三日から四日間開催 賭博行為嚴重取締り」〔三島競馬〕〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月18日付)

「日輪兵舎に合宿 張切る義勇軍 富士小隊の七十一名」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕(『静岡新報』1941年=昭和16年月日付)

「昭和十六年第一回軍用保護馬 三島鍛錬馬競走 …… 主催静岡県畜産組合聯合会」〔広告〕〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月18日付、1月23日付)

「清水港から甲府市へ自動車道路計画 山梨側も非常な乗気で」(『静岡新報』1941年=昭和16年1月19日付夕刊)

「新採点法に興味呼ぶ 保護馬鍛錬競走 いよゝゝ廿三日から举行」〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月19日付夕刊)

「日伊でヒマラヤ遠征 我が山岳界へ イ国から嬉しい招待状」〔日本山岳会〕〔吉沢一郎〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月19日付夕刊)

「富士鉄いよゝゝ買収に正式決定 今議会に提出さる」〔富士身延鉄道〕昭和16年1月19日付)

「保護馬鍛錬競走 出場馬百五十頭 開催準備着々と整ふ」〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月20日付)

「けふから三島競馬 四日間華々しく举行」〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月23日付)

「大穴続出人氣沸く 初の保護馬競走」〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月24日付夕刊)

「三島鍛錬馬競走(第一日午後)」〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月24日付)

「冬山二題(一) 富士山(その一) 冠松次郎」〔靈山〕〔雪中登山〕〔二千六百年〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月24日付) ▲▲

「二競馬に既に大穴 人氣いよゝゝ沸く 三島鍛錬馬(第二日)」〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月25日付夕刊)

「冬山二題(二) 富士山(その二) 冠松次郎」〔雪中登山〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月25日付) ▲▲

「大穴の続出 三島鍛馬競走(第三日)」〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月26日付夕刊)

「青少年義勇軍 静岡中隊先遣隊 二十名来月早々内原へ」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕〔静岡新報〕1941年=昭和16年1月26日付) →「青少年義勇軍 先遣隊十九名」(2月5日付夕刊)に続報。

「三島鍛馬競走(第三日午後の成績)」〔軍馬〕〔三島競馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年1月26日付)

「富士山麓を中心に根岸部隊退館演習 けさ堂々御殿場に向ふ」〔軍事演習〕〔富士山北麓半周〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月4日付夕刊)

「黎明の岳麓に大攻防戦展開 根岸部隊の意気昂し」〔軍事演習〕〔富士山北麓半周〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月5日付夕刊)

「青少年義勇軍 先遣隊十九名 けふ内原訓練所へ」〔満蒙開拓青少年義勇軍〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月5日付夕刊)

「十三派を一丸に 神道联合会結成 けふ県教育会館で」(『静岡新報』1941年=昭和16年2月7日付夕刊)

●歴史文化『静岡新報 Vol.205 昭和16年2月16日～3月31日』

「大宮後任町長問題で早くも暗躍開始 結局意外な人物登場せん」(『静岡新報』1941年=昭和16年2月18日)

「岳麓に計画さる三十六の寒天工場 県購聯が賀茂水産会と協同」(『静岡新報』1941年=昭和16年2月22日付)

「民間馬事関係の功労者を銚衡表彰 本県から各市町村に調査依頼」〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月22日付)

「御殿場附近で現地戦術演習 根岸部隊の全将兵」〔軍事演習〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月23日付)

「模型荒鷲 弾薬となつて岳麓の空に散る 対空演習に貴重な経験」〔板妻飛行場〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月25日付夕刊)

「大宮後任町長 渡辺藤吉氏に決定」(『静岡新報』1941年=昭和16年2月26日付)

「第二回鍛錬馬大会 五月上旬に挙行に決す」〔三島競馬〕〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月27日付)

「竹林中で黄色い粉を棒で叩き轟然爆発 無心で悪戯中の両幼児重傷」〔軍事演習〕〔不発弾〕〔印野〕(『静岡新報』1941年=昭和16年2月28日付)

「高冷地を利用の苗木栽培好成绩 今泉村山間部の努力」(『静岡新報』1941年=昭和16年3月8日付)

「吉原と伝法合併 両町村会満場決議 人口一万六千 四月一日より実現」(『静岡新報』1941年=昭和16年3月9日付夕刊)

「勉強熱の旺盛な富士町の半島人 老人連も進んで授業を受く」〔朝鮮人〕(『静岡新報』1941年=昭和16年3月10日付)

「富士登山路改修 御殿場登山協会が計画」〔御殿場口登山道〕(『静岡新報』1941年=昭和16年3月18日付) ▲▲

「たんせき ぜんそく 龍角散」〔広告〕〔バックに富士山のカット〕(『静岡新報』1941年=昭和16年3月19日付)、4月2日付)

「富士山麓の開墾地 次郎長の記念碑 其の功績を讃えて」〔次郎長開墾〕〔清水次郎長〕

(『静岡新報』1941年=昭和16年3月29日付)

「吉原、伝法の合併 認可の指令到達」(『静岡新報』1941年=昭和16年3月30日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.206 昭和16年4月1日～5月15日』

「国民学校発足に当り けふ空前の大異動発表 清新の意気注入 総数千六百余名に及ぶ」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月1日付夕刊)

「大陸開発の意気に燃え 義勇軍けふ出発 堂々二個中隊 知事の激励受けて」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月1日付夕刊)

「国民学校教員異動 第一面より続く」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月1日付夕刊)

「教員の大異動発表 千六百余名に及ぶ(夕刊につづく)」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月1日付)

「引続き中等学校 青年校教員異動 両者合計四百名に達す」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月2日付夕刊)

「十三宗五十六派を二十七派に合同 仏教界の新体制認可申請」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月2日付夕刊)

「陣歿愛馬の碑 荷馬車組合で建設」〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月2日付夕刊)

「吉原伝法合併記念式挙行」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月2日付)

「富士根村の三区民が学級増加の陳情」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月6日付)

「世界大国魂神社建立と映画『神国日本』の完成 山本九州神道実行団長と御殿場」〔霊峰〕〔山本弥栄彦〕〔頭山満〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月6日付)

「次郎長祭と記念館の計画 小笠原子等が来清」〔小笠原長生〕〔清水次郎長〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月8日付)

「富士山麓に天草製造地建設 県購聯新規事業」(『静岡新報』1941年=昭和16年4月10日付)

「時代の波に押されて消えるアメリカ村 廿六棟悉く日本人の手へ」〔昭和16年に関連記事〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月19日付) →「卅年住み馴れ日本にさようなら」(6月7日付)に続報。

「岳麓の演習に配属将校も参加 第三部隊けふ出発」〔西富士廠舎〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月19日付)

「静岡新報・読売新聞と合併 戦時下の報道完璧を期し郷土紙の使命を達成 静岡新報社」〔社告〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月23日付)

「岳麓に描かれた食糧増産美談 推進班の实地調査で判明」〔駿東郡〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月24日付夕刊)

「けふから三島市 先進熱海を凌駕 一躍県下第五位の都市へ 丹那隧道の開通から発展へ一路驀進」〔丹那トンネル〕〔東海道本線〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月29日付)

「郷土紙の特色発揮 全紙面の刷新断行 いよゝゝ五月一日より 静岡新報社」〔社告〕(『静岡新報』1941年=昭和16年4月29日付)

「食糧は携帯で登山 登山期を迎へた大宮口の苦心」（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月1日付）▲▲

「静岡測候所完成 最新式地震計も設置」（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月1日付）

「富士翁の逝去 錦旗を守護した勇士」〔駿州赤心隊〕〔富士進■〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月8日付）←マイクロフィルムで見ると《富士進造》とも読めるが、『遠州報国隊事歴大要』（静岡県立中央図書館蔵）に出てくる富士姓の4人とは合致しないようだ。

「高原の土に動員令 出来る百万円の開発協会 富士の中腹に麦穂が揺ぐ」〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月8日付）一部▲▲

「富士登山口の物価協定」〔大宮、御殿場、須走、吉田聯合打合会〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月8日付）→「強力の値上等決定」（6月5日付）に続報。

「富士山も一斉値上」〔物価〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月14日付）▲▲

●歴史文化『静岡新報 Vol.207 昭和16年5月16日～6月30日』

「あの町この町 富士郡」〔東京農業大学〕〔潤井川〕〔大沢崩れ〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月16日付）一部▲▲

「あの町この町 駿東郡」〔富士山麓バス〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月17日付）一部▲▲

「あの町この町 富士郡」〔大沢崩れ〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月22日付）一部▲▲

「懸賞」〔社告〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年5月25日付）一部▲▲

「強力の値上等決定 登山のお膳立整ふ 富士三登山口関係者联合会」〔物価〕〔酒類販売制限〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月5日付）▲▲

「火山土禍の潤川筋 愈々根本的改修 関係十一ヶ町村 期成同盟会を結成」〔潤井川〕〔大沢崩れ〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月6日付夕刊）

「お山の物価」（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月6日付）▲▲

「愈々十日より全紙面新活字採用 印刷を鮮明に“読み易い新聞”へ 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月7日付）

「梅雨の尖兵退却 潤川危く決潰 豪雨中警防団必死の作業」〔潤井川〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月7日付）

「卅年住み馴れ日本にさようなら 御殿場アメリカ村の“主”帰国」〔ボールデン〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月7日付）

→〔岩田■、■＝日のしたに明「G. W. ボールデンのその後――御殿場時代雑記」http://www.seinan-gu.ac.jp/pub/100aniv/kiyo/02/02_051_060.pdf参照。

「増産妨げる立看板 鉄道沿線から撤去 四県東海連絡協議会で決る」〔景観〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月8日付夕刊）

「沼津合同新聞を合併 新聞統合に進んで協力 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月10日付）

「持てる未開地を耕せと 富士の中腹に田植“米無し村” 須走の篤農家が努力」〔須走に水田〕〔わさび田〕〔滝口俊次郎〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月10日付）

一部▼▼→「起ち上る“米なし村”」（11月8日付）に続報。

「あの町この町 富士郡」〔潤井川〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月10日付）

一部▼▼

「岳麓で猛演習 中部第三部隊」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月12日付）

「土砂禍徹底防止 潤川応急施設 四万六千円追加計上」〔潤井川〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月14日付夕刊）

「富士の山室 七月一日一部開く」〔山開き〕〔霊峰〕〔表登山口大宮口登山联合会〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月18日付）▼▼

「お田植式 富士浅間神社の神饌田」〔須走口浅間神社〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月19日付夕刊）▼▼

「あの町この町 駿東郡」〔御殿場口〕〔御殿場富士登山協会〕〔乗馬登山〕〔馬車登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月21日付）一部▼▼

「“お山も見てくれ”」〔上野村〕〔食糧増産共同作業〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月22日付）

「お山の警察電話 七月十二日開通」（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月22日付）

▼▼

「酒なし・日の丸弁当 開山祭ことしも質素に」〔御殿場口〕〔須走口〕〔御殿場口富士登山協会〕〔御殿場口浅間神社〕〔須走口浅間神社〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月22日付）▼▼

「あの町この町 駿東郡」〔須走口〕〔乗馬登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月24日付）▼▼

「登山バス、乗馬ことしも営業」〔大宮口〕〔乗馬登山〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月26日付）▼▼

「あの町この町 駿東郡」〔登山バス〕〔御殿場口？〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月27日付）▼▼

「有難う“強力”さん 气象台で七氏表彰」〔中央气象台〕〔富士山頂気象観測所〕〔高層気象観測〕〔御殿場富士登山冬期案内人組合〕〔梶房吉〕〔池谷正吉〕〔内田忠代〕〔山崎佐太郎〕〔小見川正〕〔外山竹二郎〕〔勝又久雄〕〔岡田武松〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月28日付夕刊）▼▼

「潤川砂防再工事 昨日、沿岸町村長内務省へ陳情」〔潤井川〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月28日付）

「霊峰“夏の陣”整ふ あす富士の山開き」〔登山者数〕〔御殿場口〕〔登山バス〕〔臨時列車〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）▼▼

「お山汚すな 八木御殿場署長談」（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）

「登山道程と所要時間」〔御殿場口〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）

「登山者に富士の葉 根上登山協会長語る」（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）

「無事故の協力を望む 榎尾御殿場駅長談」（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）

「山中の諸設備」〔救護所〕〔派出所〕〔郵便局〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）▼▼

「両社の護符」〔浅間大社〕〔奥宮神社〕〔久須志神社〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）▼▼

「古式の開山祭 五日、富士浅間神社で」〔須走口浅間神社〕〔登山バス〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）▼▼

「大宮口順路」〔身延線〕〔物価〕〔乗馬登山〕〔大宮口馬返し〕〔登山バス〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年6月30日付）▼▼←紙面の右端が画像から切れて少なくとも1行以上が判読できない。

●歴史文化『静岡新報 VOL.208 昭和16年7月1日～8月15日』

「初登りは海の勇士 大賑ひのお山びらき」〔御殿場口浅間神社〕〔開山祭〕〔開山式〕〔大宮口〕〔浅間大社〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月1日付夕刊）▼▼

「あの町この町 駿東郡」〔須走口〕〔御殿場口〕〔登山者数〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月3日付）一部▼▼

「あの町この町 富士郡」〔大宮町登山联合会〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月3日付）一部▼▼

「晴れたり霊峰 業者も興亜の心意気」〔御殿場口〕〔登山者数〕〔登山バス〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月3日付）▼▼

「霊峰開山奉告祭 続いて頂上郵便局も開設」〔浅間大社〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月4日付）▼▼

「裾野で演習 中部第十部隊」〔軍事演習〕〔東富士演習場〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月5日付夕刊）

「お山は押すなゝゝの賑ひ」〔御殿場口〕〔須走口〕〔須走浅間神社〕〔登山者数〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月5日付）▼▼

「毎夕刊二頁に減頁断行 広告を大犠牲に記事充実 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月6日付）

「女軍が激増 きのふの登山者八千人」〔御殿場口〕〔登山者数〕〔女性登山〕〔臨時列車〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月7日付）▼▼

「頂上で試合を奉納」〔変わり種登山〕〔霊峰〕〔国威宣揚〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月7日付）▼▼

「あの町この町 富士郡」〔大宮口〕〔登山バス〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月8日付）一部▼▼

「開山奉告祭」〔浅間大社〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月8日付）▼▼

「あの町この町 富士郡」〔浅間大社〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月9日付）一部▼▼→記事中に《昇格記念》とあるがどう同いう昇格か不明？

「八ヶ町村一斉着工 潤川改修工事本極り」〔潤井川〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月10日付）

「騎乗競技大会」〔大日本騎道会〕〔三島競馬〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月12日付夕刊）

「保護馬鍛錬競走 十月十五日から四日間」〔軍馬〕〔三島競馬〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月12日付）

「豪雨再び全県下を強襲す 大宮地方」（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月13日付）一部▼▼

「夏期の混雑防止に国鉄旅行制限 三等寝台と食堂は連結取止め」（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月13日付）

「鍛へる真夏 時局色多彩に盛つて県下中等学校の鍛錬計画」〔富士道場〕〔東富士演習場〕〔鍛錬登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月14日付）一部▼▼

「東海道線復旧 身延線開通」〔豪雨〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月14日付）

「お山も晴る 一千の登山者無事下山」〔豪雨〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月15日付夕刊）▼▼

「富士で遭難 六合目断崖から墜落」〔須走口〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月16日付夕刊）▼▼

「混食に竹の実 製法も至つて簡単」〔竹の花〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月16日付）

「藪入で賑ふ お山へ三千人」〔藪入り登山〕〔霊峰〕〔報国登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月16日付）▼▼

「雲海を衝いて店員部隊登山」〔藪入り登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月17日付）▼▼

「あの町この町 富士郡」〔盂蘭盆〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月18日付）一部▼▼

「あの町この町 富士郡」〔大宮口〕〔登山者数〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月19日付）一部▼▼

「枢軸国の一行けふ登山 盛大な歓迎会」〔日独伊親善協会〕〔盟邦親善登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月19日付）▼▼

「雨で登山を中止 枢軸戦捷祈念の一行」〔霊峰〕〔盟邦親善登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月21日付）▼▼

「山頂で増産祈願 榛原郡農会技術員の壮挙」〔夜間登山〕〔増産祈願登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月22日付夕刊）▼▼→「[霊峰で増産祈願](#)」（7月28日付）に続報あり。

「富士で遭難」〔御殿場口〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月22日付夕刊）

「遭難者なし 登山者引返す」〔登山者数〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月23日付）▼▼

「あの町この町 富士郡」〔曾我兄弟慰霊祭〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月25日付）一部▼▼

「暑熱に鍛へる課題 空・地・山に描く感激」〔障害者登山〕〔最年少登山〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月25日付）一部▼▼

「全宗教は釈迦に還元 一町村一寺に整理せよ 兼井鴻臣氏談」〔東亜宗教聯合運動〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月26日付夕刊）

「あの町この町 駿東郡」〔警察官教習所〕〔須走浅間神社〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月27日付）一部▼▼

「霊峰で増産祈願」〔増産祈願登山〕〔榛原郡農会技術員〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月28日付）▼▼

「今夏最高記録 御殿場口から一万二千」〔登山者数〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月28日付）▼▼

「四季の姿から産業まで 観光読本駿河路」（『静岡新報』1941年＝昭和16年7月29日付）

「あの町この町 駿東郡」〔御殿場口〕〔登山者数〕〔八月山〕〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月1日付）一部▼▼

「厩雑記(1) 馬と起き馬と寝る 陰惨な街に明るい厩舎 岩間紫朗一等兵」〔軍馬〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月1日付）

「厩雑記2 病馬と思へば出産 妙な寝方した“雪石号” 岩崎紫郎一等兵」〔軍馬〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月2日付）

「富士で演習 中部第三部隊の将兵」〔軍事演習〕〔上井出村〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月2日付）

「厩雑記(終) 安かなれ月幾号 それは美しい夏の夜だつた 岩間紫朗一等兵」〔軍馬〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月3日付）

「日支親善の登山 七日、■大使一行廿名」〔日華親善登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月4日付）→■＝衣へんに者▼▼

「富士に遭難白骨死体」〔遭難〕〔大沢崩れ〕〔大久保春道〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月4日付）←「行方不明の国大生 第三次大捜査」（1940年＝昭和15年8月10日付夕刊）の結末。

「新に二版制採用 “東部版” “中西部版” 創設 明六日朝刊より郷土記事充実 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月5日付）

「あの町この町 駿東郡」〔日華親善登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月5日付）一部▼▼

「報知新聞社取締役会長に正力本社会長が兼務就任 益々新聞使命の遂行に邁進 静岡新報社」〔社告〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月6日付）

「楽に出来る富士登山法 一步一步数へつつ 休む時は立つたまゝ」（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月7日付）

「■大使ら富士登山」〔須走口〕〔登山バス〕〔大米谷〕〔日華親善登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月7日付）→■＝衣へんに者、一部▼▼

「■氏等頂上へ」〔最年少登山〕〔日華親善登山〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月8日付）→■＝衣へんに者

「五ヶ年に一千頭 岳麓振興会の酪農計画」〔御殿場町外十ヶ町村岳麓振興会〕〔畜牛〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月12日付）

「農作物の豊凶 “お山うらなひ”」〔阿夫利神社〕〔陸稻〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年8月12日付）

「講習いかして増産 あつぱれ印野の女推進隊員」〔女子青年農業増産報国推進隊〕〔代

用食) (『静岡新報』1941年=昭和16年8月13日付)

●歴史文化情報センター『静岡新報 VOL.209 昭和16年8月16日～9月30日』

「竹から強い縄 竹細工屋さんの発明」〔竹縄〕(『静岡新報』1941年=昭和16年8月17日付夕刊) ▲▲

「ひたひたと寄せる“秋”の姿」〔写真〕(『静岡新報』1941年=昭和16年8月22日付)

「たちこめる朝霧高原 しみじみ味へる岳麓の晩夏」〔写真〕(『静岡新報』1941年=昭和16年8月27日付)

「夏のお山にお別れ きのふ御殿場口閉山式」〔写真〕〔御殿場登山協会〕〔御殿場浅間神社〕〔登山者数〕〔霊峰〕〔鍊成登山〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月6日付) ▼▼

「閉山式の青年相撲」〔御殿場口〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月6日付)

「利鎌の音も快よし 岳麓の穂刈さん 稲刈り一番槍！」〔玉穂村〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月7日付)

「田中君に軍配 岳麓で小鳥呼寄せ試合」〔田中末吉〕〔高田兵吉〕〔清治勇男〕〔須走口〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月7日付)

「富士山中腹崩壊 大沢村付近」〔霊峰〕〔大沢崩れ〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月7日付) ▼▼

「大音響で落下する貨車のやうな岩 富士異変・目撃者の話」〔大沢崩れ〕〔壱塚〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月9日付) ▼▼

「出発繰上げ 富士崩壊陳情隊」〔大沢崩れ〕〔富士治山治水期成同盟会〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月11日付) ▼▼

「富士の“灰泥”止め 潤川に水田護る堰堤」〔大沢崩れ〕〔潤井川〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月17日付夕刊)

「馬の移動を制限 廿五日執行規則公布」〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年9月25日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.210 昭和16年10月1日～10月31日』

「お山でコックニヶ月 名物男保科君が観測所へ奉仕」〔富士山頂気象観測所〕〔保科実〕〔多数回登山〕〔霊峰〕(『静岡新報』1941年=昭和16年10月1日付) ▼▼

「霊峰に大手術 内務省から技師が実地視察」〔大沢崩れ〕〔潤井川〕〔富士治山治水期成同盟会〕(『静岡新報』1941年=昭和16年10月4日付)

「馬事団体を統制 馬政調査会で要綱決定」〔軍馬〕(『静岡新報』1941年=昭和16年10月12日付)

「岳麓で猛訓練 中部第三部隊」〔軍事演習〕〔富士西演習場〕(『静岡新報』1941年=昭和16年10月12日付)

「けふ猟解禁・山野に銃声 払暁から賑かな浮島沼 鶉が多い岳麓に東京から卅名」〔狩猟〕(『静岡新報』1941年=昭和16年10月16日付夕刊)

「新内閣祝ふ富士の初雪」〔写真〕(『静岡新報』1941年=昭和16年10月20日付)

●歴史文化『静岡新報 Vol.211 昭和16年11月1日～11月30日』

「立ち上る“米なし村”火山灰に稔る穂 須走の喜び・滝口氏に凱歌」〔滝口俊次郎〕〔須

走に水田〕〔わさび田〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年11月8日付）▼▼ ←記事
中《第一話》は「持てる未開地を耕せと」（6月10日付）の続報。

「富士山に大雪 太郎坊付近で約六寸」〔霊峰〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年
11月11日付）▼▼

「寒いはず・お山は大雪」〔写真〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年11月12日付）
「家庭用に好適 富士山の“天然木炭”火力試験」〔宝永噴火〕（『静岡新報』1941
年＝昭和16年11月19日付）▼▼←戦後、家庭用の木炭拾いに登ったという話を耳にした
こともあるし、現在でも幕岩の上の方に木炭の露頭が見られる。

「三島鍛錬馬競走迫る 来月十一日から」〔軍馬〕〔三島競馬〕（『静岡新報』1941
年＝昭和16年11月23日付）

「十二月一日より『静岡新聞社』を創設 県唯一の郷土紙として発足 静岡新報社 浜松
新聞社 清水新聞社 沼津合同新聞社 東海朝日新聞社 静岡民有新聞社」〔社告〕（『静
岡新報』1941年＝昭和16年11月24日付）

「岳麓の農地開発計画 地元民が実現の猛運動」〔農地開発営団〕〔万野原〕〔山宮〕〔人
穴〕（『静岡新報』1941年＝昭和16年11月24日付）▼▼

「“変る町”物語 富士に惚れた家康 狐も恐はがる彦左衛門」〔一富士二鷹三茄子〕（『静
岡新報』1941年＝昭和16年11月24日付）

「岳麓に戦車兵学校 近く誕生 鉄牛部隊の雛を育成」〔人穴〕〔陸軍少年戦車兵学校〕
（『静岡新報』1941年＝昭和16年11月28日付）▼▼

「愈々あす『静岡新聞』創刊 『静岡新報』は今朝刊限り廃刊 静岡新報社」〔社告〕（『静
岡新報』1941年＝昭和16年11月30日付）